はじめに

吉岡 康裕

このガイドブックの発行は、平和学習を目的としています。では、「平和」とは何でしょうか。分かりやすくいえば、「安らかに和らぐこと。穏やかで変わりのない生活。戦争がなく、世が平穏であること。」（広辞苑）なのでしょう。この状態を阻害するものが、まずは「戦争」であり、「差別」なのではないでしょうか。その「戦争」と「差別」が、74 年前に沖縄戦という地上戦により悲惨な犠牲を強いられた沖縄に、今現在も継続しています。このガイドブックを読んでいただき、「戦争」と「差別」の課題を踏まえて沖縄の現実を見直し、「真の平和」とは何かを考えていただきたいのです。

現在、沖縄に「平和の礎」が建っていることは知っていても、全国都道府県の慰霊塔・慰霊碑が建っていることを知らない人（特に本土の人）が多くいます。仮に、知っている方がいても、なぜ都道府県の慰霊塔や慰霊碑が沖縄に建っているのか、その理由が判然としない方が多いのではないでしょうか。

本ガイドブックの発行に込めた第一の願いは、沖縄に建つ慰霊塔・慰霊碑が、私たちが生まれ、暮らしている都道府県から派兵された多数の兵士の方々が、沖縄の地と南洋諸島で戦死され、その戦死された方々を慰霊（追悼）するために建てられたことを知っていただくことにあります。

第二の願いは、太平洋戦争において唯一地上戦を経験した沖縄戦の実相を知っていただくことです。その地上戦において犠牲になった死傷者数は、沖縄の民間人の犠牲者数が兵士の数より多く、また地域によっては強制集団死（集団自決）という悲惨な出来事があったということを知ることで、これらの都道府県が建てた慰霊塔・慰霊碑が、二度とこのような非道で非情な戦争を繰り返さないという非戦平和・恒久平和の願いを確かな意志として誓う平和学習の貴重な場所になればと願うものです。

こうした沖縄戦の実相を踏まえるならば、敗戦後に各都道府県の有志の方々により戦没者兵士の慰霊（追悼）のために沖縄に建てられたこれら慰霊塔・慰霊碑の意義には、当然、非戦平和・恒久平和を願う想いが込められてあることはもちろんのことであります。

それにもかかわらず、その碑文に「戦争を肯定・讃美する」、「戦死を美化する」、「戦死者を英霊と讃える」ような言葉と非戦平和・恒久平和を願う言葉が碑文中に併存していることに疑問と違和感を憶えるのです。「戦争は、どのような大義があろうとも醜悪で生命・財産の破壊をともなう罪悪行為」であり、「戦死は、国政による強制された犠牲死で遺族に多大な悲劇をもたらす死」であり、「戦死者は、時勢に強いられ自らの意志に反した無念で哀しく空しい死」であると、私は理解します。碑文の起案者は、有識者で地位のある方々なのですが、どうしてこのような矛盾した碑文を起案し公開しているのでしょうか。

このことについて、元沖縄県知事である大田昌秀氏の著書に示唆に富んだ次のような言葉があります。「ある心理学者は、日本人における責任感の不在の原則をたずねてみると、結局、『罪の意識の不在』の問題に逢着したと述べているが、沖縄問題との関係で考えてみると実によく分かる。」（『醜い日本人―日本の沖縄意識』大田昌秀著、ix 頁）と。この責任感の不在の原則である「罪の意識の不在」が、非戦平和・恒久平和を願いながら、「戦争を肯定・讃美し、戦死を美化し、戦死者を英霊と讃える」という相反する矛盾した言葉が平然と語られるのでしょう。

さらに、この地上戦において各都道府県出身の戦没者兵士の方々と共に闘った、沖縄県民から徴兵された戦没者兵士（沖縄守備軍の命令で強制動員された非戦闘員である男女の学徒を含む）の方々に加え、戦争に協力したにもかかわらず犠牲を強いられた多数の沖縄民間人を慰霊（追悼）する意義が碑文に込められる必要があるのではないでしょうか。

こうした慰霊（追悼）の意義が込められた慰霊塔と、それに寄り添うように建立された慰霊碑の碑文の言葉に人々が出遇ってこそ、平和学習の意義を体感し非戦平和・恒久平和を願う新たな人々が、この場から誕生するのではないでしょうか。それに相応しい碑文であるのかを、見直していただきたいのです。もし、平和学習に不相応な碑文であると判断されるようであれば、真摯に改めていただくことを切に願います。

「平和の礎」が何故、平和学習の拠点として現在も人々に受けとめられるのか。それは、沖縄戦を経験した元沖縄県知事の大田昌秀氏をはじめとする人々が厳粛に真摯に検討された理念が形になったことにあると思います（第 1 章「６．平和の礎」101 頁）。

戦争の体験と記憶が風化しつつある戦後 74 年目を迎えた今日、沖縄に建つ都道府県の慰霊塔・慰

霊碑の碑文を通して改めて戦争の悲惨を知る機会となり、またその場所が平和の大切さに思いを致す平和学習ができる貴重な場として生かされることの必要性を感じます。

私たちは、沖縄出身者でもなければ、沖縄戦経験者でもありません。しかし幸いなことに、今回、沖縄戦と慰霊塔・慰霊碑の碑文をめぐる問題について、沖縄県民であり沖縄戦経験者であった元沖縄県知事の大田昌秀氏（故人）をはじめとして、沖縄在住彫刻家の金城実氏、沖縄在住で浄土真宗僧侶の知花昌一氏（元読谷村議員）、佐喜眞美術館長である佐喜眞道夫氏、そして沖縄在住牧師の平良修氏、金井創氏、そして21年間沖縄在住の真宗大谷派僧侶で現在、東本願寺沖縄別院職員の長谷暢氏のご協力を得ることが出来ました。ガイドブックには、諸氏のお許しを得て、著作類の転載、または聞き取りに基づく文章、講演録、寄稿文を掲載し、沖縄戦の実相と慰霊塔・慰霊碑の碑文の意義、そして沖縄の歴史・現状を知っていただけるように編集を心がけました。

そもそも、沖縄をめぐる諸問題が、ともすれば誤解され、人々の困惑を招きがちなのは、私たちが沖縄について真向かいになって「知る」ことを疎かにしてきたからではないでしょうか。「知る」ことを疎かにし、自分で確かめもしないままに、与えられた情報を鵜呑みにし、誤解のままに沖縄の現状を分かったつもりにしている認識から差別的な言動が生まれてくるのではないでしょうか。ここからは、沖縄の諸問題を解決する方途は開かれてこないでしょう。

もし、沖縄問題を真向かいに受けとめるなら、この沖縄の問題は沖縄だけの問題ではなく、本土に住む者の問題でもあることを知ることになるでしょう。そのことも、このガイドブックを読む中で理解いただきたいと思います。

上述の内容を含めた本ガイドブックを持参して、沖縄の地を訪ね、慰霊塔・慰霊碑の碑文の前に立っていただきたいのです。沖縄の自然・歴史・宗教・基地の実情などを学び体感することを通して、沖縄を見つめ直し、慰霊塔・慰霊碑の碑文の意義を考える手がかりとなることを願います。

できるならば、読者の皆様が沖縄県との比較を通じ、ご自身の出身地や生活地と何が違い、何が同じなのかを確かめていただきたいと思います。沖縄を深く知ることが、同時に読者の皆様の出身地や生活地をさらに深く知る手がかりともなることでしょう。

このガイドブック制作を行うに当たり、金城実氏からは聞き取りによる成文、知花昌一氏は講演録、故人の大田昌秀氏、平良修氏、佐喜眞道夫氏からは著書からの転載、金井創氏、長谷暢氏からは寄稿文をいただきましたことに深く御礼申し上げます。また、監修という重責を引き受けていただいた福島栄寿先生、貴重な助言と協力をいただいた長谷暢氏、並びに福島ゼミの出雲路真志君・久保槙一郎君・丸尾大貴君の3人の学生さんには、学業に忙しい中、沖縄での取材、碑文の文字お越しと照合、原稿の確認作業などのご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。

そして、「慰霊塔・慰霊碑の建立地区案合図」は、私の次女(徳田千紘)に作成依頼をし、協力を得たことに感謝します。

さらに、46都道府県の慰霊塔管理団体（24の都道府県・22の遺族会、または遺族連合会など）と沖縄県平和祈念財団には、本誌の制作にあたり事前に本誌の趣旨説明をしたうえで慰霊塔・慰霊碑の写真掲載の承認をお願いしたところ、ご理解を賜りましたことに御礼申し上げます。

また、私の段取りの悪さから入稿が遅れても調整していただいた、三陽メディア印刷(株)と担当の菅原正広氏には大変お世話になり感謝申し上げます。

なお、本誌は、私の母校である大谷大学の研究制度にある教育振興に資する研究教材としての認証をいただき制作したものでもあります。大学当局のご高配に感謝申し上げます。

さらに、本誌は、私が3年間企画チーフを務めた真宗大谷派 東京教区報恩講（主テーマ「今、いのちがあなたを生きている」）最終年度の2019年1月26日に参詣者の方々に配布しました。サブテーマは1年ごとに変わりますが、その基底にあるのが「沖縄差別」です。沖縄在住の知花昌一氏、兪滾子（ゆ よんじゃ）氏、佐喜眞道夫氏に講演をお願いして、沖縄戦の実相、沖縄が差別されてきた歴史と現状を教えていただきました。知花氏と佐喜眞氏の講演内容は本誌に含まれています。

このように多くの方々のご理解、ご協力のもとで上梓しましたこのガイドブックが、一人でも多くの方の手にわたり沖縄の歴史と現状についての理解に役立ち、沖縄問題を正しく考える一助となり、そして平和学習の教材として活用いただけることを心より念じます。　　（2019年1月26日）

目　次

はじめに －1

総　論　「本ガイドブックの発刊にあたって－都道府県の碑文を読むために－」 －5

沖縄本島の慰霊塔建立地区図 －13

慰霊塔・慰霊碑・戦跡の案内図 －14

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑 －21

１．46 都道府県の慰霊塔と慰霊碑 －21

1. 北海道　2. 青森県　3. 岩手県　4. 宮城県　5. 秋田県　6. 山形県
7. 福島県　8. 栃木県　9. 群馬県　10. 茨城県　11. 千葉県　12. 埼玉県
13. 東京都　14. 神奈川県　15. 新潟県　16. 山梨県　17. 静岡県　18. 愛知県
19. 長野県　20. 富山県　21. 石川県　22. 福井県　23. 岐阜県　24. 滋賀県
25. 三重県　26. 奈良県　27, 和歌山県　28. 京都府　29. 大阪府　30. 兵庫県
31. 鳥取県　32. 岡山県　33. 島根県　34. 広島県　35. 山口県　36. 香川県
37. 徳島県　38. 愛媛県　39. 高知県　40. 福岡県　41. 佐賀県　42. 大分県
43. 長崎県　44. 熊本県　45. 宮崎県　46. 鹿児島県

２．特色ある慰霊塔と碑文 －68

1. 魂魄之塔　2. 南北之塔　3. 韓国人慰霊塔　4. 青丘之塔　5, 恨之碑
6. 艦砲ぬ喰え－残さーの歌碑　7. 「さとうきび畑」の歌碑　8. 海軍戦没者慰霊之塔
9. 米軍上陸の地碑　10. 黎明之塔　11. バックナー中将戦死之跡碑
12. アーニー・パイルの碑

３．南洋諸島の戦没者慰霊塔 －82

1. 南洋群島沖縄県人戦没者並開拓殉難者慰霊碑　2. 台湾之塔　3. タバオ之塔

４．強制集団死（集団自決）関連の慰霊碑 －86

1. チビチリガマから世界へ平和の祈りを碑・チビチリガマ世代を結ぶ平和の像
2. 白玉之塔　3. 集団自決跡地　4. 平和之塔　5. 痛恨之碑

５．男女学徒隊・教職員戦没者の慰霊塔・慰霊碑 －92

1. ひめゆりの塔　2. 梯梧之塔　3. ずゐせんの塔　4. 白梅之塔　5. 翔洋碑
6. 和魂　7. 積徳高等女学校慰霊之碑　8. 開南健児之塔　9. 沖縄工業健児之塔
10. 農林健児之塔　11. 南燈慰霊之塔　12. 一中健児之塔　13. 二中健児之塔
14. 沖縄師範健児之塔

６．平和の礎・沖縄菩提樹苑 － 101

１．平和の礎 －101
２．沖縄菩提樹苑 －103

第２章　戦跡を訪ねて －106
１．糸数のアブチラガマ －107
２．シムクガマ －107
３．旧海軍司令部壕 －108
４．沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号 －108
５．奉安殿 －109
６．富盛の石彫大獅子 －109

第３章　沖縄戦の実相と慰霊の意味 －110
１．沖縄戦とは －
１．大田昌秀氏「沖縄戦とは何か」－111
２．佐喜眞道夫氏「高校生への『沖縄戦の図』解説」－123
３．大田昌秀氏「沖縄の声に聞く－戦争からみえてくる人間の相(後編)－」 －137

２．慰霊とは
１．大田昌秀氏「慰霊とは何か　林立する慰霊の塔に想う」 －140

第４章　寄稿文 －148
１．金城　実氏「金城実が語る沖縄と慰霊」－149
２．知花昌一氏「沖縄から日本を考える－非戦の祈り－」－173
３．平良　修氏「沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの」－190
「はじめに－『戦争讃美に異義あり』」－196
４．金井　創氏「慰霊から平和構築へ」－198
５．長谷　暢氏「沖縄から問われている」－202
「沖縄の仏教・浄土真宗の歴史：紹介」－206

第５章　資料の紹介 －208
１．沖縄から伝えたい。米軍基地の話 Q&A：沖縄県 －209
1)沖縄の米軍基地ができた歴史的背景を教えてください。
2)何もなかったところに米軍基地ができて、その周りに人が住んだのではないですか。
3)沖縄にはどれだけの米軍基地があるのですか。
4)日米地位協定とは何ですか。また課題を教えてください。
5)日米地位協定の改定は難しいのではないですか。
6)米軍基地がなくなったら沖縄の経済に悪影響があるのではないですか。
7)米軍基地と引き替えに沖縄振興が図られているのではないですか。
8)米軍基地を負担するのは当然ではないですか。
9)なぜ普天間飛行場を辺野古へ移設することに反対なのですか。
10)沖縄県は辺野古新基地建設に反対していますが、日米安全保障体制に反対なのですか。

２．真宗大谷派　1995 年の不戦決議 －213
３．真宗大谷派　2015 年の非戦決議 －213
４．真宗大谷派　沖縄戦 50 周年追弔法会　表白 －214
５．真宗大谷派 沖縄別院　米軍普天間基地周辺住民へ危険を及ぼす米軍機への抗議 －215

編集者の紹介 － 218

総　論

本ガイドブックの発行にあたって

―都道府県の碑文を読むために―

福島　栄寿

本ガイドブック発行の発案者である吉岡康裕氏は、「はじめに」において、摩文仁の丘とその周辺地域に建立された各都道府県の沖縄戦関連の慰霊塔・慰霊碑に注目する願いと意味について、以下のように述べている。

> 第一の願いは、沖縄に建つ慰霊塔・慰霊碑が、私たちが生まれ、暮らしている都道府県から派兵された多数の兵士の方々が、沖縄の地と南洋諸島で戦死され、その戦死された方々を慰霊（追悼）するために建てられたことを知っていただくことにあります。第二の願いは、太平洋戦争において唯一地上戦を経験した沖縄戦の実相を知っていただくことです。その地上戦においての犠牲になった死傷者数は、沖縄の民間人の犠牲者が兵士の数より多く、また地域によっては強制集団死（集団自決）という悲惨な出来事があったということを知ることで、これらの都道府県が建てた慰霊塔・慰霊碑が、二度とこのような非道で非情な戦争を繰り返さないという非戦平和・恒久平和の願いを確かな意志として誓う平和学習の貴重な場所になればと願うものです(1 頁)。

この吉岡氏の言葉に、私たちの本ガイドブック発行の趣旨もまた、端的に表明されている。付言するならば、摩文仁の丘の慰霊塔と碑文の忘却は、沖縄戦、アジア・太平洋戦争の忘却をも意味することになるだろう。戦後、各都道府県の遺族会などが競って建立した慰霊塔と慰霊碑とは、一体何であったのか。どのような思いが込められ、建立されたのか。その遺族会の方々の思いもまた、風化してしまうのではないか。そういう危惧を抱くと同時に、多くの碑文は、沖縄県の復帰前の建立であり、当時の沖縄に対する認識、またアジア・太平洋戦争についての認識のあり方が、そのまま遺されているのも事実である。

そこで、私たちは、まずもって各都道府県の碑文の内容を知ることが必要であると考え、できるだけ多くの碑文テキストを、網羅的に掲載することとした。それが、「第 1 章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑　1．46 都道府県の慰霊塔と慰霊碑」である。

ちなみに、都道府県の慰霊塔・慰霊碑は、1954 年に建立された北海道の「北霊碑」が時期としては最も早く、その後、高度経済成長期の 1960 年代に「紀乃國之塔」(1961 年)、「愛媛之塔」「黒百合の塔」「千秋の塔」(1962 年)、「群馬の塔」「火乃国之塔」(1963 年)、「信濃の塔」「みちのくの塔」「茨城の塔」「近江の塔」「のじぎくの塔」「京都の塔」(1964 年)、「神奈川の塔」「愛國知祖之塔」「なにわの塔」「立山の塔」「山形の塔」「岡山の塔」「房総之塔」「徳島の塔」「安らかに（鹿児島県）」「ひむかいの塔」「三重の塔」「大分の塔」(1965 年)、「岐阜県の塔」「岩手の塔」「福岡の慰霊の塔」「鎮魂長崎の塔」「防長英霊の塔」「福井之塔」「栃木の塔」「ふくしまの塔」「静岡の塔」「土佐之塔」「甲斐之塔」「はがくれの塔」「埼玉の塔」(1966 年)、「大和の塔」(1967 年)、「宮城之塔」「ひろしまの塔」「讃岐の奉公の塔」(1968 年)、「島根の塔」(1969 年）と、全体の九割が建立されている。そして、70 年代に、「紀乃國之塔・改修」「ひむかいの塔・補修」(1970 年)、「東京之塔」「因伯の塔」(1971 年)、「北霊碑・改修」(1972 年)、「新潟の塔」(1976 年)、「埼玉の塔」(1978 年）が建立された。その後、以下のように改修が行われた塔がある。「千秋の塔・改修」(1984 年)、「岡山の塔・改修」(1986 年)、「ふくしまの塔・改修」(1987 年)、「近江の塔・改修」「ひむかいの塔・補修」(1991 年)、「愛国知祖之塔・改修」「なにわの塔・改修」(1994 年)、「北霊碑・改修」「房総之塔・改修」「のじきくの塔・改修」(1996

年)、「京都の塔・改修」(1997 年) である。

本ガイドブックでは、碑文の掲載に際して、単に碑文テキストを掲載するだけではなく、碑文を読む手がかりとするために、幾つかのキーワードを設け、各碑文の下欄に記すこととした。そこで、その碑文テキストを読むために設定したキーワードとその意味について、説明しておく。

その際、本ガイドブックの編集子の立場について、一言しておきたい。編集子は、共に真宗大谷派に僧籍を有する者である。宗門は、かつて、アジア・太平洋戦争 (「大東亜戦争」) を「大東亜決戦」と意味づけ、門信徒に向けては戦時教化に努め、また多くの若者たちに、「戦没将士」は「英霊」として靖国神社と東本願寺で奉安されると説諭し、戦場に送り出した。そうした教団の戦争協力を慚愧し、1995 年に「不戦決議」(第 5 章に収録)、2015 年には「非戦決議」(同前) を表明し、教団としての過去の戦争責任、アジア諸国への加害責任について認め、謝罪し、未来へ向けての「真の平和を希求」することを誓っている。まずもって、私たち編集子のアジア・太平洋戦争や戦没者への見方は、基本的にこの決議文の趣旨に基づくものである。

こうした視点から、キーワードを設定するに際して、幾つかの代表的な先行研究を参考にした。一つは、かつて靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会 (以下、連絡会) が 1983 年に発行した『戦争賛美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告―』(以下、『異議あり』) 所収の諸論考である。これらの論考は、碑文を読み解くための視座を考える上で非常に示唆的である。なかでも、碑文の分類を行っている中原俊明「慰霊塔碑文の総論的検討」及び、本ガイドブックにも転載した平良修「沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの」が手がかりとなる。そして、同じく碑文を詳細に考察した真鍋禎男『沖縄　戦跡が語る悲惨』(沖縄文化社、2016 年、以下『戦跡が語る悲惨』) も大変参考になる。これらの先行研究に示唆を得ながら、以下、本ガイドブックの碑文に付したキーワードについて説明していく。

各都道府県の碑文の内容についてのキーワードと意味

① **美化・肯定** (戦争・戦死の肯定、美化の響きをもつもの。)

中原俊明が指摘するのは、碑文の多くに、強弱はあるが、戦争及び戦死の肯定賛美があるという点である (『異議あり』7～9 頁)。例えば、「大東亜戦争の大義に殉じ」、「国難に殉じ」とし、また戦死を「英霊」「散華」「祖国防衛の御楯」「本土防衛の防波堤」などと表現している碑文も散見される。

真鍋禎男もまた、慰霊塔の碑文には総じて、戦争を肯定し、「戦死の自県出身兵を英雄として称えている」と指摘し、以下のように具体的に例を挙げている。

> 満州事変に始まり一五年に及ぶ一連の戦争は、侵略の思想で貫徹した。太平洋戦争はより明確に、「大東亜の建設」を目的に掲げた。その結果、アジアやオセアニアの諸外国に物心両面の多大な損害をもたらした。心からの謝罪が当然の人道になり、誇れるものは何もない。／にもかかわらず各都道府県慰霊塔の碑文には、戦時中の侵略用語「大東亜戦争」をそのまま用いた塔が全四六基のうち九基ある。北海道、岩手、山形、神奈川、山梨、長野、福井、鳥取、熊本に見る。福井の塔は「大東亜戦争の大義」と書いて侵略戦争を堂々と肯定のうえ、「全県民の赤誠をこめてこれを建立する」と付言した。侵略戦争の肯定が特定意見ではなく、県民共通の認識になる。／他の慰霊塔においても、侵略に言及し謝罪や反省を述べる碑文はない。逆に、「祖国防衛」(山形、大阪、岡山、鹿児島)、「祖国の隆昌と民族の安寧を念じ」(福島)、「本土防衛･･･国家の栄光」(茨城)、「祖国の安泰を願い」(千葉、香川)、「祖国の興隆を信じ」(神奈川)、「祖国のため」(長野、滋賀、山口)、「祖国の安泰と繁栄を願い」(静岡)、「国土防衛」(愛知)、「祖国の発展を祈り」

（三重）、「祖国日本の隆昌を願い」（岐阜）、「祖国の興隆を念じ」（京都）、「祖国の安泰と繁栄をいのり」（奈良）、「祖国の安泰を祈念し」（和歌山）、「護国」（広島）、「祖国日本の防衛のため」（福岡）、「祖国日本の繁栄を念じつつ国難に」（長崎）、「国難」（熊本）、「祖国の栄光を信じ」（宮崎）、と記す。／天皇の言葉による開戦の詔書はこう述べた。「万邦共栄ノ楽ヲ偕ニスル」「帝国ノ光栄ヲ保全セムコトヲ期ス」。沖縄の島田知事は（中略）開戦を「正義」、胸の高鳴りを「昭和一六年一二月八日の感激」と表明した。／戦争の目的を正当化し、加害を被害にすり替えると、他国に与えた痛みは知覚できない。そして将来、再び平然と誤ちの道へ突き進む（『戦跡が語る悲惨』200～201 頁）。

と。また平良修は、碑文の多くには、戦死を「空しいもの」とみる視点が欠落していると指摘している。

親しい者の戦死を空しい死と見なすことは遺族にとって胸かきむしられることに違いない。（中略）殊に国内ほとんど唯一の地上戦場になった沖縄での余りにも悲惨な最期を知るとき、それがむごたらしい最期であればあるほど、その死を国に殉じた美しいものとして意味づけせずにはおれないに違いない。（中略）一九四七年、つまり終戦の翌々年、文部省が学校教育用に発行した「あたらしい憲法のはなし」の中で、政府は、「戦争は人間をほろぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから、こんどの戦争をしかけた国には大きな責任があるといわなければなりません。」と説明している。戦争を空しいものととらえているだけではない。あの戦争を日本がしかけた戦争として、責任を表明しているのである。まことに正しく、永代にわたってゆるがせにしてはならない評価であると思う。ならばそのような戦争による死が、どうして空しくないものであり得るだろうか。あの戦争における親しい者の死を意味あるものとする唯一の道、文字通り唯一の道がある。それは、つらいことではあるが、私たちが彼らの死を、軍国主義思想に踊らされ侵略戦争を聖戦と思いこまされた者の「空しい死」であったとはっきり認め、彼らの死をもって空しい死の終りとさせる決意と行動にしかない（『異議あり』47～48 頁）。

と指摘する。

同様に真鍋は、この碑文にみる戦死の美化・肯定という点について、次のように指摘している。

戦争目的の正当化は必然的に戦死の自県出身兵を英雄にまつり上げ、賛美する。「玉砕」「護国の楯」「散華」「英魂」「国に殉じ」「尊い礎」「英霊」「祖国に殉じ」「愛国の至情」「華と散り」「偉勲」「勇戦」「勇姿」「勇魂」「雄魂」「崇高な死」「つわものたち」「祖国を愛し」「玉魂」「聖霊」「崇高なる死」「強靱不屈の精神」「勲」「新日本建設の御光」「世界平和の守護神」「不滅の偉勲」「殉国の士」「勇士」「男の子の誇り」「祖国日本の守り神」「世界平和の礎」「高く尊き勲」「勲功」「一命を祖国に捧げ」「勇戦力闘」「悲壮の戦死」「在天御加護」「御遺徳」「御盾」「いさおし」「護国の英霊」「遺烈」「崇高な御精神」「忠勇」「靖国の神」「崇高な愛国のまごころ」「花と散った」「みたて」をちりばめ、彩る。／しかし戦場の兵士たちは、そのような美しく威厳のある死では決してなかった。肉体を弾と化し、米軍との格段の兵力差、物量差、兵器性能の差のもとで突撃させられた。敵弾に倒れた遺体は、野ざらしのまま朽ちた。陸軍病院や野戦病院で臨終の兵は米軍の艦砲弾による弾痕の穴へ次から次に投げ捨てられ、手と足がばらばらの方向を向いていた。出征時に故郷の村や町で「万歳！」の歓喜に包まれ戦地へ赴いた兵士たちの、末路はとてもみじめだった。その死に美辞麗句を添えても、死者は喜ばない。美化すると、死んだ命が軽くなる。／（中略）兵士個々の死を見ずに、「自県出身戦没兵何千何百余名」の一括で「英霊」と称える碑文は、軍隊を仰ぎ祀る手法として手っ取り早い。あるいは、戦死の犠牲の上に戦後日本の経済発展と平

和の持続がある、との碑文も死を美化し戦争肯定に結びつく。そして、無謀な戦争へ導いた為政者たちの責任を不問にする。経済の理論と仕組みに戦死は関係なく、技術力の向上ならびに世界経済との絡みで成長を遂げてきた。平和の維持は憲法第九条がもたらした。／美化は期待をつのらせる。茨城の塔は「諸霊の愛国の至情…（が）後進を鼓舞することを信ずる」、福井の塔は「いくとせのちの春をおもえば」、長崎の碑は「靖国の神のいさおしたゝえつゝ新しい日本創られてゆく」、と願いを後世に託した。兵士の実感による「戦死は哀れ」の心情を碑文が打ち消し、再び軍事優先社会へ導く（『戦跡が語る悲惨』202～204 頁）。

と。碑文にみる戦争・戦死の肯定・美化の内容の問題点は、以上の三氏の指摘に尽きていると思う。

さて、平良は、碑文のさらなる特徴として、「すべての碑文におしなべて言えることは、戦争罪責の告白が見られないことである。」（『異議あり』53 頁）と指摘する。そして、「あの戦争を誤った侵略戦争であったと認め、自分はそれに駆り立てられた被害者であると同時に、積極的に参加した加害者であったと自己告発し、それを悔いる言葉が全くみられないのである。したがって、その深みから反戦平和を突き出す重々しい強さも出てきてはいない。「平和」云々という表現は幾つかの碑文にはあることはある。しかしそれらは自分の被災の痛みから出ているに過ぎないのであって、それ以上のものがあるようには感じられない。」（同前）と厳しく批判している。そこで本ガイドブックでは、平良の厳しい指摘を踏まえ、それぞれの碑文の内容に、平和への願望・祈念、戦争への懺悔・哀しみが読み取れるもの、そして反戦への決意・誓いが込められているものについて、次の三つのキーワードを設定した。

② **平和祈念**（平和への願望・祈念を表すもの）
③ **懺悔・哀しみ**（戦争への懺悔、哀しみを表すもの）
④ **反戦**（反戦の決意・誓いを表すもの）

さらに平良は、「本土」側の慰霊碑に、沖縄戦で最大の犠牲者であった沖縄住民に対する悼みが欠落していることを指摘している。そして、

私たちの気持をかろうじて安んじさせてくれるのは、数多い碑の中でせいぜい京都の碑くらいのものである。（中略）「京都府下出身の将兵二千五百三十有余の人びとが遠く郷土に想いをはせながらひたすら祖国の興隆を念じつつ砲煙弾雨の中に倒れた。また多くの沖縄住民も運命を倶にされたことは誠に哀惜にたえない」。戦跡に林立する慰霊碑は美を競い合うかのようである。しかし、自分らの生活の場のすべてを墓地にさせられ、自らもその中に一番多く白骨をさらすことになった者たちを悼む心を、何故表わしてくれないのだろうか（『異議あり』52～53 頁）。

と指摘する。戦死した沖縄の人々への哀惜の念の欠落は、多くの慰霊碑が建てられたのが沖縄「本土」復帰前であったためであろうか。そこで、本ガイドブックでは、沖縄への意識を読み解くキーワードとして、次の二つのキーワードを設定した。

⑤ **沖縄友好**（沖縄との友好、連帯等を表すもの）
⑥ **沖縄哀悼**（沖縄への悼みを表すもの）

沖縄への悼みの欠落という点については、真鍋もまた、本土の「沖縄無視」という表現を用いて、次のように指摘している。

沖縄戦における沖縄住民の死亡総数は日本軍将兵をはるかに上回った。その沖縄に言及の都道

府県慰霊塔は、わずか三基にとどまる。「多くの沖縄住民も運命を倶にされたことは誠に哀惜に絶へない」（京都）、「沖縄県民の尊い人命を奪い」（滋賀・平成三年碑文）、「沖縄の人たちとともに」（岡山・昭和四〇年碑文）、がすべてになる。／他の四三都道府県は、沖縄の犠牲と惨状にまったく目を向けていない。三重の塔は、「国破れて山河あり」の形容で感慨にひたる。沖縄は山河まで破壊された。兵庫の塔は、沖縄が「捨て石」になって安堵した。こう述べる。「もし沖縄戦の筆舌に尽くしがたい持久と玉砕がなければ太平洋戦争も別の経過をたどり　本土も上陸作戦による深刻な戦禍を受けることなしには終戦をみなかったでしょう　そうなれば　兵庫県民のいまの生活も保障されなかったに違いありません」。／（中略）「祖国の隆昌を願い」など二四府県の記述においても、「祖国」が「本土」を意味し、沖縄を除外していることは文意から明らかだ。なぜこぞって沖縄を無視するのだろうか（『戦跡が語る悲惨』204 頁）。

そして真鍋は、「沖縄無視」の理由を、沖縄戦後史を振り返り、以下のように指摘する。

戦後二年の一九四七年九月一九日、日本占領の GHQ で政治顧問を務めるウィリアム・ジョセフ・シーボルトは宮内庁御用掛の寺崎英成から、沖縄の将来に関する天皇の見解を伝えられた。それをシーボルドは文書にして翌九月二〇日、GHQ 最高司令官マッカーサーに届けた（天皇メッセージ―筆者注）。寺崎が語る天皇の考えは、「米国が沖縄をはじめ、その他の琉球諸島に対する軍事占領を継続するよう希望している」。さらに補足した。「沖縄（その他必要とされる諸島）に対する米国の軍事占領は、主権を日本に残したまま、長期―二五年ないし五〇年またはそれ以上の―租借方式という擬制（fiction）に基づいて行われるべきであると考えている」。／沖縄戦において天皇制護持のため地獄の苦しみを強いられた沖縄ならびに沖縄住民は、謝罪の言葉を聞くことなく、再び天皇に突き放された。／五二年四月二八日、四九カ国の調印による対日平和条約が発効して日本は占領を解かれ、独立した。しかし、小笠原諸島、奄美諸島、沖縄および先島諸島は除外され、アメリカの施政権行使がさらに続いた。そのうち奄美諸島はいち早く一年八カ月後の五三年一二月二五日に、日本返還になった。奄美諸島と、取り残された沖縄諸島との間の境界線は、かつて薩摩藩が琉球王国を植民地にしたときの境界線でもあった。沖縄は、七二年五月一五日をもってようやく返還に至る。／沖縄の人たちは、対日平和条約発効の四月二八日を「屈辱の日」と受け止めた。日本の憲法が適用されず、米軍基地建設で土地を奪われ、米軍機の墜落事故や米兵による犯罪発生のたびに泣き寝入りを重ね、「本土」との往来に外国並みの日本渡航証明書（パスポート）を必要とした。（中略）そのような時代状況において各都道府県は沖縄に、慰霊塔を建てた。福島の塔は自県出身兵の死地を「海外において」と書き、沖縄を外国の扱いにした。宮城の塔も、建設委員会の名称に「海外」の文字を用いた。（中略）碑文で沖縄に言及のない都道府県の、沖縄無視が今も続く（同前、204～206 頁）。

と。したがって、「本土」と沖縄の距離感があるのも当然ということになる。真鍋は、

沖縄と他の広大な戦域を、一括して合祀する塔も多くある。「沖縄ならびに南方戦線で戦没」（北海道）や戦死者の総数表示を一例に、青森、岩手、宮城、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、新潟、山梨、長野、富山、福井、静岡、三重、岐阜、大阪、奈良、和歌山、鳥取、岡山、広島、山口、香川、高知、佐賀、長崎、宮崎の、三二都道府県が並ぶ。／このような合祀は沖縄に対する「本土」の、心理的な距離感の存在によって成り立つ。米軍は沖縄攻略の次に、九州への上陸を計画していた。九州が戦場にされて多大な犠牲をこうむり、荒廃の末に敗退した場合、「本土」の九州の、激戦跡地において自県出身兵を遠い「南方諸地域」の霊と一緒に合祀し弔うだろうか。／「本土」と沖縄の距離感は四〇〇年前の、薩摩藩による琉球侵攻によ

って生じた。そして今も、沖縄に建つ各都道府県慰霊塔が距離感をくっきりと印象づける（同前、206～207 頁）。

と、指摘している。そこで、この真鍋の指摘を踏まえ、次のキーワードを設定した。

⑦ **沖縄楯・外地**（沖縄を本土の楯、又は外地としてとらえたもの）

なお、慰霊塔の改修の際に、書き換えも行われている碑文もある。本ガイドブックでは、その場合、書き換え前後の碑文テキストを掲載し、双方にキーワードを付すこととした。

また、これらの各都道府県の慰霊塔の他、第 1 章では、「特色のある慰霊塔と碑文」「南洋群島の戦没者慰霊塔」「強制集団死（集団自決）関連の慰霊碑」「男女学徒隊・教職員戦没者の慰霊塔・慰霊碑」「平和の礎・沖縄菩提樹苑」の写真と碑文テキストを紹介した。続く「第 2 章　戦跡を訪ねて」では、沖縄戦の実相を知ることができる戦跡のなかから吉岡氏が訪ねた場所を掲載している。

また、「第 3 章　沖縄戦の実相と慰霊の意味」では、沖縄戦の実相について理解を深めるために、大田昌秀氏「沖縄戦とは何か」（『慰霊の塔―沖縄戦の教訓と慰霊―』所収・転載）、佐喜眞道夫氏「高校生への『沖縄戦の図』解説」（『沖縄の心を』所収・加筆）、大田氏「沖縄の声に聞く―戦争からみえてくる人間の相―」（『同朋新聞』2016 年 8 月号所収・転載）を掲載した。そして、改めて沖縄戦戦没者の慰霊の意味を考えるための手がかりとして、大田氏「慰霊とは何か林立する慰霊の塔に想う」（『慰霊の塔―沖縄戦の教訓と慰霊―』所収・転載）を掲載した。

そして「第 4 章　寄稿文」には、本ガイドブック発行の趣旨に賛同していただいた金城実氏（沖縄在住、彫刻家）「金城実が語る沖縄と慰霊」（聞き取り）、知花昌一氏（沖縄在住、真宗大谷派僧侶）「沖縄から日本を考える―非戦の祈り―」（講演録）、平良修氏（沖縄在住、牧師）「沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの」（『戦争讃美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告』所収・転載）、金井創氏（沖縄在住、牧師）「慰霊から平和構築へ」（寄稿）、長谷暢氏（「編集者紹介」参照）「沖縄から問われている」（寄稿）、「沖縄の仏教・浄土真宗の歴史：紹介」を掲載した。

慰霊塔・慰霊碑と合わせて最終の「第 5 章　資料の紹介」には、参考資料として、「沖縄から伝えたい。米軍基地の話 Q&A：沖縄県」（沖縄県秘書課）、「真宗大谷派 1995 年不戦決議」・「真宗大谷派 2015 年非戦決議」・「真宗大谷派沖縄戦 50 周年追弔法会　表白」、「真宗大谷派沖縄別院 米軍普天間基地周辺住民へ危険を及ぼす米軍機への抗議」を掲載した。

最後に、本ガイドブック発行の経緯について簡単に説明しておきたい。吉岡康裕氏より、本ガイドブック作成の相談を受けたのは、確か 2016 年春であった。吉岡氏の話を聞くなかで、私自身、摩文仁の丘周辺に建つ慰霊塔等については、摩文仁の丘に幾度か足を運んだことはあったが、しっかりと碑文を読んでいなかったことに気づかされた。そこで、吉岡氏のご厚意により、自らの勉強と学生の学びの機会とすべく、3 名の学生と共に、本ガイドブック作成作業に取り組みはじめたのである。

早速に、2016 年 9 月、吉岡氏と長谷暢氏、そして私と学生たちは、慰霊塔と碑文を確かめるために、沖縄本島の摩文仁の丘とその周辺地域を撮影に訪れた。その後は、吉岡氏と長谷氏と私の三名で、さらに撮影を行うために摩文仁の丘とその周辺、そして座間味島、久米島といった離島にも訪れた。最終の調査は、2018 年 10 月に「集団自決之碑」の撮影のために訪れた渡嘉敷島であった。ゼミ学生の出雲路君、久保君、丸尾君には、撮影した写真を見ながら、各都道府県の碑文の文字起しをお願いし、2016 年度の後期半年をかけて、毎週一回、授業時間外に開催した研究会では、毎時間、碑文の文字と写真とを見比べながら修正するという煩瑣な作業を手伝ってもらった。学生諸君にはこの場を借りて御礼申し上げたい。本ガイドブックに掲載されている慰霊塔と慰霊碑と碑文の写真と、碑文テキスト

は、以上のような調査に基づくものである。

本ガイドブック発行の趣旨が、読者諸賢により広く理解され、忘却されつつある慰霊塔・慰霊碑・碑文に光が当てられることにより、私たちの歴史認識を再確認する手がかりとなればと願うばかりである。

主要参考文献　本ガイドブック作成にあたり用いた主要参考文献等は、以下の通りである。

新城敏昭『教養講座　琉球・沖縄史』編集工房東洋企画、2014 年
大田昌秀『沖縄戦戦没者を祀る慰霊の塔』那覇出版社、1985 年
大田昌秀『死者たちは、いまだ眠れず』新泉社、2006 年
大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』那覇出版社、2007 年
佐喜眞道夫『沖縄の心を』佐喜眞美術館、2006 年
全国歴史教育研究協議会編『改訂版　日本史 B 用語集』山川出版社、2009 年
靖国神社国営化反対沖縄キリスト教連絡会編『戦争賛美に異議あり！－沖縄における慰霊塔碑文調査報告－』1983 年
真鍋禎男『沖縄　戦跡が語る悲惨』沖縄文化社、2016 年
吉田裕他編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015 年
『沖縄の慰霊塔・碑』（沖縄県平和祈念財団、2007 年）
『教化研究　資料・真宗と国家Ⅵ下』152／153 号（真宗大谷派教学研究所、2013 年）
『第 16 回　非戦平和展　兵戈無用・戦争は戦争の顔をしてこない』（真宗大谷派、2016 年）

主要参考ホームページ

真宗大谷派東本願寺ＨＰ（http://www.higashihonganji.or.jp/news/declaration/11475/　2018 年 11 月 23 日閲覧）
真宗大谷派東本願寺沖縄別院ＨＰ（https://shinran-oki.org/wish.html　2018 年 11 月 23 日閲覧）

（その他、注記作成に参照した雑誌、新聞、自治体等のホームページについては、その都度、注記末尾に典拠として記した。）

慰霊塔 慰霊碑の建立地案内図

■沖縄本島の慰霊塔建立地区 －13

沖縄の地元地域で建立された慰霊塔の建つ沖縄本島の市町村、離島の一部を記載します。慰霊塔は、各地区（市町村・ただし米軍の上陸が無く被害のなかった離島地区は除く）に複数建立されています。建立された慰霊塔については、沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』、または大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』をご参照ください。

１．摩文仁地区（１） －14

摩文仁地区（２） －15

２．伊原 米須 山崎地区 －16

３．真栄里 西崎 真壁 真栄平地区 －17

４．八重瀬地区 －17

５．那覇地区 －18

６．豊見城地区 －19

７．嘉数地区 －19

８．嘉手納地区 －20

９．読谷地区 －20

以上の地区案合図内には、本誌に記載されていない慰霊塔、施設、観光地が多数あります。それらは、記載した慰霊塔の近くにあります。以下、ご参考までに、代表的な慰霊塔、施設、観光地を掲載します。

１．摩文仁地区（１）　①平和の火　②沖縄平和祈念資料館　⑥沖縄平和祈念堂　⑦平和の丘

摩文仁地区（２）　㉖国立沖縄戦没者墓苑　その他記載の慰霊塔・碑

２．伊原 米須 山崎地区　④平和祈念資料館　その他記載の慰霊塔

３．真栄里 西崎 真壁 真栄平地区　②栄里之塔　④真山之塔　⑥萬華之塔

４．八重瀬地区　⑦白梅学徒看護隊の碑　その他記載の慰霊塔

Ⓐおきなわワールド　Ⓑ玉泉洞　Ⓒガンガラーの谷

５．那覇地区　①小桜の塔　③海鳴りの像　その他記載の慰霊塔

Ⓐ対馬丸記念館　Ⓑ不屈館　その他施設

※なかでも、「対馬丸記念館」と「不屈館」は、訪ねていただきたいと思います。
対馬丸記念館では、何故、学童たちが対馬丸に乗船しなければならなかったのか、その目的や起こった悲劇を知ってください。
不屈館では、米軍統治下において不屈と反骨の精神を持って米軍と対峙した瀬長亀次郎（1907～2001）という人について知って欲しいと思います。その精神は、基地反対の抗議活動をする沖縄県民に受け継がれているのです。

７．嘉数地区　②嘉数の塔　Ⓐ嘉数展望台　Ⓑ嘉数のトーチカ

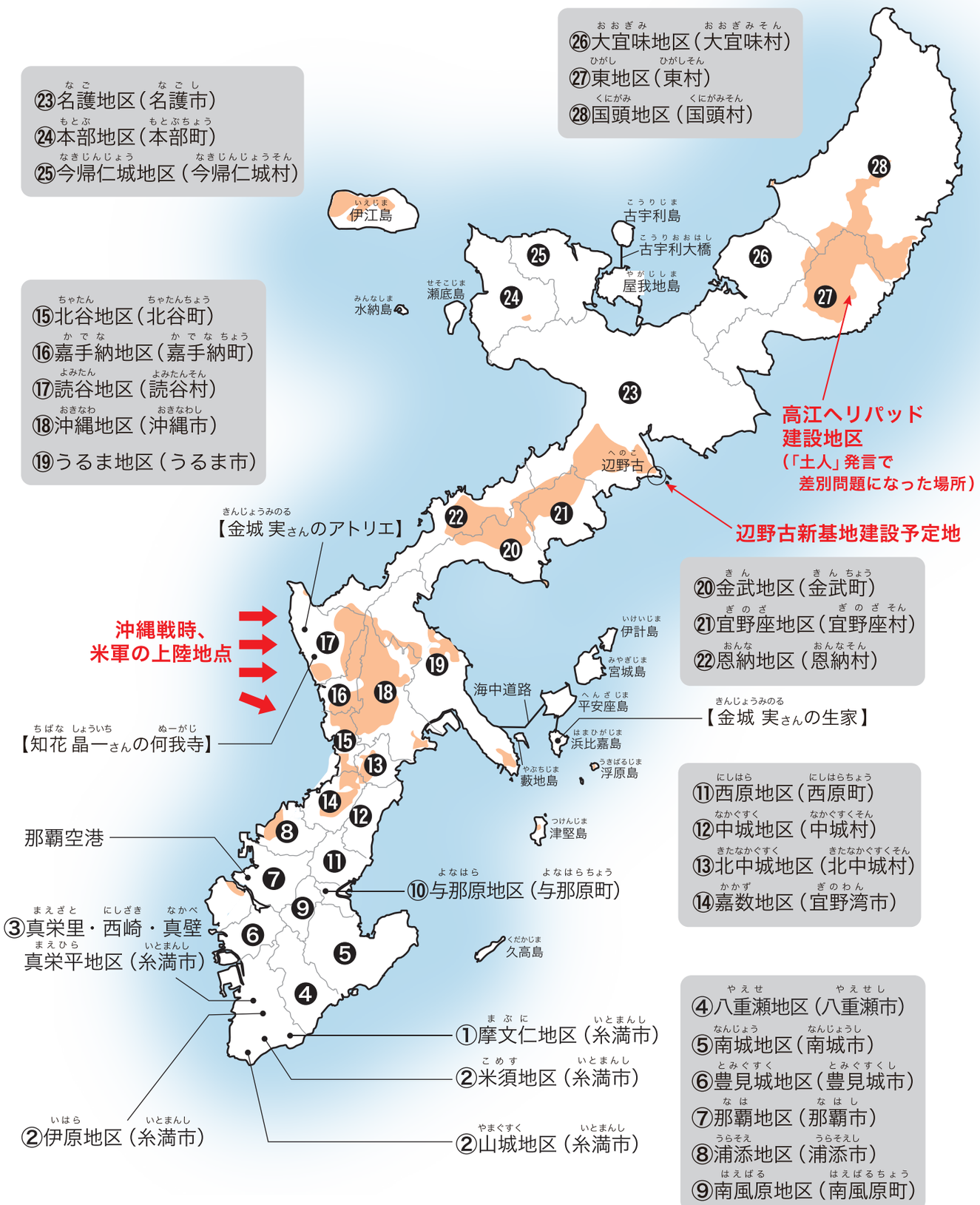
※嘉数展望台からは、普天間米軍基地が全貌できます。オスプレーが駐機、または飛行する様子を見ることができます。世界一危険な基地の全景を見て欲しいと思います。

９．読谷地区　Ⓑ象の檻跡地　Ⓒ琉球村　Ⓓ残波岬　Ⓔ座喜味城跡　Ⓕビオスの丘　Ⓖ眞栄田岬

※読谷地区には、金城実氏のアトリエ、知花昌一氏のお寺「何我寺」と民宿がありますので、訪ねて見てはいかがでしょうか。

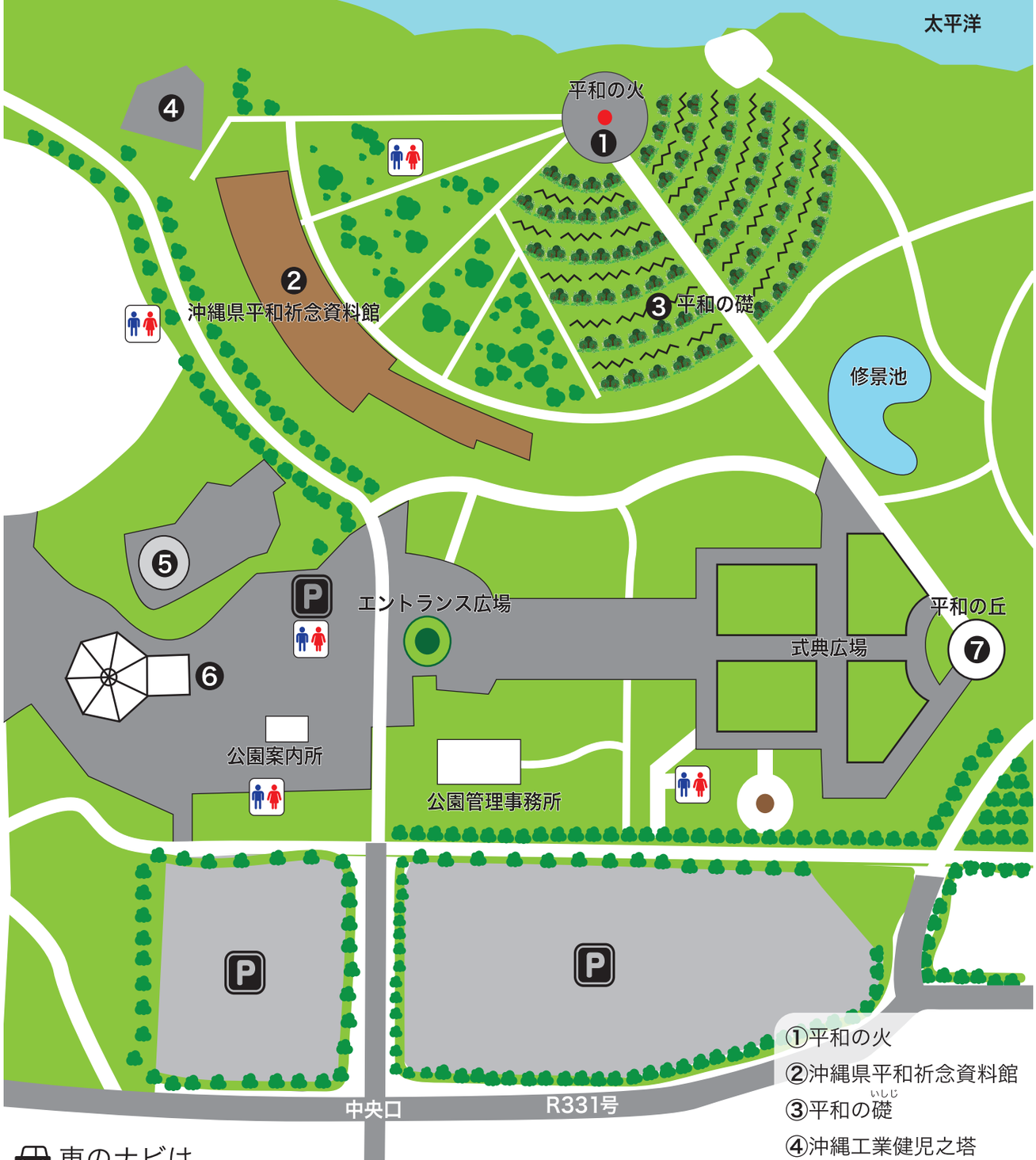
沖縄本島の慰霊塔建立地区

色付け部分は、沖縄本島にある米軍専用基地施設の地域です。（2018年1月現在）
※沖縄県 知事公室 基地対策課の資料に基づく



沖縄平和祈念公園

沖縄平和祈念公園は、沖縄戦で最大の激戦地となった糸満市摩文仁地区にあり、
沖縄平和祈念資料館、沖縄平和祈念堂、平和の礎などが整備されています。
園内には、国立沖縄戦没者墓苑を中心に、各都道府県、自治体、遺族会などの
慰霊塔、慰霊碑が数多く建立されています。



①平和の火
②沖縄県平和祈念資料館
③平和の礎（いしじ）
④沖縄工業健児之塔
⑤韓国人慰霊塔
⑥沖縄平和祈念堂
⑦平和の丘

車のナビは
沖縄平和祈念公園
で検索

1. 摩文仁（まぶに）地区（1）

⑦島守(しまもり)之塔
⑧栃木の塔（栃木県）
⑨みちのくの塔（青森県）
⑩岡山の塔（岡山県）
⑪愛媛之塔（愛媛観）
⑫逓魂(ていこん)之塔
⑬房総之塔（千葉県）
⑭福井之塔（福井県）
⑮近江の塔（滋賀県）
⑯新潟の塔（新潟県）
⑰愛國知祖(あいこくちそ)之塔（愛知県）
⑱千秋(せんしゅう)の塔（秋田県）
⑲茨城之塔（茨城県）
⑳群馬之塔（群馬県）
㉑のじぎくの塔（兵庫県）
㉒神奈川の塔（神奈川県）
㉓静岡の塔（静岡県）
㉔英霊に水を捧げる記念碑
㉕立山の塔（富山県）
㉖国立沖縄戦没者墓苑
㉗岐阜県の塔（岐阜県）

㉘岩手の塔（岩手県）
㉙三重の塔（三重県）
㉚第六十二師団慰霊碑
㉛なにわの塔（大阪府）
㉜徳島の塔（徳島県）
㉝福岡の慰霊の塔（福岡県）
㉞埼玉の塔（埼玉県）
㉟鎮魂(ちんこん)長崎の塔（長崎県）
㊱はがくれの塔（佐賀県）
㊲防長(ぼうちょう)英霊の塔（山口県）
㊳信濃(しなの)の塔（長野県）
㊴ふくしまの塔（福島県）
㊵沖縄放送局戦没職員慰霊碑
㊶火之国(ひのくに)之塔（熊本県）
㊷黒百合の塔（石川県）
㊸しづたまの碑
㊹樺太(からふと)の碑
㊺安らかに（鹿児島県）
㊻勇魂(ゆうこん)の塔
㊼黎明(れいめい)之塔
㊽疑烈空挺隊(ぎれつくうていたい)の碑
㊾ダバオ之塔
㊿台湾之塔
(51)空華(くげ)之塔
(52)宮城之塔（宮城県）
(53)ブーゲンビル島戦没勇士之碑
(54)沖縄師範健児(しはんけんじ)之塔
(55)南冥(なんめい)の塔
(56)独立臼砲(きゅうほう)第一連隊戦没英霊之塔
(57)風部隊(かぜぶたい)之碑

1. 摩文仁(まぶに)地区(2)

2. 伊原・米須・山城地区

米須海岸（スーサイド）

米須海岸は、県内有数のサーフィンスポットで糸満市長杯も開催されます。
多くのサーファーが波を求めて県内外から訪れています。
この海岸一帯を別称「スーサイド（suicide）」と呼び、その意味は「自殺」です。
沖縄戦のとき、この海岸一帯で多くの自決があったことから、サーファーたちの中で「スーサイド」と名付けられたと臣われます（長谷記）。

①バックナー中将
戦死之跡碑

②栄里之塔

③山形の塔（山形県）

④眞山之塔

⑤白梅之塔

⑥萬華之塔

⑦南北之塔

⑧翔洋碑
※沖縄水産高校内に建つ。

①甲斐之塔（山梨県）

②土佐之塔（高知県）

③魄粋之塔

④慰霊顕彰碑
※①～④の塔は、
具志頭城址公園に建つ。

⑤萬朶之塔
※老人ホーム転生園の手前右側を
徒歩。畑の脇に建つ。

⑥八重瀬之塔

⑦白梅学徒看護隊の碑
※八重瀬公園駐車場の入口左側

⑧富盛の石彫大獅子
※案内板を目安に探してください。

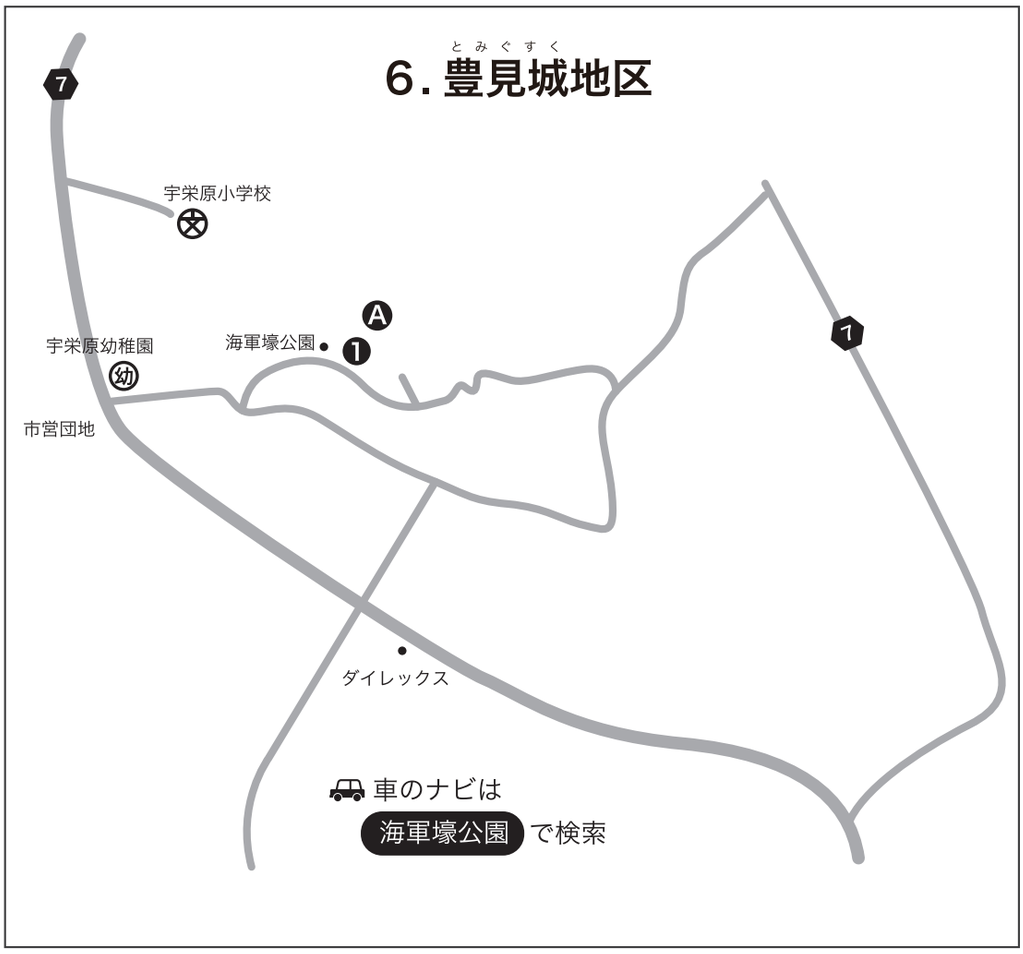
Ⓐ おきなわワールド

Ⓑ 玉泉洞

Ⓒ ガンガラーの谷

Ⓓ 糸数のアブチラガマ

5. 那覇地区
波之上臨港道路
首里高校
29
50
首里城公園
7
赤マルソウ通り
養秀会館
旭ヶ丘公園
波之上宮
護国寺
58
43
久米２
久米南
松山
ゆいレール
那覇商業高校
大典寺
222
久茂地
42
松尾
39
県庁前
県庁北口
沖縄県庁
那覇市役所
沖縄県警察本部
那覇高校
県庁南口
城岳公園
明治橋
331
山下
奥武山陸上競技場
330
沖縄県護国神社
221
329
507
奥武山公園
①小桜の塔
※旭ヶ丘公園内に建つ
②戦没新聞人の塔
※旭ヶ丘公園内に建つ
③海鳴りの像
※対馬丸記念館の右横より階段上がる
④恒久平和のモニュメント「なぐやけ」
※旭ヶ丘公園内に建つ
⑤和魂
※那覇商業高校内のグラウンド脇に建つ
⑥積徳高等女学校慰霊之塔
※大典寺の入口右側に建つ
⑦一中健児之塔
※養秀会館の敷地内に建つ
⑧二中健児の塔
※城岳公園内に建つ
Ⓐ 対馬丸記念館
Ⓑ 不屈館
Ⓒ 福州園
Ⓓ 辻遊郭開祖之墓
Ⓔ 龍柱



①海軍戦没者
慰霊之塔

Ⓐ旧海軍司令部壕群

①京都の塔
②嘉数の塔
③青丘之塔

Ⓐ嘉数展望台
Ⓑ嘉数のトーチカ

①農林健児之塔

※野國總管公園内。
野國總管宮の脇、右手奥。

①チビチリガマ

②恨之碑

③さとうきび畑の歌碑

④艦砲ぬ
喰ぇ一残さーの歌碑

⑤米軍上陸の地碑

Ⓐシムクガマ

Ⓑ象の檻跡地

Ⓒ体験王国
むら咲きむら

Ⓓ座喜味城跡

Ⓔやちむんの里

Ⓕ残波岬

Ⓖ真栄田岬
（青の洞窟）

Ⓗ琉球村

Ⓘビオスの丘

Ⓙ奉安殿

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

１．46 都道府県の慰霊塔と慰霊碑

ここでは、碑文の性質を判断したキーワードを各碑文に付記しましたので、参考にしてください。詳細については、前頁の「総論：本ガイドブックの発行にあたって－都道府県の碑文を読むために－」で説明してありますので参照ください。

キーワード　**①美化・肯定**（戦争・戦死の肯定、美化の響きをもつもの）
②平和祈念（平和への願望・祈念を表すもの）
③懺悔・哀しみ（戦争への懺悔、哀しみを表すもの）
④反戦（反戦への決意・誓いを表すもの）
⑤沖縄友好（沖縄との友好、連帯等を表すもの）
⑥沖縄哀悼（沖縄への悼みを表すもの）
⑦沖縄楯・外地（沖縄を本土の楯、または外地としてとらえたもの）

１．北海道　北霊碑 －22
２．青森県　みちのくの塔－23
３．岩手県　岩手の塔－24
４．宮城県　宮城之塔－25
５．秋田県　千秋の塔－26
６．山形県　山形の塔－27
７．福島県　ふくしまの塔－28
８．栃木県　栃木の塔－29
９．群馬県　群馬の塔－30
10．茨城県　茨城の塔－31
11．千葉県　房総之塔－32
12．埼玉県　埼玉の塔－33
13．東京都　東京之塔－34
14．神奈川県　神奈川の塔－35
15．新潟県　新潟の塔－36
16．山梨県　甲斐之塔－37
17．静岡県　静岡の塔－38
18．愛知県　愛國知祖之塔－39
19．長野県　信濃の塔－40
20．富山県　立山の塔－41
21．石川県　黒百合の塔－42
22．福井県　福井之塔－43
23．岐阜県　岐阜県の塔－44
24．滋賀県　近江の塔－45
25．三重県　三重の塔－46
26．奈良県　大和の塔－47
27．和歌山県　紀乃國之塔－48
28．京都府　京都の塔－49
29．大阪府　なにわの塔－50
30．兵庫県　のじぎくの塔－51
31．鳥取県　因伯の塔－52
32．岡山県　岡山の塔－53
33．島根県　島根の塔－54
34．広島県　ひろしまの塔－55
35．山口県　防長英霊の塔－56
36．香川県　讃岐の奉公の塔－57
37．徳島県　徳島之塔－58
38．愛媛県　愛媛之塔－59
39．高知県　土佐之塔－60
40．福岡県　福岡の慰霊の塔－61
41．佐賀県　はがくれの塔－62
42．大分県　大分の塔－63
43．長崎県　鎮魂長崎の塔－64
44．熊本県　火乃国之塔－65
45．宮崎県　ひむかいの塔－66
46．鹿児島県　安らかに－67

1. 北海道

北霊碑（ほくれいひ）

米須地区に建つ
（2. 伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図参照 ⑮）

①所在地　沖縄県糸満市米須
②建立年月日　1954（昭和 29）年 4 月
（1972 年 10 月と
1996 年 11 月に改修）
③敷地面積　640 ㎡
④戦没者数　40,850名
（沖縄戦戦没者10,850名、
南方諸地域戦没者30,000名）
⑤管理団体　北海道連合遺族会
⑥建立の経緯　碑文を参照

碑　文

曠古の大東亜戦争はその惨烈ここ沖縄の決戦に極まって我北海道出身の将兵一万有余名も玉砕護国の楯とはなった昭和二十九年四月北海タイムス社北海道沖縄遺族会がその霊を悼み全国に魁けて本碑を創建したが爾来風雨十八年漸くその補繕を迫られるに及び茲に本会の発議により本年恰も沖縄の祖国復帰をトし道並に全道市町村の助成及び沖縄会の協力をも得て浄財を募り本島はもとより伊江島慶良間等四十余島並に広く南方海域諸島に散華した北霊凡そ三万余柱の招魂の聖碑ともてなして之を改修した。

願わくは英魂永遠に瞑せられんことを改修にあたり終戦以来慰霊事業諸般に亘り献身的な奉仕を援助を戴いた沖縄遺族連合会会長金城和信翁以下の御恩徳を銘記し後世に伝うる次第である。

昭和四十七年五月十五日
北海道連合遺族会
北海道護国神社宮司　藤枝弘文

※美化・肯定

碑　文

北霊碑改修の趣旨

わが国の平和と繁栄は、先の大戦で国に殉じられた戦没者各位の尊い礎の上に築かれたものであることは全国民が認識しているところである。

沖縄ならびに南方戦線で戦没された北海道出身将兵のみ霊を祀る北霊碑は、昭和二十九年、全国に先駆けてこの地、沖縄糸満に建立され、昭和四十七年に一度改修されたが、爾来、沖縄を訪れる北海道民が必ず参詣される聖碑となり、遺族の心のよりどころともなっている。

しかし、今日、改修されて二十有余年の歳月をかさねることにより碑材のいたみが顕著となり、ために尊崇感に与える影響もあり、道民、遺族から再改修の強い要望を受け、今般、財団法人北海道連合遺族会の創立五十周年記念事業として、大巾に改修することとしました。

今回の改修にあたっては、北海道の特色を生かし、南方における慰霊施設として、尊崇でき、平和の尊さを永く後世に伝え得ることを祈念し、道ならびに道内全市町村のご支援を受け、遺族の熱い想いをこめ、総工費四千万円をもって、平成八年五月着工、同年九月吉日竣工した。

ここに、北霊碑に祀る英霊の安らかならんことを冀うとともに、ご協力賜わった道、道内全市町村ならびに関係所団体に、心から深甚なる謝意を表するしだいである

平成八年十一月
財団法人　北海道連合遺族会
会長　堂垣内尚弘

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

2.青森県

みちのくの塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図参照 ⑨)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964(昭和 39)年
11月 11日
③敷地面積　1,827 ㎡
④戦没者数　19,847 名
(沖縄戦戦没者 544 名、
南方諸地域戦没者 19,303 名)
⑤管理団体　青森県遺族連合会
⑥建立の経緯　碑文を参照

碑　文

太平洋戦争において、日本近海をはじめ、中国本土、南方諸戦線に参じ、祖国に殉じた県人一万九千八百四十有余柱のみ霊のため、最後の戦場となった摩文仁の丘に塔碑を建立する。

碑石を故山より運び、遙かにみちのくを望んで立たしめ、文を刻し、和歌を献じて慰霊のまごころを捧げる。

時に昭和三十九年十一月十一日

青森県戦没者沖縄慰霊塔
建立期成同盟会

※美化・肯定、沖縄楯・外地

碑　文

本県南方戦没者一九,八四七柱の慰霊のため、遥か郷土の秀峰岩木山の原石を船で運び、六地区遥拝のために副碑を配置して、昭和三十九年十一月、県民の誠心を込めて「みちのくの塔」が建立された。以来、数回の補修工事や環境の整備を行い、碑前においては、毎年県人多数の参加の下、盛大に慰霊祭を挙行し今日に至る。時移り人変わりて、今後詣でる人々のために歴史的事業である「塔の由来」を碑文に残す重要性を思い、ここに青森県遺族連合会創立五十周年記念事業として、木村知事謹作の和歌を献じ「みちのくの塔の由来」の碑を建立する。

平成九年十一月十一日

青森県知事　木村守男
青森県議会議長　高橋弘一
青森県遺族連合会長　藤田美栄

終戦五十年を記念して知事の詠める歌
国のため　愛しき人ら　散華して
五十路過ぎさり　かなしみ今も
木村守男

3.岩手県

岩手の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ㉘）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966（昭和 41）年
10 月 20 日
③敷地面積　825 ㎡
④戦没者数　34,860 名
（沖縄戦戦没者 653 名、南方諸地域
戦没者 20,697 名、その他 13,510 名）
⑤管理団体　岩手県

碑　文

大東亜戦争に際し祖国に殉じられたる郷土出身三万四千八百有余柱のみ霊よわれら今日あるは諸霊に負うところ多し

諸霊の愛国の至情を後世に伝えみ霊を慰むるはわれらが責務なりされば本土防衛最後の戦場となりしここ摩文仁ヶ丘にわれら県民の平和への願いと慰霊の誠をこめて塔を建立す

希くはとこしえにこの霊地に鎮まり給わらんことを

昭和四十一年十月二十日

岩手県戦没者慰霊塔建立期成会
会長　岩手県知事　千田 正

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

4. 宮城県

宮城之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ㊷

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1968（昭和 43）年
2 月 20 日
③敷地面積　996, 9 ㎡
④戦没者数　45,500 余名
（沖縄戦戦没者 582 名）
⑤管理団体　宮城県

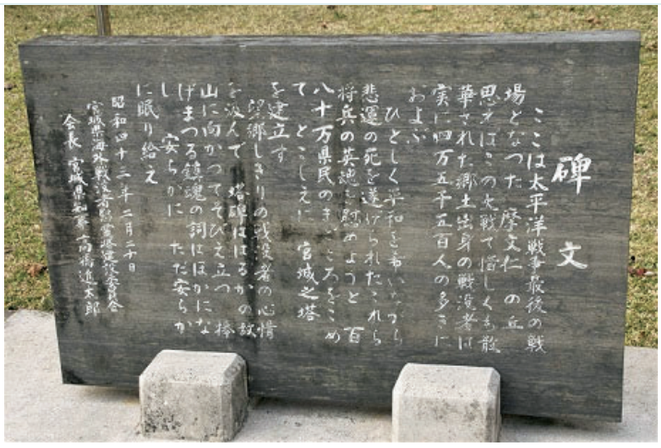
碑　文

ここは太平洋戦争最後の戦場となった　摩文仁の丘
思えばこの大戦で惜しくも散華された郷土出身の戦没者は実に四万五千五百人の多きにおよぶひとしく平和を希いながら悲運の死を遂げられたこれら将兵の英魂を慰めようと　百八十万県民のまごころをこめて　とこしえに宮城之塔を建立す

望郷しきりの戦没者の心情を汲んで 塔碑ははるかの故山に向かってそびえ立つ 捧げまつる鎮魂の詞はほかになし 安らかに ただ安らかに眠り給え

昭和四十三年二月二十日
宮城県海外戦没者慰霊塔建設委員会
会長　宮城県知事高橋進太郎

※美化・肯定、沖縄楯・外地



5. 秋田県

千秋（せんしゅう）の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ⑱）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1962（昭和37）年１月 30 日
（1984 年 12 月 26 日移転改修）
③敷地面積　1,080.45 ㎡
④戦没者数　12,432 名
（沖縄戦戦没者432名、
南方諸地域戦没者12,000名）
⑤管理団体　秋田県

碑　文

過ぎし大戦において、国内唯一の戦場となった沖縄の地に参戦した秋田県出身の兵士は、遠き故郷に思いを馳せながら華と散り、この地に永久に眠っております。茲に沖縄戦で殉じられた多くの御霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するため、ここ摩文仁の丘に「千秋の塔」を建立いたします。

初代「千秋の塔」
建立年月日　昭和三十二年一月二十三日
建立場所　糸満市米須「魂魄之塔」前
建立者　沖縄県人会宜野座通男氏他
碑銘命名者　宜野座通男氏

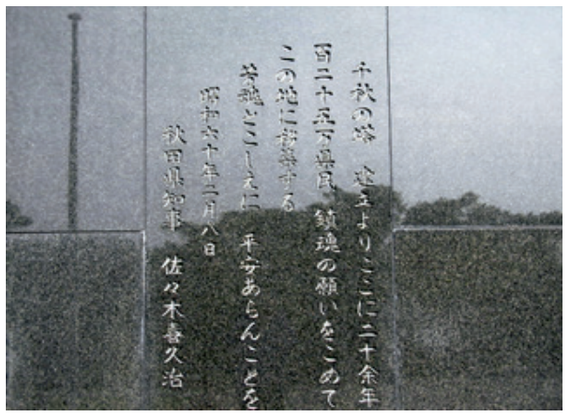
二代目「千秋之塔」
建立年月日　昭和三十七年一月三十日
建立場所　糸満市摩文仁平和祈念公園内（黎明の塔前）
建立者「千秋の塔」再建協議会
（秋田県遺族連合会他三団体）
協賛団体　秋田県、秋田県議会他四団体

三代目「千秋之塔」（現慰霊碑）
建立年月日　昭和五十九年十二月二十六日
建立場所　糸満市摩文仁平和祈念公園内（現在地）
建立者　秋田県
秋田県戦没者数　総数約三万四千名
うち沖縄戦六二三名

※美化・肯定、平和祈念

碑　文

千秋の塔　建立よりここに二十余年百二十五万県民　鎮魂の願いをこめてこの地に移築する
芳魂とこしえに　平安あらんことを
昭和六十年二月八日
秋田県知事　佐々木喜久治



6.山形県

山形の塔

「糸満市真栄里」に建つ
（3.・真栄里・西崎・真壁・真栄平地区
建立場所案内図参照 ③）

①所在地　沖縄県糸満市字真栄里
②建立年月日　1965（昭和 40）年 2 月 6 日
③敷地面積　1,005 ㎡
④戦没者数　40,834 名
（沖縄戦戦没者 765 名、
南方諸地域戦没者 25,612 名、
その他地域戦没者 14,457 名）
⑤管理団体　山形県

碑　文

山形の塔

この塔は沖縄（七七六柱）をはじめ海外諸地域において戦没された山形県出身者四万余柱の諸霊を祀ってあります。

一九六五年二月山形県民の総意と誠心による碑石、台座を県から運び建立したもので、この聖地は歩兵第三十二連隊が軍旗を奉持勇戦斗し一九四五年八月この壕内で奉焼した由緒ある丘であります。

右の堂は観音像（二体）を安置する観音堂です。

山形県
一九八二年十月（再記）

※美化・肯定、沖縄楯・外地

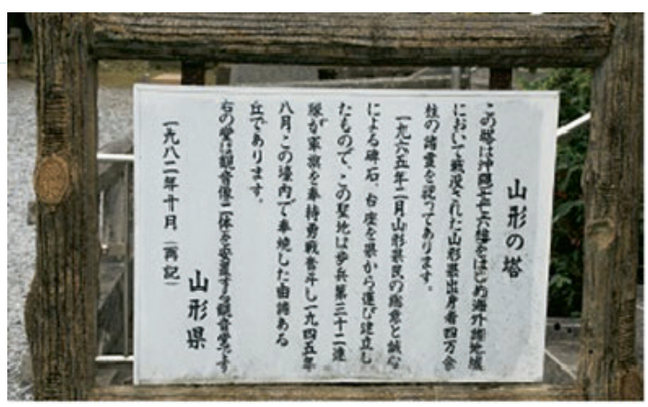
碑　文

山形の塔建立記

大東亜戦争において祖国防衛のため、惜しくも散華された山形県出身三万八千余の英霊を仰ぎその偉勲をしのび、み霊の冥福を祈り永久に鎮まりますことを念じ、ここに県民の総意を結集してこの塔を建立したのである。

昭和四十年二月六日
建設期成同盟会長　加藤富之助

※美化・肯定



7.福島県

ふくしまの塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図 参照 ㊴）

①所在地　沖縄県糸満市摩文
②建立年月日　1966（昭和 41）年
10 月 26 日
③敷地面積　1,231㎡
④戦没者数　66,304 名
（沖縄戦戦没者 942 名、南方諸地域戦没者 23,947 名、その他地域戦没者 41,415 名）
⑤管理団体　福島県遺族会

碑　文

この塔は　第二次世界大戦において祖国の隆昌と民族の安寧を念じて戦いに加わり惜しくも海外において尊い命を散華された　福島県出身戦没者六万六千余柱の英魂を合祭したものであります

われわれは　その勇姿をしのび祖国に殉じた誠をとこしえにたたえ　そのご冥福を祈るため　ふるさとの清石を運び慰霊の塔とし八方には異郷の戦場をしのぶ遥拝所を配したものであります

この建立にあたっては　福島県民の総意を基礎とした期成同盟会を結成し広く県民各層からの協賛と浄財をあおぎ　ここ大戦最終の激戦地「摩文仁の丘」に英霊へのつきない敬慕と世界の永遠の平和の願いをこめて　この「ふくしまの塔」を建設したのであります

同郷六万六千余の霊よ　いつまでも　そしてやすらかにしずまりますことを祈ります

昭和四十一年十月二十六日
福島県戦没者沖縄慰霊塔
建設期成同盟会　謹志

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

碑　文

「ふくしまの塔」は昭和四十一年十月この場所に建立されたのであったが、敷地が狭隘で年々の祭祀にも不便であったばかりでなく、近年塔の一部に破損箇所もできるにいたった。

これがため本会において慎重に協議を重ねた結果敷地を拡張し全面的整備を図ることとした。

これに要する経費金三千百萬については各界からの協賛と会員の浄財に據ることとしたが、県知事松平勇雄殿の御英断により金壹千萬圓の県費助成をいたゞいた。

敷地については沖縄県御当局の御配慮により従来の面積の約二倍に当る八百参拾平米を無償で借受けることができた。

今この事業の竣工に当り福島県御当局は勿論のこと沖縄県御当局、沖縄県福島県人会の御後援に対し厚く感謝の意を表する。

昭和六十二年十一月六日
財団法人福島県遺族会

※沖縄友好

8.栃木県

栃木の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ⑧）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966（昭和 41）年
11 月 9 日
③敷地面積　1,950 ㎡
④戦没者数　31,495 名
（沖縄戦戦没者 676 名、南方諸地域
戦没者 30,819 名）
⑤管理団体　茨城県遺族連合会

碑　文

太平洋戦争に於いて　南方方面に戦没した下野出身の英霊は、実に三万一千余柱を数える

今や祖国に平和はよみがえったが、再び帰ることのないあなたがたを思えば哀痛きわまりない

ここに県民あげて鎮魂の祈りをこめ沖縄摩文仁が丘に　この地ゆかりの門柱墓式をとり郷土足尾の石を用いて栃木の塔を建て　永えにその功績を伝え、感謝と敬仰の誠を捧げる

昭和四十一年
栃木県南方方面戦没者
慰霊塔建設委員会

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

碑　文

「栃木の塔」の由来

この「栃木の塔」は、さきの大戦で国の礎となられた、栃木県出身の南方方面戦没者三万一千余柱の尊霊を永久にお慰め申し上げるために建立されたものであります

沖縄王家の墓（玉陵）の型式を取り入れ、沖縄の伝統的墓型（門中墓）の一種である破風墓を模したものです。

慰霊塔には、沖縄産トラバーチン（ 大理石）を使用し、碑の文字板、副碑及び踏石には、足尾の庚申御影石及び大谷石を使用しています

トラバーチンの墓は、歳月とともに表面が苔むして黒味を帯び、沖縄の風土に調和して、つつましい中にも荘厳さを供え、沖縄の人々に貴ばれているものです

なお、建立に当たっては、 陶芸家故浜田庄司先生を始め県建築士会及び現地の方々の御指導を受けたものであります

平成三年十月
栃木県遺族連合会

※美化・肯定、沖縄友好、沖縄楯・外地

9.群馬県

群馬之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ⑳）

①所在地　沖縄県糸満市字摩文仁
②建立年月日　1963（昭和 38）年 2 月 1 日
③敷地面積　1,183 平方メートル
④戦没者数　30,771 名（沖縄戦戦没者
850 名、南方諸地域戦没 29,921 名）
⑤管理団体　群馬県遺族の会

碑　文

群馬の塔ご案内
ご参拝の皆様誠に有り難うございます。
群馬の塔には太平洋戦争における群馬県出身者のうち沖縄戦没者八百有余名と遠く南方の各戦線で戦没された 三万余名を一体として合祀されてあります。
主柱の三波石は平和への祈りをこめた合掌型で、はるか群馬に向っていますから、郷里に在っても常に遙拝することができます。

また　南方諸地域における戦没者のため各戦場を六方面に区分し、それぞれ郷土の名石をもって方向を示してありますから、遠く南方諸戦場をしのび拝礼することができます。
身動きもできない程敵火をあび矢弾がつきて
食もなく、一滴の水さえ求め得ずおり重なってたおれて行ったあの谷この丘一木一草に霊魂宿る沖縄戦の惨情、いや、南方の戦場もそれ以上のものがあったでしょう。
こゝに雄々しくも散っていった将兵の面影をしのんで心からご冥福をお祈り致しましょう

※美化・肯定、沖縄楯・外地

碑　文

太平洋戦争の戦局が主として東南アジア全域において大勢を決することゝなるや諸霊は遠く離れた南方戦線において陸海空の苛烈なる死闘を重ね言語に絶する苦しみに遭い非運にも異境に没してふたゝび家郷に帰えらずむなしく散華せし将兵の数は幾万を知らず洵に胸を抉られるものありことに群馬県出身者はこゝ沖縄島に陸軍航空中佐町田一郎氏をはじめ八百有余柱におよび全南方戦線において死を遂げる者亦数多しこのたび終戦より十七回忌にあたり故郷に在住する百六十万県民は諸霊の崇高な死に対して報謝慰霊を捧げるべくここに群馬県同議会を初めとし県戦争犠牲者福祉運動本部県下の市町村同議会など三十三団体の協賛により厳かに群馬の塔を建つ秀峯上毛三山をかたどりはるばると名石三波石など心をこめて運びここ摩文仁の景勝地において遙か南方諸地域と沖縄の地に眠る霊が安らかな浪の楽の音に守られながら共にふるさとを語り合うよすがとなす心をしずめ南溟の彼方を望み観て漠々たる雲の涯になつかしくもまた哀しき緒霊の冥福を祈る

昭和三十八年二月
群馬県戦没者沖縄慰霊塔建設期成同盟会長
群馬県議会議長　飯塚国蔵　謹誌

※美化・肯定、沖縄楯・外地

10.茨城県

茨城の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図参照 ⑲）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964（昭和 39）年 11 月 29 日
③敷地面積　1,324 ㎡
④戦没者数　38,000 名
（沖縄戦戦没者 610 名、南方諸地域
戦没者 38,200 名）
⑤管理団体　茨城県遺族連合会

碑　文

茨城の塔碑文

この塔は太平洋戦争において本土防衛の防波堤となって沖縄の戦をはじめ　遠く南方戦線に死闘を重ね異郷にその尊い生命を国家の栄光の前に捧げた　茨城県出身戦没者三万八千余柱の勇魂をこの地に招き　二百万県民が平和の祈りをこめて建立したものである　諸霊の愛国の至情は仰いで範とすべく　耿々として後進を鼓舞することを信ずる

冀くは雄魂　永くこの霊地に鎮まり 国家永遠の隆昌と遺族の繁栄に加護を垂れ給え
昭和三十九年十一月

財団法人　茨城県遺族連合会
理事長　遠山　勇

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

碑　文

「茨城の塔」整備記念碑

この塔は、昭和三十九年十一月沖縄をはじめ南方全線域の戦没者の慰霊と、茨城県民の平和への祈りにより建立された。

かねてから敷地の整備をはじめとする全体整備が念願であったことから本年、終戦五十周年を記念し、整地、慰霊塔の移設、柵の改築、東屋、方位盤の新設を茨城県の御協力をいただき整備したものである。

平成七年十一月
財団法人　茨城県遺族連合会
会長　狩野　安

※平和祈念、沖縄楯・外地

11.千葉県

房総之塔

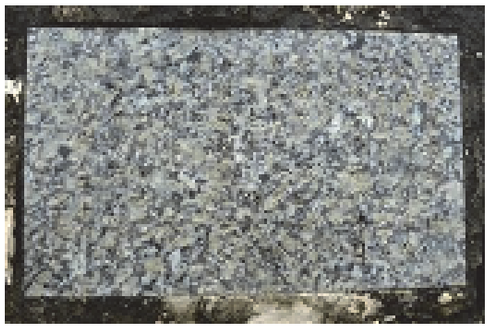
「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑬）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年
12 月 3 日
(平成 8 年 10 月改修)
③敷地面積　663 ㎡
④戦没者数　35,693 名
(沖縄戦戦没者 1,608 名、南方諸地域
戦没者 34,085 名)
⑤管理団体　千葉県

碑　文

「房総之塔」は建立から三十有余年を経てここに戦後五十年の節目を迎えたことから改めて　戦没者を慰霊し平和を祈念するため　施設の大規模改修を行いました
一　休憩施設設置
一　スロープ設置
一　参道敷石改修等
平成八年十月　千葉県

※平和祈念



碑　文

建立の記

この塔は さきの大戦においてひたすら祖国の安泰を願い戦陣に駆け 沖縄 中国及び南方諸地域で散華された千葉県出身戦没者三万五千六百九十三柱の御霊を合祀したものであります

建設にあたっては 千葉県南方戦没者慰霊塔建設委員会が県民各層からの協賛と浄財を仰ぎ 史上類例のない激戦の地である ここ摩文仁の丘に 昭和四十年十二月三日建立しました

また 塔の形は 合掌を組み現世の平和と子孫の繁栄を祈る姿を象徴したものであり 中央には戦没者の遺品をちりばめた玉塊を安置してあります

名称は公募により「房総之塔」と命名されました

追　記

平成五年九月の台風十三号により玉塊が破損したため同年十二月三日に 県花である「菜の花」と ふるさと千葉県を波の形としてあしらった現在の玉塊に改修しました
なお　旧玉塊の遺品は塔後方に埋納してあります

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

12.埼玉県

埼玉の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉞）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966(昭和 41)年
11 月 25 日
③敷地面積　1,157 ㎡
④戦没者数　28,031 名
（沖縄戦戦没者 1,040 名、南方諸地域
戦没者 26,991 名）
⑤管理団体　埼玉の塔管理委員会

碑　文

塔型態の意味

なだらかな丸味を帯びた台座は郷土埼玉の地形立地を象徴し、この台座に立つ高さ約４ｍ横 13ｍに及ぶ白いバックスクリーンは、いまはなき戦没者が、こよなく愛した肉親への数々の願いを託し文字にならなかった遺書を表現したもので、またバックスクリーンの前面に立つ７体の鉄像は、たとえ故人が戦いによりその生命が断れてもその精神的生命、なかんずく平和希求への至情は植物の世界にかえって不断の生命を宿す草のように生き続け、たえず平和な人類社会の創造へと呼びかけている姿を抽象化し表現したものであります。また台座をとりまく一帯の造園は埼玉を象徴する「まがたま」を形どり参道前面に数多く配置した郷土産の庭石は遺家族はもとより多数の県民がこの慰霊塔とともに絶えず一体化してあることを表現したものです。　埼玉の塔管理委員会
昭和 53 年 11 月 25 日建立す

※平和祈念

碑　文

埼玉の塔建立の記

苛烈を極めた太平洋戦争が終わって二十一年 ふるさとを遠くいで 南海の島々に身を挺してたたかったつわものたち 限りなく祖国を愛し 若き生命を捧げた郷土出身の戦没者二万八千余のみたまを想う

三百万埼玉県民同胞は 心をこめて荒川の清流に磨かれし銘石と 本県特産の鋳物を運び 無限の生命と平和の願いを萌生する植物の化身にうつして ここ摩文仁の丘に埼玉の塔を建立す

たおれし友あい集いて ふるさとの小鳥うたう武蔵野を緑けむる秩父路をともに語らい 永久に 安らかにお眠り下さい　昭和四十一年十一月
埼玉県沖縄慰霊塔建設委員会会長
埼玉県知事　栗原　浩　謹書

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

碑　文

今日埼玉県は、660 有余万の人口を有し、愛称「彩の国」として、産業、文化、学術など様々な分野で発達しております。

郷土の繁栄を祈りながら散華された 2 万 8 千余のみたまに、四季折々の色彩豊かな自然に恵まれ、躍進を続ける埼玉県の姿を御報告するため、彩の国元年に当たり設置しました。　平成 5 年 11 月吉日　埼玉の塔管理委員会

※美化・肯定

13.東京都

東京之塔

山崎地区に建つ
（2.伊原・米須・山城地区
建立場所案内図を参照 ⑲）

①所在地　沖縄県糸満市山城
②建立年月日　1971(昭和 46)年
10 月 27 日
③敷地面積　8,000 ㎡
④戦没者数　103,500 名
（沖縄戦戦没者 6,500 名、南方諸地域
戦没者 97,000 名）
⑤管理団体　東京都

碑　文

さきの大戦中 南方諸地域において戦没せられた東京都の関係者は実に十万有余柱に及ぶ

顧みればわれら同胞が戦禍に堪えて刻苦精励すること二十有余年　よく平和の恩恵に浴しえたことは　ひとえに英霊が戦火の悲惨と生命の尊厳を貴い血をもって示されたたまものにほかならない

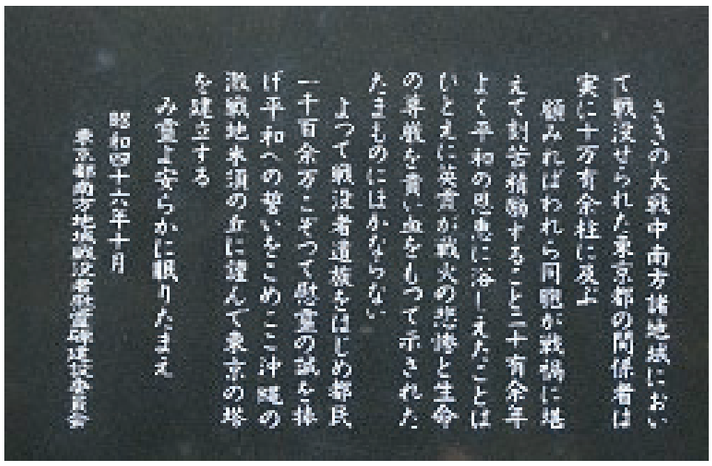
よって戦没者遺族をはじめ都民一千百余万こぞって慰霊の誠を捧げ平和への誓いをこめ ここ沖縄の激戦地米須の丘に謹んで東京の塔を建立する

み霊よ安らかに眠りたまえ

昭和四十六年十月

東京都南方地域戦没者慰霊碑建設委員会

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地



14.神奈川県

神奈川の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉒）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 11 月 26 日
③敷地面積　1,534 ㎡
④戦没者数　40,680 名
（沖縄戦戦没者 1,678 名、南方諸地域
戦没者 39,002 名）
⑤管理団体　神奈川県

神奈川の塔　建立の由来

大東亜戦争終戦二十周年に当り戦争犠牲者援護団体が中心となって南方諸地域で散華された英霊の顕彰と神奈川県と沖縄をむすぶ親善のきずなとなることを念じ広く県民の賛同を得て 今次の大戦最大の激戦地沖縄に慰霊塔建立すべきであるとの声が澎湃として起り県、県議会は挙げてこれに応えるとともに関係機関の積極的な協力のもと本年のはじめ各界を代表する関係者七十余名をもって神奈川県南方諸地域戦没者慰霊碑建設委員会を結成し三月下旬建設用地取得のため現地に調査団を派遣しこの地を選定した　建設設計には平和への象徴を特に考慮し専門技術家による荘厳な構想をもってあたり 塔の主要資材は県内産出の石材を用い石英閃緑岩は陸上自衛隊駒門駐屯地第一戦車大隊が山北町丹沢山麓より搬出し本小松石は真鶴町の有志から寄贈されたものである

建立経費は県民からの浄財と県費の助成によったが募金された額は約七百万円におよぶ巨額となりこれは挙げて塔の直接建設費に充当した 除幕式には神奈川県民地元関係各位七百人余が参列し盛大に挙行された　その間琉球政府沖縄遺族連合会神奈川県内各会各層の熱意あふれる尽力によるところまことに多くここに深く謝意を表する

塔の概要　慰霊の対象　南方諸地域戦没者
陸軍三〇, 五〇〇名　海軍一〇, 三〇〇名
工事期間　起工　昭和四十年八月九日
完工　昭和四十年十一月二十六日
建設工事　善太郎組(那覇市)
石材加工奉仕　小沢映二石材店(真鶴町)
神奈川県南方諸地域戦没者慰霊碑建設委員会

※美化・肯定、沖縄友好、沖縄楯・外地

碑　文

「神奈川の塔」建立 50 年を迎えるにあたり、県民の力を結集して改修を行い、戦争の悲惨さと平和の尊さを、未来を担う次の世代へしっかりと継承します。
戦没者の皆様の永久の安らぎを心よりお祈りします。
平成２６年１１月２６日　神奈川県知事　黒岩祐治

※平和祈念、懺悔・哀しみ

碑　文

先の大戦において、沖縄をはじめ南方諸地域で戦没された４万余諸霊のご冥福を心から祈ります。
「神奈川の塔」建立２５周年にあたり、苑地を改修し、ふたたび戦争がくり返されることのないよう 800 万県民とともに永遠の平和への誓いを新たにします。
平成２年１１月２６日　神奈川県知事　長洲一二

※美化・肯定、平和祈念、懺悔・哀しみ、反戦、沖縄楯・外地

碑　文

神奈川の塔
われわれ神奈川県民は大東亜戦争終戦ここに２０年を迎えるにあたり、南方諸地域において祖国の興隆を信じて参戦し、惜しくも異郷に散華せられた、み霊のご冥福を祈るため、ここ摩文仁の丘にふるさとの銘石を運びつきぬ平和への願いをこめて「神奈川の塔」を建立しました。
４万余諸霊が永遠に安らかに眠られますよう祈ります。
昭和４０年１１月２６日
神奈川県南方諸地域戦没者慰霊碑建設委員会会長
神奈川県知事　内山岩太郎

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

15.新潟県

新潟の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ⑯）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1975（昭和 50）年 12 月 8 日
③敷地面積　1,124 ㎡
④戦没者数　41,960 名
（沖縄戦戦没者 1,117 名、南方諸地域
戦没者 40,843 名）
⑤管理団体　新潟の塔奉賛会

「新潟の塔に祀られている英霊の碑」とパネルの右上に書かれ、戦没地点や戦没者数などを記した地図が安置されている。

※平和祈念、懺悔・哀しみ、反戦、沖縄友好、沖縄楯・外地

碑　文

新潟の塔 建立の由来

先の大戦における本県出身戦没者は沖縄で千百十七柱、南方諸地域で四万八百四十三柱と、多くの尊い若い命が散華されました。

本県では昭和五十年（沖縄の本土復帰から三年後）、沖縄との交流が深かった日本健青会新発田支部が慰霊塔建設を提起し、御霊を慰霊するため、沖縄戦没者遺族と戦友の会が発足、悲願三十年の願いを込めて県民運動として塔建立実現に向け、沖縄に新潟県の慰霊塔を建てる会が結成されました。

建立に際し沖縄県のご厚意により、敷地は我が国唯一地上戦のあった激戦終焉の地・摩文仁に決定されました。塔本体工事は、糸満市をはじめ有志の応援をいただいて、建てる会直営工事で昭和五十年十二月に完成しました。

昭和五十一年一月十日、除幕慰霊祭がふるさと新潟から運んだ雪で作ったダルマと好意の樽酒を塔に供え、沖縄戦没者遺族をはじめ建てる会関係者並びに沖縄側関係者等三百余名の参列のもと厳かに挙行されました。

塔本体は、本県安田産のみかけ石で新潟米を形作り、手前には本県出土の火焔型土器を模した燈明台を配置し、ふるさと新潟との絆を表現し永遠の平和を祈念しました。

建立から四十年が経過し、戦没者散華の地図入り碑文の老巧化が進み改修しました。また、戦後七十年の節目の年を迎え、戦没者のご冥福を祈ると共に平和の維持を希求し、不戦の誓い新たに後世に塔建立の経緯と平和の尊さを伝えるため、新潟の塔建立由来碑文を設置しました。

新潟の塔に関連する総ての諸施設及び改修工事は、国・県・市町村・ふるさとを想う皆様の温かいご支援による賜物であります。ここにあらためて心から深く感謝申し上げます。

平成二十七年十一月

16.山梨県

甲斐(かい)之塔

「具志頭城址公園」に建つ
（4.八重瀬地区
建立場所案内図を参照 ①）

①所在地　沖縄県八重瀬町具志頭(ぐしちゃん)
②建立年月日　1966(昭和 41)年 11 月 8 日
③敷地面積　761 ㎡
④戦没者数　22,051 名
（沖縄戦戦没者 550 名、南方諸地域
戦没者 21,501 名）
⑤管理団体　山梨県

碑　文

この塔に 大東亜戦争において 沖縄および 日本外地で散華された 山梨県出身戦没者の御霊を祀る

昭和四十一年十一月八日
山梨県出身大東亜戦争
戦没者慰霊塔建設委員会

※美化・肯定、沖縄楯・外地

17.静岡県

静岡の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㉓）

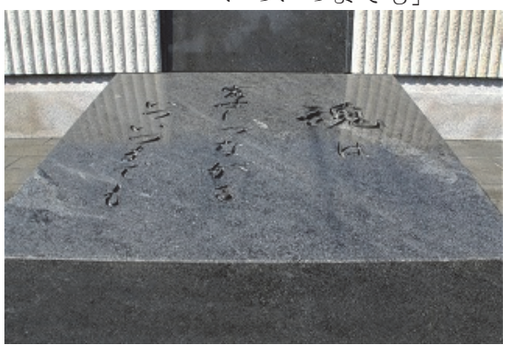
①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966（昭和 41）年 4 月 30 日
③敷地面積　1,674 ㎡
④戦没者数（建立時）　40,409 名
（沖縄戦戦没者 1,607 名、南方諸地域
戦没者 38,802 名）
⑤管理団体　静霊奉賛会

終戦 50 周年平和祈念事業
「静岡の塔」改修記念碑

「平和への誓い」
平成 7 年 11 月
静岡県知事　石川嘉延　謹書

銘石碑文

「魂は　富士につながる
いついつまでも」



碑　文

静岡の塔

この塔は遥かに祖国の安泰と繁栄を願いつつ沖縄をはじめ南方諸地域においてその任に倒れその職に殉した静岡県出身の将兵文民の不滅の偉勲をたたえその霊を慰めるため県民の総意により建立したものである

昭和四十一年五月
静　岡　県

※美化・肯定、沖縄楯・外地

18.愛知県

愛國知祖之塔（あいこくちそ）

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑰）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 11 月 15 日
(2004 年 11 月 17 日浦添城跡から
移設、新塔建設)
③敷地面積　1,052 ㎡
④戦没者数(建立時)　51,011 名
(沖縄戦及び南方地域戦没者うち沖
縄戦戦没者 2,974 名
(2018 年 10 月 15 日現在)
南方諸地域戦没者 48,196 名
⑤管理団体　愛知県

由　緒

此の塔は大東亜戦史上に於ける最苛烈を極めた沖縄戦に散華せる愛知県出身の英霊二千八百十五柱を合祀せるものなり
昭和三十七年 四月十日建立
愛知県沖縄戦遺族会
愛知県沖縄会
平成 六年十一月複製

※美化・肯定

碑　文

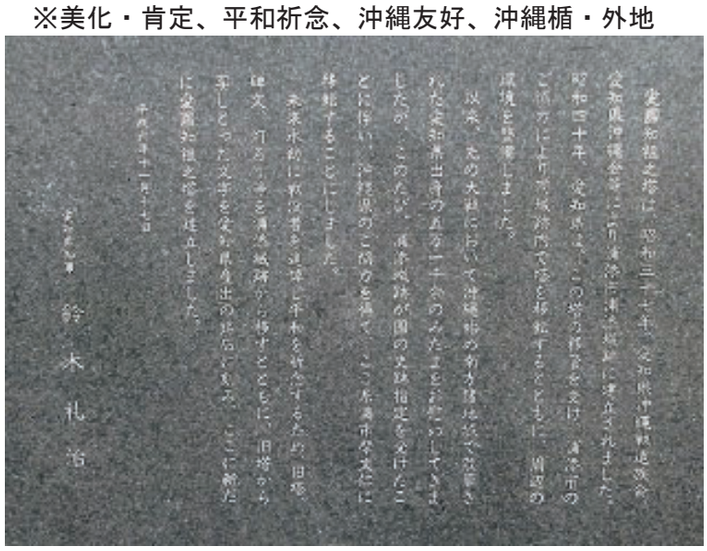
ここに高爽の地をトし「愛國知祖之塔」を移し建て　本県殉国の士二千八百有余柱の霊位を奉祀する
往時を想えば 浦添の一砂一塵みな国土防衛に斃れしわが郷党先輩の血潮に染りしものにして 心を洗い耳を澄ませば いまにその声を聞くがごとくである
爾来二十星霜　この祖ありて今日のわれ等あり この祖に報ゆるは　母國をしていよいよ平和に 益々繁栄せしむるにあるとの念切なるものがある
県民の総意を血涙をもって書す
英魂　願くは来りらけ　とこしなえに
神鎮まりませ　昭和四十年八月十五日
愛知県知事　桑原幹根

※美化・肯定、平和祈念

碑　文

愛国知祖之塔は、昭和三十七年、愛知県沖縄戦遺族会、愛知県沖縄会等により浦添市浦添城跡に建立されました。昭和四十年、愛知県は、この塔の移管を受け、浦添市のご協力により同城跡内で塔を移転するとともに、周辺の環境を整備しました。
以来、先の大戦において沖縄始め南方諸地域で散華された愛知県出身の五万一千余のみたまをお慰めしてきましたが、このたび、浦添城跡が国の史跡指定を受けたことに伴い、沖縄県のご協力を得て、ここ糸満市摩文仁に移転することにしました。
未来永劫に戦没者を追悼し平和を祈念するため、旧塔、碑文、灯ろう等を浦添城跡から移すとともに、旧塔から写しとった文字を愛知県産出の銘石に刻み、ここに新たに愛國知祖之塔を建立しました。
平成六年十一月十七日
愛知県知事　鈴木　礼治

※美化・肯定、平和祈念、沖縄友好、沖縄楯・外地

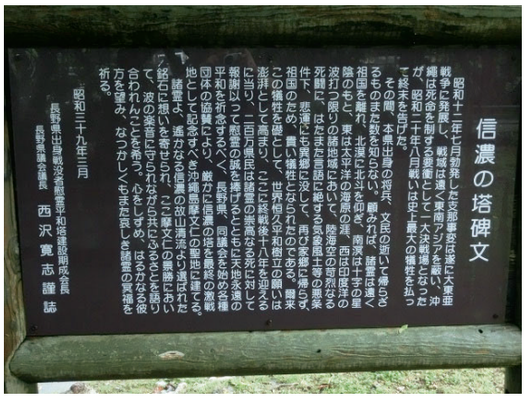


19.長野県

信濃（しなの）の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㊳）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964（昭和 39）年 4 月 1 日
③敷地面積　1,332 ㎡
④戦没者数　55,405 名
（沖縄戦戦没者 1,294 名、中部南太平洋諸地域戦没者 21,811 名、その他諸地域戦没者 32,300 名）
⑤管理団体　長野県



碑　文

信濃の塔碑文

昭和十二年七月勃発した支那事変は遂に大東亜戦争に発展し、戦域は遠く東南アジアを蔽い、沖縄は死命を制する要衝として一大決戦場となったが、昭和二十年八月戦いは史上最大の犠牲を払って終末を告げた。

その間、本県出身の将兵、文民の逝いて帰らざるものまた数を知らない。顧みれば、諸霊は遠く祖国を離れ、北漠に北斗を仰ぎ、南溟は十字の星陰のもと、東は太平洋の海原の涯、西は印度洋の波打つ限りの諸地域において、陸海空の苛烈なる死闘に、はたまた言語に絶する気象風土等の悪条件下、非運にも異郷に没して、再び家郷に帰らず、祖国のため、貴い犠牲となられたのである。爾来この犠牲を礎として、世界恒久平和樹立の願いは澎湃として高まり、ここに終戦後十八年を迎えるに当り、二百万県民は諸霊の崇高なる死に対して報謝以って慰霊の誠を捧げるとともに天地永遠の平和を祈念するべく、長野県、同議会を始め各種団体の協賛により、厳かに信濃の塔を最終の激戦地として記念すべき沖縄島摩文仁の聖地に建てる。

諸霊よ、遙かなる信濃の故山清流より選ばれた銘石に想いを寄せられ、ここ摩文仁の景勝において、波の楽音に守られながら共にふるさとを語り合われんことを希う。心をしずめ、はるかなる彼方を望み、なつかしくもまた哀しき諸霊の冥福を祈る。

昭和三十九年三月
長野県出身戦没者慰霊平和塔建設期成会長
長野県議会議長　西沢寛志謹誌

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

20.富山県

立山の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㉕）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965（昭和 40）年11月 5 日
③敷地面積　2,237㎡
④戦没者数　14,872 名
（沖縄戦戦没者 876 名、南方諸地域戦没者 13,996 名）
⑤管理団体　富山県南方戦没者慰霊塔奉賛会

碑　文

立山の塔

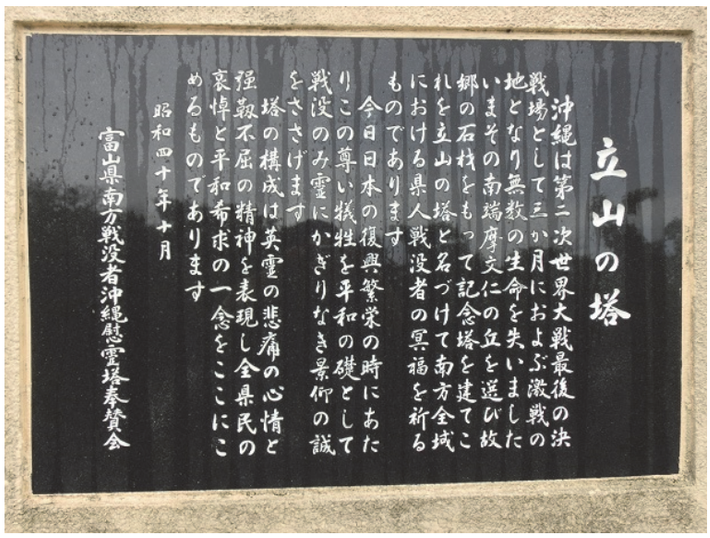
沖縄は第二次世界大戦最後の決戦場として三か月におよぶ激戦の地となり無数の生命を失いました　いまその南端摩文仁の丘を選び故郷の石材をもって記念塔を建てこれを立山の塔と名づけて南方全域における県人戦没者の冥福を祈るものであります

今日日本の復興繁栄の時にあたりこの尊い犠牲を平和の礎として戦没のみ霊にかぎりなき景仰の誠をささげます

塔の構成は英霊の悲痛の心情と強靱不屈の精神を表現し全県民の哀悼と平和希求の一念をここにこめるものであります

昭和四十年十月
富山県南方戦没者沖縄慰霊塔奉賛会

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地



21.石川県

黒百合（くろゆり）の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㊷）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1962（昭和 37）年11月 7 日
③敷地面積　340 ㎡
④戦没者数　1,074 名（2018 年
10 月 15 日現在）
（なお財団 HP では、沖縄戦戦没者
901 名、南方諸地域戦没者 168 名）
⑤管理団体　石川県

碑　文

塔建立の記

戦史に比類のない沖縄決戦は我が郷土部隊が台湾に転戦した直後ではあったがなお石川県出身将兵で本島並びにこの近海の激戦に参加し悲壮の最期を遂げられた英霊は実に九七八柱の多きに達しました。

戦後十有七年たまたま石川県町村議長会一行の沖縄視察を機として県出身戦没者の慰霊塔建設の議が起こりこゝ摩文仁の霊域に塔を建立するに決し広く県民の温い真心によって昭和三十七年九月に起工し同年十一月竣成を見ました。塔の名は国立公園白山の高峰に咲く花より選んで「黒百合の塔」と命名し戦没将兵の冥福を祈り永くその勲をたゝえることと致しました　冀くは英魂永く安らかに慈に鎮まりまして新日本建設の御光となり世界平和の守護神として深き御加護を垂れ給いますよう祈るものであります　黒百合の塔が今後ながく沖縄と石川を結ぶきずなとなりますことを願って止みません

なおこの塔の建立にあたり沖縄市町村会並びに市町村議長会が格別の御厚情を寄せられましたことを特に附記して感謝の意を表します

昭和三十七年十一月七日
石川県黒百合の塔建設委員会

※美化・肯定、平和祈念、沖縄友好

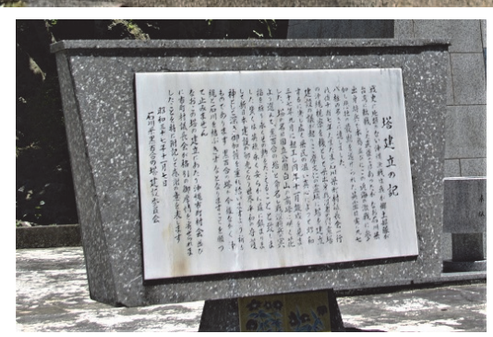
黒百合之塔（石川県）
糸満摩文仁丘

1962 年 11 月建立され石川県出身沖縄戦歿者 978 柱の御霊を祀る
石川県下に在る国立公園白山に咲く黒百合の名をとり命名されたものである

1963 年 5 月
財団法人　沖縄戦歿者慰霊奉賛会

黒百合の塔建立後の調査等により現在 1074 柱の戦没者が刻銘されております

石川県



22.福井県

福井之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑭)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966(昭和 41)年10 月 17 日
③敷地面積　824 ㎡
④戦没者数　24,507 名(沖縄戦戦没者
1,182 名、南方諸地域戦没者 23,325 名)
⑤管理団体　福井県遺族連合会

人類の恒久の平和を誓い　御霊のいよ安らかなるを祈る

福井県知事　栗田幸雄

※平和祈念

沖縄ならびに南方全地域において大東亜戦争の大義に殉じた福井県出身者二万四千五百七柱の英霊をこの聖地に奉祀しそのとこしえの冥福を祈る
ここに全県民の赤誠をこめてこれを建立する
　南溟にたとひこの身は果つるとも　いくとせのちの春をおもへば

遺詠 永嶺　肇

昭和四十一年十月十七日
福井県戦没者沖縄慰霊塔建設期成同盟会会長
福井県知事　北　栄造

※美化･肯定、沖縄楯・外地

23. 岐阜県

岐阜県の塔

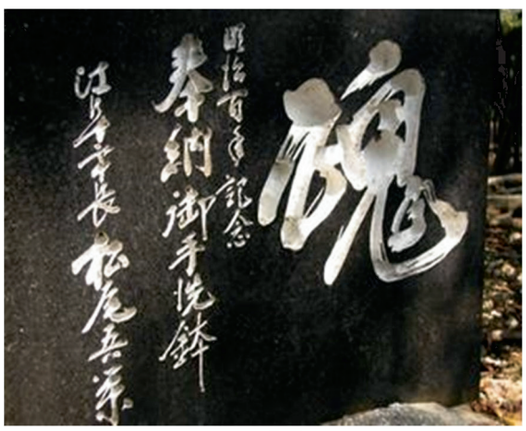
「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㉗）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966（昭和41）年3月25日
③敷地面積　2,039㎡
④戦没者数　26,831名（沖縄戦戦没者
907 名、南方諸地域戦没者 25,924 名
⑤管理団体　岐阜県

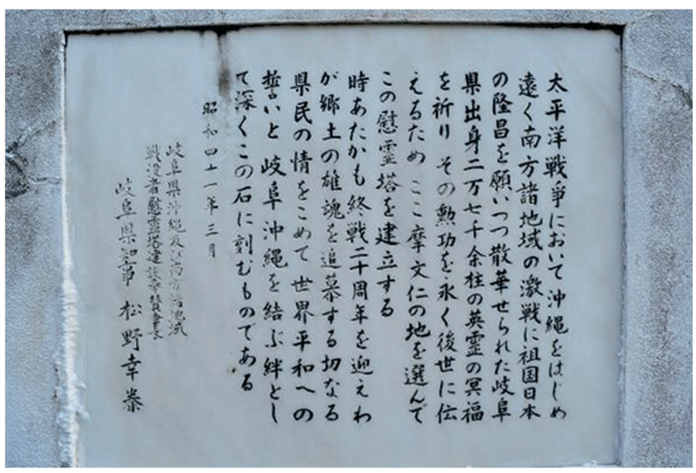
碑　文

太平洋戦争において沖縄をはじめ遠く南方諸地域の激戦に祖国日本の隆昌を願いつつ散華せられた岐阜県出身二万七千余柱の英霊の冥福を祈り　その勲功を永く後世に伝えるため　ここ摩文仁の地を選んでこの慰霊塔を建立する
時あたかも終戦二十周年を迎えわが郷土の雄魂を追慕する切なる県民の情をこめて世界平和への誓いと岐阜沖縄を結ぶ絆として深くこの石に刻むものである
昭和四十一年三月
岐阜県沖縄及び南方諸
地域戦没者慰霊塔建設奉
賛会長岐阜県知事
松野幸泰

※美化・肯定、平和祈念、沖縄友好、沖縄楯・外地



写真（沖縄県平和祈念財団）


太平洋戦争において沖縄をはじめ遠く南方諸地域の激戦に祖国日本の隆昌を願いつつ散華せられた岐阜県出身二万七千余柱の英霊の冥福を祈り　その勲功を永く後世に伝えるため　ここ摩文仁の地を選んでこの慰霊塔を建立する
時あたかも終戦二十周年を迎えわが郷土の雄魂を追慕する切なる県民の情をこめて世界平和への誓いと岐阜沖縄を結ぶ絆として深くこの石に刻むものである
昭和四十一年三月
岐阜県知事　松野幸泰

24.滋賀県

近江の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑮)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964(昭和39)年 11 月 25 日
③敷地面積　1,671 ㎡
④戦没者数　1,697 名(南方諸地域戦没者を含む)
⑤管理団体　滋賀県遺族会

近江の塔
言語に絶する悲壮な沖縄の戦いに祖国のため尊い一命を捧げられた本県出身壱千六百七十三柱の御英霊をお慰めせんとする議県内に澎湃として起り昭和三十九年二月二十四日慰霊顕彰会を結成し県民の浄財を基として郷土の香り高き清石をもって緑り深い此の地に近江の塔を建立して御霊を合祀する
昭和三十九年十一月二十五日建立
滋賀県沖縄戦没者慰霊顕彰会

※美化・肯定

碑　文

近江の塔
言語に絶する苛烈な沖縄戦は、十数万人にものぼる多数の兵士や沖縄県民の尊い人命を奪い、本県出身の多くの兵士も、愛する妻や子・父母の待つなつかしい故郷に再び還ることなく、この沖縄とその近海において一命を祖国に捧げられたこれらの戦没者に対し、慰霊のまことを捧げるため慰霊顕彰会を結成し、県民の浄財を基として昭和三十九年十一月に近江の塔を建立した。
以来二十七年、長年の風雨に堪えたこの塔を滋賀県の援助により改修し、戦争の空しさ・悲惨さを次代に正しく伝え、世界恒久平和への実現にむかってたゆまぬ努力を続けることをここに誓う。
平成三年十月二十二日
財団法人　滋賀県遺族会

※美化・肯定、平和祈念、懺悔・哀しみ、沖縄哀悼

25.三重県

三重の塔

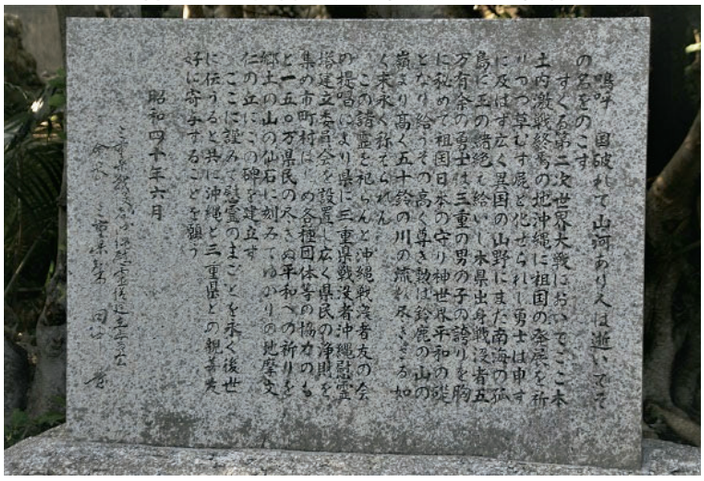
「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉙)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 6 月 26 日
③敷地面積　1,950 ㎡
④戦没者数(建立時)　53,000 名
(沖縄戦戦没者 2,600 名、南方諸地域戦没者 31,300 名、その他地域戦没者 19,100 名)
⑤管理団体　三重県

鳴呼　国破れて山河あり人は逝いてその名をのこす
すぐる第二次世界大戦においてここ本土内激戦終焉の地沖縄に祖国の発展を祈りつつ草むす屍と化せられし勇士は申すに及ばず広く異国の山野にまた南海の孤島に玉の緒絶え給いし本県出身戦没者五万有余の勇士は三重の男の子の誇りを胸に秘めて祖国日本の守り神世界平和の礎となり給うその高く尊き勲は鈴鹿の山の嶺より高く五十鈴の川の流れ尽きざる如く末永く称えられん
この諸霊を祀らんと沖縄戦没者友の会の提唱により県に三重県戦没者沖縄慰霊塔建立委員会を設置し広く県民の浄財を集め市町村はじめ各種団体等の協力のもと一五〇万県民の尽きぬ平和への祈りを郷土の山の仙石に刻みてゆかりの地摩文仁の丘にこの碑を建立す
ここに謹みて慰霊のまことを永く後世に伝うると共に沖縄と三重県との親善友好に寄与することを願う

昭和四十年六月
三重県戦没者沖縄慰霊塔建立委員会
会長　三重県知事　田中覚

※美化・肯定、平和祈念、沖縄友好、沖縄楯・外地



26.奈良県

大和の塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑯）

①所在地　沖縄県糸満市
字米須嵩下原 1450
②建立年月日　1967（昭和 42）年11 月 16 日
③敷地面積　642 ㎡
④戦没者数　15,871 名（沖縄戦戦没者
556 名、南方諸地域戦没者 15,315 名）
⑤管理団体　奈良県

碑　文

大和の塔
この塔はすぐる太平洋戦争においてふるさとを遠くはなれた南海の島々で祖国の安泰と繁栄をいのりつゝ散華された奈良県出身戦没者一万五千余柱のみたまを慰めるため県民の心をこめてゆかりの地ここ米須の丘に建立したものである

一九六七年一一月
奈良県知事　奥田良三

※美化･肯定、沖縄楯・外地

27.和歌山県

紀乃國之塔（きのくに）

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑨）

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1961(昭和 36)年11月 30 日
③敷地面積　981,8 ㎡
④戦没者数　19,834 名(沖縄戦戦没者 839 名、南方諸地域戦没者 18,995 名)
⑤管理団体　和歌山県

碑　文

紀乃国之塔によせて

紀乃国之塔はこの地で祖国の安泰を祈念しながら壮烈な最期をとげた和歌山県出身八三九柱の英霊を祀るため昭和三十六年十一月敬弔の誠をこめて県民が建設したものであります　爾来遠く海を渡ってこの塔を訪れ英霊に対面されるご遺族や県民が年を追うて多くなりました　私も昭和四十四年十一月参拝する機会を得ましたが浄域を拡張整備したいとの声がとみに高まるをき且つまた建塔された各位の意向を推察するとき浄域を更に荘厳にすることが戦後二十五周年記念事業として最もふさわしいと考えて整備することにいたしましたねがわくは諸霊には郷土の人人の捧げる追弔敬祭の微衷をおうけ下さらんことを

昭和四十五年十一月
和歌山県知事　大橋正雄

※美化・肯定

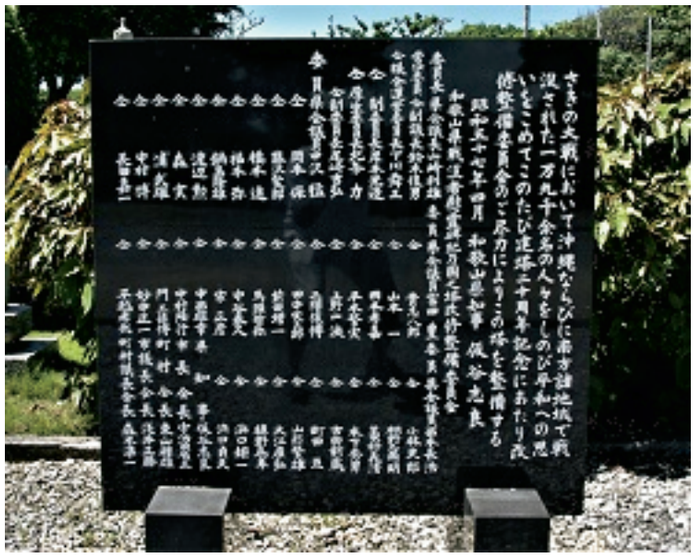
碑　文

さきの大戦において沖縄ならびに南方諸地域で戦没された一万九千余名の人々をしのび平和への思いをこめてこのたび建塔二十周年記念に当たり改修整備委員会のご尽力によりこの塔を整備する

昭和五十七年四月　和歌山県知事　仮谷志良
和歌山県戦没者慰霊碑紀乃国之塔改修整備委員会
委員長　県会議長　山崎利雄

（以下、略）

※平和祈念、沖縄楯・外地



父はゝの　くにやすかれと　紀の国の　ますらたけおハ花とちりにき
紀州出身戦没者の英霊に捧ぐ

昭和三十六年十月
和歌山県知事　小野真次　謹書

※美化・肯定

28.京都府

京都の塔

嘉数高台公園内に建つ
（7.嘉数地区
建立場所案内図を参照 ①）

①所在地　沖縄県宜野湾市嘉数
②建立年月日　1964（昭和 39）年 4 月 29 日
③敷地面積　331 ㎡
④戦没者数　2,536 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　沖縄・京都の塔奉賛会

碑　文

昭和二十年春沖縄島の戦いに際して京都府下出身の将兵二千五百三十有余の人びとが遠く郷土に想いをはせひたすら祖国の興隆を念じつゝついに砲煙弾雨の中に倒れたまた多くの沖縄住民も運命を倶にされたことは誠に哀惜に絶へない。とくにこの高台附近は主戦場の一部としてその戦闘は最も激烈をきわめた。
星霜十九年を経ていまこの悲しみの地にそれらの人びとの御瞑福を祈るため京都府市民によつて「京都の塔」が建立されるにいたつた。
再び戦争の悲しみが繰りかえされることのないようまた併せて沖縄と京都とを結ぶ文化と友好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである
昭和三十九年四月二十九日

※美化・肯定、懺悔・哀しみ、反戦、沖縄友好、沖縄哀悼

碑　文

第二次世界大戦が終了した当時、この付近一帯は戦火のため樹木も無く焦土と化し、トーチカの残骸のみが寂しくあったそうです。
私達の先輩が昭和三十九年、石垣を築いて慰霊塔「沖縄京都の塔」が建立されたのであります。それから三十余年の間、樹木も繁り、付近一帯も公園として美しくなりました。しかし乍ら、風雨と植生のため、石垣の崩落と基壇の崩壊が危惧されてまいりました。
平成九年、私たちはその修復工事にとりかかり、浄財の募金を始めましたところ、多くの方々のご協力を賜わり、平成九年十二月に修復工事は完了しました。
これからも、この慰霊塔が、私たちの平和への願いをかなえる礎となりますことを、また此処沖縄との絆の証ともなりますことを祈り、且つ、誓うものであります。

平成十年二月九日
財団法人　沖縄京都の塔奉賛会

※平和祈念、沖縄友好

29.大阪府

なにわの塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉛)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 4 月 26 日
(平成 6 年 3 月改修)
③敷地面積　2,495 ㎡
④戦没者数(建立時)　35,000 余名
(沖縄戦戦没者 2,400 名、南方諸地域
戦没者 32,600 名)
⑤管理団体　大阪府遺族連合会

碑　文

なにわの塔

太平洋戦争最后の激戦地たるこの沖縄に勇戦力闘して、悲壮の戦死を遂げられた大阪府出身の英霊二千四百有余柱。ねがわくは奇蹟的復興を遂げえた郷土の現状を見そなわせ。これひとえに最期まで祈り続けられた諸霊が在天御加護の賜にほかならない。

思えば個人の生命は短く、民族の歴史は永い。

終戦二十年に当り最も犠牲の多かりし摩文仁の丘に「なにわの塔」を建立して恭しく諸霊の御遺徳を顕彰しあわせて人類恒久の平和を祈る

御証悟安からんことを。

昭和四十年四月二十六日
大阪沖縄戦没者慰霊塔建立委員会
代表　大阪府知事　左藤義詮
大阪市長　中馬馨
大阪府遺族会長　栗井岩吉

※美化・肯定、平和祈念

碑　文

合　祀　碑

祖国防衛の御楯として南方諸地域に散華したまいし英霊三万五千有余柱を

この摩文仁の丘なるわが「なにわの塔」に恭々しく斎祀し奉る。

アジアではじめての万国博覧会が
諸霊の郷土で開かるるにあたり

願わくは三世通達の智眼を開いてとこしえに「人類の進歩と調和」を守護したまわんことを

昭和四十四年十月二十四日
大阪府知事　左藤　義詮
大阪市長　中馬馨
大阪府遺族会長　栗井　岩吉

※美化・肯定、沖縄楯・外地

30.兵庫県
のじぎくの塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1. 摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉑)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964(昭和 39)年 6 月 13 日
(1996 年 3 月改修)
③敷地面積　1,560 ㎡
④戦没者数　3,073 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　兵庫県遺族会

碑　文

人と自然、人と人、人と社会の
共生をめざして

戦後 50 年を記念して、のじぎくの塔苑地を改修し、改めて沖縄戦で犠牲となられた御霊のご冥福を心からお祈りいたします。
奇しくも本年、故郷兵庫では、阪神・淡路大震災が発生し、多くの尊い生命が失われました。戦争や災害による悲劇が二度と繰り返されることのないよう、人々が安心して暮らせる共生社会の実現をめざして、県民こぞってたゆまぬ努力を続けてまいります。

兵庫県知事　貝原俊民

※美化・肯定、反戦

碑　文

もし沖縄戦が筆舌に尽くしがたい持久と玉砕がなければ太平洋戦争も別の経過をたどり　本土も上陸作戦による深刻な戦禍を受けることなしには終戦をみなかったでしょう　そうなれば　兵庫県民のいまの生活も保障されなかったに違いありません　とくに沖縄における兵庫県出身の戦没者は 3073 柱に達し　北海道に次ぎ　全国都道府県で第２位になっております　どうしてこの戦没者の霊を　この遠隔の地にそのままとしておけましょう　期せずして　この点に 400 余万県民の気持ちが一致し県民運動として　せめて慰霊塔を建ててお慰めしようということになりました
　わたしたちの微意をお受けください　そうして永遠に安らかに眠ってください
昭和 39 年 6 月 13 日 兵庫県戦没者沖縄慰霊塔建立委員会
代表世話人　兵庫県知事　釜井　元彦

基壇の中心に設けられた主碑のみたま石は戦没者の霊をまたこれをはさむ 2 枚の合掌石は遺族と県民のあたたかい手を象徴して　それを主碑のうしろの後背が　自然のきびしさから永遠に守り続けようとしております　基壇のなかには遺族がよせられた霊石が安置されています
塔名の　のじぎくは　ひろく県民からつのって命名しました　のじぎくは兵庫県の県花です

※美化・肯定、沖縄楯・外地

31.鳥取県

因伯（いんぱく）の塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑱）

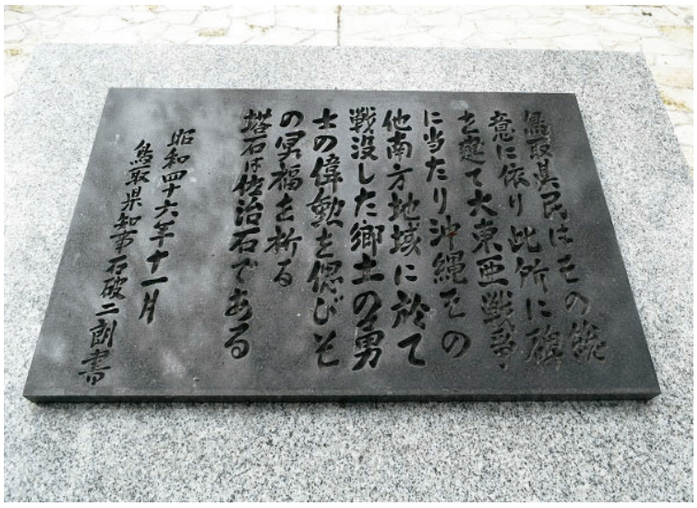
①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1971(昭和 46)年11 月 4 日
③敷地面積　1,894 ㎡
④戦没者数　13,904 名(沖縄戦戦没者 539 名、南方諸地域戦没者 13,365 名)
⑤管理団体　鳥取県

碑　文

鳥取県民はその総意に依り此所に碑を建て大東亜戦争に当たり沖縄その他南方地域に於て戦没した郷土の勇士の偉勲を偲びその冥福を祈る
塔石は佐治石である

昭和四十六年十一月
鳥取県知事　石破二朗書

※美化･肯定、沖縄楯・外地



32.岡山県

岡山の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1. 摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑩)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 10 月 21 日
(1986 年 3 月 25 日改修)
③敷地面積　1,084 ㎡
④戦没者数　33,799 名
(沖縄戦戦没者 1,578 名、
南方諸地域戦没者 32,221 名)
⑤管理団体　岡山県

碑　文

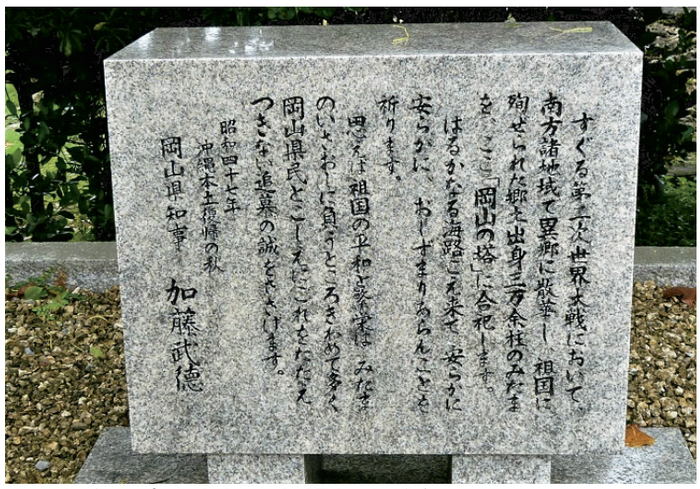
すぐる第二次世界大戦において、南方諸地域で異郷に散華し、祖国に殉ぜられた郷土出身三万余柱のみたまを、ここ「岡山の塔」に合祀します。

はるかなる海路こえ来て、安らかに安らかに、おしずまりあらんことを祈ります。

思えば祖国の平和と繁栄は、みたまのいさおしに負うところきわめて多く岡山県民とこしえにこれをたたえつきない追慕の誠をささげます。

昭和四十七年
沖縄本土復帰の秋
岡山県知事　加藤武徳

※美化・肯定、沖縄楯・外地



とこしえに安らかに　お眠りください
昭和 61 年 3 月　岡山県

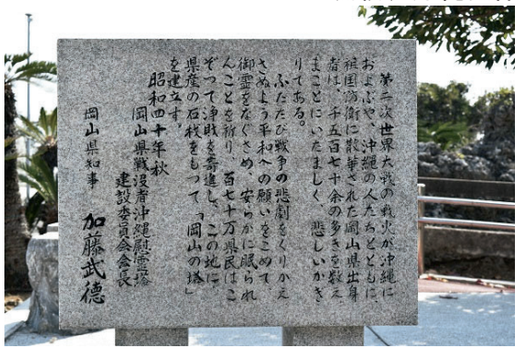
碑　文

第二次世界大戦の戦火が沖縄におよぶや、沖縄の人たちとともに、祖国防衛に散華された岡山県出身者は、千五百七十余の多きを数え、まことにいたましく、悲しいかぎりである。

ふたたび戦争の悲劇をくりかえさぬよう平和への願いをこめて、御霊をなぐさめ、安らかに眠られんことを祈り、百七十万県民はこぞつて浄財を寄進し、この地に県産の石材をもつて「岡山の塔」を建立す。

昭和四十年秋
岡山県戦没者沖縄慰霊塔
建設委員会会長
岡山県知事　加藤武徳

※美化・肯定、平和祈念、懺悔・哀しみ、反戦、沖縄哀悼



33.島根県

島根の塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑩）

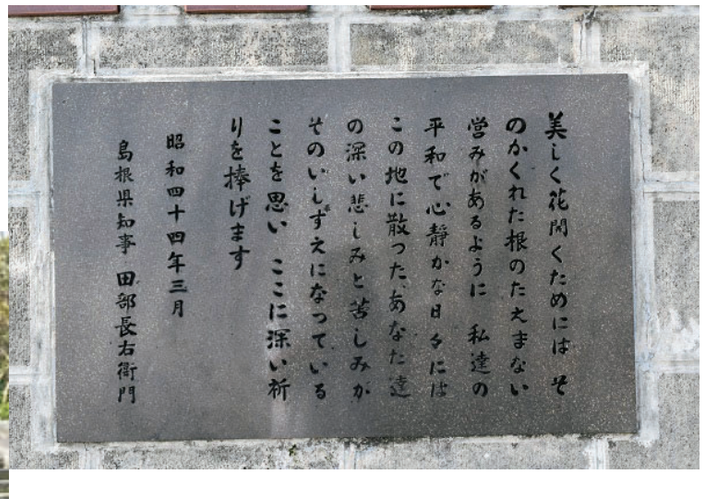
①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1969（昭和 44）年 3 月 28 日
③敷地面積　1,179 ㎡
④戦没者数　908 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　島根県遺族連合会

碑　文

美しく花開くためには そのかくれた根のたえまない営みがあるように　私達の平和で心静かな日々にはこの地に散ったあなた達の深い悲しみと苦しみがそのいしずえになっていることを思い　ここに深い祈りを捧げます

昭和四十四年三月
島根県知事　田部長右衛門

※美化・肯定、懺悔・哀しみ



34.広島県

ひろしまの塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑫）

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1968（昭和 43）年 5 月 23 日
③敷地面積　1,594.2 ㎡
④戦没者数　34,635 名（沖縄戦戦没者
1,271 名、南方諸地域戦没者 33,364 名）
⑤管理団体　広島県

碑　文

献　辞

海を渡り　また　海を渡り　郷土はるかに　戦って還らず　沖縄に散り　南方に散る 護国の英霊　三万四千六百余柱　ここに　とこしえに　鎮まりませば
ふるさとの 妻子　父母　老いも若きも　海を渡り　また　海を渡り　ここに　もうでて
み霊安かれと　祈らざらめや　祈らざらめや

昭和 43 年 5 月
広島県戦没者沖縄慰霊塔建設委員会
会長　県議会議長　檜山袖四郎

※美化・肯定、沖縄楯・外地

35.山口県

防長英霊の塔（ぼうちょう）

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（2）
建立場所案内図 参照 ㊲）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966（昭和 41）年 11 月 6 日
③敷地面積　628 ㎡
④戦没者数　24,447 名
（沖縄戦戦没者 1,043 名、南方諸地域
戦没者 23,404 名）
⑤管理団体　山口県南方地域戦没者
慰霊奉賛会

碑　文

防長英霊の塔について

この防長英霊の塔は、今次大戦中沖縄を始め南方諸地域に於て祖国のため散華された山口県出身戦没者二万四千四百四十七柱の御霊（みたま）に深く慰霊の誠を捧げるとともに御冥福を祈って県民あげての協力と浄財をもって最後の激戦地となったこの摩文仁の丘に郷土（ふるさと）の石材や花木をもちよって昭和四十一年秋建立したものです。

この塔内は、御遺族から託された愛情のこもった霊石や遺品が納めてあります。

また、この塔の発想は、日本古来の千木勝男木のイメージを残し、さらに、奈良朝時代の校倉（あぜくら）造りの手法をあわせ聖なる御霊のよりどころとしたものであり、清らかにして優雅な構造形式で県民ひとしく心の象徴としてふさわしい塔であります。慰霊式典は、毎年十一月六日厳粛に執り行っております。

山口県南方地域戦没者慰霊奉賛会

あなたの遊んだ川の石　あなたの登った山の石　ふることの石を寄せ　ここマブニの丘にうずめます　その一つ一つに　妻や子が父母の　こころが託されているのです　祈りがこめられているのです　みたまよ願わくは　安らかに眠りたまえ

昭和四十一年十一月
山口県知事　橋本正之

※美化・肯定、沖縄楯・外地

36.香川県

讃岐の奉公の塔

米須地区に建つ
(2.伊原•米須•山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑪)

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1968(昭和 43)年 5 月 18 日
③敷地面積　910 ㎡
④戦没者数　32,413 名(沖縄戦戦没者 1,120 名、南方諸地域戦没者 18,637 名、満州及び中国方面戦没者 12,656 名)
⑤管理団体　香川県

至誠もって　国に殉じた　讃岐の
人々のために

※美化・肯定

碑　文

むかしむかし　讃岐の国の殿様に仕える　可憐な乙女がおってな　その娘はお姫様の身代わりに病気になり　悲しくも命を失った　人々はその死をいたみ　誠実にして至純　献身的なその心をあわれんで「奉公さん」と名づけ　人形を作り功績をたたえたそうな

讃岐の奉公塔建立の碑
ここ沖縄　南方諸地域　中国大陸で祖国の安泰を願い家族を案じつつ亡くなられた
三万二千四百十三柱の御霊とこしえに安かれと祈るとともに
郷土の発展と恒久平和の実現を心から願いつつ郷土人形奉公さんを想い起し
「讃岐の奉公塔」と命名する
昭和四十三年五月吉日
香川県戦没者沖縄慰霊塔建立委員会

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地

37.徳島県

徳島之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉜)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年 12 月 5 日
③敷地面積　604 ㎡
④戦没者数　1,597 名
(沖縄戦戦没者 941 名、南方諸地域
戦没者 656 名)
⑤管理団体　徳島県遺族会

たたかいに　散りたる御魂　やすかれと

ふるさと阿波の　青石を建つ

徳永好吉氏作

赤枝実子書

※美化・肯定

38.愛媛県

愛媛之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ⑪)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1962(昭和 37)年 10 月 17 日
③敷地面積　1,601 ㎡
④戦没者数　2,077 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　愛媛県遺族会

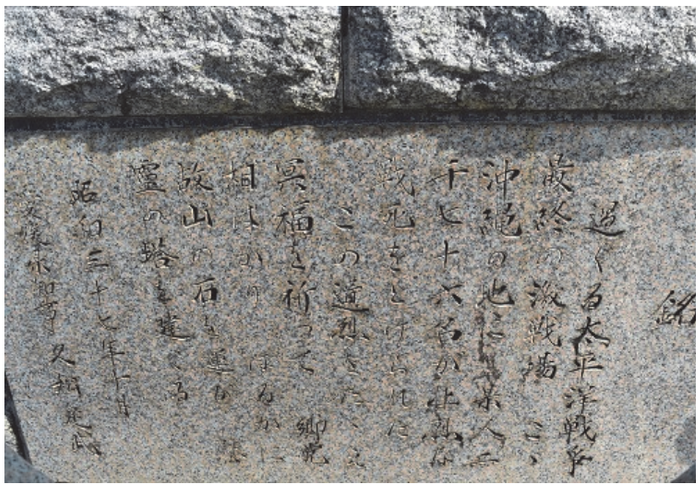
碑　文

銘

過ぐる太平洋戦争最終の激戦場　こゝ沖縄の地に
県人二千七十六名が壮烈な戦死をとげられた
この遺烈をたゝえ冥福を祈つて　郷党相はかり
はるかに故山の石を運び　慰霊の塔を建てる

昭和三十七年十月
愛媛県知事　久松定武

※美化・肯定



39.高知県

土佐之塔

「具志頭城址公園」に建つ
（4.八重瀬地区
建立場所案内図を参照 ②）

①所在地　沖縄県八重瀬町具志頭（ぐしちゃん）
②建立年月日　1966（昭和 41）年 11 月 22 日
③敷地面積　3,312 ㎡
④戦没者数　18,545 名
（沖縄戦戦没者 832 名、南方諸地域
戦没者 17,713 名）
⑤管理団体　高知県

塔の由来

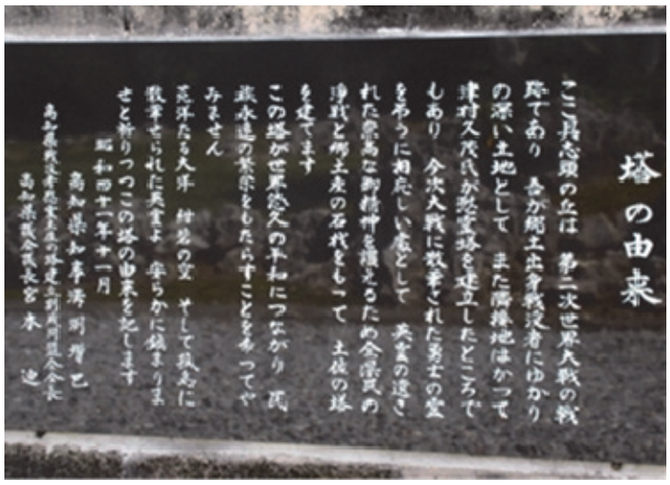
ここ具志頭の丘は　第二次世界大戦の戦跡であり　吾が郷土出身戦没者にゆかりの深い土地として　また隣接地はかつて津村久茂氏が慰霊塔を建立したところでもあり　今次大戦に散華された勇士の霊を弔うに相応しい処として　英霊の遺された崇高な御精神を讃えるため全県民の浄財と郷土産の石材をもつて　土佐の塔を建てます

この塔が世界悠久の平和につながり　民族永遠の繁栄をもたらすことを希つてやみません

茫洋たる大洋　紺碧の空　そして孤島に散華せられた英霊よ　安らかに鎮まりませと祈りつつこの塔の由来を記します

昭和四十一年十一月
高知県知事　溝渕増巳
高知県戦没者慰霊土佐の塔建立期成同盟会会長
高知県議会議長　宮本迪

※美化・肯定、平和祈念、沖縄楯・外地



40.福岡県

福岡の慰霊の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉝)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966(昭和 41)年12 月 10 日
③敷地面積　736 ㎡
④戦没者数　4,015 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　福岡県

碑　文

福岡の慰霊塔

太平洋戦争において祖国日本の防衛のために福岡出身の二四〇〇余名が尊いいのちをささげたここ沖縄の摩文仁ヶ丘に県民の感謝と追悼のまごころを結集してこの慰霊の塔を建立す

みたまよ安らかに鎮まりませ

※美化・肯定

41.佐賀県

はがくれの塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㊱)

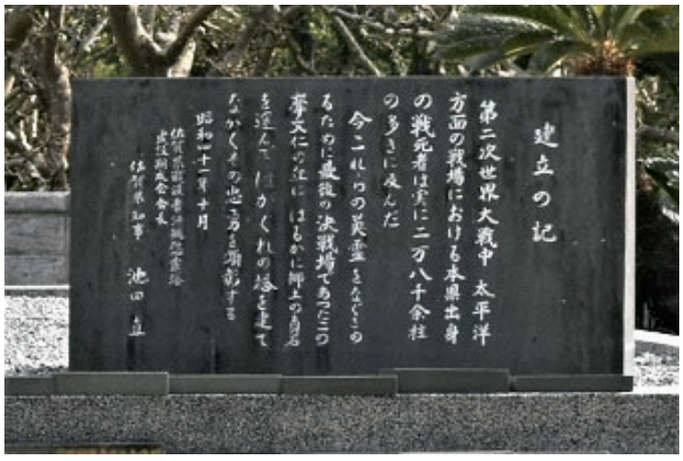
①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1965(昭和 40)年10 月 17 日
③敷地面積　727 ㎡
④戦没者数　約 28,000 名(沖縄戦戦没者
914 名、南方諸地域戦没者 27,000 名)
⑤管理団体　佐賀県遺族会

碑　文

建立の記
第二次世界大戦中　太平洋方面の戦場における本県出身の戦死者は実に二万八千余柱の多きに及んだ
　今これらの英霊をなぐさめるために最後の決戦場であつたこの摩文仁の丘に　はるかに郷土の貞石を運んで　はがくれの塔を建てながくその忠勇を顕彰する

昭和四十一年十月
佐賀県戦没者沖縄慰霊塔
建設期成会会長
佐賀県知事　池田 直

※美化･肯定、沖縄楯・外地



42.大分県

大分の塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑭）

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1965（昭和 40）年 11 月 17 日
③敷地面積　314 ㎡
④戦没者数　約 1,430 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　大分県遺族連合会

碑　文

建塔の記

太平洋戦争における最終段階としての沖縄の死闘の歴史は　何人も涙なくして語ることができません　戦後十余年　県民生活もやや安定した一九六一年十一月大分県の遺族代表が初めて沖縄に巡拝したとき

ふるさとの山河も泣かむ　この島に
散りたる若き　御霊祭れば

と記した県産檜の白木の柱を建て　沖縄に散華した県出身九百余柱の霊を慰めたのであります

他方数県で現地に永久的な慰霊塔を次々に建立するようになりましたので　このたび県遺族会の発意でここ最後の激戦地米須の丘に　大分県耶馬渓産の霊石を用い「大分の塔」を建てることにいたしました

謹んで哀悼の誠を捧げ英霊のご冥福と世界の平和を祈念する次第であります

一九六五年一一月
大分県知事　木下　郁
大分県沖縄戦没慰霊塔建設委員会々長
小林政治

※美化・肯定、平和祈念、懺悔・哀しみ

43.長崎県

鎮魂長崎の塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㉟)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1966(昭和 41)年 9 月吉日
③敷地面積　693 ㎡
④戦没者数　35,000 名(沖縄戦戦没者 1,800 名、南方諸地域戦没者 33,200 名)
⑤管理団体　長崎県戦没者慰霊奉賛会

鎮魂長崎之碑建立の記
靖国の神のいさおしたゝえつゝ
新しい日本創られてゆく
佐藤　勝也

碑　文

すぎし日の大戦により中国大陸および沖縄以南の各戦線において長崎県出身三万五千余名の方々がゆたかな春秋を残して散華された

祖国日本の繁栄を念じつつ国難に殉ぜられた崇高な愛国のまごころを思うとき敬慕の情おさえ難いものがある

百七十万県民は子々孫々に至るまであげて崇敬と慰霊のまことを捧げご遺徳を偲ぶよすがとすべく大戦最後の激戦地ここ沖縄のゆかりの地を選びご遺族から寄せられた霊石を礎とし郷土の名石もって碑を建立する

英霊の永久に安らかならんことを祈る

一九六六年九月吉日 建立
長崎県戦没者沖縄慰霊塔建設期成会
名誉会長　長崎県知事　佐藤勝也
会長　長崎県議会議長　小柳二雄

※美化･肯定、沖縄楯・外地

44.熊本県

火乃国之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㊶)

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1963(昭和 38)年 5 月 5 日
③敷地面積　397 ㎡
④戦没者数　2,012 名
(平成 30 年 10 月 15 日現在)
⑤管理団体　熊本県遺族連合会

塔の側面には、戦没者のご芳名が記名される

歌　碑

碑　文

大東亜戦争において尤も凄惨苛烈を極めた沖縄本島離島並に近海の激戦に参加し一身を捧げて国難に殉ぜられた熊本県出身将兵の英霊は元陸軍大佐松尾春雄以下千七百二十柱の多数に達しております　熊本県遺族連合会に於ては将来再びこのような惨禍を繰り返さぬよう永遠の世界平和を祈念しそのみたまをお慰め申上げるために創立十五周年記念事業として茲摩文仁の霊域に関係遺族の浄財を投じ熊本県当局並に各方面の援助協賛の下にこの碑を建てる　塔の名は肥後熊本が火の国たるの古事記に依り火乃国之塔と命名し戦歿将兵のご偉勲を顕彰しみたま安かれと祈る　冀くば英魂永へに神鎮まりませ

※美化･肯定、平和祈念、反戦

45.宮崎県

ひむかいの塔

米須地区に建つ
（2.伊原・米須・山崎地区
建立場所案内図を参照 ⑥）

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1965（昭和 40）年 11 月 18 日
③敷地面積　1,113 ㎡
④戦没者数　31,237 名（沖縄戦戦没者
1,848 名、南方諸地域戦没者 29,389 名）
⑤管理団体　宮崎県遺族連合会

碑　文

宮崎の慰霊の塔

太平洋戦争最期の決戦場となった　この沖縄戦域に　宮崎県出身 1800 余名の人々が祖国の栄光を信じつつ花と散った

県民こぞって　ふるさとの石を運び　名もゆかしく　ひむかいの塔を建て　とこしえに安らかなれと祈る

昭和 40 年 11 月
宮崎県民

※美化・肯定

碑　文

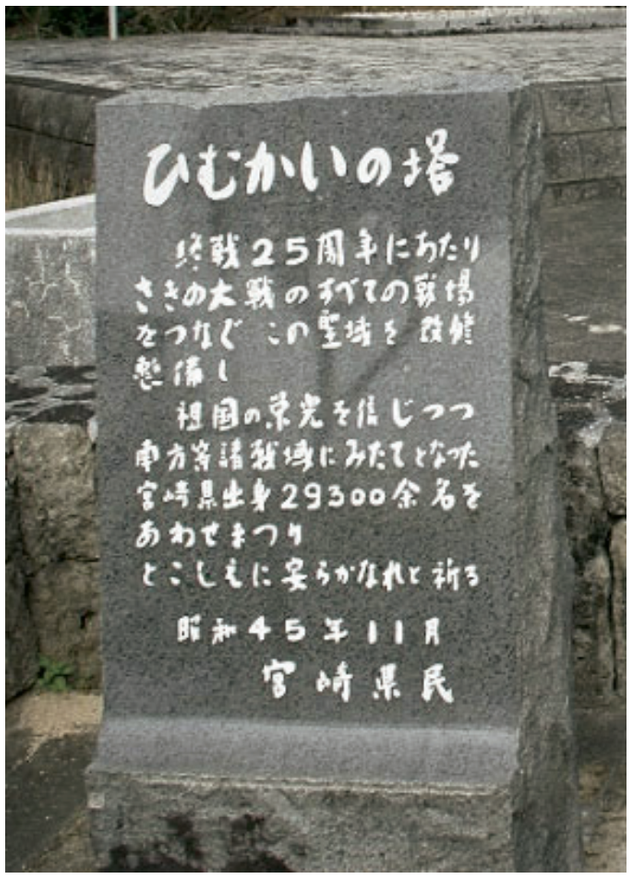
ひむかいの塔

終戦 25 周年にあたり　さきの大戦のすべての戦場をつなぐ　この聖域を改修整備し

祖国の栄光を信じつつ南方等諸地域にみたてとなった宮崎県出身 29300 余名をあわせまつり
とこしえに安らかなれと祈る

昭和 45 年 11 月
宮崎県民

※美化・肯定、沖縄楯・外地



46.鹿児島県
安らかに

「沖縄平和祈念公園」に建つ
(1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㊺)

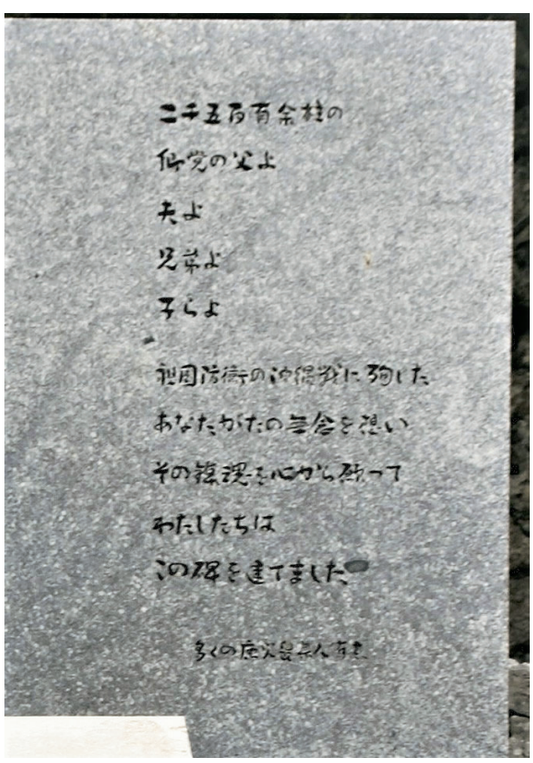
①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1964(昭和 39)年 11 月 21 日
③敷地面積　506 ㎡
④戦没者数　2,582 名（沖縄戦戦没者）
⑤管理団体　鹿児島県

碑　文

二千五百余柱の　郷党の父よ
夫よ　兄弟よ　子らよ
祖国防衛の沖縄戦に殉じた
あなたがたの無念を思い
その鎮魂を心から願って
わたしたちは　この碑を建てました

多くの鹿児島県人有志

※美化・肯定



碑　文

御案内

沖縄戦没者鹿児島県慰霊塔「安らかに」は、太平洋戦争末期、沖縄決戦に散華した南西諸島防衛第三十二軍司令官牛島満大将以下、郷党の軍人軍属ら二、五八二柱の御霊を慰霊するため、昭和三十九年十一月二十一日、県民から寄せられた浄財と県、市町村の助成金をもって沖縄戦没者鹿児島県慰霊塔建立期成会により建立されました。

「安らかに」は、日本芸術院会員中村晋也氏の作になり、苛烈な戦争に身命を捧げた戦没者と郷里との永遠のきずなを刻み、平和への祈りを訪れる人に訴えています。

摩文仁城本丸石垣を背に紺碧の大海原を望むこの地を、以来、鹿児島霊園と称し、昭和四十七年には慰霊塔及び土地(現在 506・19 平方米) 全てを鹿児島県が承継し、今日に至っています。

この間、三回にわたり保全に必要な補修を行ってまいりましたが、今年は、太平洋戦争終結から五十年の節目の年にあたり、改めて戦没者の御霊に対し追悼の誠を捧げるため、今回霊園の全面的な改修をいたしました。

ここに、平和への誓い新たに、祖国の繁栄と世界平和の尊い礎となられた御霊の永遠に安らかなるを、県民の皆様方とともに願ってやみません。

平成七年十一月
鹿児島県知事　土屋佳照

※美化・肯定、平和祈念

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

２．特色ある慰霊塔と碑文

ここには、身元不明者の戦没者、徴用された戦死者、沖縄住民戦没者、海軍戦没者、司令官戦死者、米軍関係者の戦死者などの慰霊塔・慰霊碑の中から次のものを選び掲載しました。

１．魂魄の塔　－69

２．南北之塔　－71

３．韓国人慰霊塔　－72

４．青丘之塔　－73

５．恨之碑　－74

６．艦砲ぬ喰えー残さーの歌碑　－75

７．「さとうきび畑」の歌碑　－76

８．海軍戦没者慰霊之塔　－77

９．米軍上陸の地碑　－78

10．黎明之塔　－79

11．バックナー中将戦死之跡碑　－80

12．アーニー・パイルの碑　－81

1. 魂魄（こんぱく）の塔

米須地区に建つ
（2. 伊原・米須・山城地区
建立場所案内図を参照 ⑬）

①所在地　沖縄県糸満市米須
②建立年月日　1946（昭和 21）年 2 月
（1989年補修）
③戦没者数　35,000 名
④管理団体　沖縄遺族連合会
⑤建立の経緯（財団 HP）

糸満市米須集落の南方 300m、海岸寄りにある。ここは沖縄戦最後の激戦地であり、日本軍も住民も米軍に追い詰められて逃げ場を失い、陸海空からの激しい攻撃を受け命を落とした人は数多い。敗戦直後、米須地区に移転収容された旧真和志村（現在の那覇市）の住民が米軍の許可を得て遺骨収集班を結成、道路や畑、丘、森に散っていた遺骨を集め魂魄の塔を建立した。戦没者数 3 万 5000 は沖縄では最大の慰霊塔であるが、昭和 54 年 2 月摩文仁が丘に完成した国立沖縄戦没者墓苑にその大部分は転骨された。

なお、塔は終戦直後の石積みで素手作りであり崩れる恐れがあったため、平成元年補修され、あわせて碑文の刻版が設置された。塔の裏側には
にぎたまと　なりてしづもる
おくつきの　み床の上を　わたる潮風
と刻まれている。

碑　文

魂魄の塔

この地は今次大戦でも一番の激戦地であり、日本軍も住民も追いつめられて逃げ場を失い、陸、海、空からの攻撃を受けて、敵弾にあたって倒れた屍が最も多い激戦地の跡である。

戦後、真和志村民が収容移住を許された所で村民及び地域住民の協力によって、道路、畑の中、周辺いたる所に散乱していた遺骨を集めて祀ったのがこの魂魄の塔である。

祭神三万五千余柱という、沖縄で一番多く祀った無名戦士の塔であったが、その後、昭和五十四年二月摩文仁の丘に国立沖縄戦没者墓苑が完成し、遺骨は同墓苑に分骨して安置してあります。

和魂となりてしづもるおくつきの
み床の上を渡る潮風

建立年月日　昭和二十一年二月
財団法人　沖縄県遺族連合会

魂魄の塔（右碑文の裏面）

歌意は、和魂（にぎたま）「平和てもの柔らかな徳を備えた霊魂」となってねむるおくつき（奥津城＝墓）のみ床の上を潮風が吹きわたっている、ということです。

終戦の翌年の昭和二十一年一月、沖縄の各地に散らばっていた旧真和志村民は自分の村に帰る予備的措置として、この米須一帯の地に集結させられました。

沖縄戦において、島の南の果てまで追いつめられ、逃げ場を失った日本軍や民間人は、ここで夥しい数の戦死者をだしました。戦死者の屍は目をおうばかりに散在し、放置されたままとなっていました。

このような惨状をみかねた当時の金城和信真和志村長は、村民に呼びかけ、遺骨の収集へと乗り出しました。そのとき、糸満高校真和志分校校長をされていた翁長助静先生は、生徒を指揮して遺骨収集の先頭にたつかたわら、この魂魄の建立に協力し、表記の歌を墓碑の裏に刻まれました。

この歌はいわば無名の戦死者に捧げられた鎮魂歌となっています。

なお、当時の歌碑は長い年月の流れに風化され、碑の文字もほとんど読取ることができないまでに失せてしまっていました。そこで、この歌碑はこれに心を痛めた当時の教え子たちが、戦後五十周年の節目にこの歌碑を建立しました。

平成七年六月

2018 年 6 月 23 日沖縄慰霊の日に撮影

碑　文

魂魄の塔

沖縄は国内でひとり戦場となり、言語に絶する状況下、二十万余の同胞が散華した。

かかる中で、昭和二十一年一月二十三日、九死に一生を得た真和志村民は、米軍によって当地に集結させられ、金城和信氏が村長に任命されたが、一帯は累々として亡骸が横たはる有様であった。

この光景を痛嘆した金城村長は、先づ御遺体を弔ふべく決意し、夫人と共に、村民の協力を仰いで鄭重なる収拾を始めた。

そして、今は敵も味方もないとの信念で、彼我二万余柱を奉じて納骨堂を造り、同年二月二十七日、金城村長は之を魂魄と名付け、自ら石碑に墨書して「魂魄」と刻んだ。

更に金城御夫妻は、信子と貞子の愛娘を戦死させたこともあって、同年四月五日、乙女たちを祈る「ひめゆりの塔」を建立した。

ひめゆりの名は、金城村長が、女子師範学校と県立第一高等女学校の姫百合に因んで命名したもので、自ら石碑に「ひめゆり」と刻み、亡き生徒たちの名を刻んだ。

続いて金城御夫妻は、同年四月九日、男子学徒を祀る「健児の塔」も建立したのである。

後に金城和信は、遺族連合会の会長となり、戦歿者とその遺族のために生涯を捧げ、正五位勲三等に叙せられた。

今では方々に慰霊塔が建つやうになったが、思へば、焼土と化した終戦直後に建立されたこの「魂魄の塔」こそは、沖縄における最初の鎮魂碑である。

東京大学名誉教授

宇野精一

2.南北之塔

「糸満市真栄平地区」に建つ
（3.真栄里・西崎・真壁・真栄平地区
建立場所案内図を参照 ⑦）

①所在地　沖縄県糸満市真栄平
②建立年月日　1946（昭和 21）年 6 月
（1966 年改修）
③戦没者数　6,000 余名
④管理団体　真栄平自治区
⑤建立の経緯

道内出身者が中心の第二十四師団（通称・山部隊）に所属した、アイヌ民族元兵士で故人の弟子豊治氏と、糸満市真栄平の住民が、1966 年に戦争犠牲者の遺骨を集めた納骨堂とともに建立した慰霊碑。北海道ウタリ協会によれば、「沖縄戦で戦死したアイヌ民族は四十三人（判明分）。真栄平にその遺骨が納められているかは不明だが、同協会は八一年からほぼ五年置きに南北之塔でイチャルパ（供養祭）を催し、別のグループも行っている」。（「北海道新聞」2009 年 2 月 20 日夕刊）

塔の北面には、「キムンウタリ」（アイヌ語で「山の同胞」という意味）という言葉、塔の南面には、「真栄平区民」と刻まれている。

真栄平集落の後方にある「アバタガマ」に、激戦地であった真栄平では、屋敷内や道路、田畑、山野に散在していた身元不明の遺骨を住民が収集して納めた。人々はここを「真栄平納骨堂」と呼んだ。収骨された遺骨は数千体に及んだという。その後、永久的な慰霊塔（南北之塔）を建てることになった。（糸満市ＨＰ）

碑　文

南北の塔

沖縄戦終えんの地、ここ真栄平は最も悲惨な戦場と化し、多くの犠牲者を出した所である。当時の人口九百人の中、生存者はわずかに三百人余りであった。

沖縄の戦後は遺骨収集から始まったと言われ、収容所から半年ぶりに帰った区民も直ちに屋敷内や道路、田畑、山野に散らばっていた遺骨の収集をはじめた。

この塔には、真栄平周辺で戦禍にたおれた区民をはじめ、中南部からの避難民、軍人等、数千柱の身元不明者の遺骨が納められ、その御霊が祀られている。

この塔は終戦間もない昭和二十一年、真栄平納骨堂として、世界の恒久平和の願いをこめ、真栄平区民によって建立された。昭和四十一年、真栄平遺族会や篤志家のご芳志を受けて改築を行い、現在の南北の塔が完成された。

毎年六月二十三日には、戦没者のご冥福をお祈りするとともに、平和の尊さを子々孫々に伝える行事として慰霊祭が行われている。

平成元年三月
真栄平自治会

3.韓国人慰霊塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1. 摩文仁地区（1）
建立場所案内図を参照 ⑤）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1975（昭和 50）年 8 月
③管理団体　韓国人慰霊塔建立委員会
④建立の経緯

太平洋戦争が勃発すると、多くの韓国人青年たちは日本軍に強制的に徴集され、大陸や南洋の各戦線に配置された。沖縄でも 1 万人余りの韓国人が徴兵、徴用され、虐待や戦いの中で命を落とした。（沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』）「碑文の後方の石塚は故国の墓を模したもの。石塚手前広場の中央にある大きな矢印は、祖国に帰れなかった戦没者の望郷の思いが届くようにと韓国の方向を指しているという。」
（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』）

碑　文

1941 年太平洋戦争が勃発するや多くの韓国青年達は日本の強制的徴募により大陸や南洋の各戦線に配置された。この沖縄の地にも徴兵、徴用として動員された 1 万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あるいは戦死、あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった。

祖国に帰り得ざるこれら冤魂は、波高きこの地の虚空にさまよいながら雨になって降り風となって吹くであろう。この孤独な霊魂を慰めるべく、われわれは全韓民族の名においてこの塔を建て謹んで英霊の冥福を祈る。

願わくば安らかに眠られよ
1975 年 8 月
韓国人慰霊塔建立委員会

文中の「冤魂」に、悲痛と憤怒のすべてがこもる。日本は植民地の「朝鮮」において、日の丸掲揚、宮城遥拝、神社の建設と参拝、「皇国臣民の誓詞」唱和、日本式姓名への創氏改名、などの「同化」策を押し付けた。そのうえ、一九四三年八月一日の徴兵開始で多くを戦死に追いやった。徴兵のみならず日本国内の労働力不足を補うため、青年男子を強制連行で日本へ送り込み、炭坑や鉱山、土木工事現場などで酷使した。（中略）沖縄では「軍夫」として、日本軍部隊内で過酷な雑役に従事させた。（中略）女性を慰安婦におとしめる連行も、悲惨を極めた。（中略）慰安婦たちの、屈辱のほどは計り知れない。沖縄も全島に、一三〇余ないし一四〇余ヵ所が存在した。このように韓国の男女は、日本の政府、軍隊、企業に基本的人権を否定され、犠牲を強いられた。その犠牲者は、はたして韓国人慰霊塔の碑文が記す「英霊」なのだろうか。飾りのない表現こそふさわしい。碑文による沖縄への動員数は、「一萬余名」にのぼった。死者の数も相当数に達したと推定できる。一方で平和の礎に刻銘の韓国および北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の合計は、四四七人になる。その差は遺族の守秘権を伴いつつ、植民地支配と戦争加害に対する日本の誠実なけじめが被害者側に受け入れられたとき、縮まる。平和の礎は屏風に一四面の無地を残し、追加刻銘に備えている。　（真鍋禎男『沖縄　戦跡が語る悲惨』）

4.青丘之塔（せいきゅう）

「嘉数高台公園内」に建つ
（7.嘉数地区
建立場所案内図を参照 ③）

①所在地　沖縄県宜野湾市嘉数
②建立年月日　1971(昭和 46)年 5 月
③戦没者数　386 名
④建立団体　日本民主同志会

嘉数高台公園内にある、韓国人・朝鮮人を祀った碑。1971（昭和 46）年、日本同志会が宜野湾市嘉数高地に建立した。

青丘とは韓半島・朝鮮半島のことで、昔中国では半島を中国側から見た様子からそう呼んでいた。

彼らは戦場でもっとも弱い立場であり、もっとも危険にさらされ、この碑の様に韓国人・朝鮮人の事にふれた碑は珍しい。

（沖縄の慰霊碑・慰霊塔ＨＰ）

歌　碑
「この塔にねむれる人は　とつくにの
えにしぞ深き　みたまなりけり」

「とつくに」とは、「外つ国」、外国・異国のことを指す。

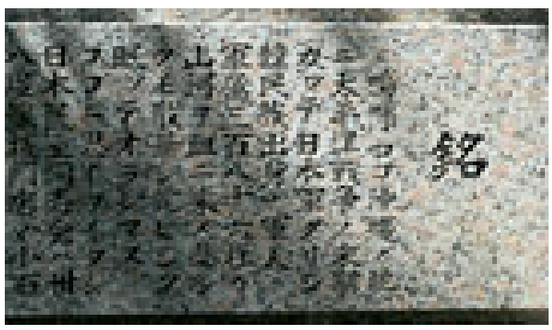
碑　文

銘

嗚呼　ここ沖縄の地に太平洋戦争の末期、かつて日本軍たりし韓民族出身の軍人、軍属 386 柱が山河を血に染め悲しくも散華（さんげ）し侘（わび）しく眠っておられます。

ここに思いをいたし日本民主同志会は 38 度線板門店の小石 38 ヶを写経と共に碑礎に鎮め、イデオロギーと国境と民族を超越し人道主義を遵奉し、哀（かな）しき歴史を秘めたこれらの御霊（みたま）を慰霊顕彰するために、最も激烈なる戦闘を展開した戦跡嘉数の高地に志を同じくする諸賢、あわせて関係機関並びに地元嘉数地区の御協力を得て、韓民族出身沖縄戦没者慰霊碑「青丘之塔」を建立し永久に英勲を讃えます

昭和 46 年 5 月吉日



アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者

5.恨之碑（はん）

「読谷村地区」に建つ
（9. 読谷村地区
建立場所案内図を参照 ②）

①所在地　沖縄県読谷村中頭郡瀬名波
②建立年月日　2006（平成 18）年 5 月 13 日
③管理団体　恨之碑建立をすすめる会
④建立の経緯

軍夫とは、朝鮮半島から強制連行され日本軍の下働きをさせられた男性たち。武器もわたされず飢餓状態のまま危険な仕事に酷使され、兵士よりもさらに差別され最も過酷な犠牲を受けましたが、その実態はいまだに詳しく分かっていません。

生還した姜仁昌さんと徐正福さんは、1997年12月、「今も異郷の地でさまよう犠牲者たちの遺骨を故国に持ち帰り弔いたい」と、阿嘉島へ軍夫たちの遺骨の収集に向かいました。しかし遺骨は見つからず、やむをえず韓国と沖縄に慰霊とメモリアルの意味をもつモニュメントを造ってほしいと言い残して帰国しました。（中略）製作を金城実氏に依頼。そうして韓国慶尚北道（1999年8月）と沖縄読谷村（2006年5月）に１基ずつ造られたのが「恨之碑」です。

（沖縄「恨之碑」はなぜ造られたのかＨＰ）

碑　文

アジア太平洋戦争、沖縄戦において、日本は朝鮮半島から 100 万人以上とも言われる人びとを強制連行し、日本人の軍夫、性奴隷として使役した。

慶尚北道から軍夫たちが沖縄に送り込まれたのは 1944 年 6 月頃。姜仁昌さんは慶良間諸島の阿嘉島に、徐正福さんは宮古島の前線に配置された。沖縄の地上戦は 1945 年 3 月 26 日に始まった。二人は、同胞たちの死を目のあたりにし、また同胞への処刑や虐待などに立ち会わされた。

私たちは朝鮮半島と沖縄に向かい合う二つの同一の追悼碑を建立することを決めた。そして不幸な過去を心に刻み、平和・共生への決意の印をと、多くの賛同者・団体の寄付によりこの碑を建てた。

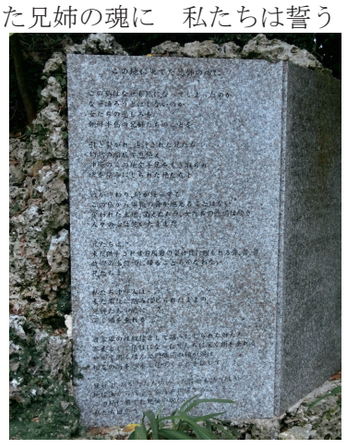
レリーフは金城実さん。碑文は安里英子さん。翻訳は河東吉さん。

2006 年 5 月 13 日　韓国からの姜仁昌さん、徐正福さんと共に除幕式を行った。

アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発
朝鮮半島出身者恨之碑建立をすすめる会

碑　文

この地に果てた兄姉の魂に
この島はなぜ寡黙になってしまったのか
なぜ語ろうとはしないのか　女たちの悲しみを
朝鮮半島の兄姉たちのことを
引き裂かれ、連行された兄たち　灼熱の船底で息絶え
沖縄のこの地で手足をもぎ取られ
魂を踏みにじられた兄たちよ
戦いが終わり、時が経っても
この島から軍靴の音が絶えることはない
奪われた土地は、消えたムラ、女たちの悲鳴は続き
人々の心は乾いたままだ
兄たちよ
未だ供養されず石灰岩の裂け目に埋もれる骨、骨、骨
故郷の土饅頭に帰ることもかなわない　兄たちよ
私たち沖縄人は　未だ軍靴に踏みにじられたままの
兄姉たちの魂に　深く頭を垂れる
日本軍の性奴隷として踏みにじられた姉たち
軍夫として犠牲になった兄たちに深く頭を垂れる
やがて固く結んだ鳳仙花の種が弾け
相互の海を越えて花咲くことを信じて
兄姉よ、あなたたちの辿った苦難を語り継ぎ
地球上から戦争と軍隊を根絶することを
この地に果てた兄姉の魂に　私たちは誓う



6.艦砲ぬ喰え-残さ-の歌碑

「読谷村:楚辺浄化センター前」に建つ
（9.読谷地区
建立場所案内図を参照 ④）

①所在地　沖縄県中頭群読谷村楚辺
②建立年月日　2013(平成 25)年
6 月 23 日
③戦没者数　沖縄戦での全戦没者
④管理団体　歌碑建立委員会

2013 年 6 月 23 日（日）沖縄戦で家族を失った悲しみを歌った沖縄民謡の名曲「艦砲ぬ喰ぇー残さー」の歌碑が作詞作曲した比嘉恒敏さんの出身地、本村楚辺のユウバンタ浜内に完成しました。読谷村楚辺出身の故比嘉恒敏氏は、実体験を基に「艦砲ぬ喰ぇー残さー」を制作した。

戦中、長男を「対馬丸」で失い、大阪の空襲で妻と次男を、そして父までをも失った。戦後、沖縄で再婚し 4 名の姉妹民謡グループ『でいご娘』を誕生させる。比嘉は、こよなく歌、三線を愛した。過酷な戦世と戦後を生きた体験が歌の力となり、共感の輪が広がった。「恨でぃん悔でぃんあきじゃらん、子孫末代まで遺言さな」はまさに県民共通の願いだ。しかし、1973 年、恒敏と妻の乗った車に飲酒運転の米兵が突っ込み、ふたりとも他界するという凄惨な最期を遂げる。

戦争とは何なのか。人類は、文明を発展させるために愚かな争いを繰り返してきた。歌碑があるユウバンタ浜では、訪れる人々に先輩方が戦争体験を丁寧に話してくれる。語り継いでいく事の大切さを感じると同時に、私たち世代が引き継いでいかなくてはいけない。「子孫末代　遺言さな」、その想いを。

（読谷村観光協会ＨＰ）

五、私の親を喰ったあの戦争
私の故郷を喰ったあの艦砲射撃
生まれ変わっても
忘れることができようか
誰があの戦争をはじめたのか
恨んでも悔やんでも飽きたりない
子孫末代まで遺言したいねえ
あなたも　わたしも
おまえも　おれも
艦砲に喰われず生き残った者よ

※碑には、一番から五番までの歌詞と訳が刻まれている。

碑　文

戦後 68 年が経過し、沖縄戦の実相が時間の経過と共に風化していくことが危ぐされている今日、改めて歴史の過ちを繰り返さないため、沖縄戦体験の継承が課題となっている。

「艦砲ぬ喰ぇ-残さ-」は、1971 年ごろ(故)比嘉恒敏氏が作詞・作曲した沖縄民謡で1975年恒敏氏の4人娘民謡グループ「でいご娘」がレコーディングし県内で大ヒットした。

歌詞の中には、戦中戦後の沖縄体験の思いが綴られていて、艦砲射撃によって犠牲になった人々への哀悼と共に、悲惨な沖縄戦を生き残った゛ういちなーんちゅ゛の戦争を恨み平和を願う心情がつづられて「恨んでぃん 飽きじゃらん 子孫末代 遺言さな」と結ばれている。

悲惨な沖縄戦の実相を伝える象徴として、この地から全世界へ戦争の悲惨と平和の尊さを発信するため「艦砲ぬ喰ぇー残さ-」歌碑を建立する。

2013 年 6 月 23 日

※碑文写真ではなく、ここでは五番の歌碑を掲載する。

7.「さとうきび畑」の歌碑

「読谷村:「さとうきび畑」
歌碑広場に建つ」
(9. 読谷村地区
建立場所案内図を参照 ③)

①所在地　沖縄県読谷村高志保 495-6
②建立年月日　2012(平成 24)年
4 月 1 日
③管理団体　読谷村観光協会
④建立の経緯

この歌の作者・寺島尚彦氏は、沖縄のさとうきび畑の土の下に未だ埋もれたままの戦没者たちの魂に揺り動かされるように「さとうきび畑」を書き上げました。

この歌に込められた平和の祈りを沖縄から永遠に発信し続けるため、読谷村に「さとうきび歌碑」を建立しました。平和の願いを共有するすべての人々への思いを集結させてニライカナイ（沖縄の言葉で、魂の宿るところの意）の地から祈りを届けます。

歌碑の建立に必要な経費は、この歌にふさわしく草の根運動として、全国各地からの寄付、歌碑基金チャリティーコンサート等を通して 2012 年 4 月 1 日歌碑を完成させることが出来ました。

ひとりでも多くの皆さまと「さとうきび畑」の歌碑を通した平和の思いを共有できますように。　（読谷村観光協会ＨＰ）

歌碑の右側に、ミュージックボックスがあり、ボタンを押すと「さとうきび畑」のメロディーがオルゴールの音色によって聴こえてくる。

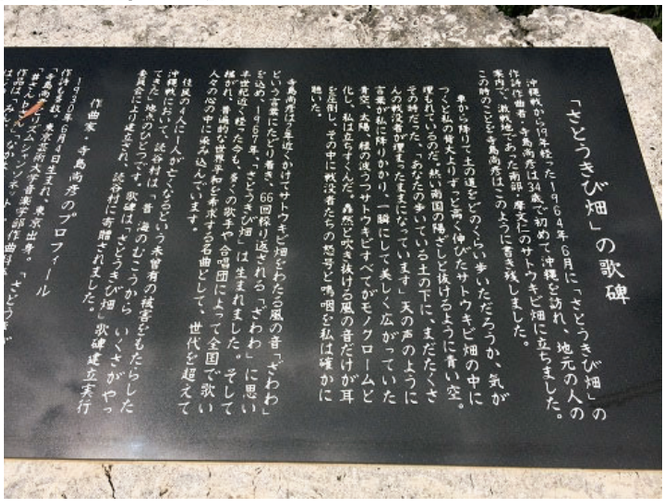
写真：（読谷村観光協会ＨＰ）

「さとうきび畑」の歌碑

沖縄戦から 19 年経った 1964 年 6 月に「さとうきび畑」の作詞作曲者・寺島尚彦は 34 歳で初めて沖縄を訪れ、地元の人の案内で、激戦地であった南部・摩文仁のサトウキビ畑に立ちました。この時のことを寺島尚彦はこのように書き残しました。

車から降りて土の道をどのくらい歩いただろうか、気がつくと私の背丈よりずっと高く伸びたサトウキビ畑の中に埋もれているのだ。熱い南国の陽ざしと抜けるように青い空。その時だった、「あなたの歩いている土の下に、まだたくさんの戦没者が埋まったままになっています」天の声のように言葉が私に降りかかり、一瞬にして美しく広がっていた青空、太陽、緑の波うつサトウキビすべてがモノクロームと化し、私は立ちすくんだ。轟然と吹き抜ける風の音だけが耳を圧倒し、その中に戦没者たちの怒号と嗚咽を私は確かに聴いた。（中略）

住民の 4 人に 1 人が亡くなるという未曽有の被害をもたらした沖縄戦において、読谷村は「昔 海のむこうからいくさがやってきた」地点のひとつです。歌碑は「さとうきび畑」歌碑建立実行委員会により建立され、読谷村に寄贈されました。（下略）



8.海軍戦没者慰霊之塔

「豊見城地区:海軍壕公園内に建つ」
（6. 豊見城地区
建立場所案内図を参照 ①）

①所在地　沖縄県豊見城市字豊見城 236
②建立年月日　1958（昭和 33）年
2008（平成 20）年 10 月:補修工事
③管理団体　一般社団法人沖縄海友会
④建立の経緯

第二次世界大戦の末期には、日本海軍の司令壕が置かれ激しい戦場となり多くの戦没者をだしました。昭和 33 年には戦没者を供養するため、「海軍戦没者慰霊之碑」が海軍戦没者慰霊之塔建立発起人会や沖縄海友会（現：一般社団法人沖縄海友会）によって建立されました。平成 20 年には、沖縄海友会によって補修工事がされています。

（海軍壕公園の観光案内ＨＰ）

大田少将とは、海軍沖縄方面根拠地司令官として小禄地区（現、那覇市）の守備に当たった後、政府宛に、地元住民が守備に協力したがために甚大な犠牲を被ったことについて述べたうえで、「県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを・・・」といった趣旨の電報を打って自決した人です。そのような父親の墓参に沖縄を訪れた彼の子息、英雄氏は、「父の最期の地である海軍壕で、私は合掌することすら忘れたほど、海軍壕の中で私を支配したのは、悲しみと怒りと疑惑であった」と、こう記しているのです。なぜ入場料をとるのか、なぜロウ人形など置くのか。親父の顔をメダルに刻むのはなぜだ。立派な軍人だからか、本当に立派なのか。この壕の目的は何だ。反戦恒久平和を祈念するとあるが、訪れる観光客が、本当に帝国主義戦争の無意味さ、非人間性を知る手助けになるのか。丘の上に軍艦旗が掲げられているのはどうしてか。かつての戦争指導者岸信介氏らはどんな気持ちで植樹したのか。立派な供養塔や植樹することが沖縄戦で死んだ多くの将兵、県民の最善の施策なのか・・・・・」

（沖縄思潮編集委員会「沖縄思潮」第一巻第四号、1974 年）

（大田昌秀「沖縄の慰霊の塔」）

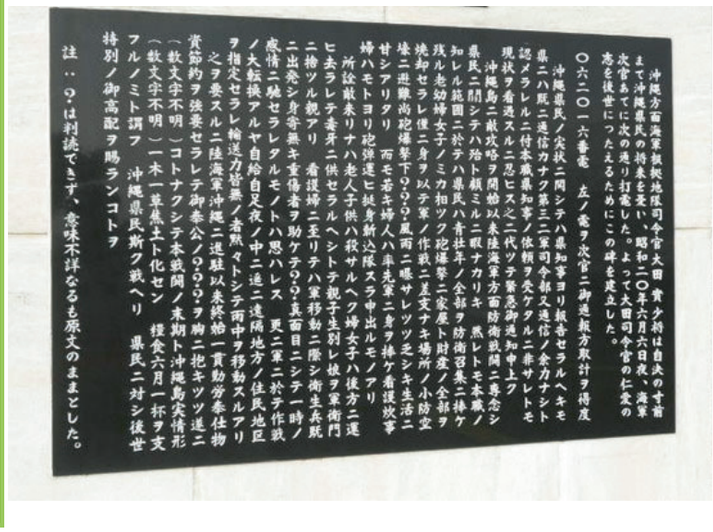
碑　文

仁愛之碑

沖縄方面海軍根拠地隊司令官 大田 実 少将は自決の寸前まで沖縄県民の将来を憂い、昭和二十年六月六日夜、海軍次官あてに次の通り打電した。よって大田司令官の仁愛の志を後世につたえるためにこの碑を建立した。

〇六二〇一六番電（中略）

沖縄県民斯ク戦ヘリ　県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ



9.米軍上陸の地碑

「読谷村地区:泊城公園内に建つ」
（9. 読谷地区
建立場所案内図を参照 ⑤）

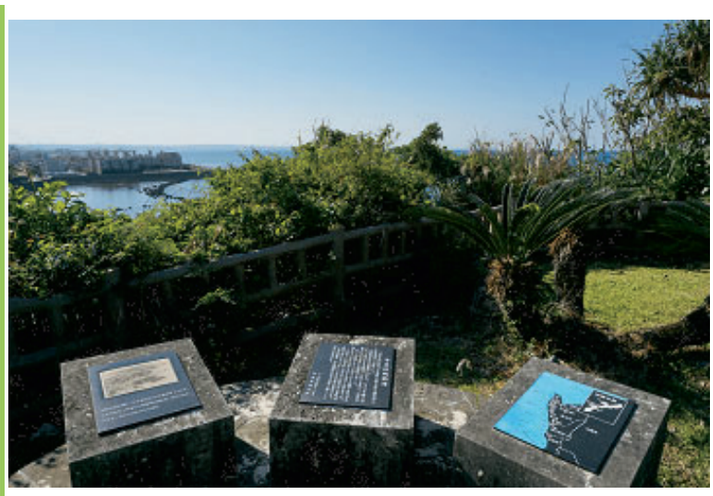
①所在地　沖縄県読谷村渡具知 228
②建立年月日　1995（平成7）年12月
③管理団体　沖縄県読谷村
④建立の経緯　右の碑文を参照

1945 年 4 月 1 日午前 8 時半頃、米軍が沖縄本島西海岸からの上陸作戦を開始しました。この本島上陸作戦を足掛かりとして、ゆくゆくは日本本土攻略作戦へ繋げていきたかった米軍は「アイスバーグ作戦」と名づけて周到な準備の下に作戦を開始しました。船舶は約 1500 隻、兵員は約 18 万弱、補給部隊を含めると 50 万人を超える米軍人に対して、日本軍の兵員は約 11 万人でした。上陸の際には必要に艦砲射撃を行った上での上陸作戦を行い、日本軍からの攻撃もなく無血上陸となった。

（黒しばわんこのお散歩ガイドＨＰ）

米軍上陸地の図

米軍上陸時の艦船の写真と解説文



勿為沖縄戦場

一九四五年四月一日米軍は読谷村の西海岸から沖縄本島へ上陸した。

沖縄戦は鉄の暴風といわれ、一木一草焼き尽くし、緑豊かな故郷は、がれきと化し、住民を巻き込んだ悲惨な地上戦であった。

かつて経験したことのないこの戦争は島の文化と人々の平和な暮らしと多くの尊い人命を奪った。

この美しい海岸が二度と再び如何なる軍隊の上陸の地ともならないことを村民は祈念する。

太平洋戦争・沖縄戦終結 50 周年を期してこの碑を建立する。

一九九五年一二月
沖縄県読谷村

10.黎明之塔（れいめい）

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区（2）
建立場所案内図を参照 ㊼）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1952（昭和 27）年 6 月
③戦没者数　2 名
④管理団体　沖縄県遺族連合会

牛島満（うしじま みつる）

1887～1945 大正・昭和時代前期の軍人。明治 20 年7 月 31 日生まれ。昭和 12 年歩兵第三十六旅団長として南京攻略に参加。14 年陸軍中将。19 年第三十二軍司令官となり沖縄に赴任、アメリカ軍に沖縄本島最南端においつめられ、昭和 20 年 6 月 23 日自決。59 歳。大将に進級。鹿児島県出身。陸軍大学校卒。

「秋待たで枯れ行く島の青草は　皇国の春に甦らなむ」

この牛島司令官の辞世の句には、本土決戦を信じて疑わなかった胸中がよく表れている、と牛島さんは指摘する。沖縄戦の本質は「沖縄を守るため」ではなく、「本土決戦のための時間稼ぎ」だった。だからこそ、牛島司令官は司令部を置いた首里城での決戦を避け、沖縄本島南部に撤退し、最後の一兵まで闘うことを強要した―これが牛島さんの導いた結論だ。

牛島貞満氏（牛島満司令官の孫）述
（「ＡＥＲＡ」1996 年 6 月 27 日 No. 28）

碑　文

第三十二軍は沖縄県民の献身的協力を受け力斗奮戦三ケ月に及んだがその甲斐も空しく将兵悉く祖国に殉じ軍司令官牛嶋満大将並びに参謀長長勇中将等此の地において自刃す時に昭和二十年六月二十三日午前四時三十分茲に南方同胞援護会の助成を得て碑を建て永くその偉烈を伝う

昭和三十七年十月
財団法人
沖縄県遺族連合会

11.バックナー中将戦死之跡碑

「真栄里地区に建つ」
（3.真栄里･西崎･真壁･真栄平地区
建立場所案内図を参照 ①）

①所在地　沖縄県糸満市真栄里
②建立年月日　1975（昭和 50）年 6 月
③管理団体　沖縄県慰霊奉賛会
④建立の経緯

米第十軍司令官サイモン・B・バックナー中将は 1945 年 6 月 18 日午後 1 時 15 分、戦闘指揮中にこの地で戦死した。これは 2013 年に至るまで、アメリカ軍史上において最高位の階級で戦死した事例である。

1952 年に米軍の手により記念碑が建立されたが、1974 年にキャンプフォスターに移設されたため、1975 年 6 月に沖縄県慰霊奉賛会により現在の碑が建立された。

（糸満市ＨＰ）

戦線視察で、護衛部下の 2 名と訪れる。
一番右側に立つのがバックナー中将。

6 月 18 日の昼すぎ、第 10 軍司令官バックナー中将は、真壁付近に布陣する第 2 海兵師団の前線観測所に立ち寄って海兵隊のさいごの進撃状況を視察中、日本軍の 47 ミリ対戦車砲の一弾が岩の下部に命中し、相次いで五発の砲弾がとんできた。砲弾の破片か、岩の破片かが同中将の胸にあたり彼は 10 分後に絶命した。
（大田昌秀編『写真記録　これが沖縄戦だ』）

バックナー中将の戦死とその後の事件について

バックナー中将の戦死（銃撃または砲撃事件）は、一部の米兵に復讐心を与えたようで、その後、残虐な行為を犯す米兵が目立って出てくるようになる。「アメリカ軍の間に、沖縄の民間人に対して残虐な行為を犯した者が生じたのは、この事件に対して復讐したいという気持ちがあったからかもしれない。6 月 18、19、20 日の 3 日間に計 60 人を殺害した事件は、18 日におけるバックナーの戦死直後に起きており、そのすべてが同じ地区で発生している。その中の数件は、観測所のあった稜線のすぐ下の真栄里で起きたのである。」

（ジョージ・F『天王山　沖縄戦と原子爆弾』下）

碑に関するエピソード

10 数年前に糸満市在住の金城丘志さんが、こちらの慰霊碑に特別な関心を寄せ、行動を起こした。慰霊碑周辺が荒れ果てていることに気づき、2007 年にイーグル・スカウトのプロジェクトとして、環境整備をしようと思い立った。そして、家族の助けを借りて、在沖米国領事館の協力の下、海兵隊や陸軍の隊員たちと共に慰霊碑とその周辺の清掃活動を始めた。当初は、一度限りの予定だったが、その後、海兵隊と陸軍の隊員たちは慰霊碑が綺麗に保たれるようにと、県民ボランティアの人々と連携して、毎年恒例のイベントとなっている。また、花の植え付けを行い、それと同時に桜の木も、毎年 7 本ずつ植樹している。慰霊碑を訪問する人達が、開花した桜の花を見て、今ある平和を大切にしてくれることを願い、植樹しているのだ。

（在日米海兵隊ＨＰ）

12.アーニー・パイルの碑

「伊江島に建つ」

①所在地　沖縄県伊江村川平
②建立年月日　1955(昭和 30)年 4 月
③管理団体　伊江村
④建立の経緯

世界的に有名な従軍記者、アーニーパイルは 1945 年 4 月 18 日、伊江島に上陸した米第 305 連隊と行動を共にし戦場を取材中、日本軍の機関銃弾に倒れた。同記者は、戦場にあっても一般の兵士の不安や怒り、喜びや悲しみを愛情をもって報道しつづけた。

遺体は粗末な木製の十字架の下に埋葬されていたら、後に沖縄本島の陸軍墓地、そして、ホノルルの国立墓地へ移された。しかし、彼の戦死の地には、米軍の手によってこのアーニー・パイル記念碑が建てられた。（伊江村ＨＰ）

このアーニー・パイルについて、大田昌秀氏は、その著書「沖縄のこころ」で「アーニー・パイルの最後」の項に、彼の取材の取組みと兵士との接し方、そして沖縄戦取材での死の予感を語っている。感心するのは、最後の文章に「例年、四月十八日には、かれのために慰霊祭が催されるが、それにはアメリカ人だけでなく、多数の地元住民も参加している。わざわざ沖縄本島から参拝に訪れる人も少なくない。」とある。

（大田昌秀『沖縄のこころ』）

アーニー・パイル

（本名　アーネスト・テイラー・パイル）の生涯

生年月日　1900 年 8 月 3 日
故　郷　アメリカ合衆国インディアナ州ダナ
経　歴　彼はインディアナ大学に進み　ラポーテ・ヘラルドにおいて見習いレポーターとしてキャリアを積む。
1935 年 彼は机に向かう仕事に飽き、特ダネを探しはじめる。
1940 年 ロンドンでラフトワッフ爆発の記事を鮮明に書く。
1942 年 彼はアメリカ軍に通信員として入隊し北アフリカやイタリアノルマンディ・ドイツに同行し、戦場の男たちの様子を記事にした。
1944 年 彼はジャーナリストとして最高の名誉であるピューリッツアー賞を授けられた。 一時アメリカ合衆国に戻ったが、すぐに第 77 歩兵隊に入隊する。
1945 年 彼はアメリカ軍の沖縄上陸に同行し、4 月 16 日伊江島に上陸した。4 月 18 日取材中に日本軍の弾にあたり、この地に生涯を閉じた。
第 33 代アメリカ合衆国トルーマン大統領もパイルの死を悼んで特別の声明を発表した。

※彼は兵士の視点から戦争を情緒的に書いて、第二次世界大戦で有名になったジャーナリストである。彼にとって戦争の道具はノート、ペンそしてタイプライターであった。
彼の功績を讃えるために在沖在郷軍人会が碑を建立し、毎年 4 月 18 日に近い日曜日に慰霊祭が行われている。
私達村民は誓う二度とあの忌わしい戦争を繰り返さない、平和な世界を築くことを。

2007 年 7 月 22 日　　伊江村
沖縄サミット並びにアーニー・パイル誕生 100 年記念
（現地パネル「左写真」より）

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

3. 南洋群島の戦没者慰霊塔

沖縄県民が、南洋諸島に出兵して戦死した戦没者を追悼する慰霊塔、また台湾・フィリピンの民間人が徴用され沖縄の地で戦死した戦没者を追悼する慰霊塔を選定して掲載しました。

１．南洋群島沖縄県人戦没者並開拓殉難者慰霊碑－83

２．台湾之塔－84

３．ダバオ之塔－85

1.南洋群島沖縄県人戦没者並開拓殉難者慰霊碑

「識名霊園内」に建つ
（識名霊園管理事務所の手前）

①所在地　沖縄県那覇市識名
②建立年月日　1963（昭和 38）年 12 月
③戦没者数　12,826 名
④管理団体　南洋群島帰還者会
⑤建立経緯

旧南洋諸島には戦前、沖縄県人６万人が移住したが、太平洋戦争で１万２８２６人が戦禍により犠牲となった。開拓途上で命を失った人とともに御霊を慰めるため、県内外の生存帰還者から寄せられた浄財によって建立された。（沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』）

沖縄県庁は、砲爆撃により庁舎内での業務が危険になったため、識名霊園内にある壕（ガマ）に移転して行っていた。本慰霊塔に向かう途中の右側にある。

碑　文

大東亜戦争戦歿者並開拓殉難者一万余柱の御霊を祀る

一九六三年十二月吉日建之
南洋群島帰還者会

南洋群島の帰還者でつくる「南洋群島帰還者会」がサイパン、テニアンで 1968 年から実施している「南洋群島・慰霊と交流の旅」（南洋群島墓参団）が来年で終えることが 22 日、明らかとなった。会員の高齢化などによって現地を訪れることが困難になったことが要因。来年５月を予定している 50 回目の訪問を節目に、墓参団の歴史に幕が下りる。すでに沖縄県などには通達しており、23 日の総会で会員に報告する。48 年に結成した南洋群島帰還者会は、68 年に戦後初めて墓参団としてサイパン島とテニアン島を訪問。現地に慰霊のための「おきなわの塔」を建立し、以来亡くなった県人を慰霊してきた。太平洋戦争で犠牲になった人々の「三十三回忌」となる 76 年には 1100 人が参加した。だが、近年は参加者が減り、会の事務局によると、今年の参加者は 22 人だった。

同会は 23 日午後、那覇市識名の南洋群島沖縄県人戦没者慰霊碑で慰霊祭を開く予定で、墓参団が終了しても慰霊祭は続けていく考え。22 日、慰霊祭の準備のために碑を訪れた同会事務局長の安里嗣淳さん（73）は「多くの人に参加してほしい」と、最後の墓参団への参加を呼び掛けている。

（「琉球新報」ＨＰ　2018 年 6 月 23 日）

2.台湾之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁（2）地区
建立場所案内図を参照 ⑤⓪）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　2016（平成 28）年
8 月 15 日
③戦没者数　30,000 余名
④管理団体　日本台湾平和基金会
⑤建立の経緯

慰霊碑は戦後７０年の節目として２０１５年、日本台湾平和基金会が着工。敷地は沖縄翼友会が提供し、同会管理の空華の塔に隣接する場所。碑の前面には台湾の形がかたどられている。

同基金会の許光輝理事長によると、平和の礎に刻銘されている台湾人は３４人。　（「琉球新報」2016 年 6 月 26 日）

碑　文

台湾之塔　碑文

台湾之塔　建立にあたり

台湾之塔は、先の大戦に台湾から参戦し散華された軍人軍属などの御霊を慰霊・顕彰する碑であります。本来在るべき摩文仁の丘に戦後 70 年もの間建てられずにいた事に心を痛めた日台両地の有志の浄財を集めることにより建立されたものです。

当時台湾から勇んで参戦した 20 万余の軍人軍属の内、約 3 万柱の戦没者と 1 万 5 千余人の行方不明者は、共に我々の同胞でした。時代が変ろうと、人が自らの命を犠牲にして他者を救わんとした行為は、民族や国家の如何を問わず、人道の範として賞され語り継がれなければなりません。

建立地となったこの土地は、「戦時中の御恩返しの一端となり日本と台湾の交流・日台親善の懸橋ともなれば是に過ぎるものはない」として、沖縄翼友会より提供されました。このように日台間の恩義により結ばれる絆が、アジアと世界の人々の希望と成らんことを願ってやみません。

此処に台湾之塔の建立をもって御霊の泰からんことを願い、この塔を訪れる全ての人々が先人の恩義に優る交流を心掛けられる事を祈念致します。

2016 年 8 月 15 日
一般社団法人　日本台湾平和基金
特定非営利活動法人　台日交流協会

3.ダバオ之塔

「沖縄平和祈念公園」に建つ
（1.摩文仁地区(2)
建立場所案内図を参照 ㊾）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1972（昭和 47）年
3 月 28 日
③戦没者数　20,000 余名
④管理団体　タバオ会
⑤建立経緯

太平洋戦争中、フィリピン・ミンダナオ島ダバオにおいて戦没したりダバオ開拓途上犠牲となったりした同胞２ 万余柱の御霊に対し、限りなき思慕の情を寄せ供養するため、全国のダバオ関係者によって建立された。

（沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』）

糸満市摩文仁の平和祈念公園内にあるダバオの塔で１５日、慰霊祭（県ダバオ会主催）が開かれた。遺族ら約１５０人が参加し、太平洋戦争時にフィリピン・ミンダナオ島ダバオで亡くなった沖縄県出身者の冥福を祈った。戦前、ダバオには県出身移民者が多く在住しており、太平洋戦争で戦闘に巻き込まれ、多くの住民が犠牲になった。式典で、県ダバオ会の山入端嘉弘会長は「大戦からことしで６９年になるが、戦争の記憶は脳裏に刻まれ忘れることはできない」とあいさつした。姉妹３人で参列した石原幸子さん（７３）＝宜野湾市＝は、米軍の攻撃を避け、家族で山に避難した際に栄養不足で弟を失った。幸子さん一家は終戦を知らず、８月１５日以降も山を逃げ回った。戦後、引き揚げ船で長崎県の佐世保に到着したが、戦火を生き延びた１０歳と８歳の兄は寒さで肺炎になり死亡した。

幸子さんは、「戦争が起これば真っ先に犠牲になるのは体力のない子どもたち。二度と悲惨な戦争は繰り返してはいけない」と願った。

2014 年 5 月 16 日（「琉球新報」ＨＰ）

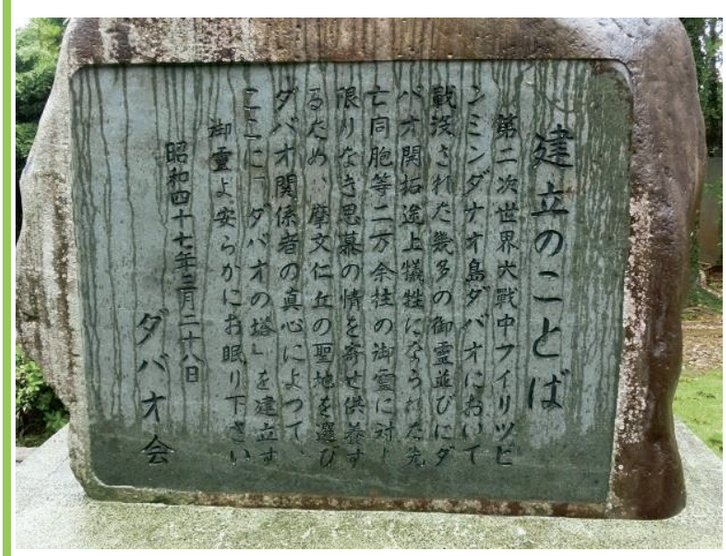
碑　文

建立のことば

第二次世界大戦中フィリツピンミンダナオ島ダバオにおいて戦没された幾多の御霊並びにダバオ開拓途上犠牲になられた先亡同胞二万余柱の御霊に対し、限りなき思慕の情を寄せ供養するため、摩文仁丘の聖地を選びダバオ関係者の真心によつて、ここに「ダバオの塔」を建立す

御霊よ安らかにお眠り下さい

昭和四十七年三月二十八日
ダバオ会



第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

4. 強制集団死（集団自決）関連の慰霊碑

沖縄本島、離島で起きた悲惨な強制集団死があった地に建立される慰霊塔・慰霊碑を掲載しました。

１．読 谷 村　チビチリガマから世界へ平和の祈りを碑 －87
　　チビチリガマ世代を結ぶ平和の像
２．渡嘉敷島　白玉之塔 －88
３．渡嘉敷島　集団自決跡地 －89
４．座間味島　平和之塔 －90
５．久 米 島　痛恨之碑 －91

■強制集団死を考える

本ガイドブック編集に当り、強制集団死（集団自決）が行われた読谷村（チビチリガマ）、慶良間列島の渡嘉敷島（集団自決跡地）、座間味島（集団自決之地、平和之塔）、久米島（痛恨之碑）を訪れ、それぞれの慰霊塔・慰霊碑を調査した。強制集団死については、『アジア・太平洋戦争辞典』（吉川弘文館、2015 年）に詳しいので、以下引用して紹介する。

集団自決　地域の住民が集団で死を強制･誘導された事件。日本軍によって配られた手りゅう弾を爆発させたり、男たちが女性や子どもを殺してみずからも死ぬ方法が取られることが多かった。長らく「集団自決」と表現されてきたが、住民はみずから死んだのではないので「強制集団死」と呼ぶべきという主張がなされている。他方、国家のためにみずから命を捧げたと殉国美談視することはできないが、「自決」と語られるような状況があったことを受けとめ、強制された「集団自決」として考えるべきという主張もある。集団自決として有名なのは沖縄戦における慶良間列島である。一九四五年三月下旬、米軍が上陸する中で座間味島百七十七人、慶留間島五十三人、渡嘉敷島三百三十人が集団自決で亡くなったとされている。軍中央では日本軍が玉砕するときには民間人も一緒に死ぬことが名誉あることと考えられ、敵軍に捕まるとひどい目にあわされて殺されるという恐怖心を植えつけるキャンペーンがなされていた。また捕虜になるのは恥であるという教育がなされ、「軍官民共生共死の一体化」が叫ばれ、軍が全滅するときには住民も死ぬという意識が植え付けられていた。さらに現地の軍も住民に手りゅう弾を配布し、いざという場合に決するように仕向けていた。沖縄ではほかに読谷のチビチリガマなどでも起きているが、慶良間に集中しているのは、小さな離島でありもはや逃げ場がないと思ったこと、自決の「軍命」が出されたと聞いたことが大きかったとみられる。全体として日本軍の強制と誘導によって起こされたと言える。この集団自決は沖縄以外でも、日本軍が多くの在留邦人を抱えて戦ったサイパン、テニアン、フィリピンのパナイ島、ソ連軍侵攻下の旧満洲でも起きている。軍が民間人を保護しようとしていれば多くは避けられたと考えられ、民間人であっても捕虜になることを許さず死を強制する当時の日本軍と国家体制が引き起こしたものであると言える。

参考文献：宮城晴美『母の遺したもの－沖縄・座間味島「集団自決」の新しい事実－(新版)』(2008 年 高文研、林博史『沖縄戦　強制された「集団自決」』(『歴史文化ライブラリー』2009 年 吉川弘文館)、下嶋哲朗『非業の生者たち―集団自決　サイパンから満州へ―』(2012 年 岩波書店)（林博史）　（福島記）

1. 読谷村（よみたんそん）

チビチリガマから世界へ平和の祈りを碑
チビチリガマ世代を結ぶ平和の像

「読谷村」に建つ

（読谷村波平地区のこんもりとした雑木林の一角に建つ。「体験王国むら咲きむら」から車で 10 分以内の場所）　（9. 読谷地区 ①）

① 所在地　沖縄県中頭郡読谷村波平 1153
② 建立年月日　1987（昭和 62）年 4 月 2 日除幕
1995（平成7）年 4 月 2 日再建
③ 犠牲者数　強制集団死者数 85 名（刻銘者）
※当初は 83 名であったが、その後の調査の結果 2 名の犠牲者が判明し 85 名となる。
④ 建立者　彫刻家 金城実と強制集団死者の遺族、地域住民の協力者
⑤ 慰霊祭　4 月 2 日
⑥ 管理団体　チビチリガマ遺族会

チビチリガマ世代を結ぶ平和の像

チビチリガマ遺族会では、二度とチビチリガマの悲劇を繰り返してはならないとの思いと、チビチリガマで亡くなった人々の慟哭を忘れず、次の世代へ伝えようとモニュメントの制作を発議した。そして、1986 年 12 月から翌 87 年 3 月末までに「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」を、波平の小公園（チンマーサー）で彫刻家金城実氏と遺族、児童生徒らとともに制作。その後チビチリガマ入り口横に制作した「平和の像」を設置して、1987 年 4 月 2 日除幕式を行った。

（読谷村史『戦時記録』下巻第 7 章「慰霊の塔は語る」）

碑　文
チビチリガマから世界へ平和の祈り

一九四五年四月一日、米軍はこの読谷村の西海岸から沖縄本島へ上陸した。それは、住民を巻き込んだ悲惨な沖縄戦・地上戦であった。その日のうちに、米軍はチビチリガマ一帯に迫っていた。翌二日、チビチリガマへ避難していた住民約一四〇名中、八十三名が「集団自決」をした。尊い命を喪った。

あれから三十八年後、やっと真相が明らかになった。その結果、八十三名のうち約六割が十八歳以下の子供たちであった。その他、二名が米兵の手によって犠牲になった。

「集団自決」とは、「国家のために命を奉げよ」「生きて虜囚（りょしゅう）の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ。」といった皇民化教育、軍事主義教育による強制された死のことである。

遺族は、チビチリガマから世界へ平和の祈りを、と「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」を彫刻家金城実氏と住民の協力のもとに作成した。像の完成から七ヵ月後、十一月八日、心なき者らにより像は無残にも破壊された。住民は怒り、遺族は嘆いた。

全国の平和を願う人々はそのことを憤り、励ましと多大なカンパを寄せた。あれから七年余が経過し、平和の像の再建が実現した。チビチリガマの犠牲者への追悼と平和を愛するすべての人々の思いを込め、沖縄戦終結五十周年にあたり、ふたたび国家の名において戦争への道を歩まさないことを決意し、ここにこの碑を建立する。

一九九五年四月二日
チビチリガマ遺族会

2. 渡嘉敷島（とかしき）

白玉之塔（しらたま）

「渡嘉敷村」に建つ
（「国立沖縄青少年交流の家」に向かう途中右手に案内板がある。下記の案内図を参照 ）

①所在地　沖縄県島尻郡渡嘉敷村
　　字渡嘉敷イシッピ原 1845 番地
②建立年月日　1962（昭和 37）年 4 月 19 日
③一般住民戦没者数　380 名
　（強制集団死と見做される
　　公簿上の戦没者数 330 人）
　日本軍戦没者数　594 名
④管理団体　渡嘉敷村遺族会

※以下は、渡嘉敷村公式サイトと現地パネル表記による。

集団自決のあった日の翌日までの一般住民の死亡者数

27 日	28 日			29 日	27～29
確定	確定	刻銘漏れ	計	確定	小計
5 人	278 人	-2人	276 人	7 人	288 人
防衛隊員（住民）の死亡者数					42 人
集団自決と看做される公簿上の戦没者数					330 人

※1950年に発行された沖縄タイムスの「鉄の暴風」に記載されている死亡者数等の具体的な数値のうち、いわゆる「集団自決者数 329 人」の根拠については未だに解明出来ていない。
　村に残る昭和 32 年～4 年頃の援護法関係を基に、発効から 58 年後の現在において、敢えてそれに近い数値を抽出するとすれば、上記のデータによる推計が最も穏当なところであろう。

一般の住民享年別戦没者数

0 歳	10 人	25 歳		50 歳	8 人	75 歳	10 人
1 歳	13 人	26 歳	3 人	51 歳		76 歳	6 人
2 歳	7 人	27 歳	1 人	52 歳	3 人	77 歳	2 人
3 歳	16 人	28 歳	1 人	53 歳	6 人	78 歳	3 人
4 歳	8 人	29 歳	4 人	54 歳	3 人	79 歳	4 人
5 歳	5 人	30 歳	1 人	55 歳	5 人	80 歳	1 人
6 歳	8 人	31 歳	5 人	56 歳	5 人	81 歳	2 人
7 歳	5 人	32 歳	1 人	57 歳	1 人	82 歳	2 人
8 歳	11 人	33 歳	1 人	58 歳	4 人	87 歳	1 人
9 歳	10 人	34 歳	7 人	59 歳	6 人	95 歳	1 人
10 歳	8 人	35 歳	3 人	60 歳	2 人		
11 歳	4 人	36 歳		61 歳	3 人		
12 歳	5 人	37 歳	2 人	62 歳	2 人		
13 歳	9 人	38 歳	1 人	63 歳	4 人		
14 歳	11 人	39 歳	3 人	64 歳	5 人		
15 歳	5 人	40 歳	2 人	65 歳	1 人		
16 歳	4 人	41 歳	4 人	66 歳	3 人		
17 歳	4 人	42 歳	2 人	67 歳	2 人		
18 歳	2 人	43 歳	2 人	68 歳	3 人		
19 歳	5 人	44 歳	2 人	69 歳	5 人		
20 歳	2 人	45 歳	5 人	70 歳	2 人		
21 歳	5 人	46 歳	2 人	71 歳	7 人		
22 歳	2 人	47 歳	7 人	72 歳	4 人	不明	27 人
23 歳	3 人	48 歳	2 人	73 歳	2 人		
24 歳	2 人	49 歳	8 人	74 歳	2 人	合計	380 人

※以上は、渡嘉敷村公式サイトと現地パネル表記による。

1943 年 3 月 23 日、米軍は数百の艦艇で慶良間諸島に砲爆撃を行い、26 日には座間味島へ、27 日には渡嘉敷島に上陸占領し、沖縄本島上陸作戦の補給基地として確保する。日本軍と住民は山中に逃げ込むが、北端の西山に追い込まれ、28 日にかねて指示されていたとおりに集団自決をしたのです。
　毎年 3 月 28 日を慰霊の日（住民玉砕の日）と定めて慰霊祭が開催されている。

（渡嘉敷村公式サイト）

3. 渡嘉敷島（とかしき）

集団自決跡地

「渡嘉敷村」に建つ

（白玉の塔を通り過ぎて、「国立沖縄青少年交流の家」の敷地内奥の左手に、ゲートが閉められた施設があり、それを開けて入る。）

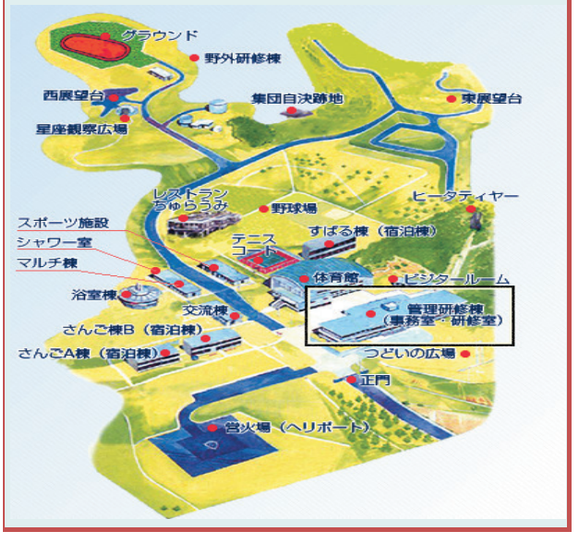
①所在地　沖縄県島尻郡渡嘉敷村
字渡嘉敷 2772 番地

②建立年月日　1993（平成 5）年 3 月 28 日

③一般住民戦没者数　380 名
（強制集団死と見做される
公簿上の戦没者数）

④管理団体　渡嘉敷村

※この奥に、強制集団死が行われた現場がある。



碑　文

この台地後方は去る大戦において住民が集団自決をした場所である。米軍の上陸により追いつめられた住民は、友軍を頼ってこの地に終結したが敵の砲爆は熾烈を極め遂に包囲され行く場を失い、刻々と迫る危機を感じた住民は「生きて捕虜となり辱めを受けるより死して国に殉ずることが国民としての本分である」として昭和 20 年 3 月 28 日祖国の勝利を念じ笑って死のうと悲壮な決意をした。兼ねてから防衛隊員が所持していた手榴弾 2 個づつが唯一の頼りで、親戚縁故が車座になり 1 ケの手榴弾に、2、30 名が集まった瞬間、不気味な炸裂音は谷間にこだまし清水の流れは寸時にして血の流れと化し、老若男女 315 名の尊い命が失われ悲惨な死を遂げた。昭和 26 年 3 月この大戦で犠牲になった方々の慰霊のためこの地に白玉の塔を建立したが、周辺地域が米軍基地となった為に移設を余儀なくされた。　時移り世変わってここに沖縄の祖国復帰 20 年の節目を迎えるに当たり過去を省み戦争の悲惨を永く後世に伝え恒久平和の誓いを新たにするためここを聖地として整備し碑を建立した。

平成 5 年 3 月 28 日　　渡嘉敷村

4. 座間味島（ざまみ）

平和之塔

「座間味村」に建つ
（高月山展望台へ向かう途中、右手に上り口の表示がある。座間味港より、徒歩で約 15 分）

①所在地　沖縄県島尻郡座間味村座間味
②建立年月日　1958（昭和 33）年 3 月
③敷地面積　不明　㎡
④戦没者数　軍人、一般住民戦没者数 1,200 名余
⑤管理団体　座間味村

「太平洋戦争沖縄戦上陸第一歩之地
昭和二十年三月二十六日午前九時上陸」と書かれた碑が座間味港の近くに建っている。

村長 野村正次郎、助役、収入役の名前が刻字され、「**以下五十九名集団自決之地**」と書かれた碑が、平和之塔へ向かう途中の左側に建っている。強制集団死は、この碑から奥に下った処でされたようだ。

平成 7 年には、平和之塔を囲むように戦没者の氏名が刻まれた碑が建てられた。毎年、3 月 26 日は、「座間味村の慰霊の日」として村民が参拝している。村では 5 年毎に慰霊祭を行い、それ以外の年は自由参拝としている。座間味村では、児童、生徒に戦禍の実情が語り継がれている。

（座間味村公式サイト）

※この碑文の下には、年月日順に沖縄戦の史実が記されてある。

碑　文

1945 年（昭和 20 年）3 月 26 日、座間味村は沖縄戦における最初の米軍上陸第一歩の地となり、多くの人々がこの地で犠牲となりました。ここ平和之塔は、高月山中腹の阿嘉島・慶良間島を見渡す高台に位置しており昭和 33 年 3 月に建立されました。この平和之塔には、軍人、民間人あわせて 1,200 柱余を平和の守り神としてお祀りし、平成 7 年には塔を囲むように村民を始めとする戦没者のお名前を刻印しました刻銘碑を建て平和の尊さを再確認しております。
～座間味村は世界の恒久平和を願っております～

5. 久米島（くめ）

痛恨之碑（つうこん）

「久米島町」に建つ
（清水小学校北側のサトウキビ畑の中にある）

① 所在地　沖縄県島尻郡久米島町字西銘
② 建立年月日　1974（昭和 49）年 8 月 20 日
③ 犠牲者数　7家族 21 名
④ 建立者　沖縄在・在日朝鮮人久米島島民
　　虐殺痛恨之碑建立実行委員会
⑤ 管理団体　NPO法人 沖縄痛恨之碑の会

碑　文

「痛恨之碑」と刻まれた下には、虐殺された次の 7 家族 21 名の名前がある。

天皇の軍隊に虐殺された
久米島住民・久米島在朝鮮人
痛恨之碑

安里正二郎氏
北原区長
小橋川共晃氏
警防団長
糸数盛保氏
宮城栄明氏　一家三名
比嘉　亀氏　一家四名
仲村渠明勇氏　一家四名
谷川昇（具仲會）
一家七名

「天皇の軍隊」とは、戦時中に久米島に駐屯した日本軍部隊の鹿山正兵曹長が指揮する「鹿山隊」約 30 名の海軍通信隊である。米軍が久米島に上陸してきたのは、1945 年 6 月 26 日。23 日には沖縄守備軍 32 軍の牛島満中将司令官は自決し、沖縄での組織的な戦闘は不可能な状態であった。鹿山隊は孤立無援となり山中に身を隠し、住民が米軍に寝返りスパイ行為をさせないために、上記の住民を銃剣で刺殺後、家に火を放って死体を家ごと焼き払う等の残虐非道な行為をした。中には、妻、10 歳、8 歳、6 歳、3 歳、生後 1 年の幼児までもが虐殺された。
（大田昌秀『死者たちは、いまだ眠れず』）

沖縄戦では、沖縄守備軍による住民虐殺事件が各地で幾度となく繰り返された。

そのうち最も象徴的で悲惨な住民殺害事件が、1945 年 6 月から 8 月にかけて久米島で起こった「久米島事件」として知られる事件である。

この碑は、「久米島事件」で犠牲になった 7 世帯 20 名を祀る。

約 2 メートルのモルタル製の擬岩にはめ込まれた黒花崗岩の石板には「天皇の軍隊に虐殺された久米島住民・久米島在朝鮮人痛恨之碑」とある。

碑は、「隠された沖縄戦」「わんがうまりあ沖縄」などの著者、富村順一氏と、ひたすら彼を支援した元拓殖高校教員の桑田博氏（故人）、小波津英興氏らが中心となって建立したもの。
（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　慰霊の塔』）

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

５．　男女学徒隊　教職員戦没者の慰霊塔　慰霊碑

沖縄戦では、21 の学校から学徒隊として動員された中から、次の各学徒隊の慰霊塔（碑）を掲載します。

１．ひめゆりの塔　－93
２．梯梧之塔　－94
３．ずゐせんの塔　－94
４．白梅之塔　－95
５．翔洋碑　－95
６．和　魂　－96
７．積徳高等女学校慰霊之碑　－96
８．開南健児之塔　－97
９．沖縄工業健児之塔　－97
10．農林健児之塔　－98
11．南燈慰霊之塔　－98
12．一中健児之塔　－99
13．二中健児の塔　－99
14．沖縄師範健児之塔　－100

上の写真は、本部町並里に建立されている**「三中学徒之碑」**です。正確な立地場所の事前確認を怠り、たどり着くことができなかった。機会を見て訪ねてみたいと思う（吉岡記）。（写真は「三中学徒之碑」ＨＰ）

碑　文（一部抜粋）

太平洋戦争も末期の昭和20年3月米軍の烈しい砲爆撃の中を沖縄県立第三中学校生徒数百名は軍命により通信隊要員または鉄血勤皇隊員としてあるいは繰上現役入隊の形で郷土防衛の戦列に馳せ参じた。

4 月 1 日米軍が沖縄本島に上陸するや陸上戦の火蓋は切って落され我が三中の生徒は此処八重岳真部山地区そして多野岳その他各地において圧倒的に優勢な米軍と果敢な戦闘を展開し、数十名が、あたら十代の若き生命を無惨にも散らしてしまった。

沖縄戦では、10 代の男子生徒たちも 12 の学校から約 1800 名が学徒隊として戦場にかりだされた。男子生徒は 14～19 歳で上級生が「鉄血勤皇隊」、下級生が「通信隊」として編成され、また陣地構築等の作業にも従事した。女子生徒は、「ひめゆり学徒隊」をはじめとする、9 の女学校から約 460 名が動員され看護要員として負傷兵の看護、遺体の処理などに従事した。合せて 21 の学校から約 2200 人が学徒隊となり、その半数ほどが亡くなったといわれる。被弾による死亡、手榴弾を爆発させて自死した生徒、爆弾をかかえて米軍に突っ込み自爆した生徒もいた。

私が理解し難いのは、激しい艦砲射撃などの飛弾の下、米兵と対峙することもある死の恐怖の戦場へ志願したわけではないが、若い生徒たちが積極的に参加するその精神状態である。金城氏、知花氏が語るように、それこそが徹底した皇民化教育の結果なのであろう。生徒たちの献身的に尽くす姿や勇気に感心するよりも、その忠実さ従順さに皇民化教育の怖さを感じる。

掲載した慰霊塔・慰霊碑には、ひめゆりの塔・梯梧之塔・ずゐせんの塔・白梅之塔・開南健児之塔・沖縄工業健児之塔・農林健児之塔・一中健児之塔・二中健児の塔・沖縄師範健児之塔のように、公開されている時間帯であれば自由に訪ねることのできる慰霊塔（碑）もあるが、翔洋碑・和魂・南燈慰霊之塔・積徳高等女学校慰霊之碑のように学校や寺院の敷地内に建っているものがある（訪問の際には、事前の承諾を得る方がよい）。

私の場合は、事前の承諾も約束も取らず、カメラを携えて突然に訪ね、事務室窓口でガイドブック作成の趣旨説明をした後、教頭先生に建立場所まで案内していただいたのだが、その途中、学校では慰霊塔（碑）についての学修の取組みを積極的に行っていること、しかし、悲惨であった沖縄戦にあまり関心を持たないことの憂いを語られていたのが印象に残っている。突然の訪問にもかかわらず、ご親切な対応をしていただきましたことに感謝申し上げます（吉岡記）。

1. ひめゆりの塔

2. 伊原・米須・山崎地区 ①

①所在地　沖縄県糸満市字伊原 671−1
②建立年月日　1946(昭和 21)年 4 月 7 日
③管理団体　ひめゆり同窓会

ひめゆり学徒隊の犠牲となった生徒、教職員 224 名を追悼する慰霊の塔

沖縄県立第一高等女学校には「乙姫」、沖縄模範学校女子部を「白百合」という交友会誌があり、両校が併置された際その両方の名前を合わせて「姫百合」と名付けられ、戦後ひらがなで「ひめゆり」と使うようになった。

ひめゆりの塔は、終戦の翌年に学徒の遺族らによって建立されました。糸満市には沖縄県立の平和祈念資料館・公園をはじめ数多くの慰霊碑・塔がありますが、最も早く建てられた塔のひとつです。ひめゆり平和祈念資料館が設立されたのは、戦後 43 年が経った平成元年（1989）6 月 23 日。それまでは、資料館をつくることよりも、失ってしまった学校をまず建て直したいと奔走していました。しかし現実的には厳しいものがあり、断念したといいます。

慰霊塔の前に穴があいている洞窟が沖縄陸軍病院第三外科壕跡。ひめゆりの塔が建っているガマ(自然洞窟)には当時、ひめゆり学徒を含む病院関係者や住人などおよそ 100 名がいたそうです。解散命令後の 6 月 19 日に米軍のガス弾攻撃を受けて 80 人余りが亡くなられたそうです。当時、薄暗い狭い壕の中で大勢の負傷した兵隊のうめき声が響く中、必死に看病するひめゆり学徒、そして必死に生き延びようとする住人がこの壕の中で共存していたのです。もし、自分が当時の兵隊だったら、ひめゆり学徒隊だったら、住人だったらと考えるとどう思うでしょうか。

（沖縄観光チャンネルＨＰ）

碑　文

ひめゆりの塔の記

昭和 20 年 3 月 24 日島尻郡玉城村港川方面へ米軍の艦砲射撃が始まった。沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の職員生徒 297 名は、軍命によって看護要員としてただちに南風原陸軍病院の勤務についた。

戦闘がはげしくなるにつれて、前線から運ばれる負傷兵の数は激増し病院の壕はたちまち超満員になり、南風原村一日橋・玉城村糸数にも分室が設けられた。看護婦・生徒たちは夜昼となく力のかぎりをつくして傷病兵の看護をつづけた。

日本軍の首里撤退もせまった 5 月 25 日の夜南風原陸軍病院の重傷患者は壕に残し歩ける患者だけをつれて、手を引き肩をかし砲弾をくぐり、包帯をちぎって道しるべとしてここ摩文仁村に移動した。南にくだって後は病院は本部・第一外科・糸数分室・第二外科・第三外科に分かれて業務を続けた。第三外科は現在のひめゆりの塔の壕にあった。

6 月 18 日いよいよ米軍がま近にせまり、看護隊は陸軍病院から解散を命ぜられた。翌 19 日第三外科の壕は敵襲を受けガス弾を投げ込まれ地獄絵図と化し、奇跡的に生き残った 5 名をのぞき職員生徒 40 名は岩に枕を並べた。軍医・兵・看護婦・炊事婦等 29 名、民間人 6 名も運命をともにした。その他の壕にいた職員生徒たちは壕脱出後弾雨の中をさまよい沖縄最南端の断崖に追い詰められて多く消息をたった。南風原陸軍病院に勤務した看護要員の全生徒の 3 分の 2 がこうして最期をとげたのである。

戦争がすんで二人の娘の行方をたずねていた金城和信夫妻によって第三外科壕がさがしあてられた。真和志村民の協力により昭和 21 年 4 月 7 日最初のひめゆりの塔が建ち、次第に整備された。ここに沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の職員 16 名、生徒 208 名の戦没者を合祀して白百合のかおりをほこったみ霊の心をうけ、平和の原点 とする。

乙女らは涙と血とを流してえた体験を地下に埋めたくないと平和へのさけびを岩肌に刻みながらついに永遠に黙した。

2. 梯梧之塔（でいご）

2. 伊原・米須・山崎地区 ③

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1950（昭和 25）年 8 月
　　1971（昭和 46）年 6 月 23 日（移設）
③管理団体　梯梧同窓会

沖縄昭和高等女学校の犠牲となった
生徒、教職員 60 名を追悼する慰霊の塔

ひめゆりの塔の近くに立つ「梯梧之塔」は、私立沖縄昭和高等女学校の生徒・教職員を祀る。梯梧学徒隊の名称は、校歌の「梯梧の花の緋の誠」にちなむ。

梯梧の塔説明碑文

梯梧の塔は、昭和 46 年 6 月 23 日、旧校舎跡より、ゆかりの地に移転。母校の校歌「梯梧の花の緋の誠」にちなんで、「梯梧の塔」として建立された。昭和 20 年 1 月 25 日より約 1 月間の看護教育を受け、3 月 6 日、17 名（4 年生）は、第 62 師団野戦病院（石 5325）へ学徒看護隊として、ナゲーラの壕へ配属された。

4 月 1 日、地上戦が始まるや、日を逐うて前線からの負傷兵が激増、壕の中は、まるで生き地獄、昼夜の別なく看護は続いた。4 月 29 日学友の中から最初の戦死者が出る。ナゲーラの壕は満杯で収容できず、9 名は第二分院の識名の壕へ移動した。壕の中で休息中、飛んで来た破片で学友 2 名が戦死。戦況の悪化で 5 月末、武富、米須、伊原へと後退。米軍は物量にものを言わせて猛攻撃は止むことなく、伊原の地で 6 名戦死。病院としての機能を果たす事ができず、6 月 19 日、隊に解散命令が出た。

無念にも学業半ばにして、戦禍の中で犠牲になった、同窓生 57 名と、職員 3 名、計 60 柱が合祀されている。勝利を信じ若くして御霊となった学友の永遠に眠る南部終焉の地に建立、恒久平和を願いつつご冥福を祈っている。

所在地　糸満市米須 1150 番地
　　建立年月日　昭和 46 年 6 月 23 日（移設）
　　敷地面積　70 坪　合祀柱数　60 柱
　　管理者　梯梧同窓会　慰霊奉賛会と永久管理契約済

3. ずゐせんの塔

2. 伊原・米須・山崎地区 ⑦

①所在地　沖縄県糸満市字米須
②建立年月日　1948（昭和 23）年 8 月
③管理団体　瑞泉同窓会

県立首里高等女学校の犠牲となった
生徒、教職員 98 名を追悼する慰霊の塔

「ずゐせん」の由来は、沖縄県立首里高等女学校が首里城の「瑞泉門」の近くにあったからだという。

碑　文

ずゐせんの塔

ずゐせんの塔は、第二次世界対戦沖縄戦で戦死した沖縄県立首里高等女学校看護隊並に職員同窓会員の御霊を祭ってある。

昭和 20 年 1 月 25 日から軍医の講習を受け、引き続き合宿訓練に入った後、3 月 27 日野戦病院壕で卒業式を挙行、直ちに第 62 師団、石部隊野戦病院に配属され最前線の浦添から首里、摩文仁へと負傷兵を看護しつつ、泥濘の中を弾雨に叩かれ、奮闘したが惜しくも散華したのである。

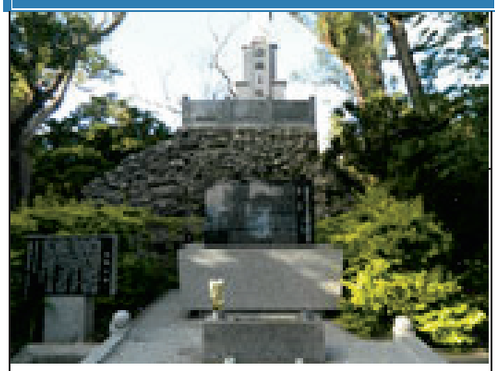
1945 年（昭和 20 年）4 月 1 日、本島内部に米軍が上陸し戦線が激化するにつれ、負傷兵の数も増加し、4 月 12 日ごろ、前線に近い仲間（現浦添市）に野戦病院の仲間分室が設置され、生徒 13 名が配置された。5 月下旬、米軍は守備軍司令部のある首里まで迫ってきたため、野戦病院は南部へ撤退する。

6 月 20 日頃、解散命令が出され、23 日、米須の壕は馬乗り攻撃に遭い、生徒たちは、壕から外に出て米軍に収容された。

4. 白梅之塔（しらうめ）

3. 真栄里・西崎・真壁・真栄平地区 ⑤

①所在地　沖縄県糸満市字真栄里
②建立年月日　1947（昭和 22）年 1 月
1992（平成 2）年 6 月（改修）
③管理団体　白梅同窓会



県立第二高等女学校の生徒、教職員 149 名を追悼する慰霊の塔

沖縄県立第二高等女学校の生徒からなる学徒隊の最後の場所である。6 月 21 日に米軍の激しい攻撃を受けた。白梅之塔には学校関係者 149 人が合祀されている。敷地内には国吉住民が建立した「萬魂之塔」がある。　（糸満市ＨＰ）

碑　文

白梅之塔

沖縄県立第二高等女学校の四年生五十六名で編成された白梅学徒看護隊は、昭和二十年三月六日第二十四師団（山部隊）の衛生看護教育隊に入隊し、補助看護婦として特別集中教育を受けていた。米軍の艦砲射撃が激しくなった同月二十四日から、東風平町富盛の八重瀬岳にあった同師団の第一野戦病院に軍属として配置され、昼夜別なく傷病兵の看護に専念した。

戦況は日毎に悪化し、同年六月四日遂に白梅隊に解散命令が下り、隊員は散り散りになって戦野を彷徨し、一人またひとりと戦火に斃れていった。その場所は殆ど不明である。また、解散後この地に後退した山第一野戦病院に、再び合流した一部の白梅隊員は、同年六月二十一、二十二の両日に亘り、米軍の猛攻撃を受け無念の最期を遂げた。この辺一帯は、白梅隊員の最も多くの犠牲者が出た所である。

塔は、戦没した白梅隊員及び沖縄戦で戦死、或いは戦争が原因で亡くなった教職員・同窓生百四十九柱の鎮魂と、世界の恒久平和を祈念して昭和二十二年一月に建立した。

毎年六月二十三日の「慰霊の日」に例祭が行われる。

平成十年六月二十三日
沖縄県立第二高等学校　白梅同窓会

5. 翔洋碑（しょうようひ）

3. 真栄里・西崎・真壁・真栄平地区 ⑧

①所在地　沖縄県糸満市西崎 1−1−1
②建立年月日　1962（昭和 37）年 11 月
1978（昭和53）年 3 月（移設）
③管理団体　沖縄水産学校同窓会

沖縄県立水産学校の犠牲となった生徒、教職員 66 名を追悼する慰霊の碑

本校では，毎年、6 月 23 日の慰霊の日に合わせて，本校敷地内にある「翔洋碑」前で全校生徒による校内慰霊祭を行っています。目的：翔洋碑について学習し、本校の生徒達が戦場に駆り出された歴史を振り返る。　（沖縄水産高校ＨＰ）

碑　文

建立の詞

昭和十二年七月七日支那事変勃発し続いて十六年十二月八日第二次世界大戦となって戦禍は益々熾烈を窮め二十年八月十五日古今未曾有の人類の悲劇は終末を告げたのであります其の間吾が沖縄県立水産学校も幾多の教職員及び同窓生を支那大陸又は南溟の地に送り或いは郷土防衛の楯となったのでありますが勇戦奮闘も空しく多数の戦死者を出したのでもあります

特に沖縄が第二次大戦の戦場と化するに及んで一年生は通信隊として球部隊に二年三年生は鉄血勤皇隊として石部隊に召集編入され直接戦闘に参加したのでありますが戦いわれに利あらずあたら春秋にとむ身を護国の神となって散華したのであります

此處に吾等同窓生並びに関係有志はこれら戦没勇士を追慕し英霊の御冥福を祈ると共に永遠の世界平和を祈願してこの塔を建立するものであります。　一九六二年十一月吉日
沖縄水産学校同窓会

6. 和　魂

5. 那覇地区 ④

①所在地　沖縄県那覇市松山 1－16－1
②建立年月日　1947(昭和 33)年 11 月 23 日
③管理団体　那覇商業高校同窓会

那覇市立商工学校の犠牲となった生徒、職員 165 名を追悼する慰霊の塔

県立那覇商業高校のグランド脇に建つ。

沖縄に米軍が上陸する直前の 3 月末、中学生に対し学徒隊として動員令が下った。那覇市商工学校の生徒は鉄血勤皇隊を組織し、主に通信隊に入隊。無線、暗号、情報の教育を受け従軍した。学徒隊員として学業半ばにして犠牲となった那覇市立商工の生徒や職員 165 人が合祀されている。

（沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』）

那覇市立商工学校の戦没職員、生徒 165 名を祀る。
沖縄戦では、同校は、生徒 99 名が軍命によって動員された。
生徒たちは、鉄血勤皇隊、通信隊を組織し、独立歩兵第二十二大隊や第三十二軍司令部暗号班等に参加した。
戦没者の詳細については今以て不明なところが多い。

（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』」）

7. 積徳（せきとく）高等女学校慰霊之碑

5. 那覇地区 ⑤

①所在地　沖縄県那覇市松山 1－9－1　大典寺
②建立年月日　2000(平成 12)年 11 月
③管理団体　積徳高等女学校　ふじ同窓会

積徳高等女学校の犠牲となった生徒、教職員 72 名を追悼する慰霊の塔

大典寺の境内地の右側に建つ。碑が建つ大典寺は、同校があった場所。

碑　文

ここに積徳高等女学校慰霊碑に刻名された方々は　去る沖縄戦で戦死　戦病死なさった教職員　在校生　卒業生　当時の四年生で学徒看護隊に動員された　戦没者の皆様です
御霊(みたま)よ　永久(とわ)に　安らかにお眠りください合掌

積徳高等女学校　ふじ同窓会
平成十二年十一月吉日　建立

私立積徳高等女学校の戦没職員、卒業生、生徒 72 名を祀る。沖縄戦では同校は三月二十三日、生徒二十五名が軍に動員された。生徒たちは、豊見城市の豊見城城跡にあった第二十四師団第二野戦病院に配属され負傷兵の看護にあたった。
五月中旬、戦局の逼迫に伴い、糸満市糸満の自然壕に撤退して看護活動を続けた。
六月二十六日、解散命令が下ったが、その際、小池同隊長が「決して死んではいけない」と訓示。そのため二十五人中、3 名の犠牲者を出すにとどまったといわれている。

（大田、同前著）

8. 開南健児之塔

2. 伊原･米須･山崎地区 ⑰

①所在地　沖縄県糸満市字山崎
②建立年月日　1971(昭和 46)年 6 月
　　1996(平成 8)年 6 月(刻銘板改修)
③管理団体　開南中学校同窓会

開南中学校の犠牲となった生徒、 職員 274 名を追悼する慰霊の塔

平和創造の森公園内、因伯の塔（鳥取県）の向いに建つ。

碑　文

開南鉄血勤皇隊 270 名が、山 3430 部隊(第 24 師団司令部) 山 3482 部隊(通信隊)山 3475 部隊(歩兵第 32 連隊) に、それぞれ分散配属され、熾烈な戦線に奮闘し 90 名が戦没す。この慰霊塔には開南同窓生及教職員全戦没者 (15 年戦争も含む) が合祀されている。

沖縄戦で戦没した私立開南中学校の職員 4 名と一期生から九期生までの 274 名を祀る。

沖縄戦では、同校は、在校生六八名が動員された。生徒たちは、鉄血勤皇隊、通信隊を組織し、第二十三大隊、同師団司令部等に配属された。

生徒たちの任務の詳細は不明な点が多いが、斬り込みに参加させられる者もいて、約六十六名の犠牲者を出した。

（大田、同前著）

9. 沖縄工業健児之塔

1. 摩文仁地区(1) ④

①所在地　沖縄県糸満市字摩文仁
②建立年月日　1962(昭和 37)年 11 月
　　1993(平成 5)年 11 月
③管理団体　沖縄県立工業高等学校同窓会・遺族会

県立工業高等学校の犠牲となった生徒、教職員167名を追悼する慰霊の塔

太平洋戦争中、沖縄、その他の地域で戦没した沖縄県立工業高等学校の同窓生、職員、生徒 167 名を祀る。

同校は、沖縄戦では、生徒九十七名が動員された。生徒たちは、鉄血勤皇隊、通信隊を組織して、輜重兵第二十四連隊、第五砲兵司令部に配属され、戦闘に参加、八十八名が犠牲となった。

（大田、同前著）

碑　文

沖縄縣立工業健児鎮魂之塔

太平洋戦争の末期、昭和十九年三月、大本営は沖縄守備隊第三二軍を新設し、政府は五月二二日戦時教育令を公布。米軍機動部隊の沖縄攻略に備えて、飛行場、港湾等各種陣地構築に一般県民、各中学校生、さらに小学生までも動員した。同年十二月、軍命により第五砲兵司令部(球九七〇〇部隊)が工業学校生に無線・有線・暗号等の訓練し、昭和二十年二月各部隊に配属。学校では鉄血勤皇隊を組織、米軍機動部隊の上陸に備える。同年三月二三日、米軍機動部隊艦載機による空爆で沖縄戦の火蓋がきられ、遂に昭和二十年四月一日米軍沖縄本島中部西海岸に上陸。水平線まで埋め尽くす艦艇による艦砲射撃等で日米両軍による国内で唯一住民を巻き込み山野が変貌する熾烈な地上戦が六月下旬の戦闘終結までの三ヶ月間続く。日本軍は米軍の圧倒的優勢の前になすすべもなくこの最南端一帯に撤退。学徒通信兵も当該地に転戦するが、同年六月十九日米軍に包囲され、その夜、敵陣に突入を決行。奮戦虚しく散華。沖縄戦で、教頭、教職員、学徒隊では各中学校中最も多くの犠牲者を出す悲惨なものとなった。この実情を後世に語り継ぐため、工業学徒通信隊最後の地に慰霊塔を建立する。（以下略）　　昭和三十七年十一月　建立

沖縄県立工業高等学校・遺族会・同窓会

10. 農林健児之塔

8. 嘉手納地区 ①

①所在地　沖縄県中頭郡嘉手納町字嘉手納
②建立年月日　1963(昭和 38)年 2 月 12 日
2005(平成 17)年 6 月 23 日(再建)
③管理団体　沖縄県立農林学校同窓会

県立農林学校の犠牲となった生徒、職員 496 名を追悼する慰霊の塔

太平洋戦争で戦没した沖縄県立農林学校の職員、生徒あわせて 496 名を祀る。

沖縄戦では、同校生は、約 130 名が軍命で動員された。

生徒たちは、鉄血勤皇隊を組織し、当初は第 19 航空司令部、のちに独立混成第 44 旅団第二歩兵隊に配属され、糧秣の運搬や戦闘に参加、23 名の犠牲者を出した。　（大田、同前著）

碑　文

建立記

昭和六年（一九三一年）の満州事変から、昭和二十年（一九四五年）の第二次世界大戦終戦に至る十五年戦争において、五百有余の同窓生および教職員が、沖縄を始め、中国大陸、また南方地域において犠牲となった。

就中太平洋戦争の激戦地となったわが沖縄では、学業半ばにして徴兵され、また鉄血勤皇隊農林隊として学徒出陣し、多数の農林健児があたら若い命を落とした。

われわれは、これら戦死された方々の犠牲を無にすることなく、悲惨な戦争を再び繰り返さぬよう不戦の誓いを堅持し、茲に生命と平和の尊さを訴え、永く戦没者の名を留め、鎮魂慰霊の誠を捧げるため農林健児之塔を建立する。

昭和三十八年（一九六三年）二月十二日建立
平成十七年（二〇〇五年）六月二十三日再建
沖縄県立農林学校同窓会

11. 南燈（なんとう）慰霊之塔

県立名護高等学校内に建つ

①所在地　沖縄県名護市大西 5－17－1
②建立年月日　1956(昭和 31)年 1 月 21 日
2001(平成 13)年 3 月 31 日(移設)
③管理団体　南燈同窓会

県立第三中学校他の犠牲となった生徒、教職員 375 名を追悼する慰霊の塔

碑　文

南燈慰霊之塔

南燈慰霊之塔は、一九五六年「三中健児之塔」として兼久公園に建立された。一九七二年沖縄県立第三高等女学校戦没者を合祀、一九八九年「南燈慰霊之塔」と改名、二〇〇一年にこの地に移転した。

碑　文

この塔には、一九三一年に勃発した満州事変から一九四五年に終結した太平洋戦争までに戦没された沖縄県立第三中学校の卒業生・在校生三三九柱、県立第三高等女学校の卒業生・在校生三六柱、計三七五柱の御霊が合祀されている。

県立第三中学校の卒業生・在校生は、一九四五年三月、軍命により、防衛隊員・鉄血勤皇隊員及び通信隊員として動員され、真部山、八重岳、名護岳、多野岳等で戦ったが、米軍の圧倒的な物量の前に壮烈な最期を遂げていった。

また、県立第三高等女学校の卒業生・在校生も、軍命により女子挺身隊員(軍需工場)・従軍看護婦として動員され、若い命を散らしていった。

戦没者の御霊を慰めるとともに、悲惨な戦争を二度と起こさないよう、「恒久平和の誓い」としてこの塔を建立する。

二〇〇一年（平成十三年）三月三一日
沖縄県立第三中学校同窓生及び遺族一同
沖縄県立第三高等女学校同窓生及び遺族一同
沖縄県立名護高等学校同窓生一同

12. 一中健児之塔

5. 那覇地区 ⑦

①所在地　沖縄県那覇市首里金城町 1−7　養秀会館
②建立年月日　1963(昭和 25)年 4 月 30 日
2002(平成 17)年(戦没者刻銘板を設置)
③管理団体　養秀同窓会

県立第一中学校の犠牲となった生徒、職員 217 名を追悼する慰霊の塔

養秀会館の前敷地に建つ。

碑　文

一中健児之塔は、先の大戦で学業半ばにして散った職員十七柱、生徒二百余柱の英霊を合祀する。

この地は、昭和十五年、県立第一中学校（首里高等学校の前身）創立六十周年記念事業として建設された養秀寮の跡地であり、昭和二十年三月二十七日敵軍を目前にして最後の卒業式が挙行され、鉄血勤皇隊が結成された地である。

県内の各中等学校は、昭和十九年十月十日の那覇大空襲以後は、軍事教練のほかは学業は全く停止され、昭和二十年三月二十五日ついに軍から学徒動員令が発せられた。

学徒によって組織された鉄血勤皇隊、通信隊は、陣地横築、通信、伝令その他の任務に従い、熾烈な砲爆撃下に決死敢闘、終始軍と行動を共にしてその責務を遂行し、壮烈な戦死をとげたのである。

社団法人　養秀同窓会

13. 二中健児の塔

5. 那覇地区 ⑧

①所在地　沖縄県那覇市楚辺 1−2−54　城岳公園内
②建立年月日　1957(昭和 32)年 12 月 29 日
1990(平成 2)年 11 月 22 日(移設)
③管理団体　城岳同窓会

県立第二中学校の犠牲となった生徒、教職員 186 名を追悼する慰霊の塔

塔は、はじめ奥武山公園内にあったが、学校設立八十周年記念事業の一環として、母校を前にした城岳公園内に移設した。

碑　文

建立の詞

一九四五年、第二次世界大戦の終末戦となった沖縄戦において沖縄県立第二中学校職員生徒は軍命により、或いは鉄血勤皇隊として、北部の防衛に当り、或いは通信隊に参加して首里以南の山河に馳駆し、その他防衛隊又は軍属として各地に勇戦奮闘中、表記の勇士はついに壮烈なる戦死を遂げられました。

茲に、母校及びその後継那覇高等学校職員生徒、同窓会員遺家族並びに一般有志相諮り、曽ってはスポーツに競った奥武山の此のゆかりの聖地を卜し沖縄県立第二中健児の塔を建立して以て英霊の至誠を追慕し、冥福を祈り永遠の世界平和を祈願するものであります。

一九五七年十二月二十九日
二中健児之塔建設期成会
会長　山城篤男

14. 沖縄師範 健児之塔

1. 摩文仁地区（2） ㊹

①所在地　沖縄県糸満市字摩文仁

②建立年月日　1946（昭和 21）年 3 月

③管理団体　沖縄師範健児之塔遺族会

沖縄師範学校の犠牲となった
生徒、職員 300 余名を追悼する慰霊の塔

沖縄師範学校男子部等の生徒によって編成された鉄血勤皇隊を祀った碑。学徒動員は沖縄戦の特徴である。 ひめゆり学徒もそうであったように鉄血勤皇隊も 13～19 の歳で法的根拠無く動員された。鉄血勤皇隊は 1945 年 3 月 31 日に編成されたが法律（義勇兵役法）は 6 月 23 日にしか発布されていない。 そのため、親の承諾印をもらうため実家に帰したという。戦争に出るのを反対し引き留める親もいたが皇民化 教育（師範学校は教師を養成する学校のため特に徹底された）を徹底されていたため、ほとんどの生徒が、学校に 戻ってきたという。

鉄血勤皇隊は伝令や通信、切り込み、急造爆雷(箱に火薬を詰めた爆弾)を背負っての特攻を行った。伝令なども、同じ文書を 3 人に持たし走らせ、そのうち 1 人だけがたどり着く、そのような任務であった。　（那覇市 HP）

平和の像

碑　文

昭和二十年三月三十一日、第二次世界大戦の最中、沖縄師範学校全職員生徒は、軍命により、第三十二軍司令部の直属隊「鐵血勤皇師範隊」として軍に動員された。

然るに同年六月二十二日、南西諸島方面軍最高司令官牛島満中將が自決するに及び師範隊は解散するに至ったが、この間、総員四百八十名中三百有餘名が守備軍と運命を共にしたのである。こゝに、生存者達の手によって「慰霊の塔」が建立されたのであるが、更に太田昌秀外間守善編「沖縄健児隊」出版並びに同名映画の上映記念事業として、廣く江湖の有志の方々の御援護の下に、この「平和の像」は建てられたのである。若い身命を捧げて散った師友人の冥福を祈ると共に、それらの尊い殉死によって斎された平和への祈願を永久に傳えるべく生存者達は心から祈るものである。

發起者　沖縄師範學校生存者

沖縄師範健児之塔の由来

この塔は、一九四五年の沖縄戦で散華した沖縄師範学校男子部の野田校長以下職員・生徒の御霊を祀ったものである。

鉄血勤皇師範隊は、三月三十一日沖縄守備軍の命令によって編成された。以来、同隊は軍と共に首里戦線からここ摩文仁の地まで勇戦奮闘し三百十九柱の職員・生徒を失った。誠に痛ましく断腸の思いである。

時は流れて一九四七年、幸運にも生存した当時の在学生合葬式、これら戦没学友の冥福を祈って塔の建立を発起した。（中略）。

鉄血勤皇師範隊の編成

本部（隊員１６名　戦死１３名）

師範隊の指揮、軍司令部との連絡調整、食料の調達、および師範隊の炊飯を担当

情報宣伝隊（隊員２２名　戦死９名）

千早隊とも呼ばれ、軍の情報や戦果の宣伝活動、占領地へ潜入して地下工作活動など

斬込隊（隊員５７名　戦死４６名）

菊水隊とも呼ばれ、敵の背後斬込みによる後方攪乱、軍司令部の歩哨勤務、負傷者の搬送など

野戦築城隊（隊員２４３名　戦死１２２名）

陣地構築や対戦車壕の敷設、主要道路や橋梁の補修や阻絶、弾薬や食料等の搬送など

特別編成中隊（隊員４８名　戦死３６名）

野戦築城隊から選抜して編成され軍司令部護衛、急造爆雷による対戦車攻撃など

現地入隊（隊員７５名　戦死６４名）

19 歳に達した学友が３月１日現地部隊に入隊

第１章　沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑

６．平和の礎　沖縄菩提樹苑

平和の礎

「平和の礎」は、国籍や軍人、非軍人の区別なく、沖縄戦で戦没した 24 万名余の名前を刻んだ碑で、太平洋戦争・沖縄戦終結 50 周年にあたる 1995 年６月、沖縄県（県知事・大田昌秀）によって建立された。

当時、大田県政が平和行政の基本とした「沖縄国際平和創造の杜構想」の一環として建立したもの。

「沖縄国際平和創造の杜構想」とは、沖縄戦終焉の地である糸満市摩文仁一帯を「沖縄国際平和創造の杜」として整備し、世界に平和を発信する地にするという構想。その構想を実現するため、「沖縄平和祈念資料館」を充実させ、「平和の礎」と「国際平和研究所」を設立し、そこを中心に「国際子ども平和館」などいろいろな付属施設も作り、世界に向けて恒久平和発信の場にするという壮大な計画であった（国際平和研究所は、大田知事の退任によって実現できなかった）。

「平和の礎」は、沖縄戦における全戦没者の名前を刻銘し、永久に残すためのもの。敵味方の区別なく、また職業軍人と非戦闘員の別もなく、さらには男女や世代の区別もなく、おしなべて全ての死者たちの名前が網羅して刻まれている。

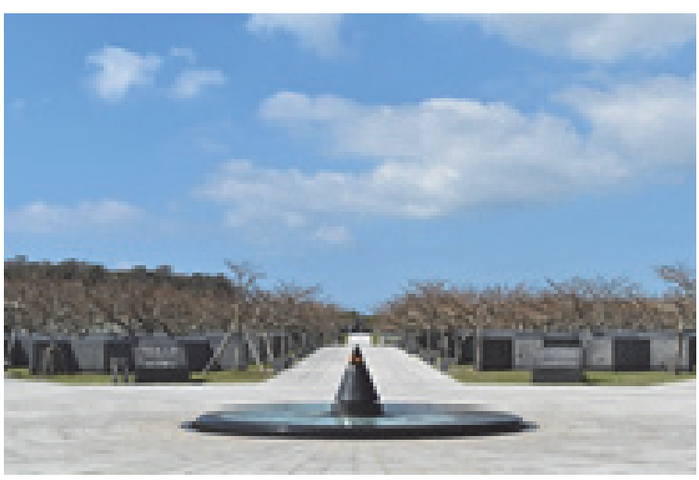
被刻銘者の中には、敵味方分かれて戦った日本側(地元沖縄出身者も含む)と米英側の戦没者だけでなく、朝鮮半島から強制連行されて沖縄で犠牲となった人びとと台湾出身の戦没者の名前も含まれている。

また、沖縄県は「平和の礎」を建立する基本理念を、次の３点に要約している。

「戦没者の追悼と平和祈念」・・・さる沖縄戦で亡くなった国内外の 20 万余のすべての人びとに追悼の意を表し、御霊を慰めるとともに、今日、平和を享受できる幸せと平和の尊さを再認識し、世界の恒久平和を祈念する。

「戦争体験の継承」・・・沖縄は第二次世界大戦において、国内で唯一の住民を巻き込んだ地上戦の場となり、多くの尊い人命、財産を失った。このような過去の悲惨な戦争体験を風化させることなく、その教訓を後世に正しく継承していく。

「安らぎと学びの場」・・・戦没者の氏名を刻銘した記念碑のみの建設にとどめず、造形物を配して芸術性を付与し、訪れるものに平和の尊さを感じさせ、安らぎと憩いをもたらす場所とする。また、子供たちに平和について関心を抱かせるような平和学習の場としての形成を目指す。」



「平和の礎」と「平和の火」

「平和の礎」は、たんなる「慰霊の塔」ではない。むしろ一口でいえば、「非戦の誓いの塔」といえる。

なぜなら、この塔を建立する趣旨、すなわち恒久平和を創出する理念が、たんに戦争で甚大な被害を被った沖縄や日本の人びとだけに限定され、通用するものではなく、広く世界の次代をになう若い世代にも共通の理念として引き継がれるべき意図がこもった普遍的なものであるからである。

「平和の礎」は、沖縄戦の、表現を絶する苦い体験を通して得られたものであり、戦争の不条理、愚かさに対する建立者の思いに基づいている。それはまた、県民に共通の痛恨の思い、悔しさの表現である。

（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』２頁～３頁、一部中略）

1. 平和の礎（いしじ）

沖縄平和祈念公園に建つ

（1. 摩文仁地区1 ）
建立場所案内図参照 ③）

①所在地　沖縄県糸満市摩文仁
②建立年月日　1995(平成7)年 6 月
③敷地面積　17,900 ㎡
④刻銘者数　241,525 人
（2018 年 6 月 1 日現在）
⑤設置団体　沖縄県
⑥指定管理団体　沖縄県平和記念財団

手前が平和の礎・後方が沖縄平和祈念資料館と沖縄平和祈念堂

（１）「平和の礎」は、太平洋戦争・沖縄戦終結 50 周年記念事業の一環として、国籍を問わず、また、軍人、民間人の別なく、全ての戦没者の氏名を刻んで、永久に残すため、平成７年（1995 年）６月に建設したものです。

その趣旨は、沖縄戦などで亡くなられた全ての戦没者を追悼し、恒久平和の希求と悲惨な戦争の教訓を正しく継承するとともに、平和学習の拠点とするためです。

なお、「礎（いしじ）」とは、建物などの基礎の「いしずえ」を沖縄の方言で「いしじ」と発音することに由来するものです。平和創造の「いしずえ」となることを期待して付けられたものです。

（２）「平和の礎」のデザインコンセプトは、“平和の波永遠なれ(Everlasting waves of peace)”となっておりまして、屏風状に並んだ刻銘碑は世界に向けて平和の波が広がるようにとの願いをデザイン化したものです。

（３）平和祈念公園から平和の広場に通ずるメイン通路は、その中心線が６月 23 日の日の出の方位に合わせて設置されています。６月 23 日は沖縄での組織的戦闘の終結した日で、沖縄県では「慰霊の日」と定め、県民の休日となっております。慰霊の日には、平和祈念公園で全沖縄戦没者追悼式が開催されます。

（４）メイン通路の奥には平和の広場があり、中央には「平和の火」が設置されています。この「平和の火」は、世界の恒久平和を願い、沖縄戦で米軍が最初に上陸した沖縄県座間味村の阿嘉島で採取した火と、広島市の「平和の灯（ともしび）」、長崎市の「誓いの火」から分けていただいた火を合わせ、平成７年 1995 年６月 23 日の「平和の礎」除幕式典において、ここに点したものです。種火は、平和の広場の地下に大事に保存しております。

（５）「平和の礎」には、沖縄戦で亡くなられた、一人ひとりのお名前が刻まれております。

ただし、沖縄県出身者については、昭和６年（1931 年）の満州事変に始まる 15 年戦争の期間中に、県内外で戦争が原因で亡くなられた方々が刻銘されております。

刻銘の方法は、それぞれの母国語で表記しており、国別、都道府県別となっております。（沖縄県平和祈念財団ＨＰ）

碑　文

「平和の礎（いしじ）」建設趣旨

私たち沖縄県民は、去る沖縄戦などで貴い命を失ったすべての人々に哀悼の意を表し、悲惨な戦争の教訓を後世に正しく継承するとともに、沖縄の歴史と風土の中で培われた「平和のこころ」を広く内外にのべ伝え、世界の恒久平和を願い、太平洋戦争・沖縄戦終結 50 周年を記念して、ここに「平和の礎」を建立する。

1995 年 6 月　沖縄県

3. 沖縄菩提樹苑（ぼだいじゅえん）

魂魄の塔の斜め向いに建つ

（2. 伊原•米須•山崎地区）
建立場所案内図参照 ⑧）

①所在地　沖縄県糸満市米須
②建立年月日　2004（平成16）年
5 月 30 日
③管理団体　沖縄菩提樹協会
④建立の経緯　碑文を参照

第二次世界大戦でなくなったすべての戦没者の慰霊のため、ブッダ（釈迦）がその下で悟りを開いたといわれている「ブッダゆかりの聖なる菩提樹」の分け樹がインド国外にはじめて贈呈され、2004 年に植樹された。2009 年にはダライ・ラマ 14 世も来訪、記念植樹が行われた。

カミキリムシと菩提樹：長嶺信夫氏の通信 HP より
（2009 年 7 月 12 日撮影）

台風時の強風と塩害を防ぐため御影石の塀を２ｍから４ｍにかさ上げし、それに加え、台風時には菩提樹を覆うように防風ネットを被せて保護対策をしていた当時の菩提樹苑の外観。防風ネットを被せないと、ほとんどの葉が落葉してしまう。

その後、右上部の写真のように屋根を付設して施設の改善がなされた。

一時期、菩提樹がゴマダラカミキリムシの幼虫による被害によって、枯れるということがあったが、現在は、その対策施されている。　（同前ＨＰ）

碑　文

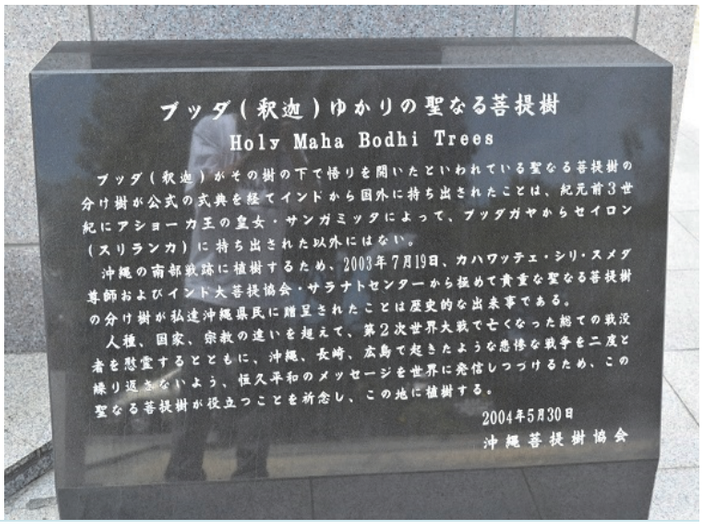
ブッダ（釈迦）ゆかりの聖なる菩提樹
Holy Maha Bodhi Trees

ブッダ（釈迦）がその樹の下で悟りを開いたといわれている聖なる菩提樹の分け樹が公式の式典を経てインドから国外に持ち出されたことや、紀元前 3 世紀にアショーカ王の皇女・サンガミッタによって、ブッダガヤからセイロン（スリランカ）に持ち出された以外にはない。

沖縄の南部戦跡に植樹するため、2003 年 7 月 19 日、カハワッテェ・シリ・スメダ尊師およびインド大菩提協会・サラナトセンターから極めて貴重な聖なる菩提樹の分け樹が私達沖縄県民に贈呈されたことは歴史的な出来事である。

人種、国家、宗教の違いを超えて、第 2 次世界大戦で亡くなった総ての戦没者を慰霊するとともに、沖縄、長崎、広島で起きたような悲惨な戦争を二度と繰り返さないよう、恒久平和のメッセージを世界に発信しつづけるため、この聖なる菩提樹が役立つことを祈念し、この地に植樹する。

2004 年 5 月 30 日
沖縄菩提樹協会



ダライ・ラマ法王 14 世のメッセージ

ダライ・ラマ法王 14 世の足跡石碑

碑　文（上部）

メッセージ
「暴力で問題は解決できないということを過去の歴史は明確に物語っています。この 21 世紀、平和的対話のみが私たちに残された平和実現のための唯一の手段です。普遍的な利益を追求するためには、思いやりと勇気が必要とされています。」

2012 年 11 月 11 日
釈迦のチベット人弟子　ダライ・ラマ

※平和祈念

碑　文（下部）

メッセージ
あらゆる事実を考察し、智恵と思いやりをもって取り組むならば、暴力に頼らずとも地球上のすべての問題を解決することができます。この世界に平和と調和があまねく広まりますよう祈念しています。

2009 年 11 月 4 日
仏教僧　ダライ・ラマ

※平和祈念

ダライ　ラマ法王 14 世の足跡について

ダライ・ラマ法王 14 世は、2009 年と 2012 年の 2 度、沖縄を訪問されました。この訪問を記念して、沖縄菩提樹苑に法王の足跡石碑を設置し、末永く保存いたします。

この足跡は、2013 年 11 月 21 日、静岡県で、法王猊下の特別な御厚意のもとに、長嶺信夫が採取したものです。

足跡石碑に記載された法王のメッセージ

「沖縄の皆さんへ　過去と現在と未来において幸せでありますように」
2013 年 11 月 21 日　釈迦の弟子　ダライ・ラマ

「沖縄菩提樹苑」の紹介

ここでは、門外不出であるはずの菩提樹が沖縄の地に植樹された経緯を、現在「長嶺胃腸科内科外科医院」の医院長である長嶺信夫氏が書かれた『沖縄に来た「お釈迦さまの菩提樹」』～随筆集～から抜粋して紹介します。

さらに、ダライ・ラマ法王 14 世は、2009 年 11 月と、2012 年 11 月の 2 度この菩提樹苑を訪問された際にスピーチされた言葉が、菩提樹苑の正面壁の右側に法王直筆の文字と翻訳された石碑が安置されてありますので紹介します。

沖縄に来た聖なる菩提樹贈呈の経緯とその記録

長嶺信夫

はじめに

私は数年来の夢として、「ブッダゆかりの聖なる菩提樹」の分け樹を第 2 次世界大戦で亡くなった多くの人達の御霊が眠り、世界の恒久平和を希求する人達の心の原点である沖縄の南部戦跡に植樹できないものか、と考えていた。今回、“ブッダゆかりの聖なる菩提樹の分け樹をぜひ沖縄に地に！“という私の意向に賛同した人達を代表して沖縄ツーリスト海外部長のプラモド・バクシ氏がインド・サールナート在のムラガンダ・クテイ寺院のスメダ尊師に菩提樹の贈呈を要請してくれた。

要請は 2003 年 1 月 24 日、バクシ氏がインドでスメダ尊師に直接面会して行われた。要請に際しては、沖縄の文かや悲惨な戦争の歴史を説明するとともに、平和の礎や平和祈念堂、丙エア祈念公園全体の写真や資料を呈示し、人種や国家、宗教の違いを超えて総ての戦没者の名前が刻銘された「平和の礎」の理念を説明した。その上で、総ての戦没者の御霊を慰霊し、かつ世界に恒久平和の願いを発信するためのシンボルとして、由緒ある菩提樹の分け樹の贈呈を要請したのである。2 時間余にわたるバクシ氏の誠意に満ちた要請と私達の菩提樹に込めた強い願いを聞いたスメダ尊師は、沖縄の悲惨な戦争の歴史に心をいため、「長崎や広島についてはよく知っていたが、沖縄の地でそのような悲惨な戦争の歴史があったとは知らなかった。要請にこたえられるように努力したい。」と涙をうかべながら聞いていたという。(中略)その後、門外不出とされていた菩提樹の分け樹の贈呈が決定されるまでに菩提樹を管理するインド大菩提協会で 3 回にわたって協議がなされたという。

菩提樹の贈呈式は、2003 年 7 月 19 日午前 9 時 30 分より、ガンジス川の沐浴で有名なベナレス近郊にある、ブッダが最初に教えを説いた(初転法輪)仏教発祥の地・サールナートのイシパタナ鹿公園(鹿野苑)の菩提樹の下で盛大かつ厳かに執り行われた。

(『沖縄に来た「お釈迦さまの菩提樹」』31～32 頁)

※菩提樹の贈呈式は、2003 年 7 月 19 日に終え、贈呈された 3 本の分け樹を持って沖縄に帰ってきたが、実際に植樹する場所を確保しなければならない。第一候補地として沖縄平和祈念堂、次にひめゆりの塔の敷地を考え交渉したが、条件が合わなかった。それでは、県内にある名刹の境内にと該当寺院に要請したが断られる。ならば、適した土地を義弟、知人の協力を得ながら探し求めて、農地転用の問題で難儀はしたが解決して今の地に植樹することができた。

上記は要約であり、長嶺氏は、植樹地獲得の苦難の実情を切々と語っている。

そして、2004 年 5 月 30 日、インド大菩提協会からスメダ尊師を迎え、ナンダ駐日インド代理大使夫妻、比良竜虎日印教会理事ほか多くの方々が出席して菩提樹植樹式典が糸満市魂魄の塔に隣接した「沖縄菩提樹苑」で盛大かつ厳粛に挙行された。菩提樹もようやく安住の地を得たのである。3 本の菩提樹は植樹から 1 年を経た 2005 年 5 月現在、3 メートルの高さに成長し、沖縄の空に向かって勢いよく枝を広げている。

(同前：34～39 頁の要約)

第２章　戦跡を訪ねて

１．糸数のアブチラガマ　－107
２．シムクガマ　－107
３．旧海軍司令部壕　－108
４．沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号　－108
５．奉安殿　－109
６．富盛の石彫大獅子　－109

1970 年代の後半には、本土の学校が修学旅行先に沖縄を選び、平和教育の中心に戦跡めぐりを実施する高校が登場するようになった。戦跡めぐりのメインはガラビ壕と糸数アブチラガマであった。修学旅行のバスに乗り、車中でガマのガイドを年十数回行った。その中で、ガマでの「暗闇の体験」を実践することで、ガマには沖縄戦追体験の「教育力」があることを確信した。

1980 年代には、沖縄に修学旅行する学校の増加や、県内の学校や団体が戦跡めぐりを実施すようになったことでガイド不足が生じた。そこで、教師・沖縄戦研究者・平和ガイドら 7 人が新たな戦争遺跡を調査したうえで、戦跡めぐりに適した戦争遺跡を描いた戦跡・基地ガイドブック「歩く・みる・考える沖縄」を 1986 年刊行した。こうした戦跡ガイド本が沖縄で出版されたのは初めてであった。1990 年代になると、本島南部以外の地域での戦跡めぐりが広がり、戦争遺跡に関心をもつ人も急速に増えてきた。そこで誕生した平和ガイド団体の沖縄平和ネットワークが、1997 年、実際に戦争遺跡をガイドしている 36 人が執筆した「新歩く・みる・考える沖縄」を刊行した。

（吉浜　忍『沖縄の戦争遺跡〈記憶〉を未来につなげる』より）

知花昌一氏が語るように、沖縄は「観光の島」であり、「基地の島」であり、そして、本島、離島のいたるところに沖縄戦の傷跡を多数残す「戦跡の島」である。観光地とは違って、あらかじめ訪れる戦跡を特定して場所の事前確認をしておかないとたどり着けないこともある。上記のような戦跡のガイドブックもありますので利用されることを勧めます。

多数ある戦跡の中でも、民衆と負傷兵、敗残兵が混在する生活の場となった「ガマ」を訪れることをお勧めします。鍾乳洞の湿気の多い暗闇の中での過酷な生活の一端を体感することができます。数多い「ガマ」の中でも、糸数アブチラガマでは平和学習を目的にガイド同伴で説明を受けながらガマの中に入ることになっています。説明を聞き、悲惨な状況下で不安と恐怖の中での生活であったことが窺い知ることができます。

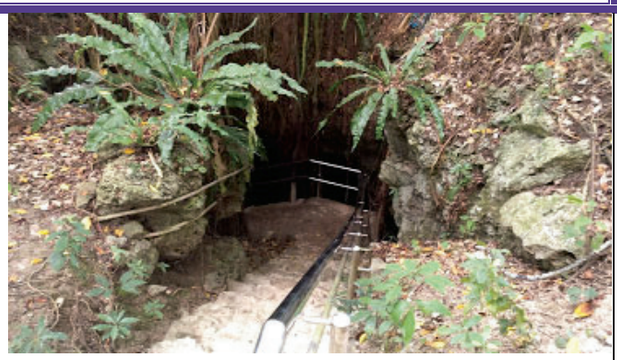
沖縄戦は、本島の全地域が戦場であることから、観光地といわれているところ、または、その近くに戦跡が存在していることがあります。たとえば、首里城は沖縄守備軍司令本部が置かれた場所のため、地下に司令部壕がありましたが、崩落のため壕の中に入ることはできません。しかし、その一部をガラス越しに見ることができます。また、城外には「第三十二軍司令部壕」があります。

さらに、八重瀬町の八重瀬公園入口には、「白梅学徒病院壕跡」があり、八重瀬公園入口の近隣には、「八重瀬之塔」（八重瀬地区⑥）が建っています。このように、激戦地の周辺には地域の慰霊塔・慰霊碑が建っていることが多いのです（吉岡記）。

1.糸数のアブチラガマ

4.八重瀬地区Ⓓ：おきなわワールドから車で約 20 分

沖縄県南城市佐敷字新里1870番地
TEL:098-917-5387



入壕料
個人　大人 250 円、小人 100 円
団体　大人 200 円、小人 100 円
※ガイドなしでは入壕できません。入壕申込書が必要ですので、事前に電話申込みを行ってください。

糸数アブチラガマは、沖縄本島南部の南城市玉城字糸数にある全長 270 メートルの自然洞窟（ガマ）です。沖縄戦時、もともとは糸数集落の避難指定壕でしたが、日本軍の地下陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となり、負傷兵や住民が混在する避難壕となりました。軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、全長 270m のガマ内は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされました。

昭和 20 年(1945 年)5 月 25 日の南部撤退命令により病院が撤退したあとは、糸数の住民と生き残り負傷兵、日本兵の雑居状態となりました。
その後、米軍の攻撃に遭いながらも生き残り、8 月 22 日の米軍の投降勧告に従って、住民と負傷兵はガマを出ました。（南部観光総合案内センターＨＰ）

2.シムクガマ

9.読谷村地区 Ⓐ

＜問い合わせ先＞
波平公民館　住所:読谷村波平 655
TEL:098-958-2229

読谷村観光協会では、「チビチリガマ・シムクガマ」現地での平和ガイドの案内あり。（有料：予約制、予約は 2 週間前まで）

シムクガマは波平又川原（マタガーバル）に洞口を開いた天然の鍾乳洞です。資料によると、「洞口はアガリシムクとイリシムクの二つあり、総延長 2,570 メートル」とあります。

1945 年（昭和 20）3 月、アメリカ軍の空襲は日を追って激しくなり、やがて艦砲射撃も始まるようになると、波平では約 1 千人の住民がこの洞窟に避難するようになりました。

やがてアメリカ軍の沖縄本島上陸の日、激しい砲爆撃の後、アメリカ軍は読谷山村の西海岸から怒濤（どとう）のような勢いで進撃してきて、戦車をともなったその一部は、シムクガマに迫って来ました。

アメリカ兵が銃を構えて洞窟入口に向かってくると、人々は恐怖の余りうろたえ、洞窟内は大混乱に陥りました。いよいよ殺されるのだと、洞窟の奥へ逃げ込もうとしますが、足の踏み場もありません。

その時、ハワイからの帰国者、比嘉平治（当時 72 歳）と比嘉平三（当時 63 歳）の 2 人が、「アメリカーガー、チュォクルサンドー（アメリカ人は人を殺さないよ）」と、騒ぐ避難者たちをなだめ説得して、ついに投降へと導き、１千人前後の避難民の命が助かったということです。

この事実に基づいて波平では、命を救った二人の先輩に感謝の意をこめて洞窟内に記念碑を建立してあります。

（読谷バーチャル平和資料館ＨＰ）

3.旧海軍司令部壕群

6.豊見城地区 Ⓐ

沖縄県豊見城市字豊見城 236 番地
旧海軍司令部壕事業所 TEL:098-850-4055

この豪での司令官であった大田実少将は、壕内で自決をした軍人である。「8.海軍戦没者慰霊之塔：77頁」で、子息の英雄氏が語った言葉の意義を、この壕に訪れた際には考えてみたい。（吉岡）

旧海軍司令部壕は、地上戦が行われた沖縄戦の司令部があったところで、1944 年に山根部隊によって掘られた司令部壕です。当時は 450m あったと言われ、現在はその一部が公開されています。カマボコ型に掘り抜いた横穴をコンクリートと杭木で固め、米軍の艦砲射撃に耐え、持久戦を続けるための地下陣地で、当時は約 4000 人の兵士が収容されていたそうで、司令官室や暗号室などの部屋があります。その中でも幕僚室の壁には手榴弾で自決した時の破片の跡も残っています。

壕内は迷路のようになっています。壁を見ると手で掘った後があり、これだけの規模を掘るのは容易なことではなかったと思います。

（沖縄観光チャンネルＨＰ）

4.沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号（はえばる）

南風原町文化センター近くにある

＜問い合わせ先＞
沖縄県島尻郡南風原町字喜屋武 257
南風原文化センター　TEL:098-889-7399

※公開時間
・午前 9 時～午後 5 時（見学受付は午後 4 時 30 分まで）
※休壕日
・毎週水曜日　・12 月 29 日～1 月 3 日
※見学方法
・一度に入る人数は 10 名以内
・全員必ずヘルメットを着用（現場無料貸出）
・懐中電灯を使用（現場無料貸出）
・常駐ガイドが案内する
・見学時間は 1 グループ 20 分程度
※申込方法
・利用団体が直接申し込み・個人および団体とも予約制

南風原町には黄金森（こがねもり）とよばれる小高い森があります。日本軍は沖縄戦に備え、黄金森に沖縄陸軍病院壕群を構築しました。院長以下、軍医・看護婦・衛生兵・ひめゆり学徒らがここで傷病兵の治療に当たりました。

南風原町は沖縄戦の記憶を伝えるために、1990 年に沖縄陸軍病院南風原壕群を文化財に指定し、2007 年 6 月に一般公開しました。第二次世界大戦の戦争遺跡を文化財に指定したのは、日本全国で初めてのことでした。

沖縄戦が始まると数千名の傷病兵が運び込まれましたが、医療設備や薬がとぼしいなか、満足な治療はできませんでした。麻酔のないままの手術や手足の切断なども日常的におこなわれました。

やがて米軍の侵攻が進むなかで、沖縄陸軍病院は南部へと撤退することになりました。連れていけない重症患者は、青酸カリによる自決を強要されるなど、多くが悲惨な最期をむかえます。

（南風原町観光協会公式サイト）

5.奉安殿（ほうあんでん）

9.読谷地区 Ⓙ

沖縄県沖縄市知花 6－34－23
「美さと児童園」内に建つ

教員・生徒たちは、登下校のたびにこの奉安殿に向かって敬礼することを強制され、皇民化教育が浸透されていった。奉安殿に納まる御真影を守ることが学校長の最大の使命であり、戦時中、御真影を守るために戦火の中で命を落とした校長もいた。

沖縄市知花地区の一角に、戦時体制下の様子を今に伝える戦跡が残されています。児童養護施設の駐車場の脇にある戦跡、「奉安殿」です。

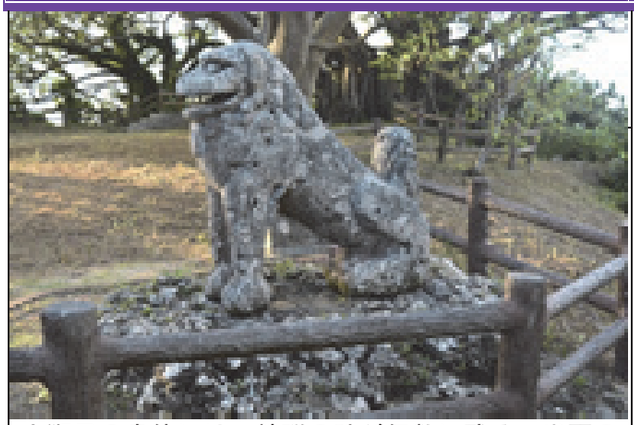
昭和天皇と皇后の写真・御真影を保管するため、昭和 15 年に建てられました。当時としてはめずらしい、鉄筋コンクリート製の丈夫な造りになっています。奉安殿は、当時ここにあった美里尋常小学校の校庭に建立されました。奉安殿が完成すると特別な存在として、すぐに学校生活の中心になったといいます。

やがて沖縄戦が始まり、奉安殿も戦禍に見舞われました。保管されていた写真は安全を図るため外に持ち出されましたが、沖縄戦終結の 1 週間後、やんばるの森で焼かれたと伝えられています。
（沖縄戦 70 年 NHK 沖縄放送局「戦跡と証言」ＨＰ）

6.富盛（とむり）の石彫大獅子

4.八重瀬地区 ⑧

沖縄県島尻郡八重瀬町富盛 22
「勢理城（じりぐすく）」の広場内に建つ



大獅子の身体には、銃弾の跡が無数に残る。米軍の銃撃が「鉄の暴風」であることを証明する姿である。

このシーサーは、1689 年、八重瀬町の富盛集落で相次いだ火事を沈めようと風水師の助言に基づいて建立されたもの。体長 1 メートル 75 センチのシーサーは 1 つの岩から彫られ、沖縄に

現存するシーサーの中で最も古いとされている。昭和 49 年 12 月 2 日、沖縄県有形民俗文化財に指定される。

昭和 20 年の 6 月上旬、退却を続ける日本軍は富盛地区付近に陣地を構え、周辺は激しい地上戦の最前線となった。現在、このシーサーは弾痕の跡を残しつつも、姿形は昔のまま毅然とそびえている。

沖縄本島南部、八重瀬町富盛にある「石彫大獅子」が写る戦時中のこの写真は、沖縄戦に関する写真集に必ずといっていいほど登場する写真である。この地区を前進したのは米陸軍第 96 師団第 381 連隊第 1 大隊であり、この場所には昭和 20 年 6 月 11 日に到着している。日本軍は、最後の主陣地線で激しい抵抗を示した。翌 12 日朝に、米軍第 17 連隊が霧に紛れて八重瀬岳台上に進出したことで日本軍の戦線は一気に崩壊へと向かった。

大獅子に残る弾痕であるが、この痕跡は写真と同じ位置に今でも残っている。まさに歴史の生き証人として今も風雨に耐えながらじっと八重瀬岳の方向を向いている。　（沖縄戦場ＨＰ）

第３章　沖縄戦の実相と慰霊の意味

１．沖縄戦とは

１．大田昌秀氏「沖縄戦とは何か」　－111

２．佐喜眞道夫氏「高校生への『沖縄戦の図』解説」　－123

３．大田昌秀氏「沖縄の声に聞く－戦争からみえてくる人間の相－（後編）」－137

２．慰霊とは

１．大田昌秀氏「慰霊とは何か　林立する慰霊の塔に想う」　－139

私が、違和感と疑問を懐いた摩文仁の丘に建つ慰霊塔・碑文について書かれた著書を探したときに出遇った一著書が大田氏のものであった。その数冊の著書を読んで知らされたことは、現在、沖縄での過剰な基地負担、辺野古新基地建設の強行、米軍機による騒音問題、多発する事故、米兵・軍属による婦女暴行事件など、県民が抱える不安に対する対応がないがしろにされていることなどは、琉球が日本政府に併合され、「捨て石」扱いをされた沖縄戦が終結し日本が敗戦後、沖縄がアメリカの統治下に置かれてからの政治的扱いが今日までも変わらないものであることを知りました。

私は、富山県人であり、千葉県人でありたい。日本人であり続けたい。その生まれと現状に誇りを持っている。健康で平穏で平和な生活を家族と共に、さらに子子孫孫にまで願う者は、そのことが阻害されているならば、その回復と獲得のために行動を起こすでしょう。それが、辺野古新基地建設のために資材が搬入されているキャンプシュワブ米軍基地前で今日も行われている抗議行動なのです。沖縄に生まれ、沖縄で育ち、沖縄で今を生きている者からすれば、その存在が無視され、否定されていることに対する、当然の行動だと思うのですが、あなたはどのように受けとめますか。ただし、この抗議行動は「非暴力」の行動であり、知花氏が語るように「非戦の祈り」の行動なのです。

大田氏が語る、「沖縄戦とは何か」、「沖縄の声に聴く」、「慰霊とは何か」を読んでいただき、沖縄戦の実相を知り、その沖縄戦が現在まで沖縄の民衆に大きな影響をもたらしていることを感じ取っていただきたいと思う。さらに、本来の慰霊(追悼・追弔)の意味が、生者から死者に対する一方的な供養行為に止まるものではなく、その死者の本願に耳を傾け、その志願に応えて社会の不条理に対する批判的言動を伴うことであることも知っていただきたいと思います。

大田昌秀氏には、著書の転載、引用をお願いしたく大田氏が理事長を務める「沖縄国際平和研究所」(現在は、閉所)を 2017 年 2 月に訪ね、当所の責任者である藤澤英明氏にその旨の説明とご依頼をしたが、大田氏とは入院療養中で面会はできなかった。そこで、藤澤氏の計らいで理事会を開いていただき、著書の転載、引用の承諾を 2017 年 2 月 20 日に得ることができました。それは、2017 年 6 月 12 日に大田氏が亡くなられる 4 か月前になります。故大田昌秀氏、藤澤英明氏には甚深の感謝を申し上げます。

また、佐喜眞道夫氏の「高校生への『沖縄戦の図』解釈」読んでいただくことを通して、沖縄戦時に沖縄住民がどのような過酷で悲惨な状況下に置かれ、自死を選ぶ者、日本兵に虐待を受け殺害される者、強制集団死を強いられた者、それらの死はすべて不本意な死の選択であったこと。丸木夫妻が描くアート「沖縄戦の図」を視覚で感じ、解説とともに受け止めてください。　（吉岡記）

1．沖縄戦とは

沖縄戦とは何か

大田 昌秀

■沖縄戦とは

沖縄戦は、さる太平洋戦争末期に、沖縄本島とその周辺の島々で、アメリカとイギリス両国の連合軍と沖縄守備軍が、最後の勝敗を賭けて戦った一大決戦でした。どういう理由からか定かではありませんが、米軍は、この戦争をアイスバーグ（氷山）作戦と名付けました。

沖縄戦の開始については、1944（昭和 19）年 10 月 10 日の空襲を起点としたり、いろいろと説が分かれていますが、わたしは、それが、日本国内で唯一住民を巻き込んでの地上戦だった事実から 1945 年 3 月 26 日に、米第七七歩兵師団が、沖縄本島西方海上約 25 キロメートルにある慶良間列島に上陸したのを開始時と規定しています。

その後 6 月 23 日に沖縄守備軍首脳が自決したことによって、軍の組織的抵抗が終結しました。

その後、連合国軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥が南西諸島守備軍の最高位の指揮官が無条件降伏をなすよう命令を発しました。それを受けて、宮古島駐留の第 28 師団の師団長納見敏郎中将と奄美大島から高田利貞陸軍中将、同じく加藤唯男海軍少将が沖縄本島に出頭しました。そして、これら三名の将官が南西諸島日本軍を代表して嘉手納飛行場内の琉球兵団（米第 10 陸軍の後身）米軍司令官ジョセフ・スチルウェル大将との間で、同年 9 月 7 日に六通の無条件降伏文書に署名して正式に終結した、と見るわけです。同日無実の住民にスパイの汚名を着せ殺害した「久米島事件」の張本人たる久米島海軍守備隊の鹿山正隊長ら一行も米軍に武器を没収されて降伏しました。

その間、沖縄本島と周辺の島々は、米軍部隊が上陸したため、主戦場と化し、約三か月余の激しい戦闘が展開された上、さらに 3 か月近くにわたって掃蕩戦が続いたのでした。

一方、宮古、八重山の先島（さきしま）諸島や奄美大島などは、敵の上陸作戦こそ免かれたものの、くりかえし敵機の激しい攻撃を受けました。一般には、あまり知られていませんが、宮古・八重山諸島は、主として英国の B・H・ローリングス中将が率いる英太平洋艦隊（第 57 機動部隊）によって攻撃を受けたのでした。

1944 年 10 月 3 日に、米統合参謀本部から南西諸島攻撃の命令を受けたチェスター・W・ニミッツ提督の率いる米太平洋艦隊は、翌 45 年 3 月 23 日から南西諸島全域に艦載機による波状攻撃をかけました。そして、3 月 26 日にその一部兵力を慶良間列島に上陸せしめ、2、3 日のうちに同諸島を制圧しました。間髪を入れず、4 月 1 日には、南西諸島の主島で最も重要な軍事的拠点、沖縄本島への上陸作戦を開始したのです。

実際の作戦は、米第五艦隊司令長官で、中部太平洋任務部隊司令長官も兼ねていた R・A・スプルーアンス海軍大将が、全般的な指揮をとりました。また兵員物資等の輸送面の指揮は、ロバート・K・ターナー海軍中将が担当しました。一方、米上陸部隊については、主力の第 10 陸軍司令官サイモン・B・バックナー陸軍中将が指揮したのです。

これらの米軍首脳は、いずれも名声の高い歴戦の猛者たちでした。スプルーアンス大将は、1942 年 6 月のミッドウエー海戦で、米空母部隊の指揮官として日本艦隊に潰滅的打撃を与えた人物だっ

たのです。またターナー中将は、1940 年から同 42 年にかけてワシントンの海軍作戦本部の戦争計画部長をつとめた作戦の大家で、サイパン上陸作戦を指揮して日本軍を玉砕に追い込んだ人物です。一方、バックナー中将は南北戦争で勇名をとどろかせた南軍の将軍の子で、沖縄戦に参加する前は、アラスカ地区司令官をつとめていました（ビーニス・M・フランク／加登川幸太郎訳『沖縄－陸・海・空の血戦』バランタイン版、第二次世界大戦ブックス、サンケイ新聞社出版局、1971 年）。

これら歴戦の将軍たちの指揮下で、米軍部隊は、約 1,500 隻の艦船に乗り込んで沖縄に攻め入ったのです。その陣容は、史上最大の延約 54 万 8,000 名。当時の沖縄の総人口を上回るほどの大軍勢でした。

これに対するわが沖縄守備軍は、牛島満司令官指揮下の沖縄守備軍（第 32 軍）の約 67,000 名の正規部隊のほか、大田実海軍少将が率いる約 1 万名の海軍沖縄方面根拠地隊と、地元から動員された約 25,000 名の防衛隊員、合わせて 11 万名足らずの兵員でしかありませんでした。守備軍の中には、防衛隊とは別に、県下の 12 の男子中等学校と 10 の女学校からそれぞれ動員された約 2,400 名の 10 代の生徒たちも含まれていました。

このように米軍と沖縄守備軍との兵員数には極端な差があったのです。しかも物量においても米軍側が圧倒的に豊富だったのです。加えて、当初から制海権も制空権も完全に米軍が握っていたので、勝敗は、まるで決まったも同然でした。

と言うのは、ほかでもなく、作戦の総元締たる東京の大本営は、米軍の沖縄諸島への上陸を、1945 年の 3 月から 4 月頃になるものと的確に予想していました。それにもかかわらず、米軍上陸の直前に、現地軍の強い反対を押し切って、沖縄守備軍の中でも最精鋭部隊としてその名を知られていた第九師団（通称武部隊）を台湾へ配転してしまいました。そのため、守備軍が長い期間をかけて演習を繰り返し練り上げてきた防備態勢に穴があく結果になりました。

あまつさえ、大本営は、その穴埋めに姫路から第八四師団を派遣すると約束しておきながら、いざとなると本土防衛を重視するあまり、その約束さえ果たさなかったのです。したがって、米軍の上陸前から守備軍将兵を絶望に追いやり、その士気に大打撃を与えるしまつでした。

こうして、沖縄戦ではそもそもの当初から大本営と現地守備軍との間の信頼関係が損われていただけでなく、戦闘遂行上の基本的な作戦についてさえ、航空作戦を重視する大本営と戦力不足から持久作戦を主張する守備軍との意見が真っ向から対立するありさま。そのような事態が、その後の戦況にいかに不利な影響をもたらすかは、自明なはずでした。それにもかかわらず、双方の間でなんらの調整もなされないままにむりやり戦闘に突入して徒らに犠牲を大きくする結果となったのです。

■玉砕覚悟の「捨て石」作戦

沖縄は、南西諸島の中でも戦略的“要”の位置を占めていました。九州までの距離は、650 キロ。台湾まで 610 キロ、上海までは 810 キロ、そして東京までが 1,561 キロ、マニラまでが 1,448 キロ、ソウルまでが 1,255 キロでしかありません。いきおい、米・英連合軍は、沖縄を攻略しさえすれば、そこには爆撃機および戦闘機がすぐに利用できる飛行場がいくつもあり、かつまた海軍の停泊基地に適当な複数の港湾もあるので、そこを前進・兵站（へいたん）拠点として最終的攻撃目標たる日本本土を叩くことも容易と判断したのです。したがって沖縄の占拠を最優先課題に決定したのです。

それに対して沖縄守備軍は、敗戦を食い止め、国体を護持する立場からも死力を尽くして米・英

軍の日本本土への侵攻を食い止める必要がありました。いきおい、大本営との作戦上の戦略・戦術の相違を乗り越えて、戦力が尽き果てるまで戦わないわけにはゆきませんでした。

沖縄は、東方や南方から中国南岸や朝鮮にかけて、さらには日本本土を目指す米・英連合軍の進撃を阻む、いわばさいごの防波堤の役割を果たしていたからです。沖縄守備軍にとって、沖縄を死守することは、至上命令たる本土防衛の責務を果たす上からも引くに引けなかったのです。

そのことは、沖縄戦が始まる当初から自明のことでした。1945 年 3 月 27 日付『朝日新聞』は、「南西諸島の戦局いよいよ重大」という社説で、南西諸島の戦略上の重要性については、もはや改めて談ずる必要もない、と次のように論じました。

「もしこの諸島のいずれかが敵の手中に収められ、有力な航空基地としての機能を発揮する場合を想定すれば、仮にこれが琉球列島の最南端であっても、東京以西、朝鮮全域・遼東半島はいずれも 2,000 キロの行動半径内に入り、もしそれが沖縄群島の場合は、半径は更に 500 キロ短縮することとなり、本土の大部分、朝鮮、南満、更に支那大陸の作戦地区は敵の基地制空権内に包み込まれることとなり、敵機の空襲はいよいよ頻度を加えることは自明の理である。」

「これと同時にもしも、敵の制空権の優位が確定するようなことにでもなれば、東支那海の制海権も自ら敵の制圧するところとなり、従ってわが南方海上路線が麻痺状態に陥り、大陸並びに日満海上連絡も危険にさらされるに至るべきはいうまでもなく、さらに、敵の支那接岸作戦を極めて容易ならしめる結果となり、かくして敵はいよいよ最後的戦略目標に向って踏み出して来ることになるのである。事態は極めて危険にして重大である。何としてもこの来襲の海上部隊を撃退せねばならぬ。わが戦力を挙げて撃退しつくさねばならぬ。」

ところが、本土においても、また現地沖縄においても、このような認識があったにもかかわらず、守備軍の側における戦力、軍需物資の不足は覆うべくもなかったのです。米軍が沖縄へ上陸する以前の段階から守備軍が被った兵員や兵器、弾薬などの損害は、あまりにも甚大だったからです。

1943（昭和 18）年 12 月 21 日、海軍の少年兵に受験するため鹿児島へ向かう少年 202 名と満州開拓に出発する人たちと合わせて五六八名が乗った湖南丸が口永良部島の西方、約 16 キロの沖合でアメリカの潜水艦グレイバック号に雷撃されて沈没し、321 名が犠牲となりました（宮良作『湖南丸と沖縄の少年たち』草土文化、1990 年）。

その後、翌 44（昭和 19）年 6 月に沖縄防衛の任務につく独立混成第 44 旅団と同第 45 旅団の将兵約 4,600 名を乗せ、鹿児島から沖縄へ向けて出航した富山丸が、徳之島東方海上で米潜水艦に撃沈され、約 4,000 名の兵員を犠牲にしました。

それに続いて、二か月後の 8 月 21 日には学童疎開船の対馬丸が鹿児島の南西約 260 キロの悪石島付近で同じく米潜水艦ボーフィン号の攻撃を受けて沈没、1,788 名の乗船者中、1,418 名の人々が 800 メートルの海底に船もろとも呑み込まれてしまったのです。乗員の中には、学童と一般疎開者 1,661 名が乗っていましたが、学童 775 名を含む 1,373 名が犠牲となってしまいました（その他に船員 24 名、兵士 21 名）。

それから二か月も経たない同年 10 月 10 日に、こんどは県都那覇市が、米艦載機の五次にわたる波状攻撃を受け、一日にして市街地の 90 パーセントを潰滅させられました。その上、軍・民合わせて死者 400 名余、負傷者 700 名余を出したほか、軍の食糧品約 4,300 トンと大量の兵器、弾薬の被害に加えて、県民一か月分の食糧およそ 30 万トンを灰燼に帰してしまいました。

しかも、その二か月後に、輸送中の第 24 師団の弾薬が爆発して多大の損害を出したのです。そのため沖縄守備軍の勇猛で知られた長勇参謀長をして、「10・10 空襲に依り受けたる被害に比較にならざる膨大なる被害にして国軍創設以来初めての不詳事件なり。此れに依り当軍の戦力は半減せりと云うも過言ならず」と慨嘆せしめたほどでした（防衛庁防衛研修所戦史室『沖縄方面陸軍作戦」朝雲出版社、1968 年）。

このような不利な戦況下で、あえて圧倒的な戦力を誇る米英連合軍を迎撃しなければならなかったのも、この時点では日本本土の防衛体制が当初計画の約六割程度しか整備されていなかったからでした。したがって、敵軍上陸を一日でも長く沖縄に釘付けにして、本土への侵攻を遅延させ、その間に本土防衛体制を完全なものにしたいと図ったのでした。

つまり、沖縄戦は、本土防衛のためのいわば「捨て石」作戦に他ならなかったわけです。

そのことは、米軍が沖縄へ上陸する直前に裁可された「帝国陸海軍作戦計画大綱」に「皇土要域に於ける作戦の目的は敵の進攻を破摧し皇土特に帝国本土を確保するにあり」と明示されていたことからも判明します（防衛庁防衛研修所戦史室、前掲書）。

言いかえると、大本営参謀部第一作戦部長の宮崎周一中将が、いみじくも「一口にいえば、本土の外郭地帯―南千島、小笠原諸島、沖縄本島以南の南西諸島台湾、上海付近―の縦深陣地によって、この地域へ進攻してくる米軍に出血、持久戦をやりながら、この間に本土の作戦準備を固め、そして最後に本土で決戦をやることだ」と述べたとおりの戦略でした（実際には本土決戦をやる前に無条件降伏しました）。（読売新聞社編『昭和史の天皇』（2）、1967 年）

沖縄戦の基本的性格が、本土防衛のための「捨て石」作戦に他ならぬ以上、その結末は沖縄の軍民に多大の犠牲を強いる悲惨なものとならざるをえませんでした。すなわち大本営では、当初から「玉砕」を自明のこととしていたのです。

沖縄守備軍の八原博通作戦参謀の記録によると、1944 年末から翌四五年初めにかけて、陸軍中野学校出身の尉官級の将校数名が首里城地下の第 32 軍司令部を訪れ、こう語ったようです。

「私どもは、沖縄戦に参加するのが任務ではない。沖縄戦が終わって、第 32 軍が全滅してから、活動を始める。沖縄を占領したアメリカ軍の行動を偵知して、東京に報告するのが任務です。」（八原博通「沖縄決戦―高級参謀の手記』読売新聞社、1972 年）

つまり、これから見ても、中央では沖縄戦が始まる前から沖縄の「玉砕」は、いわば自明のこととして見ていたわけです。ですから陸軍中野学校卒のいわゆる諜報要員たちの申告を受けた軍司令官と参謀長の顔には苦笑が走ったとのことです。

八原作戦参謀は、「私もすっかりいやな気分になり、それでは、『君たちは沖縄北部の山嶽地帯か、沖縄島周辺の小さな島に潜り込み、土地の娘さんと結婚して、時期を待つがよいだろう』と皮肉ってやった」と記録しているのです（八原、前掲書）。

一方、それとは別に沖縄守備軍の上級機関であった台湾の第 10 方面軍参謀長諫山春樹中将は、東京の大本営からの帰途、沖縄に立ち寄ったさい、沖縄守備軍の長参謀長や八原作戦参謀に対し、「米軍が、南西諸島や台湾に来攻したばあい、中央にはこれを救済する手段はない。結局、われわれは、本土決戦のための捨て石部隊なのだ。尽くすべきを尽くして玉砕するほかはない」と語っていたのです（古川成美『死生の門―沖縄戦秘録』中央社 1950 年）。

ところが、沖縄守備軍は、このように「玉砕するほかはない」事態を予見しながらも、米軍の上陸直前にあわなって、慌ただしく沖縄本島と宮古、八重山から数万の一般老幼婦女子を県外と台湾に疎開させた以外、非戦闘員の安全を確保することについては、ほとんどなんらの具体的対策もとりませんでした。

それどころか、大本営も沖縄守備軍首脳も、地元住民に対しては、あたかも戦争に勝てるかのように、徒らに「神国不滅」とか「無敵皇軍」などといった抽象的スローガンを声高に唱えるだけでした。

牛島満軍司令官は、米軍が沖縄本島に上陸して一週間目に、全く勝目がないにもかかわらず配下部隊将兵に総攻撃を命じ、つぎのように叱咤激励しました。

「皇国の安危は懸りて第 32 軍総突撃の成否にあり。挙軍宜しく大死一番して滅敵のことに当るべし。我が将兵には進死あるのみ、断じて退生あるべからず。戦友の死傷を省るの暇あらば、寧ろ一人十殺のことに努めよ。僚友斃れ一人となるも、敢為奮迅して醜敵を滅殺すべし。御稜威頭上に在り、切に敢闘を祈る。」

このような花々しい訓示に反し、守備軍首脳の間では、攻撃に出るか、それとも戦力持久作戦をとるか具体的な戦術をめぐって意見が対立し、到底戦果をあげうる状況にはありませんでした。だが、もはや戦況のいかんなどは問題でなく、軍民一体となって、「玉砕」しうるか否かが肝要であったのです。

ちなみに長勇参謀長は、地元住民に対して、同じくこう叱咤したのでした。

「今更言ったってもはじまらぬが、ただ軍の指導を理屈なしに素直に受け入れて、全県民が兵隊になることだ。すなわち一人十殺の闘魂をもって敵を撃砕するのだ。日本が必ず勝つということは、神がかり的な言い分でなく科学的見地から確信できることだ。しかるに沖縄県民が、精神的にも科学的にも確固たる見通しを持っていないかに思われるのは遺憾である。（中略）戦争は、一人で二人殺せば日本が勝つことになっているが、皇軍兵士たる者は、一人で十人殺さねば死なぬ。県民もこの決意に徹し、沖縄は吸血ポンプになるのだ。今度こそ敵がやってきたら一人残らず皆殺しにするのだ。」

かと思うと、県民が軍の作戦に協力するために重要な点は、食糧の確保にある、と言い、敵が上陸して戦いが激しくなれば、敵に増産も輸送も完全に封鎖されてしまい、県民の生命は、食糧難で脅かされる、としてつぎのように釘をさしたのでした。

「その時、一般県民が餓死するから食糧をくれといったって、軍は、これに応ずるわけにはいかぬ。軍は戦争に勝つ重大任務の遂行こそが使命であって、県民の生活を救うがために、負けることは許さるべきものではない。」（1945 年 1 月 27 日付『沖縄新報』）

まさに”語るに落ちる“ではないでしょうか。

この発言には、住民に対しては食糧の供出や家屋の提供などを強要して犠牲を強いながら、軍部自体は、住民のために何物をも与えようとしない思考・態度が、露骨に示されているからです。かかる守備軍の冷酷な仕打ちが、戦渦に巻き込まれた地元の老幼婦女子の犠牲を倍加させる結果となったことは、否めません。（下略）

（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』那覇出版社、2007 年、「第二編 1　再考・沖縄戦」より、140～150 頁）

戦争の醜さ

「醜さの極致」と表現された沖縄戦

アメリカ軍の沖縄戦に関する公式記録の多くは、異口同音に「沖縄決戦は、第二次世界大戦を通じて、もっとも激烈であり、また、もっとも損害の多い戦闘であった」と記しています。そのことは、何名もの従軍記者たちが共通して指摘している点です。

ちなみに『ニューヨーク・タイムズ』の著名なハンソン・W・ボールドウィン記者は、沖縄戦は、「生きるために戦うもの（米軍）と死ぬために戦うもの（日本軍）との世界史上空前絶後の大決戦」だったと、こう報じています。

「沖縄戦は、戦争の醜さの極致だ。そういう以外にどうこれを説明しようもない。その規模において、その範囲の広さにおいて、その激烈さにおいて、かの英本土航空決戦すら顔色なからしめる。飛行機が飛行機にたいし、軍艦が飛行機にたいし、かくも残酷な死闘をしたことは、それまでかつてなかったし、今後もおそらくあるまい。」

一般的に言って戦争報道というのは、敵・味方の激しい戦闘ぶりとか、自軍のあげた戦果について報じるのが普通です。それをボールドウィン記者は、戦争の態様に立ち入って「醜さの極致」と報じたのです。わたしは、その理由が知りたくて、「醜さ」の中味について考えてみました。そして分かったことは、沖縄戦の過程で日本軍が地元住民、とりわけ非戦闘員に対してとった所業の数々は、多くの場合、まさしく「醜い……」としか表現できないものばかりでした。

一方、米軍は、戦争開始前から地元の非戦闘員を救出する軍政要員を編成して、何千何万名もの地元住民の命を救ったことは、多くの記録が示すとおりです。とはいえ、いざ戦闘が始まると、その米軍の中にもありとあらゆる悪行を重ねる者も出てきます。それが戦争というものの実相だと言えます。

（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の「慰霊の塔」』那覇出版社、2007 年、「第二編 2 沖縄戦の教訓」より、170～171 頁）

軍隊は、国民の生命 財産を守り得るか

「集団自決」への軍の関与は

この点と関連して指摘しておきたいことがあります。それは、沖縄戦の緒戦において慶良間列島で発生した地元住民の「集団自決」（「集団死」）のことです。同列島の座間味島,慶留間島、渡嘉敷島では、およそ 700 名余の住民が「集団自決」を遂げました。この大惨事をめぐっては、やれ「軍命令で『集団自決』に追い込まれた」とか、いや「軍命令は無かった。住民が自らの意思で自決をしたのだ」といった議論が対立して戦後 60 年近く経った今日まで尾を引いています。そしてその問題をめぐって裁判沙汰まで起こっているありさまです。

1988（昭和 63）年 2 月に那覇地裁で開かれた家永教科書裁判で明らかになったことですが、政府や政府側証人は、具体的になんらの証拠も挙げずに「軍命はなかった」と言い切っています。そして「集団自決」があたかも「住民の国に殉ずる意志に発した自発的な死」と広言して憚りませんでした。

つまり凄惨きわまる「集団自決」を悪用して「殉国美談」に仕立て上げようとしたわけです。つい最近も一部のいわゆる「右寄りの人たち」が自衛隊の海外派兵を是とする世論の高まりを盾にとって、同じ論法で旧軍部の加害責任をまるごと免罪するのに躍起となっているのと、非常によく似ています。

ところで、そのような論法は、沖縄戦や太平洋戦争における非戦闘員の「集団自決」という厳然たる事実を前にしては、何らの説得力も持ち得ないのではないでしょうか。前引の「居留民仕末」を見れば、戦時における軍部の意向は、おのずと判明するからです。

第一に慶良間列島における「集団自決」にしても同島駐留の守備部隊が地元から動員された防衛隊を通して 200 発余の手榴弾を住民に配った事実は、説明がつきません。当時の厳しい軍律の下で、しかも軍部に武器が不足している状況下で、それほど多くの武器を何の目的もなしに一般住民に渡すなんて考えられないことだからです。また軍部からの圧力でも掛けられないかぎり、あのような大惨事が自発的に起こるはずがないのです。

そのことは、「集団自決」の発生は、守備軍部隊が駐留した島々だけに限られていて、慶良間列島の中でも「前島」のように軍隊がいなかった島では、「集団自決」といった事件は、まったく発生していなかったからです。また「阿嘉島」のように、住民側リーダーと守備隊の適切な対応によって、「集団自決」を未然に防止することができた事例からも、「集団自決」への軍隊の関与は否定できそうにないのです。

ちなみに一部の右翼系の人たちが、沖縄の文筆家たちが慶良間列島における住民の「集団自決」を軍命によるもの、と事実誤認のまま書いたとして、沖縄タイムス社の『鉄の暴風』を断罪しているのと対照的に、作家の司馬遼太郎氏は、こう述べています。

「『鉄の暴風』のなかにも、軍隊が住民に対して凄惨な加害者であったことが、事実を冷静に提示する態度で書かれている。もし米軍が沖縄に来ず、関東地方にきても、同様か、人口が稠密なだけにそれ以上の凄惨な事態が起ったにちがいない。住民をスパイ扱いにしたり、村落に小部隊がたて籠もって、そのために住民ごと全滅したり、それをいやがって逃げる住民を通敵者として殺したりするような事態が、無数に起こったのではないか。」（司馬遼太郎『沖縄・先島への道　街道をゆく 6』朝日新聞社、1998 年）

わたしは、自らの体験に照らして、このような発言は、軍隊の本質、または戦場の偽りのない実態を良く知っている人でなければできないと思わざるをえません。事実、司馬氏は、この発言の前段の部分で、自らの戦時中の体験を踏まえて、こう語っています。

「大阪駅から東海道線に乗って名古屋を通過すると、大阪へ行くときには車窓からみえた名古屋城の天守閣が、栃木県へ帰るときには見えなかった。名古屋は一望の焼野原だった。そういう時期のことである。

連隊に帰ってほどなく本土決戦についての寄り合いのようなものがあって、大本営からきた人が、いろいろ説明したような記憶がある。

そのころ、私には素人くさい疑問があった。私どもの連隊は、すでに述べたように東京の背後地の栃木県にいる。敵が関東地方の沿岸に上陸したときに出動することになっているのだが、そのときの交通整理はどうなるのだろうかということである。

敵の上陸に伴い、東京はじめ沿岸地方の人々が、おそらく家財道具を大八車に積んで関東の山地に逃げるために北上してくるであろう。当時の関東地方の道路というと東京都内をのぞけばほとん

ど非舗装で、二車線がせいいっぱいの路幅だった。その道路は、大八車で埋まるだろう。そこへ北方から私どもの連隊が目的地に急行すべく驀進してくれば、どうなるのか、ということだった。

そういう私の質問に対し、大本営からきた人はちょっと戸惑ったようだったが、やがて押し殺したような小さな声で……彼は温厚な表情の人で、決してサディストではなかったように思う・・・轢(ひ)っ殺してゆけ、といった。このときの私の驚きとおびえと絶望感とそれに何もかもやめたくなるような馬鹿らしさが、その後の自分自身の日常性まで変えてしまった。軍隊は住民を守るためにあるのではないか。」

「しかし、その後、自分の考えが誤りであることに気づいた。軍隊というものは本来、つまり本質としても機能としても、自国の住民を守るものではない、ということである。軍隊は軍隊そのものを守る。この軍隊の本質と摂理というものは、古今東西の軍隊を通じ、ほとんど稀有の例外をのぞいてすべての軍隊に通じるように思える。」

わたくしも、数多くの戦争記録を読んだほか、戦場での自分自身の実体験を通して学んだ観点から、これに同感せざるをえません。

では、軍隊は軍隊を守るということは、何を意味するのでしょうか。司馬氏は、それにこう答えているのです。

「軍隊が守ろうとするのは、抽象的な国家もしくはキリスト教のためといったより崇高なものであって、具体的な国民ではない。たとえ国民のためという名目を使用してもそれは抽象化された国民で、崇高目的が抽象的でなければ軍隊は成立しないのではないか。

さらに軍隊行動（作戦行動）の相手は単一である。敵の軍隊でしかない。従ってその組織と行動の目的も単一で、敵軍隊に勝とうという以外にない。それ以外に軍隊の機能性もなく、さらにはそれ以外の思考法もあるべきはずがない。」（司馬、前掲書）

司馬氏が指摘しているとおり、沖縄戦をふくめ太平洋戦争では、すべての戦闘は、「天皇のため」「国のため」「国体を守るため」といった抽象的目的のために戦われたことは周知の事実です。

ちなみに現行の自衛隊法第三条は、自衛隊の任務についてこう規定しているのです。

「自衛隊はわが国の平和と独立を守り国の安全を保つため、直接侵略及び間接侵略に対しわが国を防衛することを主たる任務とし、必要に応じ公共の秩序の維持に当たるものとする。」

つまり、この文言が明確に示しているように、「わが国の平和と独立」とか「国の安全」または「わが国を防衛」とあるだけで、具体的に「国民の生命・財産を守る」とはどこにも書かれていないのです。

しかも自衛隊は、防衛とか治安出動の場合には、今では必要に応じて武器の使用や武力行使さえ認められています。

一方、日本国憲法は、前文の前半で、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し……」と明記しているだけでなく、その後半部分では「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」と述べているのです。

言いかえますと、戦争の惨禍は、「国民の行為によって」発生するのではなく、「政府の行為によって」起こるというわけです。同様に「平和を愛する諸政府」とか「平和を愛する諸国家」とは言わずに「平和を愛する諸国民」と表現している点に注目する必要があります。

この点は、ユネスコ憲章の前文にも「政府の政治的及び経済的取り決めのみに基づく平和は、世界の諸人民の一致した、しかも永続する誠実な支持を確保しうる平和ではない。よって平和は、失

われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない」との文言からも伺えます。

つまり、平和を永続的に維持するためには、政府間の協定によるよりも、諸国民の人民同士の精神的連隊の方が大事というわけです。

立正大学の星野安三郎名誉教授が指摘されるとおり、民主主義の原理的思想は、「政府は戦争を欲し国民は平和を欲する」ことを基盤にしているからです。すなわち権力をもつ政府と国民との関係についてのフランス革命以来の伝統的精神は、「国民は、本来、平和を欲し、戦争を欲する国民は存在せず、ただ存在するのは、戦争を欲する政府だけだ」というわけなのです。

いきおい、政府が本来的に平和を欲するならば、政治は政府にまかせてもよいわけですが、政府が本来的に戦争を欲するのであれば政治を政府にまかせきりにすると、とんでもない結果を生じさせかねないのです。

しかるにつとに 1970（昭和 45）年の時点で、防衛庁の『防衛白書』は、「国を守る心について」言及し、「真の愛国心は、単に平和を愛し、国を愛するということだけではない。国家の危急に際し、身を挺して国を守るという熱意でなければならない」と説いているのです。「身を挺して国を守る」という謳い文句は、戦前の「国体を守るために命を捧げる」とか「滅私奉公」というのとほとんど同義語であることは言うまでもありません。

このように、現行の平和憲法が、軍隊も戦力も持たず、交戦権をも否定しているにもかかわらず、軍事面では、戦前回帰型の思考や行動様式が横行しているのではないでしょうか。

常に弱いものが犠牲になる

「平和の礎」に刻銘されている全戦没者の内訳は本書４、５ページに示しましたが、この数字からも明らかなとおり、戦闘を任務とする職業軍人より、はるかに多くの非戦闘員が犠牲となったわけです。その点は、非戦闘員の中でも、とりわけ、女性や幼児たちの犠牲が、甚大でした。あまつさえ、表Ⅱが端的に示しているとおり、14 歳未満の幼児たちの死因が、敵兵によるものというより、むしろ友軍の残虐行為に起因するのがはるかに多いことは、沖縄戦の醜い内実を象徴的に物語っていると言えます。

ちなみに厚生省が 1960（昭和 35）年に沖縄戦で犠牲となった一四歳未満の一万一、四八三名（実数は、もっと多い）の子どもたちの死因について調査したものがあります。表Ⅱ－１がその結果を示すものですが、これを年代別に見ると、5 歳以上の者は、13 歳を例外とすれば、平均して 700 名台の犠牲にとどまっていますが、4 歳、3 歳、2 歳は、いずれも 1,000 名を越しています。

ところで、これらの 11,483 名の子どもたちの死因の内訳は、表Ⅱ－２が明示するとおりです。

ここで「壕提供」とあるのは、子どもたちが自発的に壕を軍に提供したという意味ではなく、守備軍将兵によって壕を追い出されたために死んだというものです。つまり、死因の中でもこれが圧倒的に多くなっています。一方、「食糧提供」というのも、守備軍将兵によって食糧を奪われた結果、死んだ者を意味しているのです。

これらの結果から判明するように、戦場においては老幼婦女子のような「非警備能力者」は、こと生死に関するかぎり、敵の攻撃に対してだけでなく、「味方の軍隊」だからといって安心はできません。端的に言って、彼らは、前面の敵と背後の「友軍」によって挟撃されてしまう危険があるからです。それだけにいったん国土が戦場になると、「戦力」としては、いちばん弱い老幼婦女子

が真っ先に、そして最も苛酷な形で犠牲を強いられるのが落ちです。

しかも婦女子や高齢者たちの凄惨な犠牲の態様は、それだけにとどまらないのです。幸いにして子どもたちが生き延び得たとしても、沖縄の 6 歳未満の戦傷者たちの例が示すように、砲弾で手足を切断されたり眼をえぐり取られたりで大人同様に戦傷を被ってしまうのです。にもかかわらず、現行法の適用外の 6 歳以下というだけで、戦後にろくな保障も受けられずに放置されてしまう事態となりかねません。結局、「非警備能力者」たちは、戦場での惨禍を一身に被るだけでなく、戦争がやんだ後も戦禍をひきずったまま泣き寝入りを強いられねばならない実情なのです。

表Ⅱ－1　14 歳未満の
戦没者数の年齢別内訳

年齢	戦没者数
13 歳	1,074 名
12 歳	757 名
11 歳	696 名
10 歳	715 名
9 歳	697 名
8 歳	748 名
7 歳	767 名
6 歳	733 名
5 歳	846 名
4 歳	1,009 名
3 歳	1,027 名
2 歳	1,244 名
1 歳	989 名
0 歳	181 名
計	11,483 名

表Ⅱ－2　14 歳未満の戦没者の
死因別内訳

壕提供	10,101 名
炊事・雑役・救護	343 名
自決	313 名
食糧運搬	194 名
四散部隊への協力	150 名
保護者とともに死亡したもの	100 名
弾薬運搬	89 名
陣地構築	85 名
食糧提供	76 名
友軍より射殺	14 名
伝令	5 名
患者輸送	3 名
その他	10 名
合計	11,483 名

（表Ⅱ－1．2 はいずれも陸上自衛隊幹部学校『沖縄作戦講話録』1961 年を参照、一部字句を訂正して引用）

ところで、表Ⅱ－2 に「友軍より射殺」という項目に、被害者数は 14 名とあります。

しかし、これは実数のごく一部でしかなく、「友軍」すなわち沖縄守備軍将兵による殺害事件は、これまでに確認されただけでも「久米島事件」なども含め約 40 件、大人を含めると犠牲者数は、数百名から約 1,000 名に及ぶと記録されているほどです（儀部景俊『沖縄戦―県民の証言』日本青年出版社、1972 年）。

問題なのは、これらのおぞましい殺戮が、戦場で偶発的に発生したのでもなければ、敗戦で気が動転した守備軍将兵の狂気のなせるわざでもないということです。言うなれば、この点にこそ、沖縄戦の酸鼻な実相の中でもきわ立った特異性があると言ってよいでしょう。とはいえ、その特異性は、一島嶼（島国）が戦場化すれば、半ば必然的にどこにおいても発生し得るという点で、広く普遍性をもち得るにちがいありません。沖縄戦から教訓を学ぶ所以もまたそこにあると思われます。

ところで、「友軍」による住民の殺害が、たんに偶発的なものでもなければ、あながち敗戦に血迷った守備軍将兵の狂気のなせるわざでもない、というのはつぎのような理由からです。

すなわち、一般に軍隊は、国民の生命・財産を守る存在だと思われがちですが、実際にはそうではないのです。軍隊は、その本質において、軍隊という組織自体を守る存在に他ならないのです。この点と関連して、わたしは敗戦時の陸軍大臣で無条件降伏の前夜、「一死以て大罪を謝し奉る」との遺言を残して自決した阿南惟幾大将について司馬遼太郎氏が述べたつぎのようなコメントを想起しないわけにはいきません。

「阿南惟幾という人は、軍隊という組織論理の中に属していなければ、人柄から察して別の思想と人格のもちぬしだったかと思えるが、それでも、終戦のとき降伏案に対し、かたくなに反対した。

その理由は、日本陸軍はまだ本格的に戦っていない、というものである。あれほど島々で千単位、万単位の玉砕が相次ぎ、沖縄は県民ぐるみ全滅したという情報もあり、広島と長崎は原爆によって潰滅し、わずかな生存者も幽鬼のようになっているという事態のなかで、軍隊の論理でいえば『日本陸軍はまだ本格的に戦っていない』ということになるのである。

島々の守備隊は、戦闘というよりただ潰されるがままに潰された。『本格的に戦っていない』というのは、その意味なのである。であるから本土において、本土決戦用の兵力を率い、心ゆくまで本格的に決戦すべきである、というのが阿南惟幾の思想と論理で、これが、軍隊の本質そのものといっていい。住民の生命財産のために戦うなどというのは、どうやら素人の思想であるらしい。」（司馬、前掲書）

戦争は何をもたらすか

かの有名なプロイセンの軍事理論家で戦争論の大家、カール・フォン・クラウゼヴィッツが『戦争論』の中で述べているように、かつては「戦争とは、他の手段をもってする政策の継続である」と考えられていました。つまり、政府が戦争を始め、またそれが時の権力者の政策の一種の表現にほかならないのだから、あくまで政府が主宰者であり、戦争はその手段に過ぎません。したがって軍事的視点は、常に政治的視点に従属すべきであってその逆ではない、というのです。そこから「戦争において軍事作戦は、勝敗によってでなく、戦争の政治的目的の達成の程度によって評価されねばならない理由もここに由来する」というわけです（郷田豊・他著『〈戦争論〉の読み方ークラウゼヴィッツの現代的意義ー芙蓉書房、2001 年）。

ところが、現代の戦争においては、いざとなれば核兵器のような究極兵器や生物・化学兵器などが情容赦もなく用いられる恐れがあります。だとすれば、戦争の当事者である双方の側の国民の犠牲は、余りにも甚大で、戦争によって購（あがな）われ、達成される何物もないのです。

それどころか、人類それ自体はむろん、自然をふくめすべてが無に帰してしまいます。こうして、もはや戦争を手段にすることによって望ましい目標が達成されたり、評価に値するなんらかの価値をもたらすことは、あり得ません。したがって、政治が、いかなる大義名分を掲げようとも、もはや戦争を有効な手段として活用することは、意味がなくなったと言っても過言ではありません。わたしには、沖縄戦は、そのことを疑問の余地なく実証して見せたと思われてなりません。

ちなみに、逃げ場のない狭小な島で戦われた沖縄戦では、23 万余名もの尊い人命が喪われてしまいました。が、果たしてこの膨大な死は何を購い、評価し得る何物をもたらしたというのでしょうか。

価値ある何物をも購い得なかったのみか、戦後 60 年余もたった現在も、いまだ死者たちの遺骨の収集さえ終わっていないだけではありません。戦時中に生じた不発弾の処理さえも、年間何億円という単位の金を使いながらまだ完了していないどころか、処理し終えるまでには、あと半世紀以上もかかると言われている実情です。

沖縄戦の悲劇をもたらした太平洋戦争にしても、アジアの諸民族を欧米の支配から解放し、日本を盟主とする大東亜共栄圏を建設するといった壮大な大義名分を掲げて戦ったにもかかわらず、その結果、いったい何をもたらしたのでしょうか。

旧日本軍は、2,000 万名とも言われるおびただしい数の近隣諸国民を殺害し、いたずらに日本に対する消えることのない不信感を買っただけではありませんか。国内においては、広島・長崎が原爆による攻撃を受け 30 万名余の人命を犠牲にした上、今も人々はその後遺症で苦しんでいるのです。しかも、日本自体が未曾有の無条件降伏という、かつてない国辱を被っただけではないでしょうか。

あまつさえ、戦争が終結すると、その後遺症が原因で心を病んでいる人たちが急激に増えているのです。ちなみに沖縄では、せっかく戦争から生き延びたものの、これら心を病んでいる人たちは、家族や友人、知人と離れて病院に隔離状態になったまま今にいたるも一歩も社会へ出てこれないでいるのです。こうした問題は、とても看過できないほど深刻です。

では、果たして太平洋戦争の戦勝者たる米軍は、勝利によって何を勝ち得たというのでしょうか。

さる第二次世界大戦で中国において米軍司令官をつとめたアメリカのＡ・Ｃ・ウェデマイヤー大将は、自らの回顧録に『第二次大戦に勝者なし』というタイトルを付けているほどです。事実、米軍は、沖縄を占領下に置き、自らの軍事基地化したものの、戦勝後もまるで泥沼に足を突っ込んだかのように、休む間もなく世界のどこかで戦い続けねばなりませんでした。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争と際限もない戦争に明け暮れ、あたら未来を担う若人たちを多数、犠牲にして顧みないしまつです。

ベトナム戦争を自ら指揮したロバート・Ｓ・マクナマラ米元国防長官は、1995 年、戦後 50 周年の節目に自らの回顧録を刊行していますが、彼はその中であらまし次のように語っています。

「自分は、ケネディ大統領とジョンソン大統領の下で、アメリカの伝統的価値観と国益に基づいて戦争を指揮して来たが、今から考えると、自分たちの判断はひどく間違っていた。」（ロバート・マクナマラ『マクナマラ回顧録―ベトナムの悲劇と教訓』共同通信社、1997 年）

率直に自らの判断の誤ちを省みて、後世の人々に二度と同じ間違いを繰り返させてはならない、と説く彼の真摯な責任感と勇気は、賞讃に価するかもしれません。だが、彼のこのような反省の弁も、自ら指導した戦争で 300 万名余に及ぶベトナム人を犠牲に供したのに加えて、枯れ葉剤による 500 万余名の被害、米兵 5 万名余の死者と 75 万名余にも及ぶ負傷者を出したあげくのことです。今更いかに誠実に弁明したところで、もはや死者たちは帰っては来ないのです。

いきおい戦争における膨大な人命や前代未聞の破壊による損失は、戦後のいかなる美辞麗句や善行によっても、到底埋め合わせがつくものではありません。わたしたちに残されたせめてもの道は、死者の霊を弔い、二度と同じ間違いを犯す愚を避けることだけです。

（大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊　沖縄の慰霊の塔』那覇出版社、2007 年、「第二編 2 沖縄戦の教訓」より、186～198 頁）

沖 縄 戦 の 図

高校生への「沖縄戦の図」解説

佐喜眞美術館館長
佐喜眞道夫

佐喜眞美術館 佐喜眞道夫館長

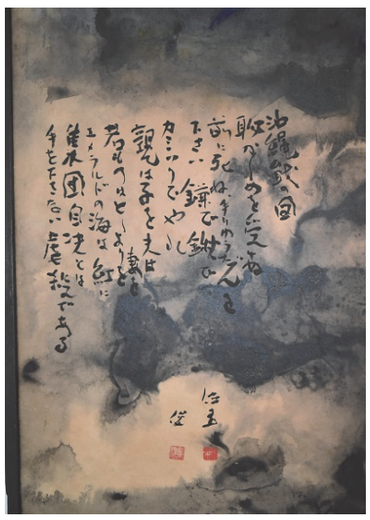
こんにちは。私は佐喜眞道夫と申します。

これからこの大きな「沖縄戦の図」について説明します。皆さんは沖縄戦についてしっかり勉強して、沖縄戦の現場である南部戦跡に行っていろんなことを感じられたと思います。

私は戦争を理解するためには、戦争の状況をしっかり勉強するのと同時に想像力が必要だと考えています。この大きな絵を想像力をたくましくして見てください。これは大きな戦争の絵ですけれども一人の兵隊も描いてありません。戦争というのは国がやります。政府が戦争をします。ですから国の側から見た戦争の話はたくさんあります。しかし、この絵に描いてあるのは女性たちと子どもたちとお年寄りです。つまり、戦争という状況の中で、一番ひどい目にあう側から見た戦争の絵です。なぜ 60 年前の沖縄戦で、こんな大きな被害を私たちが受けたのかという問題ですが、60年前までの日本という国は、すべての国民は天皇の子どもであり、天皇は神でした。天皇は「現人神（あらひとがみ）」と考

①桜の花・菊の花

えられていました。人間であると同時に神でもあるという存在でした。「天皇の赤子」という言葉を使いましたが、天皇の子どもである国民は、お国のために、天皇陛下のために、立派に命を捧げなさいと徹底して教えていた。今日の国民主体の民主国家ではなかったですね。人の命より国家がはるかに大事であった。①その当時の「皇民化教育」の象徴としてつかわれたのが桜の花と菊の花ですが、それがここ、この黄色の部分に描きこんであります。



②集団自決の文

②この絵には左の下にコメントがあります。**「沖縄戦の図、はずかしめをうける前に死ね。手榴弾をください。鍬で鎌でかみそりでやれ。親は子を、夫は妻を、若者は年寄りを、エメラルドの海は紅に。集団自決とは手をくださない虐殺である。」**集団自決とは手をくださない虐殺なんだ、と丸木さんはハッキリと言っています。

この絵を部分的に説明していきましょう。③このあたりをよく見ていきますと、硝煙のむこうに船のシルエットがいっぱい描きこんであります。これはアメリカの軍艦です。皆さんは、佐喜眞美術館の屋上から普天間基地をごらんになりましたが、アメリカ軍の普天間基地の向こうに海が見えましたね。あの目の前の海から沖縄戦が始まったのです。沖縄戦当時、目の前の海はアメリカの軍艦で埋まってしまった。その様子がここに描いてあります。アメリカ軍はあの海を埋め尽くす軍艦から、猛烈な艦砲射撃と爆撃をした後に上陸しました。平均すると一坪に 1 トン撃ちこみました。沖縄全体でいうと 20 万トン。その結果、沖縄島はどうなってしまったかというと、地上の木も土も全部吹き飛んでしまいました。下にある岩石が割れた。沖縄は隆起珊瑚礁の島です。珊瑚礁の岩がくだけますとこのように真っ白くなります。これは珊瑚礁の岩のかけらです。沖縄戦が終わったあと、沖縄島は中部から南部にかけて、真っ白にな

③硝煙のむこうに見えるアメリカ軍の軍艦

った。隆起珊瑚礁が粉微塵に吹き飛ばされた結果です。猛烈な艦砲射撃でした。

④ガマの中の人々

④こちらにはよく見ると島影が描いてあります。慶良間諸島です。そして、ガマの中の人々の様子が描かれています。天気がよければこの美術館の屋上から左の前方に見えます。慶良間諸島の中の渡嘉敷島とか座間味島とか慶留間島で集団自決がおこってしまった。その様子が上の方に描いてあります。この絵では、渡嘉敷島の集団自決で生き残った方の証言にもとづきまして渡嘉敷島のことがモデルとして使われました。この人たちは民間人です。ですから心の底では生きたい、生き延びたいと思っていたはずです。しかし、さまざまな要因がからまってみんなで死のうとなったのです。島じゅうを逃げ回った先ですから、死ぬにしても道具がありませんでした。人々はありとあらゆる方法を使って死んでいったわけですけれども、

⑥カミソリで妹の首の血管を切ろうとしている。

⑤ここでは、鎌で首を切っています。こちらはお母さんと娘さんですよね、首に縄を巻き二人で締めあってます。一緒に死のうと言うわけです。鍬で頭を割ろうとしています。かみそりで左の首の血管を切ろうとしています。逃げた先ですからこういう道具しかなかった。こういう道具ですからどんなにがんばっても何人かの人が必ず生き残ってしまう。大変難しい死に方だそうです。たとえばですね、お母さんと娘さんが一緒に死のうと、首に縄をかけ締めあっています。一緒に死にたくてこういう死に方を選んでいるのですが、絶対二人同時には死ねない。二人で締めあえば、必ずどちらかが先に死にます。すると死んだ方は力が抜けてしまいます。首がゆるんだ方は、しばらくすると気がつく。⑥ここには妹の首の血管、左の頸動脈をかみそりで切ろうとしているお兄ちゃん、少年の絵が描いてありますが、かみそりとか小刀、

⑤鎌で首を切る。母娘が、首に縄を巻き二人締めあっている。

こういう小さな刃物で首を切ろうとしましてもなかなかうまくいくものではない。血管というのは反射的に逃げるんだそうです。たまたまスパッと切れて出血多量で楽に死ねた人を、当時の人たちはうらやましがった。多くの人たちは苦しみながら、「殺してくれ」とか、「手榴弾くれ」とか言いながら、のたうちまわりながら死んでいったそうです。こういうふうにですね家族同士、兄弟同士で殺し合って生き残ってしまった人たち、生き延びてしまった人たち、この人たちの戦後というのは大変悲惨でした。生き残った自分を責めた。自分を責めて責めて、中には自分が生きているのか死んでいるの分わからなくなってしまった人も多いんです。

⑦沖縄最南端の摩文仁の丘や喜屋武岬あたりの様子

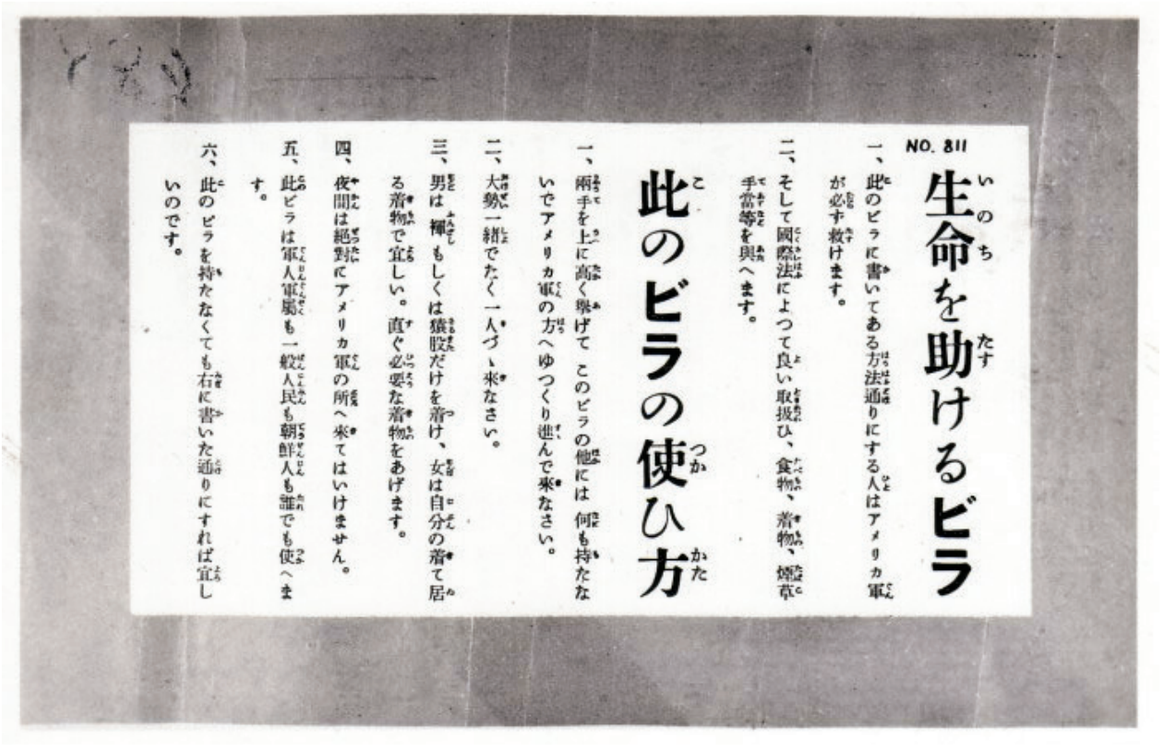
⑦こちらには、沖縄最南端の摩文仁の丘や喜屋武岬あたりの様子が描いてあります。平和の礎あたりですね。証言としましてはひめゆり学徒隊の生き残った先生がたの証言にもとづいて描かれました。

この沖縄戦の目的は、この沖縄の地で時間をかせぐことでした。本土決戦の準備のためです。日本全国で沖縄戦のような戦争をする、そのための準備をする時間をかせぐために沖縄戦をやる、これが沖縄戦の目的でした。

この本土防衛の「捨て石作戦」といわれた沖縄戦はどんな戦争だったのかと言いますと、日米両軍の兵隊同士の戦争は 5 月までででした。

日本軍は首里城の下に司令部を置いていました。首里城の司令部の軍人たちは、1945 年の 4 月から 5 月の二ヶ月間、アメリカ軍の猛烈な艦砲射撃、猛烈な爆撃にさらされました。その結果、首里城の丘は、二ヶ月後の 5 月の末にはなだらかな丘になってしまった。5 月の末には日本軍は完全に崩壊します。5 月末段階で日本軍の戦死者数は、64,000 人で 7 割を超えました。世界の戦争の常識で言いますと、3 割の兵隊が死にますと戦争はそこで終わりというものだそうです。これが世界的な基準です。7 割以上の兵隊が死んだ 5 月の末の段階を考えますと、どう考えてみても沖縄戦は 5 月の末で終わりですね。万一、戦争の続行が不可能になった 5 月の末の段階で沖縄戦が終わったと仮定するなら、沖縄戦で死んでいった民間人の 8 割の方は死なないですんでいただろうと言われています。もちろん沖縄戦は 5 月の末で終わることはありませんでした。本土決戦のための時間かせぎを命じられていた牛島満司令官は、みなさんご存知のとおり、民間人が逃げ込んでいた南部に戦線を移していきます。その結果、沖縄島の南端の断崖絶壁に当時 10 数万の人たちが追いつめられていったのです。もう海です。これ以上逃げられません。海の向こうはアメリカの軍艦と巡洋艦で真っ黒になっている。アメリカの巡洋艦はいろんなアナウンスをしていたそうです。例えば、「沖縄戦はもう終わりました。民間人は夜ではなく昼間移動しなさい。昼間、港川に向かって歩きなさい。昼間移動する民間人については攻撃しません」などと言ったようです。この断崖絶壁は高さが 30 メートルか 40 メートルあります。この岩陰にかくれている人に向かって「アメリカ軍はあと二時間後に壮絶な艦砲射撃を行います。2 時間待つから出てきなさい。出てくるときはすべての荷物を捨てて、ビラ（投降を呼びかけるビラをアメリカ軍は飛

撒いたそうです）をもって投降しなさい」などです。それを体験した人たち、このアナウンスを聞いた人たち、ひめゆりの部隊の生き残った先生たちに体験談を聞いてみますと、当時民間人の殺害をこれ以上増やすまいというアメリカの巡洋艦隊からのアナウンスが、悪魔の声に聞こえたと言われます。とてもそれを信じて投降することはできなかった。



NO. 811

生命を助けるビラ

一、此のビラに書いてある方法通りにする人はアメリカ軍が必ず救けます。

二、そして國際法によつて良い取扱ひ、食物、着物、煙草、手當等を與へます。

此のビラの使ひ方

一、兩手を上に高く擧げて このビラの他には 何も持たないでアメリカ軍の方へゆつくり進んで來なさい。

二、大勢一緒でたく一人づゝ來なさい。

三、男は 褌もしくは猿股だけを着け、女は自分の着て居る着物で宜しい。直ぐ必要な着物をあげます。

四、夜間は絶對にアメリカ軍の所へ來てはいけません。

五、此ビラは軍人軍屬も一般人民も朝鮮人も誰でも使へます。

六、此のビラを持たなくても右に書いた通りにすれば宜しいのです。

米軍が撒いたビラ　（那覇市歴史博物館より）

この人たちの多くが 30 メートルか 40 メートルの断崖絶壁から海に飛び降りて死んでいった。手榴弾をもっている人たちは円陣を作ってその真ん中で手榴弾の信管を抜く。そうすると死体はバラバラになってしまうそうです。あっちこっちそうして、死んでいった。この赤い色は、もうここまでだと、アメリカの巡洋艦に手を挙げて出ていこうとする日本軍の兵士、沖縄県民に対して、岩陰に隠れていた日本兵が、裏切り者！非国民！という形で後ろから撃ったというのです。そういう人たちの血で海は真っ赤に染まってしまった。場所によってはオレンジ色になったという証言があります。

⑧血で真赤に染まる海

⑧その証言にもとづきましてこれは海の血の色です。平和の礎の下のあの真っ青の海が真っ赤に染まってしまった。見わたすかぎりの海岸が死体でびっしり埋まってしまった。現場に立ったときその風景を想像してみてください。

それと同時に 60 年前の日本という国の文化状況、思想状況というものがどのようなものであったのか。この事実をきちっと押さえてイメージしてください。

こういうことは沖縄戦だけで起きたのではありません。満州（=中国東北部。かつて日本が傀儡国家をつくった）でも

おきました。太平洋地域の硫黄島でも起きました。サイパン島・テニアン島・フィリピン・ガダルカナル島でも起きました。当時の皇軍（天皇の軍隊=日本軍）が展開する場所ではあちこちで起きてしまいました。当時の日本政府が考えていた本土決戦、すなわち日本全国で天皇制を守るための戦争をやるという本土決戦が、彼らが考えていたように実行されたと仮定するならば、このような悲劇が全国で起こったかもしれないですね。米軍の上陸地としては、沖縄の次は九州、次は房総半島で、次は相模湾というのが彼らの想定でした。そして、そのための準備を進めていました。ですから今、千葉県ですとか神奈川県ですとか九州の各県には、当時つくられたものが、たくさん戦跡として残っています。

平和の礎の下に広がるこの真っ青の海が、真っ赤に染まったのです

⑨こちらは、日本軍によって住民が虐殺された例が久米島の証言にもとづいて描かれています。久米島では、皇軍の守備隊によって 20 名の民間人が虐殺されました。この絵では、谷川さんがモデルとして使われています。谷川さんは在日朝鮮人でした。朝鮮名をク・チュネさんとおっしゃいます。⑩下の赤い色はアメリカ軍がさかんに使った火炎放射器の炎の色です。戦争は相手を悪魔にします。当時の日本人はアジアの人々を大変侮蔑的に扱いました。またイギリス人やアメリカ人は人間ではない、鬼畜生の類だと言いました。「鬼畜米英」と教えました。また、アメリカ兵は日本人のことをサルだと教えられている。そういうアメリカ兵に捕まるようであればただではすまない。もし男がアメリカ兵に捕まったら生きたまま鼻と耳を削ぎ落とされ、指を一本づつ切り落とされ、後ろ手に針金で縛られ、戦車でひき殺されてしまう。生きたまま股裂きにあう。女性がアメリカに捕まったら、レイプされ腹を割かれて殺されてしまう。または、従軍慰安婦にされると教えられて、当時の日本人は実感をもってそれを信じていました。なぜそんなことに実感を持ったの

⑨久米島の住民虐殺（痛恨之碑）

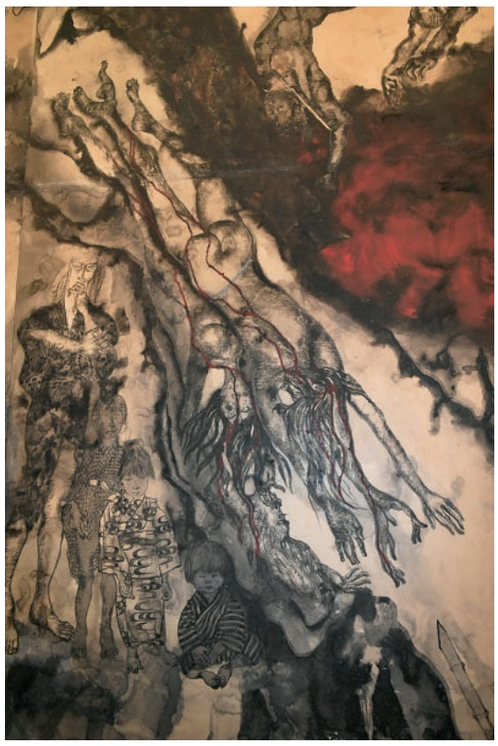
⑩火炎放射器の炎の色

でしょうか。この問題は日本人としてしっかり考えてみる必要があります。当時、日本軍が朝鮮、中国、東南アジアで何をしたのか、日本の近現代史をしっかり勉強してください。日本が占領し、侵略したアジア諸地域で日本の軍人がしたことの裏返しがアメリカ兵に対する恐怖の感情の底に流れているのではないでしょうか。

もう少し具体的なことを言っておきましょう。沖縄守備隊長の牛島満中将という人は、第六師団の 36 旅団長でした。この六師団の 36 旅団は南京大虐殺をやった部隊です。牛島という人は、南京虐殺のあと沖縄守備隊長になったのです。自分たちのやったことの反転した形でのアメリカ軍に対する猛烈な恐怖心。その恐ろしいアメリカ軍が沖縄に上陸してきました。人々は怖くて出ていきません。上陸してきたアメリカ軍は隠れている人々に向かって出てこいと、出てきなさいと命令します。人々は怖くて出てきません。アメリカ軍の命令に従わなくて隠れている人たち、この人たちに対しては容赦なく毒ガス弾、火炎放射器などが使われました。これが、アメリカ軍が掃討作戦でさかんに使った毒ガス弾や火炎放射器の炎の色です。

アメリカ軍の沖縄占領の目的は、沖縄を占領していち早く飛行場をつくり、そこから爆撃機を飛ばし日本本土を叩きつぶすというものでした。したがって、日本軍の敗残兵が残っていて、アメリカの飛行場に対してゲリラ活動をやる、そうしますとアメリカの戦闘機の安全性は保てません。ですからアメリカの掃討作戦は日本軍の敗残兵によるゲリラ活動が起きないように、最後の一人まで殺すか、捕虜にするか徹底したものでした。

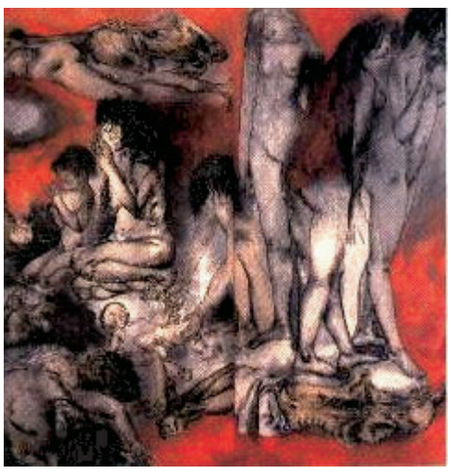
⑪この真ん中で、逆さまになって血を流して亡くなってしまった女の子は、スパイ容疑をかけられて拷問されて、死んだのでしょう。おそらく彼女は、熱心な軍国少女で日本の国の勝利のために身を挺して一生懸命がんばっていた方だと思います。こういう方がずいぶん多くスパイ容疑で死んでいった。もっともっと調査をしなければ実態がわからないことがたくさんあります。こういう誰もが触れられたくない事柄、語れば新たな悲しみを引き出して血のふき出るようなことがまだまだたくさん明らかにされないままで残っています。苦しいことですが、語っていただきたいし、語っていただけるような関係をつくり出すことを通して、戦争というものの本質を、私たちは明らかにしなければなりません。そういう義務を負っているのではないでしょうか、みなさんも私も。戦争の実態といいますか、軍隊の本質といいますか、これを考えつづけなければいけません。この場面が描くように、沖縄戦では極限の状況のなかで日本軍は住民を守りませんでした。これは沖縄でだけでなくすべての戦場でそうだったろうと思います。直視してください。軍隊が住民を、それも年端もいかない少女を殺すのです。なぜこういうことになったのかを、私たちは知らなければなりません。もしかすると、このことを皆さんが知ることによって、ひょっとすると次の戦争



⑪スパイ容疑をかけられ拷問されて、死んでいった女の子

をくい止める力になるかもしれない。だから困難を押して調査が延々と続けられています。

この絵は、証言によって描かれた部分と、もう一つは画家のメッセージからなりたっています。沖縄の戦争、広島・長崎の原子爆弾まで、ほんとうに 20 万、30 万の人間がぼろくずのように殺されていった。私たち人間が虫けらのように 20 万、30 万と殺されました。戦争というのはそういうものです。広島で原爆を見たあと、「原爆の図」から「沖縄戦の図」を描いた丸木位里、俊という画家は、人間というのは人間として生まれてきた以上、どんなことがあってもどんな目にあっても、最後の最後まで人間は人間なんです。人間は最後の瞬間、反転する力というのですか、キリスト教で言う尊厳性の光というか、仏教で言えば仏性の光というのですか、人間どんな状況に陥っても人に対して優しい気持ちを示すことができる、人間は決して戦争するために人を殺すためにこの世に生れてくるわけではない。この人間の本質を大事にして描きたいということで、丸木さんは広島で原爆を見た後、原爆の図から沖縄戦の図を描くにあたって、死んでいった人たちをきれいな線で描くことを心がけました。



原爆の図

原爆の図

たとえば、沖縄戦の図。この絵と実際の沖縄戦とどう違っているか少し話をしましょう。沖縄戦は皆さんもご存じのとおり、1945 年の 4 月から 9 月のたいへん暑い時期の戦争でした。沖縄戦で弾があたって死にますね、一週間で骨になる。死んだらすぐ腐りだすんです。この絵には腐敗していく、腐っていく死体は一つも描いてありません。人間が腐っていく臭いはたいへんな臭いだそうです。沖縄戦の体験談を読んでみますと、死体が散乱しているところを歩くと、死体の臭い、死臭がきつくてたまらない。それから蠅（はえ）と蛆（うじ）がすごかった。人々はよもぎの葉っぱを鼻に突っ込んでごまかしながら歩いた。多くの人は棒をもって歩いた。なぜ棒をもって歩いたかと言いますと、腐っている死体をグシャッと踏みつけますと、たいへん気持ちが悪い。なにより御無礼でもありますね。さらに腐敗が進んでフーセンみたいにふくらんで、黄色くなった死体を避けるため、棒で死体のないところを探して歩いて逃げていったわけです。こういう体験談がいっぱい出てくる。

さきほど沖縄戦で 20 万トンの爆弾が撃ち込まれた話をしましたが、沖縄戦でアメリカ軍がもっとも多く使った爆弾は 250 キロ爆弾です。250 キロ爆弾が一発落ちてきますと地上はどうなるか。50 メートルプールぐらいの穴があく。半径 700 メートル以内の木造住宅は吹っ飛んでしまう。これが 250 キロ爆弾。一坪に 1 トンといいますと、一坪にこの爆弾が 4 個落ちたことになる。

⑫戦争に巻き込まれたすべての人には、目が入っていない

この部屋は 44 坪あります。この部屋で 176 発の 250 キロ爆弾が落ちた計算になります。こういう猛烈な爆撃、艦砲射撃の中で人間の体はどうなったのか。もちろん原型をとどめていません。人間の体は肉片となって飛び散るわけです。ここには手足だけになってしまった体が描いてありますが、丸木さんはこれらすべてをきれいな線で描いた。人間の尊厳を大事にしたい、仏性を大事にしたいという思いできれいな線で描いた沖縄戦の図です。要するに沖縄戦の戦場では、この絵に描かれているような五体満足な死体は一つもなかったということです。沖縄戦から 60 年経ちました。沖縄では今でもなお不発弾も遺骨も出てきます。しかし、断片になった骨は誰の骨かわからない。このたくさん出てくる遺骨は親兄弟、遺族に返すことはできません。今なお、遺骨は共同墓地に納められている状況が続いています。

⑬谷川さん、チェさん、火炎放射器で逃げる母子

⑫この絵のもう一つの特徴は、戦争にまきこまれたすべての人に目が入っていません。この目、例えば、妹とお兄ちゃん、目ん玉が描いてありません。このおじょうさんにも瞳が描いてありません。⑬久米島で虐殺された谷川さんにも、火炎放射器の下で逃げるお母さんと子どもたちにも目が入っておりません。人間の顔を描くとき一番大事なのが目です。目がその人の人格や心の状態を象徴します。人の顔で一番重要な目をあえて入れていません。このことはいろんなことを考えなければなりません。

世界で起こっている地上戦という、日本本土では経験したことのないすぐ間近に敵と味方がいて殺し合うという地上戦をした沖縄戦、そういう場におかれたら、あなた自身の心中はどうなってしまうのか。そういうことを考えながら、丸木さんが戦争で亡くなっていった人の目を入れなかった意味について考えてみる必要があります。

一つヒントを言っておきましょうか。沖縄戦を体験した人に、いつ家を出たのですか、いつ捕虜になったのですか、と体験を時間の流れに沿って聞きますと、極限の体験をした人はきまってそうなんですが、極限の体験を記憶からスポーンと抜かしてしまっている。極限部分の体験を記

憶として残しておきますと自分の心が壊れてしまう。

⑭目が書かれた 3 人の子供

沖縄戦というのはそういう体験でした。そういうことを考えながら、丸木さんが戦争に巻き込まれた人々に目を入れなかった意味について、一人一人考えてみてください。⑭それからこの真ん中、この子とこの子とこの子、小さな子ども三人だけに目が入っています。この小さな子どもたち、つまり次の時代を担っていく人たち、戦争が起こったら戦争という状況の中で、私たち人間はどうなってしまうのか、戦争という状況の中で女性やお年寄りや子どもはどうなってしまうのか、よく見てしっかり考えて記憶してもらいたいという願いをこめて、画家はここに目を入れました。丸木さんは戦争という状況や原爆が落とされたという状況の中で、われわれはどうなってしまうのか、女性や子どもはどうなってしまうのかそのことをしっかり見てしっかり考えて明確に記憶していくこと、これが次の戦争が起こった時にどういう状況になるのか、つまり次の戦争を予測する力をもった記憶、こういう記憶のしかたを人々がしたときに戦争をくい止めることができるということを考えました。例えば、みなさんも見ておられるでしょうが、アフガニスタン、イラクのニュースがテレビで報道されますね、あのバクダットの空爆を見て、沖縄戦を体験したおばあちゃんが、沖縄戦を思い出して泣く。イラクの空爆を見ると沖縄戦を体験したおばあちゃんが泣く。

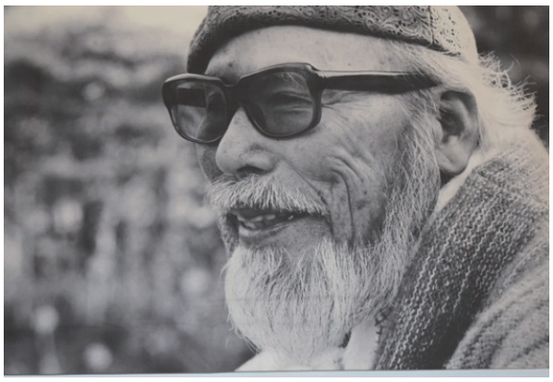
このような記憶が一番大事なんだということで、広島で原爆を体験した丸木さんは、原爆の図から沖縄戦の図まで、そういう思いをこめて 40 年間以上描きつづけたわけです。そういう点でこの絵は、丸木さんの非常に深い思いと怒りといいますか祈りですね、それがこめられた絵です。⑮また、ここのガイコツの山の中、すなわち死んでいった人の中に丸木位里・丸木俊は自らの顔を描き込んでいます。

⑮丸木位里・俊さんは、自らの顔を描き込んでいる

（佐喜眞道夫著『沖縄の心を』37～48 頁）

■この文章は、『沖縄の心』掲載の文章（2006 年 1 月 13 日に佐喜眞美術館で、佐喜眞館長が、修学旅行で訪れた仙台白百合高等学校の皆さんに「沖縄戦の図」を説明・解説したものである）を、館長自ら加筆修正されたものである。なお、文中の写真（吉岡が館長から助言をいただき

撮影をした)挿入については、館長から承認をいただいた。



丸木位里さん（佐喜眞美術館に写真展示）

丸木　俊さん（佐喜眞美術館に写真展示）

■丸木位里（まるきいり）さん・丸木俊（とし）さんと「沖縄戦の図」

丸木位里（1901 年～1995 年：94 歳）・丸木俊（1912 年～2000 年：87 歳）夫婦の描いた「沖縄戦の図」は、地上戦である沖縄戦を体験した方々の証言に基づき、その人々がモデルになって描かれたものです。

丸木夫妻は、「日本人の多くは体験した「空爆」を戦争と思ってしまっている。世界で起こっている戦争は地上戦なんだ。空爆と地上戦はまったく違う。日本人は戦争に対する考え方は甘い、こういう国はまた戦争をするかもしれない。」と述べていました。

「沖縄戦の図」は、地上戦を国内で唯一体験した沖縄の人々に沖縄戦のことを教えてもらいながら戦争で人間がどのように破壊されるかを描き、そのことをしっかり見て、戦争をしない歴史を歩んでいってほしい、という丸木夫妻の願いが込められています。

佐喜眞美術館の第三展示室には、丸木位里・俊の共同制作による「沖縄戦の図」を 1994 年の開館以来、常設展示しています。　（佐喜眞美術館ＨＰ）

美術館前庭に建つ佐喜眞家の墓である沖縄独特の「亀甲墓（かめこうばか）」

佐喜眞美術館の外観

「沖縄戦の図」常設の第三展示室

館長 佐喜眞道夫氏プロフィール

1946 年、熊本県甲佐町に生まれる。高校時代に真宗寺（熊本市健軍）の仏教青年会に参加。

1974 年、立正大学大学院文学研究科史学専攻を終了。

1975 年より、絵画の収集、研究を始める。

1979 年、関東鍼灸専門学校を卒業後、鍼灸院を開業（千葉・東京）

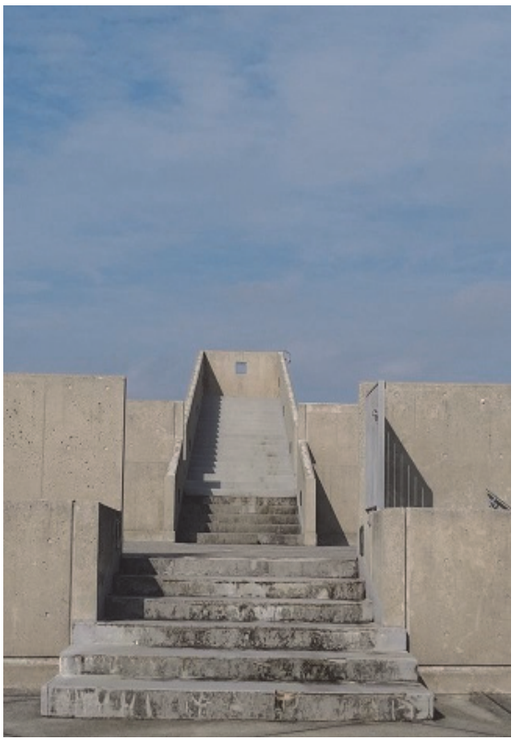
1984 年 4 月、丸木位里、俊と出会う。

1994 年 11 月 23 日、佐喜眞美術館を開館する。

佐喜眞道夫氏の主な編・著書

『アートで平和をつくるー沖縄・佐喜眞美術館の軌跡ー』岩波ブックレット、岩波書店、2014 年

『沖縄戦の図:丸木位里・俊共同制作』丸木位里・俊(画)、佐喜眞美術館編、2006 年



美術館の屋上からは普天間飛行場を見渡すことができ、屋上の階段は慰霊の日の太陽の日没線にあわせて設計されている。

階段の数は、6 月 23 日の「沖縄慰霊の日」にちなんで、手前の階段が 6 段、奥の階段が 23 段になっている。

佐喜眞美術館（さきま）　館長 佐喜眞道夫

〒901-2204　沖縄県宜野湾市上原 358

TEL 098-893-5737

FAX 098-893-6948

開館時間　9:30～17:00

休 館 日　火曜 日・年末年始

入館料 大人 700 円(630 円)

中高 600 円(540 円)

小人 300 円(200 円)

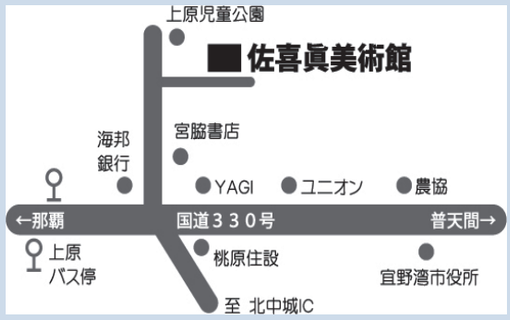
※(　)内は、20 名以上の団体料金

※友の会:年会費 3,000 円(1 年間入館料フリー特典・随時募集中)

ウェブ:http//sakima.jp

メール:info@sakima.jp

案内図



■丸木ご夫妻は共に真宗とご縁が深く、親鸞聖人の教えに深い影響を受けておられたようです。特に丸木俊さんは、北海道の真宗興正寺派「善性寺」にお生まれになりました。聖人の絵像を墨で模写された掛け軸が「善性寺」に所蔵されていますのでご紹介します。

沖縄の声に聞く－戦争からみえてくる人間の相（後編）－

生かされた意味を問う

大田昌秀

―― 前回は、沖縄戦の実態から、人間性が無情にも奪われていくことを中心にお話しいただきました。今回は、太田さんが平和運動を始められたきっかけから教えていただけますか。

大田：前回も申し上げましたが、戦時中に人間不信に陥って、もう生きている意味がないと絶望的になっていました。しかし、「新憲法」を見て生きる意味を見出したのですが、同時に、たくさんの犠牲者の中から自分が生き残った意味は何かということを問われました。そのうち、自分は生かされたんだと思うようになりました。惨めな戦争を起こさせてはいけない、これこそが自分が生かされている意味だと思い、戦後からずっと平和運動に携わってきたのです。

そして、はからずも 1990（平成二）年に沖縄県知事に就任しました。就任中は、二度と沖縄を戦場にしない、させない、加担させないという願のもと、①「沖縄県平和祈念資料館の拡充と内容の充実」、②「平和の礎の建立」、そして③「国際平和研究所の建設」を沖縄県の平和行政の三本柱として活動してきました。平和祈念資料館と平和の礎は在任中にできたのですが、国際平和研究所の設立は時間切れでできませんでした。しかし、知事を辞めて二年目に個人の平和研究所を作り、現在、ＮＰＯ法人・沖縄国際平和研究所として活動しています。

―― 平和の礎では、敵味方関係なく、沖縄戦で亡くなられた方々の名を刻んでいるのが印象的です。

大田：平和の礎を作ったのは、沖縄に攻め込んできたアメリカの人たちも戦争の犠牲者だということがよくわかったからです。アメリカのアルバートＣ・ウェデマイヤーという将軍が、「第二次大戦に勝者なし」と言っています。戦勝国であるアメリカの兵隊が家族のもとに帰って平和な生活を始めた時に、戦争で人殺しをしたという思いがずっとつきまとって、家庭内暴力が起こるなど、人生がめちゃくちゃになってしまうことがあったそうです。何のために戦争に勝ったのか意味がわからなくなっていると言っているのです。

ですから私は、アメリカの兵隊も、敵味方関係なく戦争の犠牲者だと思ったのです。そんな戦争を二度とやらせてはいけないという意味を込めて、戦争で亡くなったすべての犠牲者の名前を刻もうと平和の礎を作ったのです。

―― 沖縄戦で二十数万人の方が亡くなったなどと、すぐ数字に換言する傾向がありますが、平和の礎には、敵味方を超え、お一人おひとりの名前を刻んでいる。そこに、個人の尊重という姿勢をうかがうことができて、本当に有難く思います。

私たちの責任

―― 大田さんのように戦争を受けとめておられる方がいる一方で、戦争を美談として受けとめ、戦争の犠牲者を民のため、国のために尽くした人として崇めるということもあります。

大田：そうですね。鉄血勤皇隊として戦場に出された一人としても、いかにも殉国美談に祀り上げるようなことに対しては賛成できません。戦争で多くの沖縄の人たちが犠牲になったわけですから。

戦争を美談にしていく背景には、美談にすることによって、死者たちを弔っているという気持ちになるということがあると思います。そうなってしまうと、それ以上死者の声に耳を傾けることはできなくなってしまうのです。それは慰霊の問題と一緒ですが、慰霊というと、霊を慰めて、もう安らかに眠ってくださいと言うんです。しかし、決死して亡くなった方は安らかではないと思うのです。やはりいろいろな思いをもって、今もわれわれに呼びかけてきているのです。

――『死者たちは、いまだ眠れず「慰霊」の意味を問う』というご著書の中で、大田さんにおける戦後は、「むごたらしい死をとげた恩師や学友たちのいわば「慰霊の道のり」にほかなりませんでした」ということを書いておられますが、まさに、大田さんの平和運動は、そういう思いから出てくるわけですね。

大田：それは、生かされた者の責任であり、悲運な死をとげた無数の死者たちに報いる道だと思うからです。

もっと言えば、誰しもがこの戦争責任というものを担っていかなければならないと思うのです。しかし戦後生まれの戦争を知らない世代の方々の中には、戦争の責任は自分にはないと言う方がいらっしゃるのも事実です。ですが、戦争が行われていた時代に生まれていなかったといって、過去と無関係でいられるでしょうか。

ここで思い出されるのがドイツのヴァイツゼッカー元大統領の言葉です。1985(昭和六〇)年五月八日に行われた、ヨーロッパにおける第二次世界大戦終結四十周年記念日の演説で、彼はこのようなことを言いました。

「罪責があろうがなかろうが、年を取っていようが若かろうが、われわれはすべてこの過去を引き受けなければなりません」「老人も若者も互いに助け合って、この過去の記憶を生き生きと保つことが、自分たちの生命にかかわる程の大切なことであるのはなぜなのか、よく理解しうるようにしなければならないし、それは可能なのであります」「この過去を清算することが大切なのではありません。それは、われわれには不可能であります。過去を後から変更したり、なかったことにすることはできないのです。しかし過去に眼を閉じるものは、現在に対しても目を閉じるのであります。かつての非人間的な事柄を思い起したくないとする者は、新しく起こる罪の伝染力に負けてしまうのであります」「多くの人々が言います。いつまでたっても、この永遠に未解決の過去の問題を論じるのか。われわれはそれに関係がない。もうそれでわずらわされたくはないのだ、と。私が思いますのに、真実はちょうどその逆だと思います。事柄をよく見極めないこと、それこそ、われわれの重荷を意味するのであります。しかし、過去とはっきり向かい合うこと、それがわれわれを自由にします」。

確かに彼の言うとおりだと思うのです。そして過去と向き合う方法が、私にとっては「慰霊とは何か」を考えることだと思うのです。

戦争のない世界を願って

―― 私たちの宗門は毎年四月に、戦争で亡くなられたあらゆるいのちを憶念し、非戦の願いを共に確かめていく「全戦没者追弔法会」をお勤めしています。今年のシンポジュウムには大田さんにも登壇いただきましたが、どのようなことをお感じになりましたか。

大田：今回、一番私が感動したのは「全戦没者追弔法会」にあれだけの方々が集まっていたことです。

あれだけの方々が死者を弔うということは非常にありがたく、私の気持ちとぴたっと合います。また宗教関係で、これほどはっきりと戦争を否定して、あらゆるいのちを大事にするということを表明していることに、本当に感銘を受けたのです。同時に本土の皆さんの宗教心の強さについて、すごく感動しました。沖縄の多くの人たちは、宗教の話をすることがごくごくまれでしかないものですから、今回お伺いして、沖縄でも親鸞聖人の教えに代表されるような宗教的な呼びかけを本気で考えなくてはいけないとつくづく感じました。

―― ありがとうございます。私たち宗門の先輩方も戦争で傷つき亡くなられた方が多いのですが、単に世間でいう慰霊ということだけで終わらせないように考えていく必要があります。その方々の思いを受けとめていかないと責任を担うことにはならないと思うのです。

追弔の「弔」は、「訪う・訪ねる」という意味があります。私たちが本当の意味で死者を弔うということは、訪ね聞いていく、そういう応答をしていくことが大切だとあらためて考えさせていただきました。

大田：世界的に有名なノルウェーの平和学者ヨハン・ガルゥングという方が平和について次のようなことを語っています。「戦争のない状態を平和というけれど、それだけでは平和ではない。むしろそれは消極的な平和であり、戦争という直接的暴力がないからといって平和とは言えない。国同士の経済的格差、不公正、収奪をはじめ、学校のいじめや、男女差別などの構造的暴力をなくしていくことが積極的平和をつくる道だ」と。私はこれが真の意味での「慰霊」だと思うのです。

言い換えれば、そうすることによって、真に世界の人びとが戦争を放棄し、互いの文化を尊重し、助け合い補い合って生きる共生の社会、共生の世界をつくることも可能になるのです。私は、そのような慰霊の道を障害にわたって歩んでいきたいと心から思います。

（「大田昌秀氏に聞く」（後編）「同朋新聞」真宗大谷派、2016 年 8 月号）

２．慰霊とは

慰霊とは何か　林立する慰霊の塔に想う

大田昌秀

さる太平洋戦争で日米最後の戦闘となった沖縄戦の、そのまた最後の激戦が、沖縄本島最南端の喜屋武（きやん）半島の摩文仁が丘一帯で展開された。戦後、その戦場跡は、国定戦跡公園に指定され、園内には多数の大小さまざまな形の塔が立っている。いや、立っている、というより「立てられている」。

むろん、それらの塔は、「慰霊の塔」である。つまり、さる日米さいごの決戦で、国のため、天皇陛下のためと称して日本各地から本土防衛の防波堤に位置づけられた沖縄に馳せ参じ、無残な負け戦を戦ったあげく犠牲となった数万人の将兵たちの霊を慰めるために、戦没者それぞれの郷里の遺族や行政当局、あるいは生存者たちが建立したものである。

このような慰霊の塔は、摩文仁が丘一帯だけでなく沖縄のほとんど全域の戦跡に立てられている。あらためていうまでもないが、これらの慰霊の塔のひとつひとつには、生き長らえた人々の戦争犠牲者に対する無限の悲しみ、痛み、切実な哀惜の想いがこめられている。それゆえ、塔の前にぬかずくとき、わたしたちは、一家の杖とも柱とも頼む夫を、親を、兄弟を、そしてわが子を荒涼たるさいはての地に失った無数の遺族たちの、言葉には表わせない悲しみが痛いほどわかる。

それどころか、心耳を澄ましてきけば、不遇の死を遂げた人々の苦悶の声が、塔の下から背後の潮騒とともに聞こえてくることに気付くはずだし、また、ついに叶うこともなかった死者たちの生への切なる渇望をも汲みとることができるにちがいない。

とりわけ、わたし自身のように、死者と共に戦闘に参加し、ここ摩文仁が丘の狭小な一角に追いつめられたあげく、陸・海・空からする敵の集中的な砲爆撃にさらされながら奇しくも生き残れた人々にとっては、次から次と束になって斃（たお）れていった戦友たちがいまわのきわにみせた苦悶の姿はむろんのこと、戦場で逃げ場を失なった地元の老幼婦女子たちの目を覆わしめる断末魔の様相は、忘れようにもとうてい忘れうるものではない。それはまるで悪夢としかいいようがないほど、文字どおり人の世の終わりを示す凄惨な殺りく場面の連続だったからだ。

それだけに、40 年前の人間屠殺場としかいいようがない殺りく情景は、まるで昨日のことのようになまなましく瞼に焼き付いているし、死者たちが発した呻き声も、今以って耳からはなれないのである。しかも、見る影もなく変り果てた戦友の遺体を自分の手で埋めた者も少なくはなかっただけに、死者たちから死に際にみせた無念さが自分の皮膚をとおして思いやられるだけでなく、彼らの声にしたくてもできなかった辛さ、怒りも汲みとれるのである。

だとすれば、わたしたち生き延びることができた者は、せめて死者たちのその口惜しい想い、「声なき声」を可能なかぎり正確に後世の人々へ伝えなければならないのではないか。でなければ、戦没者は、おそらく永久に浮かばれまい。死者たちの魂が浮かばれるようにしてあげることこそが、慰霊というものだと思う。

だが、戦後 40 年がたち、戦争を体験した人たちの数が年を追うて減少するにつれ、慰霊の意味も大きく変容しつつある。このところわたしは、摩文仁が丘一帯に林立する日本全国の都道府県の華麗な「慰霊の塔」をみるにつけ、いったい慰霊とは何か、これらの「慰霊の塔」は、はたして何を意味するのだろうか、と考え込まざるをえなくなっている。

というのは外でもない。かの言語に絶する戦争を体験した戦中派でさえ、近年の日本の表面的な経済繁栄に心を奪われてか、40 年前の地獄の苦しみを丸ごと忘れさったかのように振舞う人がいる。かと思うと、いかなることがあっても「二度と再び銃を執るまい」と固く決意したはずの誓いのことばとは、まるでうらはらの言動をなす者も目立って増えているからだ。

戦争経験者でさえこうだから、ましてや戦場の実相を知らないいわゆる“戦無派”の人々は、戦争の恐さも知らなければ慰霊の意味についてじっくりと考えようともしない。あまつさえ、政治権力や一部財界人の唱導する防衛力増強論になんら顧慮することもなしに安易に追従しかねない実情である。

それどころか、今では沖縄の教訓を、次の戦争を想定し、それに向けて活用するべく図っている人々さえ現われている。信じかねることだが、沖縄戦を生き延びた元日本軍の将校級に多いが、沖縄戦における敗戦の教訓を純作戦的な観点だけからとらえ、将来の戦争では、それらの敗因を教訓に生かして二度と同じ失敗をくりかえすなと主張しているのだ。つまり沖縄戦の教訓の逆用である。恐ろしいことというよりない。

沖縄戦では、守備軍は話にもならぬほど一方的に不利な条件下（米軍の約五分の一の兵力と、武器、弾薬、食糧等は 10 分の 1 以下）での戦闘を余儀なくされた。その過程で、守備軍将兵のあいだに文字どおり人間性を喪失したのが相次ぎ、まるで動物以下の存在になりはてる事態をわたしたちはこの目に嫌というほど見せつけられた。

わずか一滴の水、一握りの食糧が欲しいばかりに、いとも簡単に自分の戦友を殺りくする者もいれば、自己保身から住民の避難壕に押し入って、食糧を奪っただけでなく、恐怖に怯えて泣き叫ぶ幼子を壕の所在が敵にばれるとして女親の目の前で首を締めて殺してしまう者も出るなど、およそありとあらゆる非人間的悪業のかぎりをつくすのが普通になったのである。

しかも戦時中は、将校というだけでみずからは安全な壕内に身をひそめたまま、一片の命令であたら無数の下級兵士たちを惨殺させてしまった人たちが、生き延びたはいいとして、戦後になるとまたぞろ人々の前面に立ち、再び戦争を想定して沖縄の教訓を逆用しようというわけだ。

いったいこの種の人たちには、沖縄戦における 10 数万の住民の犠牲になんらの痛痒も感じないのだろうか。彼らの命令で全くの無暴な戦闘を強制した結果、犬死同然の死を余儀なくされた 10 万余の将兵の戦没も、なにほどかの意味さえもたないのだろうか。敗戦から現在に至る平和にしても、またわれわれの生存自体にしても、まさに彼らの尊い「血でもってあがなわれた」ものに外ならない。彼らにはその事実さえ認識できないのか、それともそんなことはどうでもいいとでも思っているのだろうか。

沖縄戦では慶良間諸島守備部隊の一指揮官をつとめ、戦後は自衛隊で沖縄史を教えていたある元陸将補の場合も、その一例にすぎない。慶良間諸島といえば、700 人近くの地

元住民が集団自決をしたほか、何人かの住民がスパイの濡れ衣を着せられて友軍の守備隊将兵によって殺害されたことで知られている。この元指揮官は、非戦闘員の殺りくについて、「これを現地部隊長の責任だとして責めるだけでは、ただの個人非難に終ってしまい、将来のための戦訓はえられない」として、「沖縄戦は、明治以来、外地ばかりで戦争してきた日本軍が、はじめて経験した国土戦でした。戦争が始まる前に国土戦のやり方を決めておくべきだったが、それがなかったので、外地の戦場でやってきた慣習をそのまま国土戦に持ちこみ、沖縄戦の悲劇がおこったのです。」と述べている（1978 年 12 月 2 日付『朝日新聞』）。

この元高官の発言からは、日本の侵略によって隣国の民衆がいかに悲惨な目に遭わされたか、自国民を殺害したことに対する痛みといったものも感じられない。彼は、自衛隊は有事の際には選択なしに国土内で戦わなければならないから、沖縄戦を究明して学ぶべきだと、こう語っている。

自衛隊のグループ研究で、もし対馬に敵が上陸してきたら、という仮定で討議をした際、彼自身は、沖縄戦の教訓から対住民対策の重要性を主張したけれども、「島民をどうするか、については上からの指示で避けて通り純戦術的に議論をすすめた」と。

師団以下の戦闘方針を規定している『作戦用務令』に「軍の主とするところは戦闘なり。」とあるとおり、これが軍隊の軍隊たる所以だとはいえ、まさに“語るに落ちる”というよりない。

それが最近では、沖縄戦の教訓を日常的商売に生かそうという本まで現われているから驚きである。しかもその６人の著者のうち、４人はれっきとした防衛大学の教官である。『失敗の本質―日本の組織論的研究―』という最近ベストセラーになっているのがそれだが、ちなみに著者たちは、日本軍の失敗がどうして現代の組織にとって関連性を持ちうるのか、また教訓となりうるのか、と反問した上で、自らこう答えている。

そもそも軍隊とは、近代的組織、すなわち合理的・階層的、官僚的組織の最も代表的なもので、戦前の日本において、その軍事組織は、合理性と効率性を追求した官僚制組織の典型と見られた。戦後、日本軍の組織的特性は、その欠陥をも含めて、戦後の日本の組織一般のなかにおおむね無批判のまま継承されたが、「日本軍の組織原理を無批判に導入した現代日本の組織一般が、平時的状況のもとでは有効かつ順調に機能しえたとしても、危機が生じたときは、大東亜戦争で日本軍が露呈した組織的欠陥を再び表面化させないという保証はない。」という。

要するに著者たちは、こうした問題意識をふまえ、「大東亜戦争における日本軍の失敗を現代の組織一般にとっての教訓として生かし、戦史上の失敗の現代的・今日的意義を探る」として沖縄戦の教訓なるものも取り上げているわけだ。

著者たちのいう沖縄戦の教訓とは、要するに大本営や第 10 方面軍の上級司令部と現地守備軍の第 32 軍との間に根本的な作戦面で対立があったとか、沖縄作戦のねらいが、本土決戦準備のための戦略持久にあるのか、航空決戦に寄与する攻撃作戦にあるのか、作戦目的が曖昧だったといった純軍事面だけの議論に終っている。しかも、米軍が沖縄本島に上陸して二日目の大本営機密日誌は、「総理より琉球の戦況見透如何との質問あり、これに対し、第一（作戦）部長より結局敵に占領せられ本土来寇は必至と応答す」と記述されている旨、言及していながら、そうした状況下に放置された 40 数万の住民対策に

ついてなんらの論及もないとは、まさに衝撃的である。

いいかえると、沖縄戦の失敗を分析した本とはいいながら、著者たちの参照した文献リストには、住民の記録は一冊もなく、沖縄戦が本土防衛の捨て石作戦にほかならなかった史実と共に、戦火で致命的な犠牲を被った住民についても無視したままである。

実は、こうした事態こそが、せっかくの「慰霊の塔」の本質的意義をゆがめる要因になったように思われてならないのである。沖縄守備軍首脳が自決した摩文仁が丘の麓にある沖縄県立平和祈念資料館の「展示の結びのことば」は、こう述べている。

「沖縄戦の実相にふれるたびに戦争というものはこれほど残忍でこれほど汚辱にまみれたものはないと思うのです。このなまなましい体験の前ではいかなる人でも戦争を肯定し美化することはできないはずです。

戦争をおこすのはたしかに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力のできるのも私たち人間ではないでしょうか。

戦後このかた私たちは、あらゆる戦争を憎み平和な島を建設せねばと思いつづけてきました。これが余りにも大きすぎた代償を払って得たゆずることのできない私たちの信条なのです。」

おそらくこの文言が意味する内容は、沖縄の多くの人々の気持を代弁したものといえよう。ところが、摩文仁が丘一帯の「慰霊の塔」はいうに及ばず、沖縄の各地に散在する慰霊の塔の碑文には、こうした沖縄住民のこころと背反するのが少なくない。今わたしの手元には、靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会の手になる『戦争賛美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告―』という小冊子がある。これをみると、問題含みの碑文が少なくないことがよくわかる。

碑文調査に約２か年がかりで当った前記連絡会代表の平良修さんは、ことが死者にかかわる厳粛なものであり、かつまたなまなましい痛みを負い続ける遺族の心の深いところに触れる作業なので、終始真摯な姿勢で調査に当たったといい、調査の目的をこう明らかにしている。

「悲惨な戦争体験をくり返してはならない、また、くり返させてはならない、無数の戦没者の死を平和実現へのバネとして意味あらしめなければならない。私たちの意図は徹頭徹尾この平和希求にありました。そのために、戦没者を祀る慰霊塔碑文の中に、今を生きる日本国民の心がどのように反映させられているかを見ることにしました」と。

さらに調査の結果、彼らが指摘しなければならないと感じたことの最大のものは、「調査したすべての碑文をとおして、あの戦争についての、もっと正確にいうと、自分らの戦争の加担についての罪責の自覚が見当らない」、いいかえると、戦争に協力して手を汚したはずの人たちの痛みのうめきが、群立する慰霊塔からは聞こえてこないというわけである（同著の“まえがき”参照）。

では、いったい碑文はどうなっているのか。調査結果を大まかにまとめたのをみると、「ひめゆりの塔」や「アーニ・パイルの碑」（現在は米軍基地内に移設されている）などのように 1940 年代に建てられた慰霊の塔は、いずれも地元の人たちが建てたもので、それらには碑文がなかったり、あってもたんたんと史実を記述したものである。ついで同 50 年代に建てられた 21 の塔のうち県外の人たちが建立したのは北海道の塔一つだけで、残りは「島守の塔」、「梯梧の塔」、「沖縄師範健児之塔」など地元の人々によって建てら

れたものだが、これらの多くも碑文はないか、たんに事実経過を記したものである。ちなみに「健児之塔」に隣接する「平和の像」の碑文は、わたしなどが書いたものだが、たんに事実経過を述べたにすぎない。

ところが、1960 年代に建てられた 73 の塔のうち、42 は他府県の人々によって建立されたものだが、そのうち 32 の塔の碑文は、戦争・戦死を肯定し、美化する調子の文言を含んでいるほか、地元の沖縄遺族連合会の手になる 20 基の塔のうち 15 の塔に同じく戦争を肯定し、戦死を美化する調子の文章があるという。この点、碑文の総括的検討に当った琉球大学の中原俊明教授は、あらまし、つぎのように分析している。

60 年代は、日本が経済成長時代を迎える時期であると共に、政治的には池田・ロバートソン会談を経て日米政府間で日本の再軍備問題についての合意がなされ、軍備増強に向けて本格的に踏み出したときである。一方、教育の分野では、歴史の書き替えが始まり、それまでの太平洋戦争という呼称が大東亜戦争に改められたのに伴い、戦争自体をも肯定する風潮も表面化した。こうした状況下で、おそらくは遺族たちにたいする国の援護措置の拡充を期待してのことだろうが、沖縄遺族連合会は、賀屋興宣会長の率いる日本遺族連合会との結び付きを強めた。賀屋会長といえば、元大蔵大臣をつとめ、戦後は A 級戦犯として服役したこともある政府与党の大物であり、また公然と戦争を肯定する発言をしつづけた。

ところで、中央でのこうした動きに、ことのほか中央指向の発想が強く、ともすれば“伝統的”な事大主義に陥りがちな沖縄一部年配の人士が追従したのも、半ば自然のいきおいであった。だが、これでは慰霊の塔へ参拝する人たちから沖縄の人たちがしばしばロにする「反戦平和」という言葉は、はたして本物だろうか、と批判されても返す言葉もなかろう。

なお、前掲書（『戦争賛美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告―』）によると、1970 年代に新設された三つの塔のうち二つにも戦争肯定調のものがあるほか、再建された塔にも似たようなのが少なくないという。

ともあれ、何百とある慰霊の塔のうち、沖縄戦の始まる直前あたりから学業半ばで守備軍に動員され戦場に投入された県内の学徒隊を祀る塔には戦争を肯定したり戦死者を美化したりする碑文がほとんどないことは、一つの救いである。おそらく人生で最も多感な 10 代に、戦場で人間と人間が殺し合う修羅場を見、あたら若い学友たちがいたずらに砲弾の餌食となって斃（たお）れていく場面に身を以って立ち合ったことのある人々にとっては、いかなる美辞麗句をもってしても死者たちを慰撫することもできなければ、またみずからの心に受けた傷をいやすこともできないからではないか。しょせん、死は死でしかなく、したがって生きている人々による賛辞も無意味というよりない。

とはいえ、遺家族にとっては、戦没者の死を美化し、なんらかの意義付けをしなければ心休まることもあるまい。だが、むろん、いかに辛かろうが、死者たちの死の無意味さを直視したいものである。そして沖縄で老人たちが口にしてやまない「命（ぬち）どぅ宝（たから）」という言葉の意味を十分にかみしめる必要があろう。でなければ、慰霊の名において逆に死者たちを冒とくすることにもなりかねないからだ。

そのことは、大田英雄氏の「父·大田実少将と沖縄戦について」という一文にも明確に示されている。大田実少将とは、沖縄方面根拠地隊司令官として小禄地区の守備に当った後、守備軍に協力したがために甚大な犠牲を被った地元住民にたいして後世特別の配

慮を乞うといった趣旨の電報を打って自決した人である。その父親の墓参に沖縄を訪れた息子さんは、「父の最後の地である海軍壕で、私は合掌することすら忘れたほど、海軍壕の中で私を支配したのは、悲しみと怒りと疑惑であった」として、こう記しているのだ。

「なぜ入場料をとるのか、なぜロウ人形など置くのか、親父の顔をメダルに刻むのはなぜだ、立派な軍人だからか、本当に立派なのか、この壕の目的は何だ、反戦恒久平和を祈念するとあるが、訪れる観光客が、本当に帝国主義戦争の無意味さ、非人間性を知る手助けになるのか、丘の上に軍艦旗が掲げられているのはどうしてか、かつての戦争指導者岸信介氏らはどんな気持で植樹したのか、立派な供養塔や植樹することが沖縄戦で死んだ多くの将兵、県民の最善の施策なのか（・・・摩文仁の丘の各県競争の林立する供養塔をみて、ますますその疑惑を強くしたが）・・・次から次へと湧く疑惑に私はいらだっていた。いったい私は何にいらだっていたのであろうか。ともかく私は、豊見城の丘から一刻も早く逃げだしたくなる思いにかられていたのである」

（沖縄思潮編集委員会『沖縄思潮』1974年7月、第1巻第4号参照）

この言葉には、遺家族の痛切な心事が率直に吐露されているが、確かに「慰霊の塔」の中には、不可解としかいいようがないものもある。よく指摘されることだが、たとえば「黎明之塔」などその好例であろう。

周知のとおりこの塔は、守備軍首脳を祀っているようだが、死んでも首脳は首脳だといわんばかりに、たとえば住民が無名兵士たちを祀った「魂魄の塔」などとは比べものにもならないほど豪奢なものである。とりわけ碑名は、吉田茂元首相の揮毫だという。前引の大田実海軍少将がいまわのきわに「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と中央政府に要請したにもかかわらず、逆にその沖縄県民をみずからの手で日本から切りはなして27年もの間､異国の軍隊の統治下においたまさにその当事者の手によるのだ。いかにも中央政府と沖縄との対応関係を示す象徴的出来事ではないか。

わたしは、この一事によって付近一帯に林立する塔の慰霊の意味が喪失せしめられた気がしてならない。しかも伝えられるところによると、この塔の建立にとくに力を注いだのが地元出身の一部指導者たちで、戦前は沖縄文化を抹殺することを指示、若人たちにひたすら皇民化を強制して沖縄戦で死地に追いやり、未来を担うあたら多数の若い命を犬死させた張本人たちだというから驚きである。

なぜなら、普通の感性の持主なら戦前から戦時中にかけての自らの言動を省みれば、戦後は身をひそめ、人前に出て再びタクトを振ることなどできるはずがない。にもかかわらず平和の名において軍備増強に励む中央の政治権力と結んで、慰霊の名において死者たちの死を賛美し、再び銃を執らせようと手を代え品を変えて努めているしまつである。とりわけ弱い立場の遺家族を物質的な餌で釣ると共に国家によって死者たちを護持するなどといいくるめる形で・・・。その結果が前にみた碑文のゆがみではないか。

前掲の大田英雄氏は、子として父が地元住民を戦闘のまきぞえにすることを排した立派な軍人であったといわれて悪い気がせず安堵に似た気持がするのも事実としながらも、それを喜んでいいものかと自問して言う。

「父を賛美しもちあげているのは、何も沖縄豊見城の海軍壕の解説だけではない。復帰する当時の国会で、山中総務長官ももちあげたし、海上自衛隊の広報物『海自新聞』にもデカデカと、まるでこれみよがしにPRしていた。いったい、だれが、どういう意

図で、父を賛美しもちあげているのか。防衛庁や政府高官の政治的意図は、あまりにも明白である。軍人にもこのような立派な人がいるのですよと PR することによって、軍隊は常にこうして国を守り、国民のことを親身になって考えるのだという、自衛隊への親近感の植えつけを狙ったものであるし、憲法違反の自衛隊に市民権を与えようと策謀することに他ならない。」（前掲誌、32 頁）

これは、肉親を喪った悲嘆をこえて、慰霊の意味を真剣に追究した数少ない一例であろう。

論はやや前後するが、前述の「黎明之塔」が例証するとおり、軍部首脳は、無暴きわまる戦闘を挑んだあげく、さいごは自ら死を選んだことによって一種の免罪符を獲得した形となっている。だが、軍首脳の命令で戦場に投入された地元住民や戦禍にまきぞえにされた非戦闘員のおびただしい死の責任は、いったい誰がとるのだろうか。免罪符と引きかえに無責任体制がまかりとおる事態についても、手きびしい批判があることは指摘しておく必要があろう。岡本太郎氏の一文もその一例である。やや長い引用になるが、次にみてみよう。

「・・・これらの戦場を一眼に見おろす、いちだんと高い荒い岩山の上、あそこで司令官、牛島中将が最後に自決したのだなどと聞くと、とたんにムラムラする。

情況はすべて知らされず、ほとんど盲目だった無数の島民や兵隊達をかりたて、一発射てば直ちに千発のお返しがくるという、手も足も出ない圧倒的な敵に対して、為すこともなく退き、追われて来た。最南端の海岸ぷちの洞窟にたてこもり、なお大日本帝国の軍人精神の虚勢に自らを縛り、鼠のように死んで行った。」

「とことんまで叩きつぶされていながら、そして目の下に自分らのおかした惨憺たる無意味な破局を眺めながら、ついに最後まで虚栄の中に、反省もなく、『帝国軍人らしく』自刃した――彼個人がとんな立派な人格の持主だったか、それは知らない。だがその軍部を象徴する暗いエゴイズム。――私は嫌悪に戦慄する。旧日本軍隊の救い難い愚劣さ、非人間性、その恥と屈辱がここにコンデンスされている。これはもっともっと叫ばれてよい問題だ。」（岡本太郎『沖縄文化論―忘れられた日本』、中央公論社、1961 年、18 頁）。

岡本氏は、また、こうも述べている。

「内地ではとかくアメリカの軍政下にある島民生活の悲惨さがクローズアップされる。・・・しかしこの戦跡を見ていると、はるかに日本人が日本人に対しておかした傲慢無比、愚劣、卑怯、あくどさに対する憤りで、やりきれない。」（前掲書、19 頁）

非戦闘員まで道連れにした軍隊のエゴイズム、無責任さを批判する岡本氏のような発言は、沖縄に関するかぎりそう多くはない。死者たちの犠牲にたいし慟哭の涙を流すのは無数にいるにもかかわらず、個々の死がどのような状況の下で、いかなる原因で起こったか、といった点への究明が欠落したまま、加害者の死も被害者の死もすべて「戦死」の一字でくくってしまうからだ。

たとえば、沖縄戦では、戦火で死んだ住民も多いが、守備軍の直接・間接の命令によって集団で自決をとげたのも少なくない。中でも慶良間諸島の渡嘉敷村で 350 人、同じく座間味村で372 人の住民が集団自決を決行しているが、その凄惨な大量な死について、防衛庁防衛研修所戦史室の『沖縄方面陸軍作戦』は、こう記録しているにすぎない。

「・・・この集団自決は、当時の国民が一億総特攻の気持にあふれ、非戦闘員といえども敵に降伏することを潔しとしない風潮がきわめて強かったことがその根本的理

由であろう。・・・小学生、婦女子までも戦闘に協力し、軍と一体となって父祖の地を守ろうとし、戦闘に寄与できない者は小離島のため避難する場所もなく、戦闘員の煩累を絶つため崇高な犠牲的精神により自らの生命を絶つ者も生じた。」（同著、252 頁）これも、いわば一種の賛美ではないか。

ここで詳しくふれるゆとりはないが、この集団自決は、親子兄弟、親戚知人同士が鍬や鎌、手榴弾、猫いらず等でお互いに殺し合ったもので、軍の直接・間接の命令によって強制されたものにほかならなかったからだ。

ともあれ、慰霊塔の参拝者たちは、一本一本の塔の背後に死者たちの死にざまを思い描いてほしいし、それによって自らの戦後これまでの生き方そのものを照射し、失ったもの、奪われてしまったもののもつ意味の重さを考えてみたいものである。そのためにも、わたしたちは、あくまでも戦争時の犠牲の大きさにこだわりつづけ、その全容を解明しつづけなければ、おそらくは、慰霊の念願を全うすることはできないであろう。この小冊を出す狙いも、またそこにある。

この小冊を通し、わたしは、読者のひとりびとりが、沖縄の地は、どこを掘り起こしても遺骨がでてくるところであるにもかかわらず、それらの遺骨が十分に収集もされないまま、その上に次の戦争に備える巨大な軍事基地が、平和憲法を嘲笑するかのように居座りつづけている現在の実情について一度は真剣に考えていただくことを祈念して止まない。

1985 年沖縄戦 40 周年にさいし　大田昌秀

（大田昌秀『沖縄戦戦没者を祀る慰霊の塔』那覇出版社、1985 年）

第４章　寄 稿 文

１．金城 実氏（沖縄在住：彫刻家）

「金城実が語る沖縄と慰霊」－149

２．知花昌一氏（沖縄在住：真宗大谷派僧侶　元読谷村議員）

「沖縄から日本を考える－非戦の祈り－」－173

３．平良 修氏（沖縄在住：牧師）

「沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの」－190

「はじめに―『戦争賛美に異義あり！』」　－196

４．金井 創氏（沖縄在住：牧師）

「慰霊から平和構築へ」－198

５．長谷 暢（沖縄在住：東本願寺沖縄別院職員）

「沖縄から問われている」－202

「沖縄の仏教・浄土真宗の歴史：紹介」－206

※金城氏、知花氏の文には、必要に応じて語註を付した。典拠を記してない場合は、概ね「広辞苑」と「コトバンク（朝日新聞社）」に拠った。

金城 実氏と、代表作品の紹介

アトリエで聞き取りに応じる金城さん（聞き取り者：福島氏）

■金城実さんのプロフィール

1939 年、沖縄県浜比嘉島に生まれる。

京都外国語大学卒業後、西宮市立西宮西高等学校や近畿大学付属高等学校で英語を教える傍ら、彫刻制作を始める。また、大阪市立文の里中学校、大阪市立天王寺中学校の夜間学校で講師をし、生徒とともに創作活動を行った。

読谷村で強制集団死があったチビチリガマに遺族と共に半年をかけて制作し、1987 年に建立した「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」の代表的な作品がある。その他、沖縄の受難史（薩摩の侵略・琉球王国の滅亡）、沖縄戦の惨禍（皇民化政策、強制集団死）を通して「芸術は解放の武器たりうるか」という理念から人間の尊厳をテーマに反戦平和・反基地・反差別に関係する作品を多数制作。

また、戦死した父が、遺族の承諾もなく戦後靖国神社に英霊として祀られることに義憤を懐き、沖縄靖国訴訟原告団の団長を務めた。

◆「戦争と人間」

このレリーフに表現されているのは、ガマでの強制集団死や日本兵に殺される朝鮮人軍夫。さらにゴザ事件など、沖縄での地上戦による悲惨な死者たちの実相と、米軍占領下で生きた沖縄民衆の姿を写実的に表現さている。作品は、高さ 3m・幅 134mに及ぶ巨大レリーフである。

右端手前に建つのは、鬼の面をかぶった妊婦が怒りと悲憤をもって太鼓を打ち鳴らす「鬼神」という作品。

これらの作品は、アトリエ裏庭に保管展示されている。

◆「銃剣とブルドーザー」

この作品は、敗戦後アメリカ軍に家屋、農地が接収された伊江島で、農民たちが土地闘争に立ちあがった姿をモチーフにしている。ブルドーザーを従えた銃剣を持つ二人の米軍兵士の前には、瀬長亀次郎、阿波根昌鴻、屋良朝苗、安里清信と一緒に抵抗する農民が鎌を持ち立ちはだかる姿がある。

この作品も、アトリエ裏庭に保管展示されている。「戦争と人間」その他、祖父をモデルにした「漁夫マカリ」など、多数の作品が所狭しと展示してあり、その景観は圧巻である。

金城実が語る沖縄と慰霊

◆はじめに

以下の金城実（きんじょうみのる）※さんの言葉は、朝日新聞（2016年8月26日）掲載のコラム「沖縄で考える天皇制」で紹介された金城さんの言葉に驚きを懐いた私が、さらに深くお話を聞きたいとの思いから、翌年の2017年11月に沖縄県読谷村のアトリエ※に福島先生とご一緒に伺い、聞き取りをさせていただき編集したものです。

金城さんは、沖縄靖国訴訟原告団※の団長を務め、反戦平和・反基地・反差別をもとに人間の尊厳をテーマにした彫刻作品※を多数制作する彫刻家であり、集団強制死を強いられたチビチリガマ※に慰霊のモニュメント※を制作された方なので、当然、天皇批判者であろうと思っていました。ところが、そのコラムに紹介された金城さんの言葉は、「『いまの天皇※』は大好きなんですよ」でした。私にとってその言葉は、青天の霹靂です。何があったのだろうか。これは会って直接、お話を聞かねばならない程の大事件であるとの思いで、福島先生にお願いをして金城さんに貴重な時間を作っていただきました。

聞き手は、私と福島栄寿※さんです。福島先生は、金城さんから「我が、息子よ」と呼ばれるほど親しい関係を持っておられる方です。金城さんには、摩文仁の丘※等に建てられた全国都道府県の慰霊塔と、そこに付設された碑文の写真及び解説からなる本ガイドブックへの掲載に了承を得た上で、聞き取りをさせていただきました。金城さんのお話は、天皇に関する問題だけではなく、沖縄戦、国家、愛国心、差別、慰霊、そして慰霊塔・碑文についてなど、多岐にわたる内容でした。なお、「6．金城実と、親鸞聖人の出遇い」については、2018年6月23日の「慰霊の日※」の取材に沖縄へ行った際、その翌日に再度の聞き取りをさせていただいたものです。

◇　　◇

■1．沖縄と天皇制ーコラム「沖縄で考える天皇制」に紹介された金城さんの言葉からー

金城さんの言葉が紹介されたコラムの全文は、次のものです。

政治断簡「沖縄で考える『天皇制』」

朝日新聞編集委員　松下秀男　2016年8月26日

退位の意向をにじませた天皇陛下のメッセージを、どう受け止めたらよいのだろう。うーんとうなっていた時、その人を思い出した。

沖縄県読谷村の彫刻家、金城実さん(77)。代表作は、100メートルを超える大レリーフ「戦争と人間※」だ。

アトリエを訪ねると、こんな話が始まった。

「天皇制は大嫌い。でもなあ、いまの天皇陛下は大好きなんですよ。天皇制と天皇はわけて考えないと」

■**金城実**※前項のプロフュールを参照。もっと知りたい方は、You Tubeの「英霊か犬死か～沖縄から問う靖国裁判～(1)(2)(3)」・「獅子たちトーク・・」その他多数を視聴ください。

■**読谷村のアトリエ**※読谷村儀間にあるアトリエは、残波岬から南へ２㎞、さとうきび畑と住宅が混在する地域の一角にある。アトリエの中には、過去の作品が多数置かれ、裏庭には大作が所狭しと置かれてあるのは圧巻である。

■**沖縄靖国訴訟原告団**※沖縄戦で亡くした肉親を軍人でもないのに靖国神社に無断で合祀（ごうし）され、追悼の自由を侵害されたこと、さらに国が沖縄戦戦没者の名簿情報を靖国神社に知らせたことなどに対して、靖国神社と国を相手に合祀取り消しと損害賠償を求めた訴訟

■**彫刻作品**※『彫塑　金城実　作品集』（東方出版）を参照のこと。

■**チビチリガマ**※読谷村にある自然洞窟（ガマ）。沖縄戦の際、住民140人が避難したが、米軍が沖縄に上陸した翌日の1945年4月2日に、85名（内83名が強制集団死）の犠牲者が出た。母が我が子を刺し殺すなど、地獄絵図を見る惨状であったという。

■**慰霊のモニュメント**※チビチリガマの前広場に、遺族と彫刻家の金城実氏の共同制作により、1987年に「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」が建立された。同年に、右翼団体により破壊されたが、1995年に再建した。

■**いまの天皇**※2019年4月30日に天皇を「生前退位」する、明仁（あきひと）天皇のこと。

■**福島栄寿**※編集者紹介を参照。

■**摩文仁の丘**※沖縄本島最南端の糸満市にある。太平洋戦争末期の沖縄戦最大の激戦地になった地で、現在、戦没者を慰霊する都道府県の慰霊塔が数多く建立されている。

■**慰霊の日**※6月23日、全国で沖縄県だけこの日が公休日と定められ、国の機関以外の役所や学校は休みとなる。地上戦があった沖縄戦で、牛島満司令官と長勇参謀長が自決したことで、組織的戦闘が終結した節目として定められた。この日は、摩文仁の丘の平和記念公園において「沖縄全戦没者追悼式」が行われる。

■**戦争と人間**※彫刻家金城実氏の代表作品の一つ。前項を参照。

◇　　◇

金城さんには父親の記憶がない。生まれてまもない時、19 歳だった父が軍に志願し、南洋※で戦死したからだ。

新妻と幼子を沖縄の小さな島に残し、なぜ志願したのだろうか。足跡をたどるうち、「あのすずり箱が人生を変えたのか」と思うようになった。芭蕉の木の模様が施された漆塗りのすずり箱は、優秀な成績で尋常小学校を卒業した記念の品だ。島ではめずらしく標準語も話せた。そのため青年たちに教育勅語※や軍人勅諭※を教える役割を担い、心構えを説くことになる。

従軍した父から母へのはがきには「命をかけるのは沖縄のため」とあったそうだ。沖縄に限らず、差別を受けた人が進んで天皇に忠誠を誓い、命を投げ出したという話をよく耳にする。「人一倍、国に貢献するから、対等な国民と認めてほしい」という心理が働くというのである。

本土の人にだって、似た心理があったんじゃないかな。戦争に非協力的とみなされると非国民※と呼ばれ、村八分※のような目にあった。戦争で役に立てない人は一人前の男とみとめられなかった。排除されたくない。みんなと同じでありたい。そんな思いに背中を押され、人は戦争に駆り立てられたのか。

金城さんは、その仕組みや空気を「天皇制※」と呼ぶ。

◇　　◇

一方の「天皇」は、生身の人のこと。

沖縄の「琉歌※」を詠み、激戦地をめぐり、被災地や障害者施設を訪れる。その姿に金城さんは「傷を癒し、排除された者、弱い者に寄り添うのが『国民統合の象徴※』だとお考えなのだろう」と思う。

天皇陛下はメッセージで、「象徴天皇※の務めが常に途切れることなく、安定的に続いていくことをひとえに念じる」と語った。今後も天皇が「国民統合の象徴」であり続けることを望み、「国民動員※」に利用されないようクギを刺したと思えてうれしかった。というのも金城さん、その恐れありとみているからだ。

たとえば 10 年余り前、天皇陛下は学校での国旗掲揚、国歌斉唱について「強制的になるということではないことが望ましい」と述べたが、その後も掲揚や斉唱を強いる動きが進む。天皇陛下の思いをよそに、旗や歌といった命をもたないシンボルをよりどころにして、「天皇制」が独り歩きしないだろうか。

そんな話を聞きながら、これこそ「天皇制と天皇をわけて考える」べき理由だなと納得した。どうすれば、金城さんのいう「天皇制」に絡め取られずにいられるだろうか。

◆以上が、朝日新聞に掲載されたコラム「沖縄で考える天皇制」の全文です。

南洋※金城氏の父親は、1944（昭和19）年に陸軍伍長としてブーゲンビル島で、23 歳という若さで戦死する。

教育勅語※明治天皇の名で国民道徳の根源、国民教育の基本理念を明示した勅語。1890 年 10 月 30 日発布。御真影とともに天皇制教育推進の根幹として、国の祝祭日に朗読が義務づけられた。1948 年、国会で排除・失効確認を決議された。正式には「教育に関する勅語」。

軍人勅諭※1882 年 1 月 4 日。明治天皇から陸軍人に与えられた勅諭・軍隊は天皇直属下にあることを示唆し、旧軍隊の精神教育の基礎であった。

非国民※国民としての義務を守らない者。国家を裏切るような行為をする者。特に第二次世界大戦に軍や国策に非協力的な者を非難する語として用いられた。

村八分※江戸時代以降、村民により規約違反などの行為があったとき、全村が申し合わせにより、その家との交際や取引等を一切断つ私的制裁。転じて、仲間外れにすることもいう。

天皇制※天皇が君主として存在する統治体制。特に、神聖不可侵の天皇が統治権を総攬し、天皇に直属する文武の官僚がその権力を行使する絶対主義的政治機構で、天皇を統治及び倫理の中心とする政治・社会体制。明治憲法で法的に確立する。

琉歌※沖縄の歌曲で、八・八・八・六を基本とした短歌。様々な節を付けるので節歌ともいう。

国民統合の象徴※日本国憲法では、天皇は日本国および日本国民統合の象徴とされ、儀礼的な国事に関する行為（国事行為）のみを行い、国政に関する権能をもっていないとされる。

象徴天皇※日本国憲法の定める天皇制。天皇は日本国の象徴および国民統合の象徴であり、国政に関する権能を有しないとされる。

国民動員※1940 年の第 2 次近衛内閣時、新体制運動の推進を目指し、その指導的組織として大政翼賛会が成立。近衛首相が総裁。各政党が解党し、翼賛議員同盟を結成。下部組織として各種国民組織を置いた。こうして上意下達の国民総動員体制ができた。

金城：どうして朝日新聞の取材に答えたかというと、一度、天皇と天皇制を切り離して考えてみようと思ったのだ。私を知っている人には、理解し難いことだろう。松下編集委員の取材を受ける前に、ルポライターである鎌田慧（さとし）氏※との対談があり、そのとき天皇の話になり彼は、「金城ともあろう者が、靖国裁判の沖縄靖国訴訟※原告団の団長を務めながら、いまの天皇が大好きなんですよ。と言うか」と、皮肉を込めて笑いながら言っていましたよ。

私のコラムが朝日新聞に掲載された後に、何人か取材に来た記者との間で議論があった。それは、天皇と天皇制をもっと整理しなければいけないと考えたときに、はっきりと天皇と天皇制をどう区切るかという問題の議論です。私は、口が悪いので活字にすること自体が問題になるかもしれないが、まず天皇とは何かということですね。戦前・戦中の天皇は、現人神（あらひとがみ）※なので人間でありながら神様と言われていた。戦後は、人間宣言※をされた。そうすると天皇というのは、やはり人間であるということです。少しなまめかしい話をすれば、一般的人間と同じで病気もされる、結婚もされる、子どももできる、子孫も増えるというごく当たり前の人間の生き様の話である。なぜ当たり前の話をするかというと、戦前・戦中に現人神の扱いを受けた歴史的な背景があるから、あえて言うわけなのだ。

それに対して、「天皇制とは何だ」ということです。論理的に政治的な視点で考えるとあまりよく見えないのですが、視覚的にものの形に可視化して、天皇制というこの制度をどう理解するかということを考えてみたい。天皇制について、その制度を突き詰めていくと、そこには目に見えるものと見えないものがある。つまり、可視化できるものと可視化できないものがある。

じゃあ、可視化できるものは何かというと、まず天皇制の象徴である靖国神社※が出てくる。菊の御紋※が出てくる。国旗の日の丸が出てくる。国歌とされる君が代※が出てくる。我々は戦前・戦中に暗唱させられたが、森友学園※が経営する幼稚園で子どもたちに教育勅語※を暗誦させている場面がメディアで報道された。その報道を見て、我々みたいに戦争を体験した人間は、時代錯誤で怪しげなものが出てきたものだと思う。それが天皇制に結びついて見えるのだ。日の丸の掲揚、君が代の斉唱、それが学校を中心に卒業式や入学式、幼稚園等で半強制的に行なわれていることに違和感を憶える。天皇制で見える部分とは、先程から言っているようなものがそうで、これらを通して天皇制を可視化できるのだ。

次に、可視化できないものがある。これが厄介なことなんだ。可視化できない部分をどこで表現できるのか。見えないものをどのように表現できるかについては深く考える必要はない、と私は考える。

鎌田慧氏※1938 年生まれ。青森県弘前市の出身。早稲田大学を卒業。社会派ルポライター、ジャーナリスト、ノンフィクション作家、社会活動家。著書に、『反骨：鈴木東民の生涯』、『ドキュメント賭場』『六ヶ所村の記録』など、多数ある。

沖縄靖国裁判※憲法 20 条，89 条で政教分離の原則が規定されていることに関係する。沖縄靖国訴訟では、戦死した肉親が無断で靖国神社に祀られているのは精神的苦痛であるとして、当神社の祭神簿から肉親の氏名を抹消することなどを求めた合祀取消し訴訟。

現人神（あらひとがみ）※神は穏身を常とするが、人の姿となってこの世に現れた神とすることから、それを天皇とする。

人間宣言※1946 年 1 月 1 日、昭和天皇が国民に発した「新日本建設に関する詔書」の通称。天皇を神とする考え方を自らが否定し、天皇制の改革が進んでいることを国内外にアピールした。

靖国神社※東京都千代田区九段北にある元別格官弊社。国事に殉じた者の霊を祀るため 1869 (明治 2)年、東京招魂社として創建。明治維新およびそれ以降の戦死者など 246 万余の霊を合祀。1879 年(明治 12)現名に改称。現在、単立宗教法人である。

菊の御紋※天皇の家紋で「菊花紋章」のこと。花びらが 16 枚あり、1869 年から天皇のみが使用できる家紋として正式に認定された。

君が代※作曲は 1880（明治 13)年、1893 年から小学校における祝祭日の儀式用唱歌として公布され、明治憲法下で天皇の治世を祝う国歌と解されて歌われた。日本国憲法下でも事実上国歌とされ、1999 年、国旗国歌法で正式に規定された。

森友学園※学校法人森友学園が運営する、大阪府淀川区にある塚本幼稚園では、教育方針に日本伝統や文化に重点を置いたカリキュラムの中で、愛国心等を育むことを目的に、教育勅語を導入し園児に暗唱させていたという。

たとえば、金城実は彫刻を作るときモデルを使わないし、デッサンもしないで作る。あれは一体何を見ているのだと言われれば、「見えるんだ」という答えをするしかないのだ。それに対して、それは可笑しいだろうと言われれば、こちらは見えるのだから、それ以上の説明の仕様がないと返答するしかないわけだ。

一番やっかいなのは、「目に見えない天皇制というものを金城実は見えるのか。」と詰め寄られることだ。当然そういう質問が出る。可視化できないものを見えるというのは、傲慢ではないのか。いや、そうではないのだ。たとえば、私は自分の彫刻を作るときにデッサンもしないし、モデルも使わないが、頭の中に見えるものがある。これがあるから反論できるのですよ。金城実の脳みその中を見ようと思っても見えないわけだ。自分でも見えないわけですよ。手が動いて頭の中で想像するというイマジネーションだけではなくクリエイティブ（創造的・独創的）が抱き合って見えてくる。表面的には見えないし可視化できないが、ところが彫刻的に奥行きを見ようとすれば見えてくる。

そうすると天皇制の何を見ているのか、天皇制の見えないところが何処から見えているのか。それは沖縄戦でチビチリガマであった強制集団死から見えてきたのだ。1987 年 4 月に私は、読谷村波平にあるチビチリガマの前広場に慰霊のモニュメントを、強制集団死をされた遺族と一緒に共同制作をした。チビチリガマの中で、愛する親子同士、兄弟同士がなぜ殺し合ったのか。この「何故の正体」が、見えない天皇制なんですよ。

私は、この見えない天皇制の正体を思い切って「ウイルス」と言うわけだ。例えば、なぜ風邪をひくのか、風邪をひく原因になる正体は見えない、見たことが無い。なぜ熱が出るのか、なぜ咳が出るのか、なぜ鼻水が出るのか、その正体は目に見えない。この原因は、風邪のウイルスだ。だから天皇制というのは、ウイルスに等しいものではないかという発想をするのだ。こういうことを言うと、天皇はウイルスなのかと問う人がいるが、「天皇ではなく、天皇制がウイルスなのだ」と答える。このウイルスの増殖を行ったのが、皇民化政策※による沖縄人に対して行われた同化教育※なのだ。

天皇制というウイルスによって、何が侵されたのかというと、人間の一般的常識が侵されていく。それが原因で、考えられない行動に出てしまう。一言で言えば、マインドコントロール※とも言う。悪魔にコントロールされた精神状態に追い込まれていくのだ。そうでなければ、自分の愛する子どもを親が自分の手で殺すわけがないでしょう。人間的生理が完全に狂わされてしまうほどのウイルスが天皇制であると、私は思う。天皇がウイルスだと言ったら問題発言だが、制度である天皇制がウイルスだと言っているのです。

生前退位（譲位）※を希望された今上天皇※が、10 年ほど前に、東京の教育委員会に対して、「学校での国旗掲揚や国歌斉唱が強制にならないことを望みます。」と述べられたことを、テレビで見たことがあった。このとき、この天皇は偉い人だなと実感した。同様に、今の天皇から感銘を受けたのは、2016 年 7 月 13 日に「生前退位の意向を示す発言をされた天皇のメッセージ」の最後のところで、

皇民化政策※主に 15 年戦争に朝鮮・台湾・沖縄、および東南アジアなどの占領地で、住民を天皇に忠誠を尽くす皇民にするためにとられた政策。沖縄では、方言の使用禁止、創氏改名などを強制した。
同化教育※皇民化教育ともいう。主として満州事変から太平洋戦争までの戦時中に、日本が朝鮮、台湾、などの占領地や沖縄において行った日本文化への強制的な同化を目的とした教育。
マインドコントロール※個人や集団を暗示性の高い状況に導き、暗示によって特異な記憶や思考を生じさせて操ること。
生前退位（譲位）※王位や皇位が、存命中にその地位を退くことを指す言い方。基本的に王位や皇位は、終身制の地位にあり、逝去によって後継者が選ばれる。そのような地位でありながら、存命中に地位を退くという点を際立させるために敢えて「生前」の語が添えられた。「生前」を省いて「譲位」、「退位」という表現での報道も見られるようになった。
今上天皇※現在の天皇。

「象徴天皇の務めが常に途切れることなく、安定的に続いていくことをひとえに念じる」と。

ここが大事ですね。天皇が、このようなメッセージを語られたのはどんな意図があったのか。それは、未来において天皇が政治に利用されることを危惧されているからなのだ。

もちろん、次期皇位継承者である皇太子の時代も考えてのことだ。だから途切れることなく安定的に続いていくことをひとえに望むと発言されたわけですね。自分の立場である象徴天皇としての務めが悪用されてはならない。これを言いたかったのだ。ここを、しっかりと受け止めておかないといけない。

今上天皇は、福島の被災地※や熊本の被災地※、ハンセン病※の患者たちのように弱い立場にある人々への慰問をされている。国民は、慰問される天皇陛下の慈愛深く人間的な姿に感銘を受けている。日本国憲法※第一章第一条には、「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく。」とあり、さらに、第四条には「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行い、国政に関する権能を有しない。」と定めてあることを、象徴天皇として遵守され務められているのだ。

福島：今、マインドコントロールとか、ウイルスと表現されたものは、戦後以降、現在も消えることなく蔓延しているのでしょうか。

金城：それは、ありますね。

福島：大本営※は、米軍との本土決戦を前に防波堤として少しでも本土決戦を遅らせて決戦準備をするために、「捨て石※」として沖縄を利用したと理解しているのですが、であれば、沖縄戦は、本土側の都合によって強いられて戦場にさせられたということになりますね。

金城：例えば作家の百田尚樹※氏は、「沖縄だけが戦争被害を受けているわけではないだろう」と言うわけだ。確かにその通りだ。私も若い頃に、大阪市西成区の釜ヶ崎で夜間学校の英語教員をしていたとき、三角公園で第一次「戦争と人間」展で取材に来たある若い新聞記者が、「金城さん。沖縄だけが戦争の被害を受けたわけではないでしょう。広島も長崎もあるでしょう」と言うわけだ。それに対する反論として私は、「長崎、広島の死者数※や傷の大きさを、沖縄との傷の大きさと比べてどうするのだ。傷のなめ合いをしてどうするのだ。広島、長崎の方が沖縄より死者の数※が多かったではないか、と言って何の意味があるのだ。」と、少し感情的に語った記憶がある。

沖縄戦での悲劇としては、地元の方言を使ってスパイ容疑で処罰されたということがあった。だが、北は北海道から南は鹿児島まで

福島の被災地※2011年3月11日東日本大震災が発生。巨大津波が発生し、東北地方、関東地域の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。特に福島では、津波に襲われた東京電力福島第一原発は、放射能の漏洩を伴う大事故を起こした。天皇皇后は、福島をはじめ、東北地方、関東地方の被災地を見舞に度々訪れている。

熊本の被災地※2016年4月14日以降、熊本県と大分県で相次いで発生した地震。最大震度7を観測する地震があり、その後6強、6弱の地震が続き、多大な被害を被った。熊本城の屋根瓦や石垣が崩壊するなどし、現在も復旧作業が行われている。同年5月、天皇皇后は、熊本へ見舞に訪れている。

ハンセン病※ノルウエーのG．Aハンセンによりらい菌が発見され、そのらい菌によって起こる感染症。かつての日本では、「癩」とも「癩病」とも呼ばれ、差別的に捉える人も多く、医療や病気への理解が乏しい時代に、その患者の外見や感染の恐怖心から患者を隔離するという過剰な差別があった。感染力は非常に低く、現在は治療法も確立している。天皇皇后は、皇太子同妃時代から全国のハンセン病療養所を慰問している。

日本国憲法※第二次大戦の敗戦後、大日本国憲法を全面的に改正した憲法。1946年11月3日公布、翌47年5月3日から実施。

大本営※戦時の際に設置された天皇に直属する最高の統帥機関。

捨て石※沖縄戦を、本土決戦準備のための時間稼ぎを考えて、沖縄を「捨て石」とした。

百田尚樹※1956年生まれ。大阪市出身。放送作家、小説家。著書に、「海賊とよばれた男」「永遠のO」などがある。

広島、長崎の死者数※広島原爆での死者数は、314,118名（平成30年8月6日奉納時の名簿登録者数）、長崎原爆での死者数は、179,226名（平成30年8月9日奉納時の名簿登録者数）
（各市調査課報告書より）

沖縄の死者数※一般沖縄住民の戦死者数94,490人（推定）、1944年2月沖縄県人口 491,912 人。この数値から、沖縄人口の約 2 割が戦死したことになる。一般住民、日本兵、米軍兵を合わせての全戦死者数 200,666人。これらの数字には不確定な問題が指摘されるが、概ねの数値である。
（沖縄県援護課ＨＰ）

方 言 札

の日本本土で、地元の方言を使った者をスパイ容疑で処罰するという軍規があったかどうか。まず、それを知るべきだと思うから、調べてみなさいと、その記者に申し上げた。

方言を使ってスパイ容疑をかけられることは、日常生活の中で使っている言語が否定されることである。標準語励行と称して、私はその体験をしたのですが、学校では沖縄の言葉は方言だからと、使った生徒には罰則があった。沖縄の方言を使った生徒には、首から分厚い「方言札※」をかけられて辱めを受ける。方言を使うと罰せられるものだから、言葉を発しなくなり、表現力を失うことになる。言葉を奪うことは、表現力を喪失させる効果があるのだ。

表現力を失うだけではなく、言葉の源である母語※を失うことになる。言葉というものは赤子のときから自分の母親の母乳を飲みながら覚えるものだ。だから母語というのです。母なる言葉が、自分にとって一番正しい言葉となるのだと思う。人間が言葉を覚えるのは、母親からなんです。母乳を飲みながら、母と子が見つめ合いながら、体温を感じながら、匂いを感じたりしながら、母親の言葉をもって世界中の子供が、人類普遍的に母親から言葉を覚えるのです。学校で言葉を覚えるのではないのです。その母語が自分の言葉として、それぞれの土地で生き生きと使われる。

方言弾圧、標準語励行ということの裏には、自分の生まれた土地の言語や文化を自ら否定していく作用があるということなのだ。ここが問題なのです。天皇制が大きく影響してくるのです。それは何故か。それまでは両親、祖父母やガキ仲間と何の気兼ねもなく大声で発していた方言が、学校へ行ったとたんに使うと犯罪行為として罰を受ける。このことがどれほどの地獄であるのかを見えなくするのが天皇制である。天皇制による影響は、たいへん大きい。これは経験したことのない人には、理解し難いことだ。

方言札※標準語励行のため、学校で方言を使った生徒の首に罰としてかけられた札。沖縄では、20 世紀初めから 1960 年頃まで用いられていた。
母語※幼時に母親などから自然な状態で修得する言語。
同化政策※ある国が植民地に対して、本国の生活様式や思想などを同化させようとする政策。
土人※その土地に生まれ住む人。土着の人。ここでは、未開の土着人で、軽蔑と差別の意を含んで使われている。

以前、沖縄での天皇制は、恥の文化から始まったのだと言ったことがある。それはどのようなことかと言えば、沖縄人が日本人になるという同化政策※による教育は、沖縄人が恥を背負わされる。自分が生まれた地域、場所、言葉、料理など、あらゆる文化、生活習慣などを否定するという操作に引っかかってしまう。その操作をする装置が、天皇制である。そうすると自分の生まれは、恥ずべき土人※であり、非文明的な処から生まれたのだと、自分自身で考えてしまう。強制されなくても、そうなってしまうのです。先生が言わなくても、金城実の生まれ育った島には電気もない、水道もない裸足の生活で、トイレは汲み取りの便所で、豚に人糞を食わして、育った豚を盆と正月に殺して食べるような文化に生きていることを恥と感じてしまうのだ。学校に行くと、標準語を使えとか、自分が生まれたときから身に付いている生活習慣、文化が学校へ行くと否定されて、〝日本人になれ〟という同化教育という装置に使われてしまうのだ。これが天皇制崇拝と直結しているのだ。

それが、俺の親父の生き方であった。日本人になるためには、命がけで沖縄の文化を自ら否定し、天皇に忠誠を尽くさなければならず、志願して若い妻子を残して戦場に行ったのだ。

福島：戦時中の皇民化政策ですね。金城さんのお父さんもその中で生きられたのですね。

金城：私は、自分の親父の生き方から、戦争、天皇、国家、愛国心※ということを学習してきたのだ。

吉岡：その皇民化政策、同化教育を受けながら方言や自分たちの文化を殺していくことに対して、強い反発というものがあったと思うのですが。

本島中部の勝連半島から浜比嘉大橋を渡ると、金城さん生家のある浜比嘉島です。この離島には、琉球を創った神々が居住する「神様が住む島」として大切に守られてきました。美しい海に魅せられ、昔ながらの沖縄の町並みが残る島です。

金城：自分を殺すことによって天皇に忠誠を尽くすという意識は、恥の文化である沖縄の文化を背景に、強制的な同化政策により陥った結果である。

吉岡：それは、当時の沖縄の人々にとっては、喜びになったのでしょうか、苦痛だったのでしょうか。

金城：父親は賢く優秀だったから通信隊に入れたのだ。その任務に付けたことには満足したでしょう。任務にある間の自分は立派な日本軍人として務めを果たしているのだと納得していただろうと思う。父は、18 歳で結婚して 19 歳で、妻子を残して志願して戦争に行った。志願して行くのだから後悔はなく誇りさえもっていたと思う。ただし、死ぬ瞬間はどう思ったかは知らないけれどもね。

吉岡：このような思いで戦争に志願できるのも、天皇制という精神装置が作用したということでしょうか。

金城：私は、父親から反面教師として学ぶことがたくさんある。父親は、どのような思いで戦場に行ったのか。妻子を愛してなかったのかといえば、そうではなかった。その愛情を超える程のものであった天皇制とは、何であったのか。このことを考えなければならないのです。妻子への愛情を超える愛国心とは、何であったのか。これが大きな問題なのでしょう。

吉岡：日本本土であれば、長い歴史の中で天皇との関わりがありますが、天皇は沖縄には存在しない異質のものとの関わりであると思うのですが、何故、天皇制にこのように深く、それも短期間に影響を受けるのかが分からないのですが。

愛国心※自分の国を愛する心。戦前の沖縄では、「方言札」を用いるなど徹底した皇民化教育が行われた。

沖縄開教本部※1993 年に浦添市屋富祖に「真宗大谷派沖縄開教本部」が設立され、沖縄県内各地で仏教講座を開催してきた。その後、2010 年 4 月にマカレー東本願寺（米国ハワイ州）のご本尊を受け継いで東本願寺沖縄別院が設立。沖縄開教本部と別院が一体となって沖縄の地で真宗の教えを開いている。

（東本願寺沖縄別院ＨＰ）

金城：以前に沖縄開教本部※で勤務していた松井君と議論したときにも、彼は「沖縄には天皇制は存在しなかった」という。しかし、現実は沖縄の人間に天皇制が強いられたということなんだ。それだけ徹底した皇民化政策、同化教育が行われたということだ。このことを押さえないと、沖縄戦が整理できない。

■ 2. 沖縄と慰霊

百田氏 独自の論理展開
危険への接近論
自民党の勉強会
中国脅威論
工作員断定 根拠な
中韓に
高江の抗議
iPSで認知症薬候補
京都大教授ら発見
原因物質

2017年10月27日に作家の百田氏が名護市内で行った講演内容を報道する沖縄タイムスの記事

福島：沖縄の基地問題には、構造的な沖縄差別※が胚胎していると指摘されることがありますが、事実、本土の人間からするとなかなか沖縄の現状を見ようとしていない。どうしても当事者意識が薄いように思うのですが。そうした現状ついてどのような考えをお持ちですか。

金城：それは、仕方がない面があるが、本土の人には沖縄の現状が見えないということをどのように捉えて改善できるのかです。これに応えるのに、名護市長選挙の投票前の2017年10月27日に作家の百田氏が名護市内で行った講演記事（2017年11月22日付『沖縄タイムス※』）を見てもらいたい。福島さんの質問に対しては、百田氏の講演記事の内容に　ついて返答したいと思う。

米軍が宜野湾（ぎのわん）市内にある地域を接収※して普天間基地を建設する前には、宜野湾市※は、この地に学校があり集落があったことを確認しているのに、百田氏は「2015年、自民党本部の勉強会で『危険への接近』論を唱えて以来、同じ主張を続けている。この時の勉強会では他に『騒音がうるさいのは分かるが、選んで住んだのは誰なのかと言いたくなる』『沖縄は本当に被害者なのか』」と、基地建設の後に住民が選んで住んだのではないかと言っているのだ。

福島：高江の座り込みをしている抗議活動の人々も、本土から来ているのだという言い方がされますね。

金城：そういう発言のもとになっているのは、百田氏の道案内をしている沖縄出身の我那覇真子（がなはまさこ）※という女性がいるのだ。

福島：足を踏まれている側の人間の気持ちを、踏む人間が分からないということだと思うのです。

金城：結論は、そうなのだけれどね。

福島：無意識で踏んでしまっている者に、踏んでいることを気付かせるということが大事だと思うのですが。

金城：それがね、なかなか気付けないのが問題なのだ。だからね、どうしようもないところがある。それで、百田氏の講演内容を沖縄タイムスの記事で読んで、彼の言論に反論のために私が書いたものがここにある。まだ、整理はされてない文章だが、読んでみたい。

「2017年11月22日の沖縄タイムスの記事にある、百田氏独自の論理展開を読んで、ここまでのことを述べるかと怒りを禁じえない。彼の沖縄のメディアへの挑発的発言は今度が初めてではない。名護市長選が近いので政治的意図で発言したのであろう。その発言の中で、沖縄タイムの阿部岳記者の名前を名指しで目の敵のような言論を、百田氏と我那覇氏との講演会で行う。質の悪い論証無き愚かな言論に、作家としての資質を疑う。中国の脅威論に関する理解として、「『辺野

構造的な沖縄差別※対米従属的日米関係の矛盾を沖縄にしわ寄せすることによって、日米関係（日米同盟）を安定させる仕組みのこと。（新崎盛暉『日本とって沖縄とは何か』）

沖縄タイムス※沖縄県の㈱沖縄タイムス社が発行する新聞。

接収※権力機関がその必要上、強制的に人民の所有物を収受すること。

宜野湾市※沖縄本島南西部にある市。普天間飛行場など米軍基地が広い面積を占める、人口約96,000人。

我那覇真子※沖縄県生まれ。政治活動家、日本文化チャンネル桜沖縄支局のキャスター、元編集者。

辺野古での抗議活動※米軍普天間飛行場の移設に伴う名護市辺野古への新基地建設の反対抗議デモや座り込みが米軍キャンプ・シュワブ前で、「豊かな海を壊すな」「戦争につながる基地はいらない」などをスローガンに連日行われている。

古での抗議活動※』では日当が一日何万円と支払われている。その資金源が中国の工作員なのです。」と語る。ところが、記者にその根拠を問われると、「それは、無い」と答える。「それは、お前が調べろ」と言う。記者に返す言葉は、百田氏は「はっきり言います」と言いながら「根拠が無い」という発言をどのように理解するのですか。小学生以下の発言である。」

以上の通り百田氏の言論には、論理性がない。「はっきり言います」ということは、確証があるから言う言葉でありながら、根拠は何ですかと問うと「それは無い。それは、お前が調べろ」、こんなおかしな暴言は許してはならない。もう一つ、許してはならない暴言がある。それは「中国が「琉球※（沖縄）」を占領したら、記者の阿部さんの娘は中国人の慰み者になります。それを考えて記事を書いてください。」と、この人権差別発言は、沖縄戦下で言われてきた「米兵に捕まったら慰み者になるから、その前に自決せよ。」という軍部からの宣伝そのものであり、さらに、百田氏は、「戦争の悲劇は沖縄だけではない」と強調している。このような発言は、沖縄戦の事実を確かめもせず知らないままに言っていることなのだ。非常識極まりない愚劣な暴言である。

百田氏の言論を記事で読んでいると、ヒットラー※の部下でプロパガンダ※の天才と言われていたゲッペルス※の、「嘘でも百回言えば真実になる」という言葉を思い浮かべる。戦前の大本営の軍部の発表と同じである。百田氏がこのような発言に強気であるのは、沖縄出身である我那覇氏の存在が大きいのだが、沖縄のメディアの前で語るその根拠を示さなければ、国民を欺いたゲッペルスのように、その罪は重い。

■ 3. 沖縄と慰霊と靖国と

福島：金城さんは、靖国裁判の原告にもなりましたが、お父さんが国のために戦死して英霊として靖国に祀られたことに対し、どのような心情なのでしょうか。

金城：それは、琉球朝日放送によるドキュメント映画「英霊か犬死か」についての三上智恵※との対談で、私が以前から語っている「私の父親の死は、英霊※ではなく犬死※だ。」という言い分を確認するかのように彼女から、「あなたのお父さんの死は、英霊か犬死なのか」という問いがあったので、「私の親父の死は、犬死だ」と、はっきり言ったことがある。産川（ウブガー）※の前でのＮＨＫの取材コメントでも「あなたのお父さんは、英霊ですか」と聞かれたとき、「父の死は、犬死だ」と強調した返答をした。浜比嘉島の生家前での取材でも「父の死は、犬死だ」と言ったのだ。

福島：父の戦死は、「犬死だ」と、金城さんはおっしゃるけれどそこには私たちには分からないお父さんへの深い思いがあってのことなのでしょう。たとえば、摩文仁の丘に行くと全国都道府県の慰霊塔が建ち、戦死した人たちが同じように英霊として祀られています。その祀られている戦死者たちも、同じような見方になるのですか。

金城：それは、違う。他の戦死者たちを「犬死だ」と言ってはいけ

琉球※沖縄の別称。1429 年に尚巴志（しょうはし）が沖縄本島を統一し琉球王国が成立。1879 年までの約 450 年間にわたり、日本の南西諸島に存在した王制の国。明（中国）に朝貢し、王に任命してもらう冊封体制を行う。1609 年、薩摩藩島津氏の侵略を受け、幕藩体制に組み込まれる。1879 年に明治政府が王国を解体し、沖縄県を設置する琉球処分（廃琉置県）の断行により、琉球王国は滅亡する。

ヒットラー※（1889～1945）ドイツの政治家。オーストリアの税関吏の子に生まれ、第一次世界大戦にはドイツ軍の伍長として出兵。戦後ドイツ労働者党に入党、党名をナチス党と改めて 1921 年党首となる。1932 年ナチ党を第一党とし、翌年に首相となる。他党を弾圧して 1934 年総裁となり独裁権を掌握。その後、対外侵略を強行し、1939 年第二次世界大戦を引き起こし、降伏直前に自殺をする。

プロパガンダ※特定の思想・主義・世論・意識・行動へ誘導操作する意図もった宣伝行為。

ゲッペルス※（1897～1945）ナチスドイツの政治家。1933 年以来「宣伝相」。ラジオなどを駆使した巧みな宣伝で世論を操作した人物。ベルリン陥落の直前に自殺をする。

三上智恵※1964 年生まれ。ジャーナリスト、映画監督、ドキュメンタリー映像作家。

犬死※無益に死ぬこと。無駄死に。

英霊※死者の霊の尊称。特に戦死者の霊にいう。

産川※湧水で、この水を産湯に使っていたことが産川の由来。

ないし、それは暴言であり非礼なことです。たとえば、チビチリガマの強制集団死について、「なぜ、強制集団死までするのだろうか。よくここまでのことをしたものだ。」と、批判的な声もあるが、他人の死者に対して言うべきことではない。自分の親だから、その死に対して批判的な言い方ができるのであって、他人の死者を批判的に言うべきではない。

そして、靖国に祀られている一般国民の戦死者、並びにチビチリガマの遺族に対しても、その死は「犬死だ」と言ってはならないことです。ただし、私の場合は、親父をそこまで追い詰めて、その生き方を検証することによって未来に伝えたいという意思が強く働くのだ。沖縄戦や天皇制が如何なる悲劇を沖縄にもたらしたのかということを、学習し認識するためには、父との向き合い方をはっきりと検証していく必要があるでしょう。だから、歴史の伝え方の方法論としても、私は親父の死を「犬死だ」という言い方をしないと沖縄戦が見えない。だから、三上智恵との対談でも、同じように語るのです。親父に対して、犬死だと言わないと沖縄戦が見えない。しかし、それはあくまでも自らの親に対する私の学習のためであって、それを他人に言ったり求めたりしてはいけない。

魂魄の塔※「第 1 章 2．特色ある慰霊塔と碑文」を参照。
下駄踊り※下駄をヌンチャクに見立てた沖縄空手の踊り。沖縄精神では相手を殺傷することはなく、下駄などで威嚇して相手が怯んだすきに退却する非暴力を象徴する。
平和の礎※「第 1 章 6．平和の礎」を参照

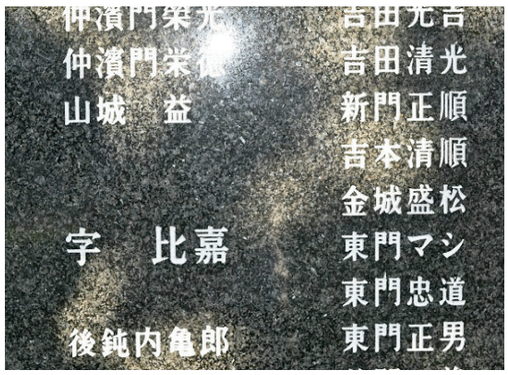
福島：摩文仁の丘では、たくさんの戦死者が英霊として祀られています。実際に、その遺族の方々が摩文仁の丘へ参拝する行為について、どのようにお考えでしょうか。

金城：私は、そのことについては違和感を持っています。東京のＮＨＫ番組「沖縄は我が念仏」で 6 月 23 日の沖縄慰霊の日に魂魄の塔※で下駄踊り※をして最後に述べた言葉は、「6 月 23 日の沖縄慰霊の日は、涙を流す日ではない」ということだ。これは極めて皮肉な言い方であり、摩文仁の丘にお参りに来た人々に対して非礼なる言葉であることは承知したうえで、「涙を流すのが慰霊の日ではなく、沖縄戦という悲劇を学習すべきなのだ」ということを言いたい。

大阪ＮＨＫ番組「沖縄の叫び」で、3 月 4 日の「三線の日」に辺野古で下駄踊りをする金城氏の姿

私が母親に無理やり連れられて、慰霊の日に摩仁の丘に初めて行ったときのことだが、そこで見たのは、その式典会場に参列している黒い背広を着た国会議員と市町村長の役人たちは暑い日差しを避けるテントの中に座っているのに、遺族の人たちは炎天に座らされている光景だった。「議員、総理大臣、市町村の役人はテントの中に座り、年老いた腰を曲げたお爺お婆たちは炎天下の暑さにひーひー苦悶している。これで、喜べるか。私は、来年からここには来ん」と、母親に言った。

その後、平和の礎（いしじ）※が完成したその年には行ったが、その礎に刻まれた夫の名前の前で母は泣いていた。「何で、泣くんや」と言ったら、母親が怒ってね。そりゃ、怒るわな。母親は、「お前は、泣かんのか」と。「わしは、泣かん」と言ったら、「お前は、恐ろしい奴やな。悲しくならんか」、「泣いてどうするのや」というようなやり取りがあった。これも、親子だからできることであって、他人とはこのようなことはできません。



平和の礎に刻字された金城氏の父の名前「金城盛松」：H30 年 6 月 23 日撮影

何故、父親が妻子を島に置いて、天皇陛下のため、お国のために命を捨てることができたのか。私にはまったく理解できない。その親がいたから私が生まれたことには感謝しているが、生き方については完全否定します。母親にしてみれば、このような私の考え方は理解できないでしょう。

母親は、このような現実を素朴に受け止める知恵があったから、靖国神社にも参拝に行った。そして沖縄の海の貝殻を奉納しようと持参したが、神官に受け取りを拒否されたときから、母親は靖国には違和感を懐き始めた。その後、母親は靖国訴訟の会員として支援もし、裁判にも何回か来ていました。晩年の母親は、靖国、天皇制を否定する立場になっていましたよ。

天皇と靖国と靖国裁判、この三つを改めて考えてみましょう。靖国神社という存在は、戦前は天皇の神社とも言われたし、戦争のための神社とも言われていた。昭和天皇の息子さんである今の明仁（あきひと）天皇が何故、靖国神社に参拝しないのか。その理由には、二つのことが考えられる。一つには、靖国に英霊として祀られている中に、A級戦犯※・B級戦犯※が合祀されているからというのが一般論である。そうではなく、もう一つの理由として、今の天皇は、憲法を守っているから、靖国神社への参拝をしないというのが私の理解なのです。

靖国には、A級戦犯、B級戦犯が祀られているから参拝しないということと、憲法を遵守されているから参拝しないという、この二つをどのように見るのか。憲法で象徴であると定めてある天皇は、政治活動をしてはいけないことになっている。だから天皇は、そのことを厳粛に守っている。では、天皇以外の国務大臣たちはどうしているのか。彼らは、天皇が行かない靖国神社へ何十人と徒党を組んで参拝をする。その様子がテレビで放映されている。これは、国会議員が靖国を参拝している姿を恣意的に国民に見せるという、政治的な計略行為であり印象操作である。

A級戦犯※第二次世界大戦後、1945 年 5 月から東京で開かれた極東国際軍事裁判（東京裁判）において、「平和に対する罪」により裁判された重大戦争犯罪者のこと。侵略戦争を計画、準備、遂行し、共同謀議を行ったことで罪に問われた者。東条英機以下 28 名がA級戦犯として起訴される。

B級戦犯※第二次世界大戦後の国際軍事裁判で、A級戦犯に対して通例の戦争犯罪をB級とした。戦争法規違反の行為として、禁止された兵器を使用、降伏者の殺傷、捕虜虐待、非戦闘員の殺傷、暴行略奪、無防備都市の攻撃、教育・宗教・病院等の施設の破壊などを含めたものをB級とした。

しかし、この参拝も議員バッチを付けているときだけしか行かないという愚かな行為である。議員であるときだけ行き、議員で無くなれば行かないという、これは正しく靖国神社を冒瀆し愚弄する行為ではないか。現職のときは、口先では靖国にはお国を守るために犠牲になられた英霊が祀られている崇敬すべき神聖な聖地であるかのような言い方する。

しかしだな、議員でなくなれば参拝しない。これは、戦死者に対する冒涜ではないのか。繰り返しになるが、天皇陛下が参拝に行かない靖国神社へ、どうして国会議員が政治利用で行けるのだろうか。それも、堂々と徒党を組んで参拝に行くことができるのか。ここに、司法の在り方が問われてくる。靖国裁判では、国会議員の靖国参拝を憲法に定める政教分離に反しているという判決を下したことがない。ということは、国家公務員が靖国神社に参拝しても憲法に違反していないという司法の判断を表明したことになる。何故、司法は堂々と違憲判決を出さないのか。これが、日本の悪しき姿なのだ。

国会議員が靖国神社へ参拝するのだから、靖国は国民も参拝すべきものなのだと、多くの国民に思い込ませる印象操作を行っているのだ。これが、先に言ったナチス時代のゲッペルスと同じ手法なのです。

■ 4. 昭和天皇の戦争責任

マッカーサーと昭和天皇

吉岡：金城さんは、昭和天皇の戦争責任※については、どのような考えをお持ちなのでしょうか。

金城：何故、昭和天皇は米軍に沖縄を提供したのか、という大きな疑問を私は抱えている。昭和天皇がマッカーサー※に宛てた天皇メッセージ※というものがありますね。これは、1947 年 9 月に、米国による沖縄の軍事占領に関して宮内庁御用掛の寺崎英成を通じて、昭和天皇の見解をまとめて、シーボルト連合国最高司令官政治顧問に伝えられたものだ。その見解の内容は、「米国が、沖縄を 25 年から 50 年、あるいはそれ以上の長期の間、租借(そしゃく)※することが日米双方の利益であり、日本国民の賛同を得ることである」と、シーボルトを通してマッカーサーに伝えている。ここにある租借とは、米国が沖縄の統治権を行使できるということで、言い方を換えると、昭和天皇は、沖縄が米国の植民地として統治されることを進言したということになる。

ここで問題なのは、日本国憲法は 1947 年 5 月 3 日に施行されているので、何故、昭和天皇は憲法で象徴とあるのに、このメッセージの内容にある政治的な発言をしたのかということだ。私は、これは、沖縄は日本ではないという認識が天皇と政治家、そして米国にあったからだと思う。だから、日本ではない沖縄のことについて天皇が発言したところで、日本国憲法の範囲外にあるから違法にはならず問題視されなかったということだ。

もう一つは、天皇の戦争責任が有知識者から問題視されたことから目を逸らすために、あえて米国にとって有益なことをメッセージとして発したのではないかと思う。それは、連合国、特にマッカーサーによって、天皇が、戦争責任を問われて罰せられることを回避するためであろうと思う。要するに、おおかたの日本国民の中には、国家の威信にかけて日本の伝統文化である天皇を護らなければならないという思いがあったのではないか。

昭和天皇の戦争責任※1931 年 9 月 18 日の満州事変から 1945 年 8 月 15 日のポツダム宣言による日本の降伏までの 15 年戦争に対する昭和天皇の戦争責任を問うこと。昭和天皇は大日本帝国憲法で、大日本帝国陸軍および大日本帝国海軍の統帥権を所持できる国家元首、かつ大日本帝国海軍の最高指揮官であると規定される。ならば、前頁にあるＡ級戦犯に当たる戦争犯罪人として裁かれるべき立場であると思われるが、そうではなかった。「同じ敗戦後を迎えたドイツには、ヒトラーという「絶対的悪人」がいて、本人は自殺しているが、その罪は裁かれた。しかし、日本の戦後は違っていた。国民は、西欧諸国によるアジアの植民地支配への危機感、非道な広島・長崎への原爆投下など、日本軍のアジア侵攻の加害者意識もあっただろうが被害者意識をも持ち、潜在的な天皇への思いから天皇の戦争責任を問うことはなかった。果たして、日本人にとって天皇とは、どのような存在なのだろうか。このときなぜ天皇の戦争責任を裁けなかったのか。」
（赤坂真理『愛と暴力の戦後とその後』）

マッカーサー※(1880～1964) 太平洋戦争開戦時の極東軍司令官。日本降伏後は、連合国軍最高司令官として日本占領の任務に当たる。

天皇メッセージ※1947 年 9 月、米国による沖縄の軍事占領に関して、宮内庁御用掛の寺崎英成を通じて、シーボルト連合国最高司令官顧問に伝えられた天皇の見解をまとめたメモである。その内容は、概ね以下の通り。
１．米国による琉球諸島の軍事占領の継続を望む。
２．上記 1 の占領は、日本の主権を残したまま長期租借によるべき。
３．上記 1 の手続きは、米国と日本の二国間条約によるべき。
天皇は、米国による沖縄占領は日米双方に利益があり、ロシア・中国の共産主義勢力の影響を懸念する日本国民の賛同も得られるなどとする。①日本の国体護持のために、沖縄を切り捨てたという議論、②長期租借により潜在的主権を確保する意図があったという議論など。論争は現在も続いている。（沖縄公文書館ＨＰ）

租借※ある国が他国の領土の一部を借りること。原則として租借国が統治権を行使する。

戦争の悲惨な被害や、広島・長崎への原爆の投下※という悲劇を経験し、右往左往して路頭に迷っているときに、日本国民は、その状態からの救いを誰に求めていけばよいのか分からなかった。

その時、もう一度日本国民は天皇を中心に日本を建て直さなければならないという哀願に飲み込まれていった。この思想に流れていくことが、常套手段として天皇の価値観を認める必要があるだろうと国家が国民を誘導していくのだ。だから、天皇の戦争責任については、国民自体が天皇の責任を問うことを稀薄にしていくという作用が働いたのだと見るべきではないだろうか。

少数派のインテリ達は、当然、天皇の戦争責任を問うべきだと言うが、おおかたの日本国民はそうではなかった。当時は混乱期であったから、マス・メディア、芸術家、文化人、学者達の中には、戦前に戦争を推進し讃美した言論を述べていたにも拘わらず、敗戦後に天皇が責任を取らないので自分たちも責任を放棄した。戦争を批判し反対運動をした思想家もいるが、結果として戦争により国家を滅ぼした責任を天皇に向けるのではなく、東条英機※に押しつけることによって昭和天皇は救われた。

日本政府は、天皇がアメリカに罰せられる前に、小笠原諸島※と南西諸島※を米軍に差し出すことで、天皇の処罰を免れさせようともした。小笠原諸島、南西諸島を米軍に差し出すことは、日本の施政権※が無くなるということだから、植民地※として米軍の軍政下に置かれるということを意味する。当然、米軍の軍事基地が建設され、核弾頭まで持ち込まれて保管されていたというのだ。この南西諸島に沖縄が含まれているのだが、沖縄が米軍の抵当に入れられ植民地となった。沖縄は日本ではないという認識で、昭和天皇は天皇メッセージで「米軍に沖縄を植民地として差し出した」ことは、憲法違反にはならないという、沖縄を差別した精神構造があったのだ。現在の政権にも同様の精神構造がある。だから、沖縄の民衆から沖縄差別だという声があがるのはこのことに原因があるのだ。沖縄戦という悲惨な戦争経験を強いられたことと、敗戦後の沖縄に対する扱いから、沖縄の人々の中には昭和天皇の戦争責任を問う人が多くいるのです。

広島・長崎への原爆の投下※1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分、人類史上最初の原子爆弾が、広島に投下された。広島に投下した三日後、8月9日午前11時2分長崎に原爆が投下された。原爆による被害の特質は、大量破壊、大量殺戮が瞬時に、かつ無差別に引き起こされ、さらに放射能による障害がその後も長期間にわたり人々を苦しめ続けている。
(広島市・長崎市ＨＰ)

東条英機※1884年東京生まれ。第2次・3次近衛内閣の陸相となり、首相に就任後も陸相と内相を兼ね、対米英開戦の最高責任者となり、太平洋戦争に突入する。戦局が劣勢となり、1944年辞職。敗戦後、Ａ級戦犯として1948年絞首刑。64歳。

小笠原諸島※父島・母島・聟島・硫黄島の4島から成り、東京都に属する。第二次世界大戦後アメリカに施政権が移るが、1968年に返還。

南西諸島※九州南端から台湾北東端の間に続く諸島の総称。

施政権※信託統治(国際連合の監督の下に、その信託を受けた国が一定の領土に対して行う統治)における立法・司法・行政の三権

植民地※異民族、または他国に支配され、その民族・国家に従属する地域・国をいう。植民地下にある住民は奴隷化され、労働を強制されるなど、その国の資源、経済力が搾取される。

18歳から選挙権※2015年6月17日、選挙権年齢を20歳以上から18歳以上に引き下げる「改正公職選挙法」が参議院本会議で可決され成立。世界では192か国の内176か国が18歳から選挙権を与えている。この前提には、18歳であれば政治に対して責任をもった判断ができるはずということなのか、その責任を持たせるように少子高齢社会を見越して育成を図ろうとしているのか。18、19歳は合わせて約240万人であり、有権者全体の2%でしかないが、政治、社会問題について意識を高める「主権者教育」が学校教育として重要になる。

■ 5. いま、抱いている危機感

最近このアトリエを訪ねて来る本土からの修学旅行の生徒たちに私が語るのは、「何故、18歳から選挙権※が与えられたのか。そのことを君たち自身で考えて欲しい。分からないのなら、その理由を君たちのお爺さんやお婆さん、お父さんやお母さんに聞いて下さい」ということだ。ところが、この

私の言葉に対する返事が無いのです。生徒たち自身の問題でありながら、答えを持っていないという現実がある。では、何故、18 歳から選挙権を与えたのか。若い彼らには、権利と義務という言葉の区別ができない。権力側から、お前たちは権利ばかりを主張しているが義務を果たしてないではないか、と言われることがある。今の若い者には、政治的意識が希薄だからという返答を大人たちからよく聞くが、それは違う。人間が言葉に対して緊張感をもって聞くことができたうえで、言葉を発しているかということを考えてみなければならない。

われわれ日本人は、権利と義務と責任ということに、日常的に直面していないために、それらについての意識が軽薄になっていることに危機感を覚えるのです。何故このように言うかといえば、18 歳から選挙権が与えられたことについて、ありがたいのか、ありがたくないのか。緊張感と危機感をもって受け止めていないと感じるからだ。政府が上意下達として国民に施行した制度に疑問を持たないことが問題だ。

つまり、日本人は、権利と義務と責任というこの三つを、日常生活の中で生かし切れていない。日常生活で生きていないのが、この三つなのだ。そのことを基本にして、何故 18 歳から選挙権を与えられたのかについて思案すると、そこから見えてくるのが徴兵制※の義務付けということだ。考え過ぎではないかと思われるかもしれないが、そうではない。そのことに思いが及ばないことの方が問題なのだのだと思う。

日常生活のなかで、日本国民は権利と義務と責任ということを体験していない。権利とは何だ。義務とは何だ。責任とは何だ。その必要性は知っているが、これらを問い返すということが無い。敗戦後から今日まで、平和憲法のもとで徴兵制の経験がない。これは悪いことではないのだが、いま現在は戦中のように、徴兵拒否した人が憲兵※に強制的に検挙されて戦場に連れて行かれるということは当然ない。しかし、徴兵制が施行されれば、その条件を満たした者は徴兵され戦場に出兵して戦うのが義務であり責任になるわけだ。この義務と責任を果たさない者には、当然それなりの罰則を課すのが権力なのだ。このことについての認識と理解が欠落してしまっている。

戦前・戦中は、国民の三大義務として「教育を受ける」・「税金を納める」・「徴兵」の義務があった。当時は、義務を果たさないとどういう目に遭うかという緊張感があったが、いまの若い世代にはそうした緊張感が希薄である。この義務を、好き嫌いで片付けられると思っているのではないか。

例えば、税金を納めない者には、義務と責任を果たさないことに対する罰則として、財産を差し押さえて没収するという厳罰が課せられるという実態を日常的に見ていない。「戦争に行きなさい」と言われたとき、「私は人を殺すのは嫌だから行きません」と、拒否をすることもできるが、徴兵制が定められたらそうはいかない。徴兵を拒否すれば罰せられるのです。

その例が、モハメド・アリ※だ。彼は、オリンピックのボクシング競技で金メダルを取り、ボクシ

徴兵制※国民に兵役の義務を強制的に負わせる制度。軍隊を平時において常設し、これに要する兵を毎年徴収し一定期間訓練して新旧交代させ、戦時編制の要員として備える。

憲兵※ここでの憲兵とは、思想弾圧など国民生活全体をも監視する権限を有する軍事警察。1881（明治 14）年に設置。

モハメド・アリ※（1942～2016）1942 年アメリカ・ケンタッキ州の出身。1960 年ローマオリンピックボクシング：ライトヘビー級で金メダルを獲得。1964 年には、世界ヘビー級王座を獲得。その後、ボクシング史上に残る名勝負を行う。しかし、ベトナム戦争への徴兵を拒否したことにより米国政府と長期にわたって争い、世界タイトルの剥奪、試合の出場禁止など様々な圧力があったが最後には無罪を勝ち取ったことでも知られる。現役時代に受けた頭部へのダメージからパーキンソン病と闘い 2016 年 74 歳で死去する。

人権侵害※人権とは、女性・子供・高齢者・障がい者・被差別地域の住民・外国人・犯罪者・犯罪被害者など、生存しているすべての人間には、豊かに安心して生きる権利がある。その基本的人権を損なうこと。

人種差別※人種的偏見によって、ある人種を社会的に差別すること。ナチスのユダヤ人排斥、白色人種による有色人種に対する差別待遇など。

ングのヘビー級の世界チャンピオンにもなったプロボクサーだ。人権侵害※や人種差別※をしてはならないと言っているアメリカでさえも、彼が自分の思想信条から人を殺すことはできないと、徴兵拒否をしたため刑務所に収監され、金メダルは剥奪された。これが、義務と責任を果たさない者に対して権力から課せられる現実なのだ。法規に定められた義務は、好き嫌いでは通らない。

アトリエに展示されてある作品

自分のことで申し上げよう。私、金城実が義務である税金を何十年も納めないとどうなるか。税務署が来て、このアトリエにある私の彫刻作品に差押えの紙を張って、作品に手を触れてはならないようにする。税務署は、金城実の作品を美術年鑑で事前に調べて、どの作品を差押さえすれば未払の税金と相殺できるかは分かっているのだ。自分の作品でありながら、それらが没収されるのだが一切文句は言えないのだ。これが義務を果たさなかった者に課せられる責任としての罰則なのだ。義務を果たさない者が受ける扱いの恐ろしさ、そのことへの緊張感覚が希薄なのだ。その恐さを若い世代の人は知らないのではないか。

踏み込んで言えば、戦争に行きたくないと言えば行かなくて済むかというと、そうはいかない。捕えられて刑務所に収監される。そして牢獄で死ぬか、精神異常を患って帰ってくるか。どちらにしろ、悲惨な状態を経験させられるのだ。80 歳になる私は、そのような現実を見てきた。今の政治状況を見ると、数の論理で憲法九条も改悪され、その後には徴兵制までもが制定されて孫たちが戦場に出征させられるようになるのではないかと危惧している。

チビチリガマ内にある遺品が少年たちによって破砕された。その遺品の前で唖然とする金城さんと知花さん

僧侶の皆さんは、日本が今、こうした危機的状況下にあることを葬儀や法事のときに話して欲しい。あなたたち僧侶は、葬儀のときに何を話しているのですか。仏法とは、今を生きる人々に真実を伝え、健やかに生きる道を説くのではないですか。

福島：今、摩文仁の丘等にある碑文を調べているのですが、それらは 1960 年代や 70 年代に建立されたものがほとんどです。その碑文の内容には、沖縄の人たちが経験した悲惨な現実を直視しようとする視線が欠けていることや、先の戦争を美化している内容が読みとれます。しかし、今、その碑文の存在そのものが忘れ去られているように思う。「平和の礎」のある場所までは、修学旅行生は訪れます。しかし摩文仁の丘までは行かない。これは摩文仁の丘にある慰霊塔・碑文そのものの風化を意味します。しかも建立された当時の受け止め方のままで戦死者を慰霊し、ほとんど見直すこともなく放置してきたのが実態ではないでしょうか。

金城：最近、沖縄戦で強制集団死があったチビチリガマの戦跡が、沖縄の若い少年たちに破壊されるという事件があった。これは右翼によるものではないかとの懸念があり、警察が徹底した調査をした。しかし右翼による指令活動ではないということで一安心はしたが、沖縄の青少年の平和教育、平和認識のあり方が懸念されるのだ。

このチビチリガマの入り口には、私の創案で、強制集団死で亡くなった人たちの遺族、地域住民と有志たちで建てたモニュメントがある。加害少年たちは、ガマ内部にある遺品とこのモニュメント「チビチリガマ世界を結ぶ平和の像」の一部を破壊した。

このガマでは、毎年、遺族、地域関係者が集い慰霊祭を行っている。遺族にとっては、尊く神聖な場所として今現在も関係を深めている。チビチリガマは、沖縄における戦争遺跡の第一号に指定されている。その遺跡を破壊したのは、とても罪深い行為だ。この加害少年たちには保護観察処分が付き、彼等の更生活動として破壊したモニュメントなど施設の修復の申し出がある。

2017 年 9 月、チビチリガマ内部にあった遺品のビンが割られたり、千羽鶴を引きちぎり、モニュメントの一部などの破壊行為をした少年 4 人が反省の祈りを込めて、金城さんの指導のもと共同制作をした高さ 60 センチほどの微笑むような顔をした野仏が、ガマの周辺に 12 体安置されている。

さて、あなた方は、摩文仁の丘等の慰霊塔の碑文について調べているが、その目的と内容が何かということが問題なのです。それをどのように沖縄の私が捉えるかです。それは、福島さんが言うように風化ということに堪えられるかということだと思う。記念碑、遺跡というモニュメントが歴史の移り変わりによる風化に堪えられるのか。戦争の記憶を忘れないための慰霊塔であり慰霊碑であるのだが、歴史という時間の流れによってその記憶が薄れ忘れられていくとすれば、それは悲しいことである。

チビチリガマで行われている慰霊祭では、沖縄戦による強制集団死という悲惨な出来事の記憶を呼び覚まし、二度とこのような過ちを起こさないことを願い誓うという姿勢で、慰霊という行動をもって死者と向き合っているのだ。風化ということならば、戦争という残虐な行為と死者に向き合っていないという、意識と行動が形骸化していることを意味する。その点が問題なのだ。

吉岡：今回、なぜ、摩文仁の丘等に林立する全国都道府県の慰霊塔と、そこに敷設されている慰霊碑文を掲載し、解説文などを添えたガイドブックを作成することになったのか。それは、2010 年 2 月 8 日～10 日の二泊三日で、首都圏大谷派開教者会※が企画した研修「沖縄開教と非戦平和」（会員参加 25 名）で、摩文仁の丘へ行き、慰霊塔を見学したことがきっかけでした。この見学後に、琉球親鸞塾※塾長の金城さんと初めてお会いし、研修での講義をお伺いしました。

当初は、広大な摩文仁の丘に各都道府県が建てた慰霊塔の外観を興味本位で眺める程度でしたが、よく観ると各慰霊塔に慰霊碑が付設され、碑文が刻字されていることに気付いたのです。特に、自分が生まれた富山県と、生活の地である千葉県の碑文を丁寧に読みました。他の都道府県の碑文も読んでみて、驚きました。先の戦争は聖戦であって、戦死者のおかげで今の日本の繁栄があり、戦没者は英霊である。ほとんどの碑文の内容はこのことを基調として述べてあり、反戦や非戦の言葉は少ない。先の太平洋戦争は聖戦と理解しているため、加害意識は無く戦死者へ謝罪する言葉はありません。京都の塔と近江の塔の碑文を除き、唯一の地上戦場となり一般市民の多数が犠牲となった沖縄への労いや謝罪の言葉はありません。

首都圏大谷派開教者会※

1991 年 8 月、東京都練馬区の真宗会館を事務所に「首都圏大谷派開教者会」が設立。設立時の会員 13 名。設立趣旨は、「現代社会の問題にこそ宗教が大きく関わって、その真価が発揮されるべきであるという理念のもと、首都圏において同朋社会の顕現とその充実を図るべく、開教により真宗大谷派の寺院の建立を願いとするものである。」（「首都圏大谷派開教者会規則前文」より）

琉球親鸞塾※当初は、玉光順正氏が主宰として開かれたが、事情により閉鎖となり、その後 2007 年に金城さんのアトリエを会場に再開された。これは、真宗大谷派が親鸞聖人の教えを聞法する道場を開く施策として奨励する「真宗同朋の会」の結成を行ったもの。塾長は、金城実氏が現在も務める。

これらの碑文の問題についての解説本を探して、大田昌秀（おおたまさひで）※氏の『沖縄の慰霊の塔－沖縄戦の教訓と慰霊－』を見つけました。ただ、この本には各慰霊塔についての解説はありますが、碑文についての総説は述べられてあっても一々の碑文の解説はありません。さらに探しても見当たらないので、沖縄別院※職員の長谷暢※氏に相談して、沖縄で宣教する５名の牧師１名の信徒の方※で編纂された『戦争賛美に異議あり！－沖縄における慰霊塔碑文調査報告－※』を紹介され、進呈してもらいました。この著書の内容は、大田氏の著書にも引用されています。

羽田空港行きの帰りの機内で熟読し、衝撃を受けました。『戦争賛美に異議あり！』に書かれた碑文への所見と、碑文内容への徹底した批判が述べてあるのです。帰省してからも何度も読み返しました。摩文仁の丘で碑文が刻字された慰霊碑を発見したこと、大田昌秀氏の本と６名の牧師が編纂された著書との出遇いが、今回のガイドブック制作の動機になっています。

福島先生とは、2015 年９月６日に開催された「大谷大学千葉支部巡回講演会※」でお会いしました。講師として、「人間は何を求めているのか－恨（はん）を解いて浄土を生きる-」という講題で、「金城実氏の彫刻家として表現される思想内容を通して、沖縄の現状を考える」ということを主題に話されました。この講演内容を聞き、この人であれば、摩文仁の丘に建つ碑文の内容に学者として深い関心を持っていただけるだろうと思い、ご相談申し上げてご理解をいただいたのです。

金城：そうでしたか。大事なのは、何事も出遇いですね。先の話ですが、記憶の風化を防ぐということを考えるときに、自然風化の面だけでなく、時間の経過や時代の移り変わりの影響についても考慮しなければならない。たとえば、時代的に言えば文部省が教科書検定で、教科書から慰安婦問題※を削るよう意見するとか、沖縄戦で強制集団死の軍命や南京虐殺は無かったとするような、右傾化する取り扱いに対して我々がどのような対応をするのかが問われてくる。摩文仁の丘にある碑文の内容に対して、我々がどのように捉え、対応するのかということが問題なのだ。

戦争の記憶の風化ということが大きな問題なのだが、チビチリガマの慰霊祭は、戦争の記憶を風化させない取組みとして機能している。慰霊祭前には遺族の子や孫たちが毎年集まってガマ周辺の掃除をして、慰霊祭当日にお参りをする子や孫たちが毎年増えている。ところが、読谷村には、「艦砲ぬ喰（く）え－残（ぬく）さ－の歌碑※」と「「さとうきび畑の歌碑」※」とか「恨（はん）の碑※」、そして「チビチリガマ」があるが、この四つの連携ができていないことに、私は不満を抱いているのだ。

大田昌秀※1925 年６月 12 日久米島生まれ。2017 年６月 12 日死去 92 歳。沖縄師範学校に進学。1945 年３月鉄血勤皇隊に動員され情報宣伝隊の「千早隊」に配属される。沖縄戦の中、敗残兵にスパイとして射殺されかかり大怪我をする。敗戦後、米軍の捕虜となり軍施設で働きながら日本とアメリカの留学試験に合格し、1951 年早稲田大学教育学部へ進学。在学中に渡米し留学する。帰国後、1968 年琉球大学法文学部教授に就任。1990 年琉球大学を辞職し、第６回沖縄県知事選挙に出馬し初当選、２期務める。この任期中に、反軍反戦反基地の姿勢を明確にして取り組む。さらに、平和の礎の建設、旧資料館を移設し、新たに沖縄平和祈念資料館を建設、2000 年４月１日より一般公開する。2001 年６月、第 19 回参議院議員通常選挙（比例区・社会民主党）に当選。2007 年７月、参議院選挙に出馬せず政界を引退。後続は、元読谷村長・県出納長の山内徳信氏が務めた。引退後の 2013 年、沖縄国際平和研究所を設立、理事長として私費で運営するが、2017 年９月閉館。

沖縄別院※以前より沖縄には「真宗大谷派沖縄開教本部」が運営活動していたが、2010 年４月にマカレー東本願寺（米国ハワイ州）のご本尊を受け継いで東本願寺沖縄別院が宜野湾市大山に設立され、本部と別院が一体となって沖縄の地で真宗の教えを聞く場を開いて活動している。

６名の牧師と１名の信徒の方※
平良　修　佐敷教会牧師
中原俊明　首里教会信徒
島田善次　宜野湾告白伝道牧師
池永倫明　沖縄伝道所牧師
名護良健　泊パフテスト教会牧師
鬼本照男　立教小学校チャフレン

戦争讃美に異議あり・・・※上記６名の執筆者が、各テーマで書かれたものを編纂し 1983 年１月 31 日第１刷発行。編集発行名称は、「靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連合会」。

長谷暢※編集者紹介を参照。

大谷大学千葉支部巡回講演会※大谷大学同窓会には、全国 80 支部を擁し、その中の千葉支部に当たる。毎年７月から９月の期間に大学・大学同窓会本部・全国各支部が協働して「全国縦断夏季八十講」という巡回公演会を開催する。

慰安婦問題・各碑※次頁に記載。

艦砲ぬ喰え－残さ－歌碑

さとうきび畑の碑

恨の碑

沖縄に現存し、目にする慰霊塔や慰霊碑は多数あるのだが、それらの意義や意味を後世に伝える努力が欠けているのでないかということを強く思う。そのことから言うと、あなた方がこれから作成する慰霊塔とそこに建つ慰霊碑の碑文を編纂したガイドブックで、広く人々に伝えようとする取り組みは、大事なことだと思う。

戦争の記憶を風化させないために、私たちはどうすべきなのか、修学旅行の生徒が戦跡に訪れることが減ったことを歎いてみたりするけれど、それでは何の解決にもならない。沖縄の人間が、主体的にどのように考え行動しているのか。現在、沖縄県平和祈念資料館がどのような役割をし、県はこうした問題に対して、どのように取組んでいるのか。ここをしっかりと検証しなければならない。

福島：摩文仁の丘に建つ碑文の多くは、先ほども言いましたが、1960年代、70年代に建てられたままで、恐らく碑文の内容も検証がされることもないままに、多くの碑文は、見直すことなく放置されてきたのではないかと思います。

金城：この碑文を見直すという問題は、あなた方だけの問題ではなくて、私の課題であり沖縄全体の課題でもある。戦争の風化を止めるためには、具体的に、技術的に、どうあるべきかという課題がある。活字媒体とか、修学旅行の生徒による学習だけでは難しいのではないか。では、どうすればよいのか。たとえば、新たにモニュメントを創ることも一つの方法かも知れない。

記憶を残すのにどれだけの意味があるのか、そのことをまずは前提にして考えてみる。金城実が制作した「戦争と人間」は、高さ3メートル×幅134メートル、2007年に完成し、沖縄県読谷村役場前で展示会を開催した。実行委員長は知花昌一※氏だ。

風化とは、記憶が薄れ、視覚から消えて色あせていくことでもある。風化を少しでも防ぐために、どのような作業が求められているのかを、議論すべきである。そもそも、そのような議論をしたことがあるか、という確かめが重要だ。先にも言ったが、読谷村には四つの戦争遺跡があるにもかかわらず、「恨の碑」も「チビチリガマ」も「艦砲ぬ喰え－残さ－の歌碑」も「「さとうきび畑」の歌碑」も、その関係者だけで、それぞれに慰霊祭を行っている。これらの連携が無いことではダメではないかというのが、私の考えなのだ。

慰安婦問題※この問題は、日中・太平洋戦争中に日本軍に徴用された、おもに東アジア各国の慰安婦への謝罪と補償の問題。国家補償は行われていないが、1995年には募金を集めて「償い金」として一時金を支払う。「女性のためのアジア平和基金」が発足した(2007年)。2015年には「日韓合意」が結ばれたが、未解決の問題である。教科書に関しては、1999年1月、文部省が中学校社会科教科書発行者に対し、検定申請前にもっとバランスのよい内容にすること、著者構成を見直すことなどを非公開に申し入れた。その結果、一部の出版社では、「慰安婦」記述を担当した著者をはずし、同年11月には、三社が中学校教科書の「従軍慰安婦」記述について「従軍」や「強制」を削除する訂正を行った。参照：(別冊・世界第696号〈2001年12月〉『歴史教科書問題 未来への回答』)
以降の歴史教科書問題の背景には、1990年代後半から、教科書中の「従軍慰安婦」や「南京事件」などの加害の記述を「自虐的」などとして削除をするよう右派勢力からの攻勢が盛んに行われたことがある。

艦砲ぬ喰え－残さ－の歌碑※第1章「沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑」の「2．特色ある慰霊碑と碑文」を参照。

「さとうきび畑」の歌碑※同上。

恨の碑※同上。

知花昌一※第3章「2．沖縄から日本を考える－非戦の祈り」を参照

南北之塔

朝鮮人慰霊塔

それから、沖縄戦の中で、特に慰安婦問題を見落としてはいけないという思いがある。沖縄戦という戦闘だけに目を奪われずに、「恨の碑」が建立された経緯から、沖縄における朝鮮人に対する沖縄人の目線がどうであったかということも、見ていかなければならない。

それから、北海道のアイヌ※の戦死者が祀られている南北之塔※と、朝鮮人の戦死者と慰安婦の死亡者が祀られた朝鮮人慰霊塔※がある。この二つの塔を調べることで、当時、アイヌや朝鮮人がどのような扱いを受けていたかを知るだろう。ここに、あなた方の取組みの質が問われるてくる大事な意味がある。

福島：南北之塔は糸満市にあります。それは、戦後、真栄平(まえひら)地区周辺に散在していた身元不明の遺骨を地域住民が拾い集めて納骨堂を建てたのが最初で、その後、恒久的な慰霊塔として 1966 年に建立された。真栄平のあたりは、沖縄戦に派兵された北海道の部隊の兵士の多くが戦死した場所であったようで、沖縄戦を生き残ったアイヌの元兵士が建立に際して寄付をしたこともあり、「南北之塔」と名付けられたようです。その後、「アイヌの碑」として知られていくようになると、沖縄の地元住民から、塔建立の史実を枉(ま)げるものという指摘や反発の動きがあったとも聞いています。実は、私のゼミ生が、「南北之塔」の建立に携わった地元住民の方に聞き取り調査を行いながら、卒業論文の作成に取り組んでいますので、その成果に期待したいと思います。こうした慰霊塔を巡る経緯そのものが、史実をいかに記録し、記憶していくかという重要な問題に関わっていると思います。

（以上、2017 年 11 月 26 日 10 時～13 時沖縄県読谷村の
アトリエにて福島・吉岡が聞き取り：文責は福島・吉岡）

■ 6. 金城実と、親鸞聖人の出遇い

福島：アトリエの入口左上に「琉球親鸞塾」と書かれた看板がありますが、どのような塾なのですか。

金城：大阪で教員生活をしながら彫刻制作をしていたとき、玉光順正※という浄土真宗※の僧侶と出遇ったのだ。玉光さんは、兵庫県で真宗大谷派※の住職をされていて、その僧侶たちが主催する集会に呼ばれて話をして欲しいということだった。行ってみると、みんな

アイヌ※かつては北海道・樺太・千島列島に居住したが、現在は主として北海道に居住する先住民族。近世以降は松前藩の過酷な支配や明治政府の開拓政策、同化政策などによって、固有の慣習や文化の多くが失われ、人口も減少したが、近年文化の継承運動が起こり地位向上を目指す動きが進んでいる。母語は、アイヌ語。

南北之塔※第 1 章「沖縄県内に建立される慰霊塔と慰霊碑」の「2、「特色ある慰霊と碑文」を参照。

朝鮮人慰霊塔※同上。

玉光順正※1943 年兵庫県生まれ。同志社大学卒業の後、京都専修学院を卒業。兵庫県市川町 光明寺住職、「市川親鸞塾」主宰。元真宗大谷派教学研究所所長。共著に『宗教・この問われるもの』、『聖書と親鸞の読み方ー解放の神学と運動の教学』など多数ある。

浄土真宗※大乗仏教の宗派の一つで、親鸞聖人を宗祖とする。浄土三部経を所依とし、阿弥陀仏の本願を信じ念仏申すことで往生浄土ができると説く。親鸞は生涯、法然上人の弟子として送るが、親鸞滅後にその門弟たちが教団として発展させる。

真宗大谷派※浄土真宗の宗派の一つ。所在地は、京都市下京区烏丸七条。親鸞聖人の御木像が安置される御影堂と阿弥陀堂が建ち、それを真宗本廟と称し、全国大谷派寺院の根本道場とする。

黒い服装（法衣）を着ているので、直感でこれは右翼の集会だと思ったものだ。

玉光さんは、平生は無口な方だが、親鸞聖人※のことを語り始めるとすごいのだ。私自身その当時は、親鸞聖人という人の認識は鎌倉時代に活動された坊さんであることぐらいで、その思想的なことは無知といっていいくらいだった。

「琉球親鸞塾」の看板（アトリエ入口左上）

しかしだな、そこで語った玉光さんの言葉に驚いた。要約するとこうだ。「親鸞聖人は、浄土真宗を名乗り、浄土※とは自己はもちろんのこと、天皇制国家であるこのヤマトを相対化することのできる根拠であり原理である。真宗とは、その根拠が阿弥陀仏の本願※、つまりすべての人々の中にある真実に目覚め、出遇うことから、何よりも自己を問い、国家を問う思想なのだ。そこに念仏が具体的表現として、現実社会の中で運動として表現されるのだ。」と、玉光さんは語るのだ。

この言葉には驚いたし共鳴もしたね。右翼が国家体制、天皇を問い、批判するなんてありえない。この言葉で、彼らは右翼ではないことを確信したのだ。ただ、玉光さんが語る中に出てくる「親鸞聖人」はもちろんのこと、「浄土※」、「阿弥陀仏の本願※」、「真宗」、「念仏」ということの意味が分からないのだ。この玉光さんが、その後に「琉球親鸞塾」を立ち上げ開くのだが、事情により後に閉鎖となった。しかし、2007 年に再びこの読谷村に私が塾長として、開くことにしたのだ。メンバーは多くはないが、知花昌一、俞漢子（ゆ よんじゃ）※といった発信力のある活動的な者がいる。玉光さんとの出遇いから、このメンバーと共に親鸞という宗教者の深い思想との出遇いが始まったのだ。

吉岡：玉光さんの言葉の中に「浄土とは自己はもちろんのこと、天皇制国家であるこのヤマトを相対化することのできる根拠であり原理であり」と語られた中の、「相対化することができる」とはどのような意味なのでしょうか。

金城：それはね、私の親父の生き方から考え知ることができるのだ。親父は、日本人になるために沖縄の文化を自ら否定し捨てて、天皇に忠誠を尽くし、19 歳で若い妻子を残して戦場へ志願して行き、そして 23 歳で戦死する。親父には、天皇とは畏敬の念を以て従順すべき絶対的な崇敬すべき存在であったのだと思う。そこには、天皇の存在意義と自分との関係は何であるのかなどと、問い質して明確にする意識などまったくなく、ただ没我的に盲目的に従順な関係性を保つことが天皇、国家に対する善行であり誠意であると考えていたのだ。

親鸞聖人※鎌倉時代前期から中期(1173 年～1262 年)にかけて本願念仏の教えを説いた僧侶。日野有範の長子として生まれ、9 歳のとき慈円のもと出家得度し、29 歳で法然の弟子となる。1207 年念仏弾圧により越後に流罪となる。地元の人々と共に生き、この地で恵信尼を妻にする。赦免後、常陸の稲田に草庵を建て本願念仏の教えを民衆に説く。60 歳を過ぎてから京都に戻り、教行信証の制作をし、90 歳で死去。

浄土※仏教において、一切の煩悩や穢れを離れ、五濁や地獄、餓鬼、畜生の三悪趣が無く、仏(如来)・菩薩が住む清浄な国土のこと。

阿弥陀仏の本願※仏教では、仏や菩薩が過去において建てた誓願をいう。この本願は、阿弥陀仏がまだ法蔵菩薩という菩薩として修行中に建てた四十八の誓願のことをいう。この誓願が成就して、阿弥陀仏と成った。

俞漢子※1949 年、広島県生まれ。韓国国籍在日二世。朝鮮人による民族学校で 12 年間学ぶ。1988 年指紋押捺拒否。地域の文化サークル「ピース・ピープル」を仲間と共に始める。1989 年市川親鸞塾(玉光順正氏が主宰)において親鸞を知る。真宗大谷派教師資格を取得。

山内徳信※1935 年沖縄県読谷村生まれ。琉球大学文理学部史学科を卒業。公立高校の教員を経て、1974 年読谷村長に当選 39 歳(6 期)村長室には、憲法 9 条、99 条の条文を描いた掛軸と額を、来客(米軍官僚・本土の政治家)に見えるように掛けた。現在も掛かっている。1998 年大田昌秀沖縄県知事の下で県出納長を務めるが 1 年で退任。2007 年 7 月参議院議員選挙比例区に社会民主党から大田氏の後を受けて出馬し初当選。2012 年 7 月次の選挙には出馬せず、政界を引退。著書に、『沖縄・読谷村の挑戦』、『憲法を実践する村－沖縄・読谷村長奮闘記』、『米軍再編と沖縄の基地－国外移転こそ民衆の願い』など多数ある

つまり、この「相対化することができる」というのは、親父の思考とは正反対のことを意味するのだ。天皇とは、国家とは、この私とどのような関係性のもとで成り立つのか。私にとって、どのような意義をもって関わるべきものなのかを問うことなんだと思う。つまり、生存するいかなる存在も、必ず相互の関係性というものがあって成り立つのだ。これが、仏教の根幹を説く教えでしょう。

支配権力者、国家主義者は、相互の関係性を認めず、一方的にその権威と意思とに絶対の優位を堅持しようとするのだ。日本政府が今の沖縄に対して行っていることが、そうであるように。

辺野古新基地問題を語り合う、山内氏と金城さん
（2018 年 6 月 24 日：アトリエにて）

福島：金城さんが書かれた『沖縄を彫る』の中に、「芸術は、民衆の解放の武器たりうるか？」という衝撃的な厳しい言葉がありますが、この言葉には琉球親鸞塾で学ぶ親鸞思想の影響があるのでしょうか。

金城：私の彫刻制作を通しての芸術活動の思想的な影響は、元読谷村長と参議院議員を務められた山内徳信（やまうちとくしん）※氏から魯迅（ろじん）※、そしてケーテ・シュミット・コルヴィッツ※に学びながら、芸術表現とは思想というフィルターを通し、昇華し普遍化されなければならないと思うようになったのだ。特に、強制集団死の現場にいた民衆たちや殺された人々にも抵抗や抗議の意志が存在したことを表現し、彼らの人間的尊厳を失わせない作品こそを創らねばならないのだ。

重要なことは、芸術が運動という力を持つことであり、そのためには、技術を特権化し、作らす側、作る側、見せられる民衆の関係を分断してはならないということだ。だからこそ、「浄土」という天皇制の世界より深く、それを包み込むくらいの世界が必要になるのだ。玉光さんの言葉で言えば「浄土を根拠として、穢土※を生きる」という、被差別部落の人々、沖縄戦で差別的に虐げられた体験をした沖縄民衆、障がい者など、差別を被るの人々と共に生きる世界に立ちながら反差別の運動を彫刻制作という芸術によって表現したいのだ。

（以上、2018 年 6 月 24 日 14 時～15 時沖縄県読谷村のアトリエにて
福島・吉岡が聞き取り：文責は福島・吉岡）

山内徳信※前項に記載。

魯迅※1881 年清浙江省紹興市生まれ。1936 年 10 月 55 歳で死去。中国の小説家、翻訳家、思想家である。中国で最も早く西洋の技法を用いて小説を書いた作家である。毛沢東は「魯迅の中国における価値は、私の考えでは、中国の第一の聖人とみなされなければならない」と講演したほど、高く評価していた。作品には、狂人日記・故郷・阿 Q 正伝・彷徨などがある。

ケーテ・シュミット・コルヴィッツ※1867 年 7 月～1945 年 4 月没 77 歳。ドイツの版画家、彫刻家。周囲にいた貧しい人々の生活や労働を描いたほか、自分自身の母として、女性としての苦闘を数多くの作品に残した作家である。ドイツ帝国、ヴァイマル共和国、ナチス・ドイツという揺れ動く時代を生きた 20 世紀前半のドイツを代表する芸術家の一人である。

穢土※我々凡夫が住む穢れた国土をいう。凡夫の住む娑婆は、三界六道の苦しみと迷いの世界であることから穢土という。穢土の対概念が浄土。

■チビチリガマで起こった少年４人による破壊行為のその後について、金城さんが書かれた通信文をご紹介します。

制作現場からの報告

チビチリガマ事件の少年たちとのかかわり　　金城 実

2017 年 9 月に、チビチリガマの内部の千羽鶴を引きちぎり、遺品や看板などを破壊して器物損壊罪で逮捕された 16 歳から 19 歳の少年たちは、以前にもお伝えしたと思うが保護観察処分をうけている。事件後那覇裁判所から私に保護観察者になってほしいとの依頼があってまず驚いた。

私は遺族とともに「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」の制作指導者である。つまり被害者の側にいる私がなぜ加害者のために仕事をしなければならないか、そこに矛盾はないかと考えた。同じく遺族会会長の与那覇徳雄さんにも保護観察者の依頼があったということであった。

若い、これからの沖縄を背負う子どもたちである。大阪にいる私の孫も 18 歳であった。保護観察の仕事とはどのようなものか、初めてである。幸いちゃんとしたマニュアルがあった。そこには公園の掃除、老人ホームの訪問、公共施設での仕事などがあり、時間の配分まで書かれてあった。

なんだ、保護観察とはこんなものかとがっかりした。マニュアル通りに行えば 1 週間もかからない。これで子供たちに何が残るのか、反省と罪の意識にどうかかわれるのか不安と不満が込み上げてきた。

少年たちと 9 月初め、私のアトリエでチビチリガマ遺族会与那覇さんも交えて宿題としておいたレポートの提出日でもあり、その内容について検討会議に入った。

彼等に課した仕事はチビチリガマの清掃と壊した像の修理、新たな野仏を作るというもので、マニュアルを大きく超えた作業になってしまった。

野仏を作って以来彼らと保護者がアトリエを訪れるのは 2 度目である。私も会長も彼らのレポート次第ではこれで終わりにしようと思っていたのだが、問題が出てきた。レポートの内容はほとんどが「野仏を作ってよかった」と書かれてあった。この言葉から何を読み取ればいいのか、確かに野仏を作ろうという発想は私から出したものだった。私の思いを伝えようと彼らに向かった。

「なぜ君たちに野仏を作らそうと思ったか、野仏という仏像は沖縄にはない。また、あなたたちの起こした事件と野仏に何か関係があるのかと聞かれれば、ない。しかし我々ウチナンチュが大切にしている年中行事というのがあるね、清命祭(シーミーサイ)7 月のエイサー、つまり生きている者たちの正月よりも死んだ人々への祈りをウチナンチュは大切にしてきた。小さいころから仏壇に向いて膝まずき、手を合わせてオジーオバーの空気を吸って知らず知らずにたたきもられていく。つまり無意識のうちにも死者と私たちという関係を掛け合わせているのだ。

チビチリガマの入り口には石に文字で刻まれた名前と年齢があるだろ、ほとんどが 19 歳以下の年齢だよ。今の君たちと同じくらい年齢の人もいる。73 年前に彼らの年齢は止まったまんまだ。どこが似ていてどこが違ったのか、気にならないかね。君たちの犯した罪は一生君たちが背負うことになる。しかもあの世に謝罪しに行くには 73 年も前のあの世に行かないといけない。そこで野仏にお願いして君たちの代わりに申し訳ないという君たちの思いを伝えに行ってもらうことになる。だから反省：お詫びの心を込めて作ってほしい。死んだ彼らはきっと君たちの作った野仏をガマの中から見ていると思うよ。」

少年たちとの野仏づくりはたちまち大きくメディアに取材された。ほとんどの局が取材に来た。NHK は国際局まで取材に来た。何かわけのわからない美談になっていくのが大げさに思える。被害

者と少年たちとの関係の在り方が気になるという日本社会がぼやーと見えてくるような気がしてくる。

4人のうち一人は今年20歳になる。もはや青年といおうか、犯罪における年齢では裁かれる内容に違いが出てくる。その青年が気になった。事件を起こしたときは19歳、妻子もいた。事件直後は仕事をしていたが、保護観察に入ると仕事はやめてしまった。彼の妻は遺族会長の与那覇さんに「主人は仕事に行かずだらだら過ごしている、何とかできませんか、もっと厳しくしてください。」と言ってきたという。私は彼に聞くことにした。「仕事に行ってないのかね」「行ってない。」「なぜ？」「面白くないから」「そうか、面白くないのか、それでどうするつもりだ。」　無言　「君ね、もお父さんなんだろ、妻子を養う責任があるだろ」「離婚した。父親じゃない、妻子を養う責任はない」と言う。私は絶句した。

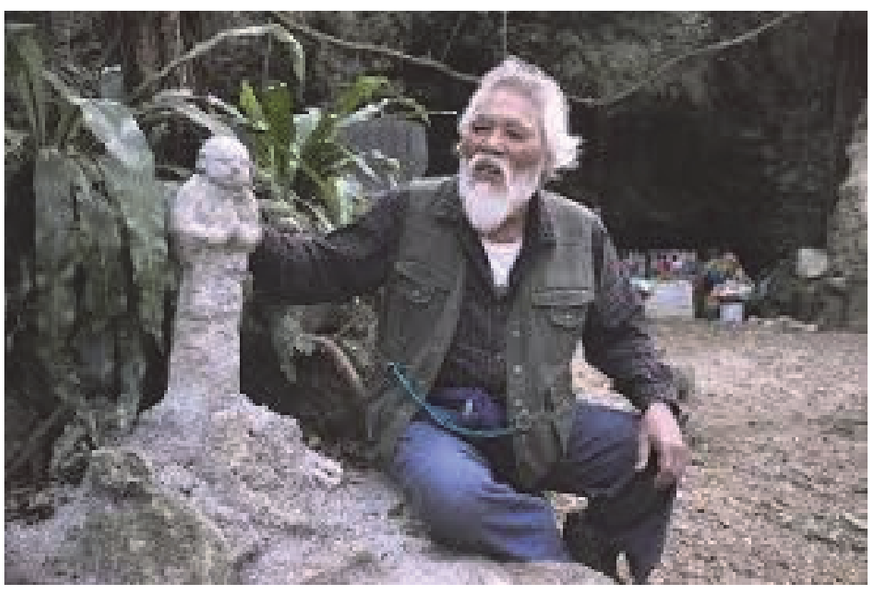
これじゃ保護観察はやめるわけにいかんな、と思い再度11月半ばに話し合うことになった。

ちなみに沖縄における少年犯罪について保護観察官に聞いてみると、なんと15000件もあり、うち約10000件が保護観察を受け、ほぼ5000件が少年刑務所に送られているという。沖縄県の全人口は144万8千人、15歳以下の年齢の人は30万人ぐらいか。保護観察者の仕事はまだ終えるわけにはいかないのです。

（沖縄の彫刻家　金城実を支える会『大獅子通信』27号　2018年11月5日より転載）

金城実氏の主な編・著書・作品集

豊里友行『金城実の世界』2010年
金城実・柴野徹夫『彫塑 鬼』憲法9条・メッ・プロジェクト、2010年
大西忠保『100mレリーフ写真集「戦争と平和」』2007年
金城実『「ミッチアマヤーおじさん」』宇多出版企画、1993年
金城実『民衆を彫る』解放出版社、2001年
松島泰勝・金城実『琉球独立は可能か』解放出版社、2018年



知花（ちばな） 昌一（しょういち）氏の紹介

プロフィール

1948 年 5 月　沖縄県読谷村に生まれる
1969 年 4 月　沖縄大学入学、1974 年中退
1983 年 8 月　チビチリガマ「集団強制死」調査
1987 年 10 月 沖縄国体で「日の丸旗」焼却
1996 年 4 月　米軍基地「象の檻」返還闘争
1999 年 9 月　読谷村議会議員初当選（ 3 期 12 年）
2011 年 4 月　大谷専修学院入学
2012 年 3 月　大谷専修学院卒業、大谷派教師資格取得
2014 年 3 月　聞法道場「何我寺（ぬうがじ）」開設
現　在　住職として法務をする傍ら、全国で講演活動をする。辺野古新基地反対運動に参加。
著書『焼き捨てられた日の丸』社会批評社
『燃える沖縄、揺らぐ安保』社会批評社
『我肝ウチナー』共著・『抵抗者たち』共著
など

※何我寺の近くにある自宅の庭に宿泊施設を設け、「何我舎」の名称で民宿を経営する。夕食は、知花さんとお酒を飲み交わしながら歓談することもできます。

何我寺の本堂

沖縄から日本を考える －非戦の祈り－

知花 昌一

■１．自己紹介

私は、金城実※さんが中心となり、私も幹事をしている「琉球親鸞塾」で、毎月『歎異抄※』を学習しながら、親鸞聖人の教えを一緒に勉強してきました。このようなこともありまして、この機会に仏教徒として生きて行こうと決意して、2010 年 4 月 15 日、真宗大谷派東本願寺「沖縄別院」として新たに施設を建てられたその落慶法要のときに、帰敬式※がありましたので、20 名程の方々と一緒に帰敬式を受けました。その後、所定の研修等を経て、真宗大谷派の僧侶資格を取得して、現在、僧侶として活動をしています。

現在、沖縄県内にある真宗大谷派（東本願寺）関連の寺院は、那覇市内にある「真教寺（しんきょうじ）※」の一ヶ寺と、宜野湾（ぎのわん）市にあります「東本願寺沖縄別院」と、私の生家がある読谷村で私が代表を務める「何我寺（ぬーがじ）」と、名護市の興念寺だけです。本願寺派※（西本願寺）は、別院を含めて 20 ヶ寺以上あるようです。私はその「何我寺」という聞法道場で、月 2 回の聞法会を続けて 6 年ほどになります。

私は、1948 年生まれで 70 歳になります。団塊世代の生まれです。大学は学園紛争の只中で安保闘争に参加する学生運動、反戦平和・反基地運動などいろいろな活動をしました。

◆沖縄は、観光の島・戦跡の島※・基地の島※

さて、沖縄のイメージといえば、まずは「観光の島」です。沖縄には、観光に人々がたくさん来て下さって、平成 29 年度は約 960 万人（沖縄県文化観光スポーツ部のデーター）近くの人が来島しました。非常に大きな産業になっています。沖縄は、蒼い海、青い空があり、非常に素晴らしい風光明媚な観光リゾート地であります。

また、もう一つは、戦争の跡が今もまだ残っている「戦跡の島※」でもあります。「ひめゆりの塔※」など、まだまだたくさんの戦争の生々しい傷跡が残っています。戦争体験をした人でまだ健在の方もおいでになりますので、その人たちは戦争の悲惨な体験を背負いながら今を生きています。そしてもう一つは、「基地の島」ということです。見たくなくても目に入ってしまう基地の島です。このようなことが、沖縄のイメージであると思います。

これから、私が理解している沖縄の過去から現代までを順追ってお話しましょう。

沖縄では、日本復帰後の 1987 年に、沖縄国体のソフトボール競技会が私の生家がある読谷村で開催されました。その開催に際しては、「国旗掲揚」と「君が代斉唱」の拒否、「天皇陛下の沖縄来島反対」の県民の声が多くあがる中、国体開催当日には、沖縄県民の強い要望は無視されたのです。昭和天皇は、体調が悪く代わりに皇太子が来沖されました。私は、この沖縄住民の思いを無視した政府の対応に抗議し、国旗掲揚台によじ登り掲揚された日の丸国旗を下ろしてライタ

金城実※第 3 章「寄稿文」1．「金城実が語る沖縄と慰霊」を参照。
歎異抄※親鸞聖人の語録。弟子の唯円作であるといわれる。聖人没後に起ってきた異議に対し、師の真意を伝えようとした書。蓮如により禁書とされたが、明治以後、広く読まれるようになる。
帰敬式※門徒として仏・法・僧の三宝に帰依する人生を生き、仏法を聞いていくことを誓う大切な儀式。それは、お釈迦さまのお弟子となって生きることから、仏弟子の証として法名を受けます。
真教寺※当時の琉球国は、薩摩藩の支配によって真宗念仏が禁止されていた中、明治 9 年に田原法水が来沖して、真宗念仏の教えを布教する。後に布教が発覚して、信徒約 300 人が処罰を受ける。その後、信仰の自由が認められ、田原法水は東本願寺琉球説教場を建立。明治 22 年に東本願寺琉球別院と改称。明治 25 年に一般寺院に編入し、寺号を真教寺とする。
本願寺派※浄土真宗十派の一つ。正称は、浄土真宗本願寺派。京都の堀川通りに建つ、西本願寺をその本山とする。
戦跡の島※沖縄戦という地上戦があった沖縄諸島には、多数の戦闘の傷跡が現在も残っている。
基地の島※日本国土面積の 0,6% しかない沖縄には現在、日本国土にある米軍専用基地の 70%以上が存在する。基地が風景になる現実。
ひめゆりの塔※第 1 章「5．男女学徒・教職員戦没者の慰霊塔」を参照。

象の檻

ーで火を付けて燃やすという行為に及んだのです。

その結果、検挙され懲役１年、執行猶予３年の刑を受けました。私のこの行為には、当時の沖縄住民の多くは理解を示してくれました。

また、私の土地に「象の檻※」という米軍の通信基地がありました。この土地は、お爺さんから引き継いできた土地ですが、「象の檻」をめぐって日本政府と米軍に対して立ち向かって闘い勝利をしたということで、大問題になったこともあります。日の丸を燃やした、あるいは、「象の檻」基地撤去闘争をやったということで、マスコミからは過激派として印象付けられていました。

私の時代は、政治的に激動の時代でした。大学紛争とか沖縄闘争とか、70 年安保※で大きな政治的うねりがあった時代です。私たちもそれに加わって、ヘルメットをかぶり火炎ビン※を持って、今の日本をもう少し良い方向へ変革させなければと思って若さと情熱で活動をしていました。行動の方向性が良いかどうかは別にして、正義感に燃えた情熱ある活動をしたという思いがあります。

そして私は今、70 歳ですが、私の人生の半分は「屈辱のアメリカの時代」を体験しています。後の半分は、1972 年から 46 年間が「忍従の日本の時代」という体験があります。私は、この二つの時代体験の中で、沖縄の矛盾、沖縄が置かれた現実を背負いながら生きてきた者です。

このような情況の中で、1999 年 9 月に 51 歳で私は読谷村の議会議員に立候補しました。結果は、上位で初当選して３期、12 年間、支持を得ながら議員を務めてきました。3 期も務めましたので、別の生き方をしようと決意して議員を辞めました。この別の生き方とは何かといえば、最初に申し上げましたように仏教徒として生きる道を選んだのです。2011 年 4 月に京都山科の大谷専修学院※に入学して、親鸞聖人について、あるいは浄土真宗について１年間しっかり勉強して多くの人たちに語れるくらいになりたいと勉学に励みました。このような経歴と思いをもって、沖縄の問題を抱えながら私は今を生きています。

こういう私が、親鸞聖人に近づいて、関心を持っていくということになったのには、いろんなご縁があります。私は沖縄に生まれ、沖縄に育ち、そして今沖縄にいるという現実から、親鸞聖人から学び知りたいと思うことが年齢を重ねるごとにだんだん多くなってきています。

象の檻※楚辺通信施設といい、敷地面積 535,000 ㎡に直径約 200m、高さ 28mの巨大な檻のようなゲージ型アンテナがあり、読谷村中央部に建っていた。米海軍の管理下で、軍事通信の傍受施設として使用していた。この土地の地主は 457 人、その中の一人が知花氏。知花氏など一部の地主が賃貸契約の更新を拒否し、契約が切れた 1996 年 4 月から日本国による不法占拠状態となる。その後、度重なる訴訟、折衝の結果、2006 年 12 月に全面返還が実現した。
（読谷村平和資料館ＨＰ）

70 年安保※日米安保条約が自動延長するに当たり、これを阻止して条約破棄を通告させようとする運動。学生運動が全国的に盛んになり、全国の主要な国公立大学や私立大学ではバリケード封鎖が行われた。学生運動が、より先鋭、過激な運動となり、「日本赤軍」もこの時期に活動する。

火炎ビン※ビンなどの容器にガソリン・灯油などを詰め、ビンの口に布を詰めて火をつけ、投げはなって燃え上がらせる仕掛けをほどこした、一種の武器。

大谷専修学院※真宗大谷派が経営する全寮制の専修学校。1924 年設立。その教育方針は、「人間が人間を教育できるとする人間中心の教育観に依ることなく、如来の人間教育の具体相たる「呼応の教育」が、われらの帰すべきまことの教育として、自然に行われるものでなければならない」とし、その願いを実現するためにも、「教職員・学生とが本尊を中心とした聞法・学習・生活を共にする」共同生活を実施している。必要な科目と定められた課程を修了した者に、大谷派教師資格が与えられる。
（「大谷専修学院要項」より）

その一つが、1517年にドイツの神学教授であるマルティン・ルター※が、当時のカトリック教会が罪を犯してもお金を払えば罪を軽くしたり、許したりする「贖宥状(しょくゆうじょう)※(免罪符)」を発行して、サン・ピエトロ聖堂※の改築修繕費を賄うために行なった腐敗した実態に対して批判したことから始まった宗教改革※についてです。

他方、日本では、法然上人※が1175年(法然43歳)に専修念仏※の教えを提唱し、親鸞聖人は1201年(親鸞29歳)に比叡山仏教を捨てて法然上人に帰依し、今までの国家護持、朝廷貴族の仏教から民衆、それも差別を受けるような底辺の人々も救われるという念仏の教えを民衆に開かれたのです。当然、当時の朝廷、為政者、国家護持の仏教界から弾圧※され、法然上人と親鸞聖人は流罪という処罰を受けました。

私は、この法然上人と親鸞聖人が国家護持の仏教、朝廷貴族の仏教から民衆の仏教へと、大いなる改革をされた方であると受け止めています。ルターより300年以上も前に、この日本で宗教改革が行われたことに驚きを感じます。もっと言いますと、民衆、それも底辺に生きる差別されている人々への視座、視点が、法然上人、親鸞聖人にあることが私には嬉しく感じます。差別されている沖縄にこそ、お二人の視線が向けられていること、それをどのように受け止めるのかが今、私に問われていることのように思います。

◆三線(さんしん)は、沖縄の生活文化

さて今日は、三線※を持ってきました。沖縄の話をすると戦跡の話、基地の話になりますが、これらはあまり楽しい話ではないのです。沖縄には現在約144万人の人々が生活していますが、そこには人々が代々引き継いできた沖縄独特の歴史、文化があります。

この三線は、私たち沖縄の人々にとっては、悲しいときも、嬉しいときも、恋をしたときも、怒りに満ちたときも、すべて三線を弾きます。三線に合った歌があります。私たちにとっては、なくてはならない、沖縄人のアイデンティティーを表現する大事な楽器です。若い人たちの間でも、非常に盛んになっています。私は先ほど言ったように団塊の世代で、その時代はフォークソングとか、グループサウンズ、ジャズなどが主流で、三線みたいなこんな古臭いものなんかやるものかと思っていたのですが、時代の流れと、私も歳を重ねてきたということもあって三線を弾いて18年経ちます。沖縄では、10年も弾いていれば一人前になっている

マルティン・ルター※(1483～1546)ドイツの宗教改革者。1517年免罪符濫売を憤り、その基礎にある従来の善行観を根底から批判する95カ条の論題を公表、教皇の破門を受け、宗教改革の端を開いた。救いは行いによらず信仰のみによると説いた。1522年、ドイツ語の聖書を作成し、また幾多の讃美歌を創った。

贖宥状※贖宥の印として中世カトリック教会が発行した証書。

サン・ピエトロ聖堂※ローマのヴァチカンにある大聖堂で、初期ルネサンス式の代表建築。

宗教改革※16世紀ヨーロッパで、ローマカトリック教会の腐敗に対して改革を企て、これから分離してプロテスタント教会を立てた宗教運動。1517年、ルターが95カ条の論題を提出して教皇の贖宥状(免罪符)販売を批判、人は業によらず信仰のみによって救われると主張し、聖書を正しい信仰の唯一の基礎とする立場から教皇権を否認した。この主張(福音主義)が多くの諸侯の指示を得、さらに運動は全ヨーロッパに広がった。

法然上人※(1133～1212)浄土宗の開祖。源空とも呼ぶ。父の遺言で出家。比叡山に入り皇円、叡空に師事。43歳のとき専修念仏に帰依、東山吉水で浄土法門を説く。興福寺などの既成仏教界からの弾圧により、土佐に流罪となったが、同年末には赦免となる。主著には「選択本願念仏集」がある。

専修念仏※世俗化、堕落した比叡山に身を置きながらも戒・定・慧の三学の修身に精進するが、苦悶の日々が続く中、43歳のとき、善導大師のお言葉に出会い、専ら念仏を称え修めることのみが、身分、知恵才覚の差別なく皆が等しく救われるのだと確信を得る。

仏教界から弾圧※法然上人の専修念仏の教えが民衆、貴族、商人など、老若男女が吉水の草庵に集う様子に危機感を懐いた興福寺、比叡山は後鳥羽上皇に、「護国の平安を乱すものなどと上訴する。一時期は静観していたが、上皇に仕える女官が念仏の集会に参加したことに激怒し、念仏教団解散を決定する。法然・親鸞は流罪、住蓮・安楽ら4名は死罪となる。仏教史上、類をみない弾圧事件である。

三線※知花さん紹介の写真で、知花さんが手に持つ楽器。

のですが、私は練習もしてないので沖縄では恥ずかしくて弾けないので、沖縄の歌を知らない本土の人達の前で弾くことは何とかやっています。

ということで、今日は沖縄の歌を最初に紹介したいと思います。これから歌うのは、「屋嘉節（やかぶし）」という歌です。歌詞は、日本の漢字に当てはめてあるので、内容は見ていただければ分かると思います。これは戦争が終わってすぐに作られた歌です。戦争が終わったときには、沖縄の人々はすべてが捕虜となりました。軍人たちは米軍によって「屋嘉村」という処に集められて、金網で囲まれます。民間人は、そのすぐ隣の「石川村」で民家の集落の中に入れられます。戦争にとられ、日本兵となり捕虜となった沖縄の青年が、自分の恋人が近くにある石川村にいるのに会えない、会いたい、会えないという切なさを歌ったのが「屋嘉節」です。彼女は石川村に居る、自分は、屋嘉の砂浜に寝ている。屋嘉村にある爆弾で焼き枯れた木にもいつか花が咲く日がくるだろうか。この恋人同士が、好きな人と結びあえるときがいつか来るだろうか、ということを歌ったのが「屋嘉節」で、沖縄戦後復興の歌です。本来は、こんな三線ではなく、カンカラ三線、アメリカから配給された食料品の空き缶で作った三線で物悲しく歌うのが「屋嘉節」の歌い方です。それでは、弾きます

沖縄民の捕虜収容所　　写真：毎日新聞社

■屋嘉節（やかぶし）－ 捕虜収容所で作られた反戦歌 －

一、哀ちかしいウチナー、戦場に成やあい、戦場に成やあい、御万人とともに、涙流ち、涙流ち

（訳：哀しいかな沖縄が戦場になって、皆共に涙流して、）

二、涙でい我身や、恩納山登てい、恩納山登てい、世間御万人と、戦凌じ、戦凌じ

（訳：涙で私たちは、恩納山に登って、皆共に戦をしのいできた。）

三、無蔵（彼女）や石川村、茅葺ぬ長屋、茅葺ぬ長屋、我身や屋嘉村ぬ、砂地枕、砂地枕

（訳：愛しい彼女は、石川村の茅葺の長屋に、私は屋嘉村の砂を枕に置かれている。）

四、何んち焦りとうが、屋嘉村ぬ枯り木、屋嘉村ぬ枯り木、何時か花咲ちゅん、
季節が有ゆら、時期ん有ゆうさ

（訳：どうして焦っているのか。屋嘉村の枯れ木よ、
いつか花咲く時が来るだろうか。きっとあるさ。）

もう一つ歌います。「命口説（ぬちくどち）」です。命の大切さを説き伝えていくという歌です。戦争が終わった後、戦争に行ってきた人が戦争体験の中で作った歌です。

戦争とは、こんな地獄だったんだということを物語る歌です。最後には、こんな戦争は二度と嫌だと、その体験を子や孫に伝えて命の大切さを伝えていくというのが「命口説」です。歌詞は八番までありますが、その内の四番を選んで歌います。

■命口説（ぬちくどち）

一、行（い）じゃる戦争（いくさ）や　思出（うびぃんじゃ）ちん　身ぬ毛立（きだ）ちさみ
恐（うすぃ）るしや　此（く）ぬ世（ゆ）ぬ地獄（じぐく）や　ありどうやる

（訳：体験した戦は、思い出しても身の毛が立つよ。恐ろしいことだ。
この世の地獄とは、あの戦の様なものだ。）

二、日の丸掲ぎとてい、竹槍し命やあじきて、国の為みえんやえんやと勤めたん

（訳：日の丸の旗揚げて、竹槍に命を託して、国のために懸命に頑張ってきたけれど、）

三、戦争（いくさ）始（はじ）みたし　誰（たぁ）やゆが　神ぬ仕業か　人故（ひぃとぅゆい）か

（訳：戦を起こしたのは誰か、戦を始めたのは誰なのか。神の仕業か、人の故なのか。）

四、幾年（いくとぅし）月日（ちちちひぃ）経（ふぃゆ）るたとうてい
ウチナー御万人（うまんちゅ）　あぬ戦争（いくさ）　エイー　子（くわ）や孫（んまが）に　語（かあた）らとうてい　何時（いち）迄ん忘（わし）んな　命（ぬち）ロ説（くどうち）

（訳：年月が経過しても、私たち沖縄皆共に、あの戦の体験を子供や孫に語って、
何時までも忘れるな、命の大切さを。）

沖縄本島に上陸をする米艦隊

避難先で疲労困憊状態の沖縄の老人たち

艦砲射撃と空爆で空いた穴に雨水

火炎放射器ですべてを焼き払う

艦砲射撃と空爆で、民家が崩壊

集団避難する沖縄民

（写真：沖縄国際平和研究所）

最後に、もう一曲「時代の流れ」を歌います。この歌は、有名な嘉手苅林 昌（かでかるりんしょう）さんが戦前戦後の変化を歌った「時代の流れ」ですが、私が２番から歌詞を入れ替えて、日本復帰の前と後を歌にしました。

■時代の流れ－日本復帰前と復帰後を比較して

一、唐ぬ世から大和ぬ世、大和ぬ世からアメリカ世
ひるまさ（珍しく）変わたる、くぬウチナー

（**訳**：沖縄の歴史は、唐の世から大和の世、そしてアメリカの世。こんなに変わった沖縄。）

二、アメリカ世や成難んりち、またん大和世に成いびたしが　何が増しやら、全るわからん

（**訳**：アメリカの世は嫌だと、またも大和の世に成ったのだけど、何が良いのか分からん。）

三、銭や円からドルに成て、またん円に成いびたしが　変わる度に、損んどする

（**訳**：お金は、円からドルになり、またも円になったのだけど、変わるたびに損をしてきた。）

四、車昔せえ右通い、なま（今）や左る通やびん　何時ぬ何時まで、戸惑ぬう

（**訳**：車は返還前には、右側通行だった。今は、左側通行なのだけれど、いつも戸惑うばかり。）

五、山や昔えウチナー物、きんぶ（みかん）ん、いちびん、取らりたしが
なまや基地成て、あめりか物

（**訳**：山々は、返還前は沖縄のもので、ミカンもイチゴも取るこができたが、
今は、基地になりアメリカの勝手になっている。）

六、海ん昔えウチナー物、我たや何時やて入らりたしが
なまやリゾート、勝手成てい

（**訳**：海も返還前は、沖縄のもので、私たちはいつでも、どこでも海に入ることができたが、
今は、リゾート会社の勝手になってしまっている）

七、変わい変わたる事やしが、何ん変わらん基地ぬ島　何時が変わゆら、増しなゆが

（**訳**：変わり変わってきたけれども、何も変わらない米軍基地の島。
いつか変わるだろうか、良くなって欲しい。）

沖縄の歌には戦争体験をして、もう二度と嫌だという反戦歌がたくさんあります。命の大切さを歌うのです。このように、歌にのせて沖縄のことも出来れば多くの方に伝えたいということで、三線も弾くようになりました。

■２．沖縄とは

当然のことですが、沖縄も日本ですので、どんな県であるのかについては、皆さんは分かっておいでだと思います。しかし、沖縄が歩んだ歴史は、あまり知られていないのではないだろうか。沖縄は、もともと「琉球王国」という独立国家でした。その琉球国が日本になるまでの痛ましく長く重い歴史があります。

鳩山由起夫元首相※1947 年、東京都文京区生まれ。政治家。1986 年 7 月、総選挙で現在の北海道 9 区から出馬、初当選。1996 年、民主党を結党。2009 年 9 月、第 93 代内閣総理大臣に就任し、2010 年 6 月に辞任。2012 年 12 月政界を引退。引退後も、政治的な活動を継続。

辺野古※名護市東部の久志地域に位置する。普天間飛行場の移設先で、現在、新基地の建設中。米軍基地のキャンプ・シュワブが隣接。新基地建設に反対する座り込みや海上阻止行動が行われている。沿岸は、海草藻場であり、ジュゴンが生息し、甲殻類の新種が発見され、アオサンゴが大規模に群生する貴重な海域である。

管直人※1946 年、山口県宇部市生まれ。1980 年 6 月参院選で初当選。1996 年第 1 次橋本内閣で厚生大臣として入閣。薬害エイズ事件、0157 の集団感染の問題、らい予防法の廃止に対応する。2010 年 6 月、鳩山首相の退陣表明を受け、第 94 代内閣総理大臣に就任。官邸での記者会見では、「政治の役割は国民、世界の人が不幸になる要素をいかに少なくする『最小不幸社会』を作ることだ」と述べた。

分島問題※琉球を二分し、宮古、八重山の両諸島を中国に与えるかわりに，その代償として中国内で欧米なみの通商権を得ようとする案が 1980 年に提示され，両国間で一時合意した。だが中国側が自国に不利とみて最終的に批准を回避した。

冊封関係※中国の歴代王朝が東アジア諸国の国際秩序を維持するために用いた対外政策。中国の皇帝が朝貢をしてきた周辺諸国の君主に官号・爵位などを与えて君臣関係を結んで相手に自国の統治を認める（冊封）と同時に、従属関係に置くこと。

◆4 つの琉球処分

私は、今の沖縄の現実を、「第 4 の琉球処分」だと思っています。日本政府が沖縄の辺野古に新基地を造るということで、2010（平成 22）年 5 月 28 日に橋本内閣のとき、沖縄県民の承諾もないまま日米政府が合意をしたのです。この合意について沖縄県民は、第 4 の琉球処分だという理解をしています。「処分」というのは、権力の発動によって一方的に決着を付けるということが処分です。たとえば、退学処分などがそうです。一方的に、本人の意向など一切聞くことなく上から処断を下すということが処分です。

この基地問題は、非常に大きな問題として受け止めています。新聞やラジオ、テレビなどで沖縄問題が伝えられました。特に、鳩山由起夫元首相※が辞任する原因も沖縄問題でした。その鳩山元首相は、辺野古※に来て、「少なくとも沖縄県外に基地を造る」ということを公約として沖縄県民に約束しました。ところが、また名護市の辺野古に新基地を造ることの宣言をして、結果的には沖縄に基地を押し付けたのです。この無責任な対応に対して、国民の多数が鳩山首相の発言はおかしいということで批判したことから、これでは次の選挙は戦えないと判断して辞任し、そして、管直人※氏が次の首相になったのです。

今、日本政府が沖縄県内に新基地建設をしようとしていることは、先に申し上げたように第 4 の琉球処分であるといっても過言ではありません。では、第 1、第 2、第 3 は何であるのか。

◆第 1 の琉球処分（1879 年 3 月琉球王国が明治政府に併合される～1952 年）

「第 1 の琉球処分」というのは、明治政府による琉球藩設置から分島問題※の終結までをいうのです。1872（明治 5）年、明治政府は琉球国を廃して琉球藩とし、廃藩置県に向けて清国（中国）との冊封関係※、通交を絶ち、明治の年号使用、藩王（琉球国王）の上京などを再三要請したが、琉球国は拒否をした。1879 年 3 月に明治政府は、処分官の松田道之の指揮のもと軍隊と警官隊を合せて約 600 名を従えて武力で威圧して、同年 3 月 27 日に首里城で廃藩置県を布達し、首里城の明け渡しを命じ、ここに琉球王国は滅亡し沖縄県となったのです。また、琉球王の尚泰（琉球王国最後の王：1901 年没、59 歳）は、東京に在住することを命じられたのです。

◆第 2 の琉球処分（1952 年 4 月沖縄が米軍の軍事植民地となる～1972 年）

「第 2 の琉球処分」は、1945 年敗戦後の 1952（昭和 27）年 4 月 28 日のサンフランシスコ講和条約※が発効された日から始まっています。サンフランシスコ講和条約は、1951 年に締結されて、条約の発効が 1952 年になります。

そして、その年 4 月 28 日に日本は主権を回復したのです。それまでの 1945 年から 1952 年までの 7 年間は、米軍の支配下に置かれ施政権は日本政府にはなかったのです。それから、サンフランシスコ講和条約によって日本は独立国としての主権を回復することになった。ただし、そのときに沖縄を切り離すという措置がなされました。米国は信託統治という言い方をしていましたが、実際は植民地です。軍事植民地として沖縄は日本から切り離されました。

沖縄の人たちは、この 4 月 28 日を「屈辱の日」、「屈辱の異民族軍事独裁支配」と呼んでいます。沖縄が日本に復帰する 1972 年までの 20 年間は、軍事植民地としての状態が続いたことになります。

屈辱ということは、皆さんも今日までの人生の中で屈辱を経験する瞬間があったかもしれません。沖縄の人々は、人生の 20 年間はアメリカの支配の中で屈辱と共に生きてきました。これは、経験のない者が分かることではないでしょう。自分の土地が「銃剣とブルドーザー」で接収され、事件事故の被害にあっても公正な裁判を受ける権利もなく、悔し涙を流しながら耐えるしかないのです。

アメリカの軍事独裁支配下の中では、沖縄を一つの国として扱う形態として琉球政府※があり、今の知事に相当する琉球政府主席という地位がありましたが、自国の代表を自分たちで選べないのです。議会もありました、もちろん裁判もありました。形はそうでしたが、その上にアメリカ軍が君臨して、アメリカ軍の言うことを聞く人を琉球政府主席に任命するのです。選挙ではなく、米軍による任命です。

そこで、立法院※と議会で法律が作られるのですが、そこにはアメリカ軍の拒否権があって、自分たちに都合の悪い法律は作らせません。何を最後まで作らなかったかといえば、「買春防止法※」です。何故、買春防止法を作らなかったのかというと、沖縄は朝鮮戦争※、ベトナム戦争※時の米軍人たちの保養地として位置付けられていたのです。そのときに、沖縄がどのような状態であったかといいますと、米軍がベトナムに出撃するとき、軍人たちは出撃の前に、また命をながらえて帰還した軍人たちが、もうやりたい放題をやるという前線基地※なのです。

ベトナム戦争では、アメリカは負けます。経済力も軍事力も弱い北ベトナムが、すごい軍事力を持った米軍を敗退させたのです。

戦争に負けるということは、たくさんの戦死者が出るということです。20 歳から 40 歳ぐらいの米軍の男たちが、沖縄から戦場に出ます。俺は、殺されるかもしれない、という覚悟をしているわけです。そうすると、持っているお金なんて役に立たないから全部使っていきます。男たちが戦場に行って殺される覚悟をして行くときに、そのお金で何をするかといえば、女性を抱いて

サンフランシスコ講和条約※正式名称は、「対日平和条約」。1951 年 9 月 8 日サンフランシスコで第 2 次大戦終結のための平和条約のために調印。1952 年 4 月 28 日発行、日本代表は吉田茂。

琉球政府※米軍統治下の沖縄住民側の自治機関。1952 年（昭和 27）4 月 1 日、琉球列島米国民政府布告に基づき創立。司法、立法、行政の三権分立の形式を備えた自治機構であるが、最終的権限はあくまで米国政府の高等弁務官が握っていた。立法院の議員以外は行政主席、上訴裁判所判事とも任命制であったが、沖縄住民の自治権拡大運動によって 1968 年 11 月に主席公選が実現。1972 年 5 月の日本復帰によって廃止、沖縄県に移行した

立法院※沖縄では、アメリカの支配下にあった沖縄政府の立法機関。

買春防止法※売春を助長する行為などを処罰するとともに、補導処分、保護更生の措置によって売春の防止を図ることを目的とする法律。1956 年制定、翌年施行。

朝鮮戦争※大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）とが、第 2 次大戦後の米国とソ連の対立を背景に、1950 年 6 月 25 日衝突、国際紛争にまで発展した戦争。1953 年 7 月休戦。

ベトナム戦争※ベトナムの独立と統一をめぐる戦争。1960 年結成の南ベトナム解放民族戦線は、北ベトナムの支援のもとに、南ベトナム軍およびこれを支援するアメリカ軍と戦い、1969 年臨時革命政府を樹立。1973 年和平協定が成立しアメリカ軍が撤退、1975 年南ベトナム政府が崩壊、翌年に南北が統一された。

前線基地※戦場で、敵に最も近いところにある前線。第一線。転じて、激烈な競争が行われているところ。

嘉手納基地

から行くのです。

ですから米軍基地近郊は売春地帯です。買春防止法を作ってしまえば、兵士たちのはけ口が無くなるわけです。本土では、婦人団体が要請をして買春防止法（1956 年）を制定しました。沖縄にも婦人団体があり、買春防止法を作る運動をしたのですが制定できません。

米軍の戦死者がベトナムから沖縄に帰還したときには、すべての死体は冷凍されて嘉手納基地※に運ばれてきます。そこで死体を綺麗に洗い整形をして本国に送り還すのです。一体で 30 ドル（1 ドルは、当時の日本円で 360 円：10,800 円）という、アルバイトがあったと聞いています。一般の沖縄女性がお店に働いて受け取る 1 ヶ月の給料が 30 ドルです。死体を 2 時間か 3 時間ぐらいで一体洗うだけで、30 ドルが稼げるのです。非常に高給なアルバイトがあったのです。

戦場から生き延びた兵士たちは、それぞれ沖縄に帰還します。戦場では殺されるという恐怖があるので、麻薬などをやっている兵士が多くいます。錠剤の幻覚剤で、マリファナ、ヘロイン、ＬＳＤなどがありました。これらを飲んで戦争をするのです。戻ってきた兵士は、助かったという解放感と戦場期間の 6 ヶ月ぐらいの給料は戦場では使えませんから、その貯まった給料でやりたい放題、どんな問題、事件を起こしても沖縄の警察が米軍兵を捕まえることができないのです。治外法権※です。こんなことから、米兵にやりたい放題をやられた時代があったのです。

それでは、米軍兵士は経済的にどれだけの報酬を取っていたのか。先の沖縄で一番偉い琉球政府の首席でさえ 350 ドル（126,000 円）ぐらいです。そのときのアメリカ軍の一般的な兵隊たちは、200 ドルから 300 ドル（108,000 円）でした。将校クラスになると、400 から 500 ドル（180,000 円）になります。戦闘機のパイロットになると、1,000 ドル（360,000 円）も支給されます。軍隊の衣食住は、すべてタダですから余ったお金で現地妻を囲ったり、女性が買われていくのです。これが沖縄の現実だったのです。

嘉手納基地※第 2 次世界大戦前は農村地域で、県営鉄道嘉手納線の終点で、農林学校、製糖工場、警察署などがあり、郡の文化・経済・教育の中心でもあった。沖縄戦の際、旧日本陸軍が建設した中（なか）飛行場は、1945 年アメリカ軍に占領されて拡張され、嘉手納基地となった。基地は嘉手納町、北谷（ちやたん）町、沖縄市にまたがる約 20 ㎢を占め，アメリカ空軍太平洋航空軍団の中枢基地となっている。

治外法権※国際法上、外国人が現に滞在する国家の権力作用（特に裁判権）に服さない資格。特定の外国人（元首、外交官およびそれらの家族）について認められ、一般に裁判権、課税権、警察権に服さず、住居・信書の不可侵が保障される。外交使節の随員も限定された範囲で治外法権を有する。また当該国家の承認の下にその領内に入った軍隊・軍艦も原則としてその国家の裁判権・行政権には服さない。

このような屈辱に涙し、耐え、腹立たしく思っても何もできない現実に悔し涙を流したのです。この悔しさから、日本には平和憲法があり、基本的人権が守られている日本に復帰すれば、今の屈辱から解放され、生命も保障されるのだという希望を懐くようになり、復帰運動が始まるのです。10 万人が集まって行進をする復帰運動など、沖縄県民は日本への復帰のためにいろいろなことを積極的に行ったのです。沖縄の方言の使用を禁止する取組みを教育の現場で行ったのもその一つです。

しかし、どうして沖縄が日本に復帰したときに切り離されたのか。それは、昭和天皇がマッカーサーにメッセージを送っているのです。これは、「天皇メッセージ」として非常に有名です。

1947 年 9 月に、昭和天皇の側近である宮内庁御用掛の寺崎英成という人が、マッカーサーの政治顧問であるシーボルトに天皇の見解であるということで伝えたのが、「天皇メッセージ」として残っています。それによると、「25 年ないし 50 年間、米国が琉球諸島を占有することが望ましい。日本の国民もそれを許すでしょう。」という内容の天皇メセージが書かれてあり、それが、サンフランシスコ講和条約に反映され、沖縄が切り離されていくことになったのだと、沖縄の多くの人たちは受け止めています。この意味からも、私は、昭和天皇には戦争責任はあるし、戦後責任もあると思っています。これが、屈辱の第 2 の琉球処分です。

◆第 3 の琉球処分（1972 年 5 月沖縄に米軍基地が残ったまま日本復帰する～2010 年）

次に、「第 3 の琉球処分」についてです。1972（昭和 47）年 5 月 15 日午前 0 時、沖縄全島にサイレンと汽笛が鳴り響き、沖縄は 27 年間に及ぶアメリカ統治が終わり日本復帰の日を迎えました。沖縄の人たちにとって、日本は素晴らしく憧れの国でした。東京オリンピック（1964（昭和 39）年 10 月）のとき、沖縄はまだ日本ではないのですが、沖縄に聖火が入ってきたときには県民は歓喜し感動しました。

沖縄の人たちは、日本に復帰すれば基地もなくなり、平和憲法があり、基本的人権も守られ、平和が実現するのだと思って復帰運動をしたのです。ところが、その返還内容を見たときに、沖縄に基地を残すということが前提だったわけです。これは、「5・15 メモ※」といいます。密約です。今では、密約もいっぱい暴かれてきました。たとえば、返還するときに基地の移動費用 400 万ドル（同年 5 月 12 日、交換レートは 305 円に決定。沖縄公文書館資料にて：日本円で、12 億 2,000 万円）の全額を日本が負担することが裏で約束されていたのです。米軍にとっては、米軍基地が存在する国々の中で、日本にある米軍施設にかかる経費が「思いやり予算※」と称する予算によって日本側が経費を負担することで米軍基地の維持運営費が格安で済むことから、米軍関係者には大変喜ばれているのです。日本政府が負担しているものとしては、基地敷設土地の固定資産税と借地料、米軍基地で就労している日本人労働者の人件費、米軍家族が居住する住居、ショッピング施設、娯楽施設等の建設費用です。これらの経費の全額、または一部を日本政府が負担しているのです。この経費負担に使われている原資は、言うまでもなく私たちが納めた税金です。現在、強行に建設進行中の辺野古新基地の建設費（約 4,135 億円：2018. 3. 24 琉球新報）も、日本政府が負担するのです。

5・15 メモ※1972（昭和 47）年 5 月 15 日、日米合同委員会が開催され、沖縄が日本復帰をしても、復帰前と同様に米軍は沖縄の基地を継続して使用できるものとして、米軍基地使用について合意。この合意事項は、秘密事項であるとして公表されなかった。なお、この合意は、日米地位協定第 2 条に基づくものである。5 月 15 日に行われたことから、この合意は一般に 5・15 メモと呼ばれている。

思いやり予算※米軍に基地を提供するため、日本側が負担する借地料などの防衛省予算は今年度 3,628 億円。このうち米軍の住宅建設や光熱水費の負担、基地で働く日本人の給料などに充てる「思いやり予算」は 1,860 億円を占める。思いやり予算は、物価上昇などで米軍の経費が増えたため、日本が 1978 年から自主的に負担し始めた。当時の金丸信防衛庁長官の「思いやりをもって対処すべき問題」との発言にちなむ。訓練移転などにも使われるようになった。

結局は、基地を無くして、核も無くして、本土並みの返還をして欲しいと沖縄が願っていたことが実現されませんでした。1972 年 5 月 15 日に沖縄は日本になったのですが、現実には基地が無くなることもなく、アメリカ軍がいなくなることもなしに、現在までの現状が続いているということです。これが、第 3 の琉球処分の結果なのです。

◆第 4 の琉球処分（2010 年 5 月辺野古新基地建設が日米で合意から現在）

そして今が、「第 4 の琉球処分」です。2010（平成 22）年 5 月 28 日に普天間基地を閉鎖返還する代わりに辺野古に新基地建設をすることの日米合意が行われたことが、第 4 の琉球処分の始まりです。この普天間基地の辺野古移設について、2018 年 5 月時点での沖縄県民意識調査では辺野古新基地建設反対が 61%、賛成が 23%です（琉球新報の調査）。

キャンプ・シュワブ前での基地反対運動

もう沖縄では、新しい基地はいらないということは、以前から日本政府に示しています。そのことを受けながら鳩山元首相も「県内での基地の移設はしない」といい、「最低でも県外である」と言っていたのですが、今はまた辺野古に基地を造るということを日米政府で合意をしています。

自分たちの生命の安全と大浦湾の海を守るために、毎日、辺野古新基地工事の資材を積んだダンプが搬入路としているキャンプ・シュワブ米軍基地の通用門の前で反対運動をしていることは、沖縄県民の怒りと悲しみを伴った当然の行動です。

これが沖縄県民の意思を無視した、第 4 の琉球処分の現状なのです。

構造的沖縄差別※
構造的政治差別※『新崎盛暉が説く構造的沖縄差別』によれば、「構造的沖縄差別」 とは、「数十年にわたる思考停止状態の中での “沖縄の米軍基地に対する存在の当然視”」に他ならない。同書では、米国の占領政策の中で、象徴天皇制、日本の非武装化、沖縄の分離軍事支配は三位一体のものであり、ここに「構造的沖縄差別の上に成り立つ対米従属的日米関係」が始まったとされる。つまり、そこから「沖縄への基地押しつけを中心とする差別的仕組み」が生まれ、「構造的沖縄差別としての日米安保」につながった指摘する。

そして、新崎は、日米の国家権力の側が 60 年の安保改定後は沖縄の本土との分断のために利用することになった、と指摘する。

（新崎盛暉『新崎盛暉が説く構造的沖縄差別』）

■３．沖縄への差別の歴史

今まで述べてきた処分の実態は、構造的沖縄差別※であり、構造的政治差別※なのです。沖縄が 1972 年に日本復帰してからも、日本復帰以前と同様の差別を受けてきたのです。日本は軍国主義のいびつな社会で、富国強兵のもと一つの価値観で一つの方向に突っ走る社会だったと思います。だから、戦争反対も言えなかったのです。もし戦争反対を言えば、連行されるような悪い時代だったのです。

逆に、日本本土の国内に、外から異質なものが入ってきたらどうするかといえば、差別という形で侮蔑される。差別されたのは、沖縄の人だけではありません。アイヌの人たちも、朝鮮から来た人たちも、歴史も違う文化も違うということで差別を受けました。具体的な例としては、飲食店、就職先で、「朝鮮、琉球、アイヌ人お断り」という排他的な対応を受けたことがあったといいます。これは、差別です。

差別を受けることは辛いことです。沖縄の人たちは、差別を受けない方法を考えました。どんな方法かといいますと「立派な日本人になる」ということです。立派な日本人になれば、差別は受けないのだ。ということで、何をしたかといいますと、まず、方言を無くす運動をしました。「方言撲滅運動」です。学校という教育の場で方言を使うと、首に方言札を掛けて辱めを受けるという罰を与えるのです。

そして、立派な日本人になるということは、国策である戦争に全面的に協力をするということ

でした。日露戦争※の時から沖縄は、日本軍として戦争に参加しています。日清戦争※のときは、当時の中国は清という大国で、琉球は中国の領土であると主張し、日本も琉球の所有を訴え、琉球の存在をめぐって緊迫していました。日清戦争で日本が中国に勝利したことから、負けた中国は日本に何も言えず、琉球は日本の領土になったのです。

日露戦争では、沖縄からもたくさんの人が戦場に行って多くの人が死んでいます。戦争に積極的にかかわり沖縄の人がたくさん死んだ方が、本土の人より愛国心があると思われるということで、戦死した人を軍神（ぐんしん）※として讃えるという行事も行ったのです。このようなことで、「立派な日本人になる」ことを一生懸命やりました。そうすれば、差別は無くなると思っていたのです。

ところが沖縄戦になったときに、米軍の日本本土への上陸を遅らせるための「捨て石」という戦場ステージの位置付けが沖縄にされていたのです。このときの戦時下において、日本政府から沖縄に犠牲を強いるという差別の扱いが厳然としてありました。この地上戦で、沖縄出身者の多くが死傷し、当時の沖縄県人口約 60 万人の内、約 122,000 人（民間人 94,000 人・軍人、軍属 28,000 人が戦死：沖縄県平和祈念資料館の資料）、当時の沖縄全人口の約 2 割が戦死しています。

日露戦争※1904 年～05 年（明治 37～38）日本と帝政ロシアとが満州・朝鮮の制覇を争った戦争。1905 年 9 月、講和条約が成立。
日清戦争※1894 年～95 年（明治 27～28）日本と清国（中国）との間に行われた戦争。翌 95 年 4 月、講和条約を締結。
軍神※優れた武勲を讃えて戦死した軍人を神にたとえた語。
篠山紀信※1940 年生まれ、東京出身、写真家。広告写真で頭角をあらわす。昭和 43 年フリーとなり、ヌードやアイドルの写真をはじめ、常にあらたな分野や手法にいどんで話題をよぶ。
南沙織※1954 年生まれ、沖縄県出身。元アイドル歌手、デビュー曲は「17 才」。デビュー当時は、母親の郷里、鹿児島県（奄美大島）生まれと公表したが、実際は生まれも育ちも沖縄県。
安全保障※外部からの侵略に対して国家及び国民の安全を保障すること。
自治権※主に地方公共団体に認められた自治行政を行い得る権能。
日米安保※次頁に掲載
主権在民※同上

写真家の篠山紀信※という方の奥さんは、沖縄出身の歌手で南沙織※さんです。「17 歳」という歌で、メジャー・デビューしたアイドル歌手でした。沖縄人と言われても何の差し障りもないほどのアイドル歌手です。あるとき記者からインタビューで「南沙織さんの出身地はどこですか」と聞かれたのです。いきなり聞かれたものだから、彼女は戸惑って「鹿児島の南です」と言ってしまった。沖縄というのが、言えなかった。どうして言えなかったのか、それはやはり過去の差別の歴史が自分の厭うべき経験として残り、彼女の心の傷として、トラウマとして沁み込まれていたのです。沖縄と言っても何の問題もなかったのに、彼女もやはり言えなかった。このように、沖縄を隠して、名字までも変えて生活した時代があったのです。今は、このようなことはありません。

しかし、差別が全部無くなったかと言えば、そうではありません。構造的政治差別というものが、まだ厳然としてあります。沖縄の人たちが 10 万人も集まって基地反対集会をし、知事も県議会も、そして各市町村の各長も議会も全部が反対という中で、何故、沖縄に基地を押し付けるのか。それが、日本の安全保障※のためだからと日本政府が判断したとしても、このようなかたちで押し付けること自体が、沖縄に対する自治権※を無視した構造的政治差別であると、私は思います。現在、日本人の 8 割が日米安保※に賛同しているといいます。

沖縄の人口は日本全体の１％です。それならば、その賛成責任として基地負担の在り方がどうあるべきか考えるまでもないはずです。

今、日本政府は、このような第４の琉球処分を断行しているのです。私は、この断行は基本的人権、主権在民※に反する行為として許すことはできないと思います。これは、政治の劣化であり堕落であると思います。

何故、沖縄がこれほどまでに基地に反対しているかといえば、73 年前に沖縄戦という地獄を体験したことが沖縄の人たちの身体に、脳裏に浸み込み、その悲しみと怒りが綿々と受け継がれているからです。米軍基地の存在が日本の安全のために抑止力として有効なのだなどと、どのような言い方をしたとしても、基地からは、これまで朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争※、イラク戦争※、そしてアフガン戦争※にも米兵たちが出撃していきました。戦争があるたびに、沖縄米軍基地は人殺しのための基地として展開されます。だから、沖縄は、ベトナムから「悪魔の島」と呼ばれていました。沖縄の人たちは、それをよく知っています。現実問題として基地は必要悪なのだけれど、このような沖縄の人々の民意を無視し、断行するという暴挙は許されないのです。

何故、沖縄はここまで差別をされるようになったのか。その元凶は、やはり戦争です。潜在的に人間には他者を差別する資質、気質、本能があるのかもしれないが、その要素を露骨に噴出させるのが戦争だと思う。人間にある防衛本能が過敏になり、精神状態が異常になることから、弱肉強食的な行動が平然と行えるようになるのではないだろうか。自己を護るためには、他国の軍人や民間人を、さらに、自国の民間人を殺害することに抵抗を感じない。戦争とは、このような非道な人間を生み出すものなのです。

だからこそ、私は祈るのです。「非戦を祈るのです。」祈るとは、言葉を発し、行動を起こすものです。キャンプ・シュワブ米軍基地の通用門の前で日々、基地反対運動をしている人たちも、同じ祈りで言葉を発し、行動をしていることを知って欲しい。

日米安保※日米安全保障条約。1951 年 9 月、サンフランシスコにおける講和条約と同時に日米間で結ばれた条約。講和による占領軍撤退後の日本の安全を保障するため、米軍の日本駐留を定めた。60 年の改定交渉によって新安保条約（正称、日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力および安全保障条約）が締結され、新たに日米両国の共同防衛義務・米軍の軍事行動に関する事前協議制度などが定められた。

主権在民※主権が国民にあること。明治憲法では、主権が天皇であったが（主権在君）、日本国憲法では、国民にある。

湾岸戦争※イラクにより侵略・占領されたクウェートの解放をめぐる戦争。イラクは 1990 年 8 月、クウェートに侵攻して占領。国際連合による撤兵決議に応じなかったため、国際連合の決議によって編制された米国を中心とする多国籍軍が、1991 年 1 月イラクに対して攻撃を開始し、2 月末までにクウェート全土を解放した。イラクの敗北で停戦。

イラク戦争※ 2003 年 3 月、イラクのフセイン政権打倒を目的に、米英主体の有志連合が軍事作戦を開始。5 月にはブッシュ米大統領が戦闘終結を宣言した。武力行使を明確に容認する国連安保理決議はなく、仏独も強く反対したが、米は「イラクが大量破壊兵器を開発している」とする証拠を示し、戦争の大義とした。その後、証拠は虚偽だったと判明。米軍の完全撤退は 11 年末までずれ込み、死者は 4,000 人を超えた。

アフガン戦争※インドを支配するイギリスとアフガニスタンとの一連の戦争。19 世紀に入ってアフガニスタンは、中央アジアからのロシアの南下とイギリスのインド防衛の接点となり、3 回にわたるアフガン戦争はいずれもイギリスの干渉で起こった。1838 年～1919 年。

■４．沖縄経済と基地 －基地は必要なし－

このようなことで、沖縄の人たちは基地の存在を反対しています。しかし、多くの日本の方々は、確かに基地は良くないと思うけれども、基地が無くなると沖縄は経済的に大丈夫なのかと思っている方が多いと思う。確かに、沖縄の県民所得は、日本で最下位が続いています。2017 年の統計によると沖縄県民の一人当たりの年間所得は、3,661,900 円（2017 年厚生労働省「賃金構造基本統計調査」をもとに各都道府県を集計：年収ガイドＨＰ）で青森県（3,594,600 円）、宮崎県（3,657,699 円）の上位で 45 位だとはいえ、全国の年間所得と比較すれば低いのです。しかしながら、2017 年度以前は、最下位である。それならば、基地が無くなると平均所得は減り、失業者も増えるではないかと考えます。

沖縄の失業率は、2018 年 4 月の完全失業率は 2,9％ですが、10 年前の 2008 年は 7,5％（沖縄企画部統計課の資料）。この失業率の減少の一因は、基地返還後の跡地開発により新たな就業が増大したことにあるのです。

詳細は省くとして、米軍基地返還後の跡地利用により経済波及効果は基地経済に比べて倍増している結果が、新都心地域※やおもろまち※で起こっています。この実績からも、普天間基地が返還された跡地利用によって、その経済効果に期待できるのではないだろうか。

もう一つは、観光客が非常に増えているということです。復帰のときに沖縄に訪れる観光客数は年間 44 万人ぐらいでした。ところが、2017（平成 29）年度は、国内外から約 960 万人の観光客が来沖しているのです。沖縄の政策として、観光客を受け入れる施設を充実させた観光立県をうたっています。950 万人以上の観光客が沖縄に来て使うお金が、約 6,900 億円以上（2015 年度沖縄県文化観光スポーツ部の資料）だといいます。この全てが沖縄に落ちるというわけではなく、本土の企業に流れることもあるのですが、沖縄の経済に大きく貢献していることに違いはありません。現状の沖縄では、観光が第一の産業になっているといえます。

これまでに、沖縄では革新的な知事が何名かいました。復帰してから基地反対の知事がいましたが、「海兵隊※はアメリカに帰れ、基地を撤去しろ」とは言えなかった。どうして言えなかったかといえば、政治に責任を持つトップとしては、アメリカに依存する経済的頻度が大きかったためです。大田昌秀知事※になって初めて、「海兵隊は、帰れ」と言えたのです。これは、沖縄に基地が無くても経済的に生きていけるという見込みが立ったからなのです。

大田元知事

もう一つ、沖縄県民が就業する基地従業員が約 8,900 人います。基地が無くなると、この 8,900 人が失業します。この人たちの生活をどうするのか、ということがあります。

現在、沖縄に米軍基地があるのは日本政府の政策でなされてきたもので、その基地従業員の問題は日本政府の責任で解決すべきことであり、財政的には可能なことなのです。

この従業員たちの給与総額が、年間約 530 億円です。これはアメリカ軍が支払うのではなく、日本政府が私たちの税金から支払っています。このようなことから、アメリカ軍が日本にいる理由は経済的にも財政的負担が少なくて済むからです。

そして、基地返還後の跡地開発による経済効果ということについては、先程少し触れました。基地の跡地利用がうまく進んでいることから、アメリカに対する経済依存度が小さくなった。このことからも、もう基地は要らないと基地返還運動が活発になっているのです。

これまで日本政府からは、沖縄振興予算※をあげるから基地に賛成してくれという態度でした。

新都心地域※那覇新都心（なはしんとしん）は、沖縄県那覇市の北部に位置する再開発地区のこと。1987（昭和 62）年 5 月に全面返還された米軍牧港住宅地区の跡地を造成したもので、大型ショッピングセンターや総合運動公園などが設置されている。

おもろまち※那覇新都心の一地域。沖縄都市モノレール線(ゆいレール)おもろまち駅がある、

海兵隊※上陸作戦を主な任務とする軍備・軍隊。海軍の一部門として組織されている場合が多いが、米国の海兵隊は陸海空軍から独立した軍隊として組織されている。

沖縄振興予算※平成 30 年度内閣府の沖縄振興予算額は 3,010 億円。対前年比 140 億円減となっている。平成 28 年度普通会計決算(県・市町村分合計)ベースで見ると、沖縄県の国庫支出金は全国 10 位、地方交付税交付金も含めた国からの財政移転では全国 12 位。また、人口一人当たりで比較すると、国庫支出金と地方交付税の合計額は全国 5 位で、復帰後一度も全国 1 位にはなっていない。（沖縄県企画部ＨＰ）

大田昌秀知事※「金城実が語る沖縄と慰霊」を参照。(166 頁）著書には「沖縄のこころー沖縄戦と私」、「醜い日本人ー日本の沖縄意識」、「鉄血勤皇隊」、「沖縄は主張する」、「沖縄の民衆意識」、「近代沖縄の政治構造」など多数ある。

名護市でも賛成派の人が市長になりましたが、建設会社の社長の中には、沖縄振興金をもとに多額の建設費を注ぎ込んでも沖縄経済が豊かにはならないということで、基地反対をしている経営者も多くいます。

日本政府によって、2018 年度は 3,010 億円（内閣府の資料）の沖縄振興予算が確定しています。1972 年の復帰後からこれまで 46 年間の間に、沖縄に莫大なお金が注ぎ込まれています。このお金は、沖縄に基地があるために注ぎ込まれた振興金や補助金を含めて沖縄振興策※としてきたものが、本当に効果があるようになっているかといえば、そうではないのです。

それは、先程話しましたように、沖縄は未だもって数値的に日本で県民所得が低い地域になるのです。本来であれば、基地があるから多額の振興金、補助金が入り、米軍もお金を落とすのだから、県民所得も豊かになっているはずです。それが、そうではないというのが実態です。

沖縄振興策※沖縄振興特別措置法は、所与の制約条件があるため自立的発展の後押しが必要な地域を対象に、国が「国土の均衡ある発展」を図る観点から特別の支援策を講じる地域振興法の一つ。こうした地域振興法には、離島振興法や山村振興法のほかに北海道開発法などがあり、沖縄だけに講じられているものはない。また、沖縄の振興法と同様な類型に属するものとして、国土復帰等の社会的条件を有する小笠原諸島や奄美群島を対象とした振興特別措置法が制定されてある。沖縄の振興については、沖縄振興特別措置法により、次の特殊な諸事情がある。
1. 第二次世界大戦末期の沖縄戦における苛烈な戦禍と、その後 26 年余りにわたり我が国の施政権の外にあったこと。（歴史的事情）
2. 本土から遠隔にあり、広大な海域に多数の離島が点在していること。（地理的事情）
3. 我が国でも希な亜熱帯地域にあること。（自然的事情）
4. 国土面積の 0.6%の沖縄に在日米軍専用施設・区域の 70.6%が集中していること。（社会的事情）
以上のことに鑑み、国が沖縄振興基本方針を策定し、これに基づき県が策定した沖縄振興計画に基づく事業を推進する等、特別の措置を講ずることにより、沖縄の総合的かつ計画的な振興を図り、もって沖縄の自立的発展に資するとともに豊かな住民生活の実現を図るものである。（沖縄県企画部ＨＰ）

■おわりに

先に申し上げたように、1972 年に沖縄は日本復帰ができたというけれども、日米安保条約の下で数々の基地問題が起こり地元沖縄住民の民意は生かされることなく、沖縄の犠牲のうえに日本国の安全が保障され維持されるという矛盾した状態が今日まで続いているという現実問題があります。

その背景には、多くの日本国民には、沖縄問題に関する無関心という心理から問題を放置するという意識があります。これが、「無関心という差別」ではないでしょうか。この「無関心」こそが日本国民の心の「闇」であると思います。黒闇（こくあん）の闇を闇と気付くことは難しく、一筋の光に照らされて初めて気付くことができるのでしょう。人間は、何事にも相手に対して関心を持ち深く関わり合う中で、他者の苦しみを共有することで相手の現実を知ることができるものです。それが皆さんには、欠落しているのではないのですか。そのことを私は問うと同時に、皆さんの状況も理解しながら一緒に考えましょうということを申し上げたいのです。我々沖縄の現実を知って欲しいのです。

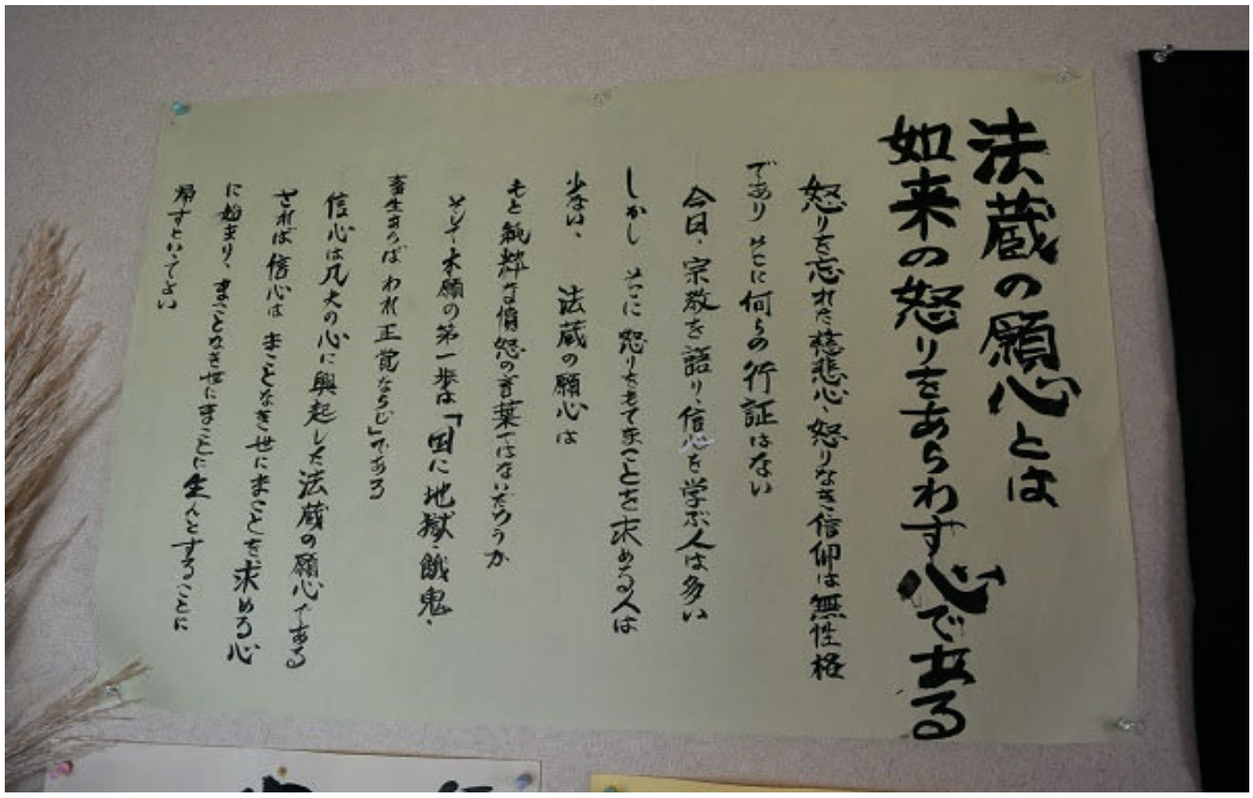
沖縄の表現には、〝可哀そう〟という同情的な言葉はありません。あえて当てはまるとすれば〝チムグリサ〟（肝苦）です。これは、自分の心が苦しくなることです。相手の苦境を知るとそのことに共鳴する心が生まれ、共に苦しみを感じるのです。沖縄問題、部落問題、ハンセン病問題にある社会の苦が解決されないのは、無関心という闇を知らないという無自覚にあるのだと思います。

沖縄は現在、第 4 の琉球処分を受けています。私達はそれに抗議し抵抗しているのですが、この問題の取組みの多くは本土の人たちにかかっています。やはり今までの政治は、「大の虫を生かすために、小の虫を潰す」という政治的取組みです。最大多数の最大幸福論が政治の主流だそ

うです。その中で、「最小」になるということは、悲哀をみること、潰されるということになります。現在の日本政府は、日本全人口の 1 パーセントの沖縄は、最大多数の 99 パーセントのためには潰されてもいいのだという政治を行っている。これを少しでも止めるということは、99 パーセントの人たちが声を上げることではないかと思います。これは、一人の人間として、その苦悶の場に立つということが必要であると思っています。常に、社会的弱者の立場に立ってものを考えていくことが、日本が精神的に豊かになることだと思います。

沖縄が、今まで申し上げてきた状況にあることを分かっていただければと思います。真の仏教、浄土真宗を学びながら現代の政治的、社会的な問題に皆さんと一緒に取り組みたいと思います。長時間にわたりお聞きいただき、ありがとうございました。

■この文章は、2010（平成 22）年 11 月 12 日、東京都練馬区の真宗会館で「首都圏大谷派開教者会」が主催した沖縄研修の事前学習会での講演録である。沖縄県民人口などの数値は知花氏の了解を得て、現況の数字に変更した。（文責：福島・吉岡）



この法語は、何我寺本堂横にある談話室の壁面に貼られてある、故藤元正樹氏（1929 年兵庫県生。真宗大谷派僧侶・元真宗大谷派教学研究所所員・元真宗大谷派同和推進本部委員・2000 年 4 月逝去）の言葉である。以前、知花さんから「命（ぬち）どぅ宝は、法蔵の願心」という言葉を聞いたことがある。その時、意味が分からなかったが、この法語を読んで少し理解できたような気がする。（吉岡記）

沖縄戦跡の慰霊碑に欠けているもの

平良 修

沖縄県条例による「慰霊の日」（6 月 23 日）を沖縄住民は単なる墓詣での日としてではなく、「反戦平和の日」として位置づけた。それは余りにも悲惨な戦争体験をさせられた者の戦争拒否の心情と、国際政治の渦の中で相変らず戦争との抱き合わせでしか生きられなくされてきた者の、押さえ難い怒りと平和希求の悲願からであった。この位置づけは「沖縄の心」を鮮明に打ち出したものとして歴史の審判に十分に耐え得る質をもっている。沖縄の歴史形成にかかわるすべての営為は、この視点からのみなさるべきである。

この立場から私たちは一つの出来事を契機として、沖縄にある多くの慰霊塔碑文をつぶさに調べてみた。20 万の尊い生命を奪い取り、山容をあらためさせたあの沖縄戦がどのように受けとめられ、どう生かされているかを知る一つの貴重な手がかりをそこに求めたからに他ならない。その結果、私たちは総じてこれからの慰霊碑に対して、ということはとりも直さずそれを建てた人々に対して、心の深い痛みを覚えつつも深刻な疑義を提さざるを得なくなった。親しい者の戦死に心からの哀悼を表わそうとする善意にもかかわらず、そこには余りにも重大な欠けがあることを見るからである。

１．戦死を空しいものと見る視点の欠落

親しい者の戦死を空しい死と見なすことは遺族にとっては胸かきむしられることに違いない。自分の親しい者の生涯をふりかえって見るとき、その人が親しい者であればあるほど、それを意味あるものであったと評価したいことは人情である。殊に国内ほとんど唯一の地上戦場になった沖縄での余りにも悲惨な最期を知るとき、それがむごたらしい最期であればあるほど、その死を国に殉じた美しいものとして意味づけせずにはおれないに違いない。

皇民化教育の洗礼を受け、「天皇陛下とお国」のために一命を投げ打つことを最高の誉れと信じてきた小さな軍国主義者たちに―日本国民はおしなべてそうであった―親しい者の戦死を、無意味な死であったとせよということの方が非情な注文なのかも知れない。しかし、そのように洗脳されていたこと自体が空しいことだったのだということに、私たちは気付いていなければならないのである。

1947 年、つまり終戦の翌々年、文部省が学校教育用に発行した「あたらしい憲法のはなし」の中で、政府は、**「戦争は人間をほろぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから、こんどの戦争をしかけた国には大きな責任があるといわなければなりません」**と説明している。戦争を空しいものととらえているだけではない。あの戦争を日本がしかけた戦争として、責任を表明しているのである。まことに正しく、永代にわたってゆるがせにしてはならない評価であると思う。ならばそのような戦争による死が、どうして空しくないものであり得るだろうか。

あの戦争における親しい者の死を意味あるものとする唯一の道、文字通り唯一の道がある。それは、つらいことではあるが、私たちが彼らの死を、軍国主義思想に躍らされ侵略戦争を聖戦と思いこまされた者の「空しい死」であったとはっきり認め、彼らの死をもって空しい死の終りとさせる決意と行動にしかないと言うべきではないだろうか。

２．戦争を始めた者たちへの怒りと糾弾の欠落

日本国憲法はその前文において**「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意する」**と言明している。そのことでも明らかなように、戦争を画策しひき起すのは国家権力である。かつての日本は天皇を頂点とする国家権力の意のままに動かされていた。その中にあって、知らされることなくただ服従することだけを強要された無力な一般国民に、何ができたというのだろうか。国民は国家権力の命ずるままにあの戦争を聖戦と信じこみ、侵略の銃を取った。そして他国をひき裂き、自分自身も癒し難い傷を負ってしまった。沖縄戦のあの惨禍はまさにそれであった。にもかかわらず、碑文の中に一つとして戦争を始めた者たち、自分らを戦争へと駆りたてて自他を殺傷させた者たちへの怒りと糾弾が見当らないのは不思議である。知らずにやったこととはいえ、自分たちもあの戦争に一端の責任を負う者として、戦争指導層を非難する資格は無いということなのだろうか。そうではないだろう。その証拠に、後述するように、自分自身の戦争罪責の告白という視点は、全くと言ってよいほど碑文には表わされていないのである。

死者はもはや語ることができない。ならば、そして、生者が真に戦争を拒否し平和のみを追求する者であるならば、死者に代って戦争を始めた者たちの責任を問うことは当然のことではないだろうか。それが無いのは単に不思議なことでは済まされない。それは過ちですらある。

あの戦争に対して最高の責任をとらなければならないはずの天皇を擁護する論を聞くことがよくある。「戦争を始めたのは天皇の側近たちであり、戦争を終結させたのは天皇である」という具合にである。そして天皇の戦争責任は不問に付されていく。何事も無かったかのようである。しかしそれはおかしい。敗戦というものを知らなかったかつての日本にとって、無条件降伏という形で戦争を終結させるということは全くあり得ないことであった。それをさせるだけの権能が天皇にあったということは、とりもなおさず開戦を止める権能もあったということである。にもかかわらず、事実天皇の名によって戦争が始められたことについて、天皇に重大な戦争責任があることは明らかである。その天皇を頂点とする支配層の独断の結果、沖縄では二〇万人が地獄死に追いやられたのである。それであるのに何故に慰霊碑は戦没者の死を悼むだけで彼らを空しい死に追いやった者たちを糾弾しないのか。

イスラエルやドイツでは今なおナチスを糾弾し続けている。何故に沖縄の慰霊碑にはそれが無いのか。西欧の体質や発想が対決的であるのに対して、日本や沖縄のそれは包容的であり、それが自分らの美徳だということなのだろうか。たしかに、争いではなく和をこそ私たちは追い求めなければならない。究極的には対決にではなく寛容にこそ場が与えられるべきである。しかし寛容であるということの真の意味は、問題を不問に付して曖昧裡に解消することではない。事柄の是非を明らかにしつつより真なるものを求めて共に在ろうとするとする態度である。慰霊碑に見られる限りにおいて、そこにあるものは裁きでも、したがって赦しでもない。対決でも寛容さでもない曖昧さである。生者のそのような筋を通さない姿勢こそが実は親しい者の死を空しい死にしてしまうのであることを、私たちは肝に銘じておくべきである。

このことは日本軍に惨殺された沖縄住民の場合に、より一層あてはまる。沖縄住民を戦火から守るために布陣したはずの日本軍によって、何百何千という数の住民が惨殺されたことは多くの証言によって明らかである。当時の敵であった米軍によって殺傷されることは、悲しいことながら戦争の習いとして起るべきことが起ったにすぎない。しかし同国軍によって非戦闘員が殺されるということは、決して水に流してしまってはならない重大事である。それはまた、戦争というものがいか

なる想像をも遙かに越えて悪魔的な様相を呈するものであることをも如実に示している。

責任者告発について沖縄住民の慰霊碑が、久米島のただ一基を例外として、ほとんど口をつぐんでいるのは何故だろうか。その例外的一基である「天皇の軍隊に虐殺された久米島住民、久米島在朝鮮人痛恨之碑」も建設実行委員会のメンバーのほとんどが他県人であることを考えると、沖縄住民が建てた告発の碑は皆無と言っていいかも知れない。沖縄住民の慰霊碑は概して寡黙である。碑文は戦火の状況を事実体験に即してたんたんと述べるだけのものが多い。そこには恨みがましさも、ふつふつたる怒りも見られない。しかし沖縄住民の慰霊碑が同国軍によって惨殺された仲間の血の叫びを訴えなければ、誰がするのか、日本兵をそこまで追いこんだ戦争指導者を告発しなければ、誰がするのか。沖縄住民の慰霊碑に代り得る慰霊碑は他にあり得ないではないか。沖縄住民を助けた日本兵も多くいたはずだとする反論もある。そうに違いない。しかしそれは当然すぎる程当然なことであって、あえて言うには及ばない。しかしその逆の事実は告発されるべきである。この場合、沖縄住民の慰霊碑の告発は心貧しい行為ではない。恥ずべきことでもない。公義を求め歴史形成に責任を負わんがための誠実な努力である。痛みが深ければ深いほど秘めたくなることも人間の情であろう。しかし、こと沖縄戦に関しては、言いたくないことほど言われなくてはならないことのはずである。このことについて沖縄住民の慰霊碑が沈黙を守り通すなら、それは沖縄的優しさの表現であるよりも、不甲斐なさと無責任さとを表わすもの以外のなにものでもなくなるだろう。沖縄住民の慰霊碑に日本軍の非道に対する心からの怒りと裁きが無く、したがってその必然の結果として、心からの赦しも愛も見当らないのは残念でならない。仮に、沈黙の中にそれらのすべてがこめられているというのであれば、私はそれが今からでも碑文に明記されることを心から願わずにはいられない。それこそ沖縄の戦後を生きることを許された者たちの誠実というものではないだろうか。沖縄住民の慰霊碑は決して月並みのものではあり得ないはずである。

３．沖縄戦において最大の犠牲者であった沖縄
住民に対する「本土」側慰霊碑の痛みの欠落

沖縄戦の戦場において住民を生死の境の彷徨に追いやったものは米軍の砲火だけではなかった。「今後方言を使う者はスパイとみなして処刑する」という理不尽な軍命令と、沖縄住民に対してそのような命令を出すことのできた体質の日本軍もまた、彼らを死に追いやるものとなった。そして軍人戦死者を上まわる数の沖縄住民の死。それは当時の県人口の三分の一といわれている。国策として「本土」防衛のための捨て石とされた沖縄であるから、米軍を沖縄に釘づけにしておけさえすれば、住民の死は三分の一に留まらずもっと多くてよかったわけである。そういう戦場で「人間が人間でなくなる」以外の何が一体あり得ただろう（中山良彦編、「沖縄戦住民証言集・人間でなくなる日」参照)。集団自決の場において愛児の両足を取って振りまわし、号泣しながら、その頭がボロボロになるまで幾度も幾度も岩に叩きつけた父親がいたという。自分の小便を自分も飲み子どもらにも飲ませて、かろうじて生きながらえた母子らがいたという。赤ん坊の泣き声が米兵に聞かれては困るからなんとかするようにと日本兵に強要され、赤ん坊と共に確実な死の待つ壕の外へ出て行った母親がいたという。泣き声を立てると叱られることを憶えてしまい、遂には涙の溜った目だけをカッと見開いて声を立てずに泣く幼児がいたという。**「世界の人々が、沖縄戦のこの惨状を見とどけるまでは、木よ伸びるな、草よ茂るなと、私は叫んだ。死屍累々としているこの地が、ふたたび人間が住めるようになるとは思えなかった」（仲宗根政善）**との証言もある（大田昌秀「こ

れが沖縄戦だ」7 頁より再引用)。沖縄住民はそのようなむごい数ヶ月をすごした。

そして戦後は「本土」の独立の代償として米軍統治下の圧政に耐えなければならなかった沖縄。その沖縄に林立する「本土」の慰霊碑の、しかしなんと冷やかなことだろう。たとえば「静岡の塔」その他に見られるように沖縄を海外の存在としてしか見ていない文言に至ってはなんと云えばいいだろうか。私たちの気持をかろうじて安んじさせてくれるのは、数多い碑の中でぜいぜい京都の碑くらいのものである。そこにはこう記してある。**「京都府下出身の将兵二千五百三十有余の人びとが遠く郷土に想いをはせながらひたすら祖国の興隆を念じついに砲煙弾雨の中に倒れた。また多くの沖縄住民も運命を倶にされたことは誠に哀惜にたえない」。**戦跡に林立する慰霊碑は美を競い合うかのようである。しかし、自分らの生活の場のすべてを墓地にさせられ、自らもその中に一番多く白骨をさらすことになった者たちを悼む心を、何故表わしてはくれないのだろうか。慰霊碑が豪華華麗であるだけに淋しさは一層深い。

４．戦争罪責告白の欠落

調査したすべての碑文におしなべて言えることは、戦争罪責の告白が見られないことである。あの戦争を誤った侵略戦争であったと認め、自分はそれに駆りたてられた被害者であると同時に、積極的に参加した加害者であったと自己告発し、それを悔いる言葉が全く見られないのである。したがって、その深みから反戦平和を突き出す重々しい強さも出てきてはいない。「平和」云々という表現は幾つかの碑文にあることはある。しかしそれらは自分の被災の痛みから出ているに過ぎないのであって、それ以上のものがあるようには感じられない。この点において沖縄の慰霊碑と「本土」のそれとの間に差ない。

この視点の欠落は重大である。戦災をこうむった者が同時に戦災を与えた加害者でもあるということを知ることは、余程深められた内心の作業を要することであって、にわかには受け容れられないことであるかも知れない。殊に沖縄の被害者はその被害度がすさまじいだけに、そうであろうと思う。しかし私たちが聖戦として積極的に参加したあの侵略戦争によって、事実無数の外国人、特にアジア人の生命財産が奪われているのである。「聖戦」ならば、相手は撲滅されるべき悪魔でしかありえなかったからである。日本人自らの戦災は自業自得である。しかし彼らがこうむった戦災は私たち沖縄人をふくむ日本人が押しつけたものである。その意味においてあの戦争に参与した日本人は一人として有罪でない者はいないのである。東條英機らのようなＡ級戦犯でないことは言うまでもない。しかし「Ａ級ではない」というにすぎないのである。

この点について私は摩文仁の県立平和祈念資料館に触れざるを得ない。同館は開館当初は「県立日本陸軍記念館」と呼ばれても仕方のない内容であったといわれている。その証拠に、当初一番多く同館に出入りしたのは自衛隊員であったという。当然のこと民衆からきびしい批判が巻き起り、長期におよぶ徹底検討の結果、現在のように住民の戦争被害に焦点を当て、そこから反戦平和を叫び上げる内容のものに展示を総入れ替えしたと聞いている（大城将保「戦争体験は継承しうるか」新沖縄文学 34 号 74～85 頁)。戦跡地の空気がかつての反戦志向型から戦争美化型へと悪変しつつある現在、平和祈念資料館のこの転換はまことに正当な英断であったと高く評価されるべきである。同館は戦跡地の反動的傾向に必死の歯止めをかけている。私は幾度となくそこを訪問しているが、一度とて十分な時間をかけることができたとの思いで帰ったことがない。それほどに人の心に語りかけて離さないものが、そこには確かにある。

しかし、それだけの質をもつ平和祈念資料館ですら、沖縄住民の戦争罪責を打ち出しているようには見えないのである。このことは惜しいというだけでは済まされない。この点を欠く限り、平和祈念資料館は決定的な欠陥をもっていると言わざるを得ない。私は沖縄住民の戦争罪責を突き出していさえすれば、被害の面は出さなくてもいいのではないかと思っているほどなのである。同館 に向って左隣り、平和祈念堂の足許に韓国人慰霊碑が立 っている。その碑文は言う**「・・・1941 年太平洋戦争が勃発するや、多くの韓国青年達は日本の強制的徴収により大陸や南洋の各戦線に配置された。この沖縄の地にも徴兵・徴用として動員された一万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あるいは戦死あるいは虐殺されるなど、惜しくも犠牲になった・・・」。**慰霊碑の建立地が日本国内であることを配慮してか、おだやかな極めて控え目な碑文である。しかし事実はそんな生易しいものでなかったことは歴史が明らかにしている。彼らにとっては日本政府に徴兵されるとは弾よけにされることであり、徴用されるとは男性は牛馬同様の労働力として、女性は日本軍の性の道具にされること以外のなにものでもなかったのである。申し訳なさにおののきながらこの碑を訪れる日本人は沖縄人もふくめて、おそらく皆無に近いのではなかろうか。ということは彼ら一万人のむごい死が私たちにとって何をも意味していないということになる。それは彼らが私たちにとっては見えない人たちであったということであるし、そのことは同時に、私たちは本当の自分自身を見ることができないでいるということでもある。この碑は、どんなによくても被害者的視点からしか真実を知ろうとしない私たちに向けて、鋭い物言いをつけている。この慰霊碑によって沖縄戦跡地の慰霊碑群は静かにではあるが厳正に裁かれている。しかし慰霊碑群はそのことに気付いていない。なんという罪深い欠けだろう。不幸なことである。

おわりに

1 分間 424 万円、1 時間 2.5 億円、一日 61 億円。1980 年度に使われた日本の軍事費である。これを世界全体に拡げると天文学的数字になる。前掲の「あたらしい憲法のはなし」が正当に表現しているように「戦争は人間をほろぼすこと、世の中のよいものをこわすこと」である。それへの経費として、日本だけでも日六一億円が使われている。なんとも空しいことである。米ソ二超大国はその保有する核兵器を使えば、世界中の人間を何回でも殺せるだけの殺傷力、破壊力を競い合って、とどまるところを知らない。相互の殺人能力を誇示し合い脅し合うことで、互いに手が出せない不安定な均衡をかろうじて保っている。このような生き方のどこに人間としての誇らしさがあるだろうか。そしてその勢力争いの片隅で日本も二超大勢力の顔色をうかがいつつ一日 61 億円を浪費している。しかも、「戦争は人間をほろぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから今度の戦争をしかけた国日本には大きな責任があると言わなければなりません。」と言い切った私たちの政府がである。戦争の本当の空しさとは、その空しさを忘れさせて性こりもなく銃を取らせるその悪魔性にあるのかも知れないと思えてくる。

沖縄には年間一八〇万人の観光客が来る。その大多数は摩文仁を中心とした戦跡地を訪れるにちがいない。ところで彼らの多くが利用するであろう戦跡観光バスは、沖縄戦を、住民の怨念を欠落させて殉国美談風にしか説明していないと批判されている。また沖縄戦が一昔前の悲劇としてしか語られず、その終結がそのまま日米軍事体制下の今日の沖縄にひき継がれて、沖縄が今なお臨戦的状況におかれている事実が語られていないことも批判されている。そういう中で彼ら観光客がどのような沖縄を見せられているのかは想像に難くない。

沖縄戦を生き残った住民たちが戦後間もなくやったことは、戦場の無数の白骨を集め葬らうことであった。そこには民間人、軍人の区別は無かった。敵味方の区別すらも無かった。このような悲劇は二度とあってはならないとの思いがすべてであったにちがいない。そして住民たちは塔を建てた。沖縄戦跡の慰霊碑はそのようにして建てられ始めた。しかしいつの間にか、世の保守化傾向と相呼応して、軍隊をなつかしむ雰囲気、日本軍最高司令官と参謀長を祀る黎明の塔が慰霊碑群の最高位のものであるかのような雰囲気が醸し出されてきている。「慰霊の日」に右の手で平和宣言がなされるかと思うと、左の手では自衛官募集業務が強行される。右手で「沖縄全戦没者追悼式」を主催するかと思うと、左手では軍事基地容認の政治がすすめられる。そういう風潮の中で、戦跡観光が盛んになるだけ戦死者は商品化され、沖縄戦は観光客の旅情に一味つけてくれる単なる過去の悲劇としてしか映らなくなってしまう。そういう反動的風潮の中で六月二三日を中心に大小さまざまの慰霊祭がおこなわれればおこなわれるほど、それは慰霊碑を反戦平和の碑として位置づけようとする方向からはずれ、このような悲劇を二度とくり返さないために専守防衛の自衛軍を強化しようという方向にすりかえられ、利用されていってしまうのである。沖縄の慰霊祭は、新しい戦死者のための国立墓地の準備に他ならない。靖国神社国営化に利用され、平和憲法の原点を見失わせる悪しき役割りだけは決して果してはならない。

ある人が言ったという次の言葉は虚心に聞かれなければならない。「戦没者の慰霊には二通りある。その一つは広島原爆塔の碑文にある『安らかに眠って下さい。繰りかえしませぬから』という形のもの。いま一つは、『安らかに眠らないでください。私たちは過ちをくり返してしまうかも知れませんから』という形のものである。」過ちはすでにくり返し始められ、取り返しがつかないほどの深みにはまっていきつつある。沖縄の慰霊行為がこのような緊迫状況の中でしかとりおこなえなくなっていることは悲しいことである。幸いこの悲しみを知ることのできる心は沖縄から決して消え去ってはいない。この心を耕し合い、広め合い、高め合い、強め合い、そして「沖縄住民の戦争罪責告白の碑」を建立することができるまでにそれを深めていくことができれば、沖縄は新しい活路を切り拓くことができるだろう。

ところで私たちはその「沖縄住民の戦争罪責告白の碑」を、打ち建てることができるだろうか。そして同時に、その深みから、群立する慰霊碑にも自己検証への友情ある声かけをすることができるだろうか。慰霊祭は身内の死を悼むだけではなく、自分たちが害を与えた者たちへの痛みをも含むものでなければならないこと、それを欠落させるならば日本人の慰霊行為は、その善意にもかかわらず大きな過ちを犯すことになることを説得することができるだろうか。正真正銘の本音として、そのことができるのでなければ、沖縄は人間史にとって無益な存在となってしまうだろう。

1981 年 7 月 23 日、名護市役所の構内に一つの慰霊塔が建立され「平和之塔」と命名された。おそらく沖縄で最も新しい慰霊塔だろう。この塔は以前は「殉国戦士之塔」と呼ばれ、日清・日露・太平洋戦争の戦死者1,300柱が合祀されていた。それが市役所庁舎の新築にともなって「平和の塔」と改められたものである。聞くところによると「反戦平和の塔」にしてはどうかとの意見もあったが、そこまでは云い切れない人たちの気持をも汲みつつ、しかし「慰霊」に留まらず、むしろそれを乗り越えて「平和」への姿勢を表現したのだという。

慰霊碑をめぐり歩いて心重い私にとって、このニュースは有難かった。この動きを私は大事に思う。大事にしなければならないと思う。厳しい反動化状況の中で、この方向に万人の思いが整えられていくことを心底から願わずにはいられない。

（『戦争賛美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告―』靖国神社国営化反対キリスト者連絡会、2002 年・初版 1983 年）

※1980 年度防衛予算は、約 2 兆 2,300 億円である。2018 年度は、5 兆 1,911 億円となっている（防衛省ホームページ上、昭和 55 年度「防衛白書」
http://www.clearing.mod.go.jp/hakusho_data/1980/w1980_00.html を参照）。

はじめに ―『戦争賛美に異議あり！』

平良 修

はじめに

2 年前に着手した慰霊塔碑文の調査研究がやっと終了し、報告書を公刊することになりました。

あの悲惨な戦争体験を決してくり返してはならない、また、くり返させてもならない、無数の戦没者の死を平和実現へのバネとして意味あらしめなければならない。私たちの意図は徹頭徹尾この平和希求にありました。そのために、戦没者を祀る慰霊塔碑文の中に、今を生きる日本国民の心がどのように反映させられているかを見ることにしました。戦没者がどのような死を遂げたかよりも、今生きている者たちが彼らの死をどのように見ているのか、彼らの死を自分らの生にどのように繋ぎ合わそうとしているのかこそが、決定的に重要なことと思えたからです。

ことが死者にかかわる厳粛なことですし、また、なまなましい痛みを負い続ける遺族の心の深いところに触れる作業でしたから、私たちは終始真摯な姿勢を心がけました。それにもかかわらず、あるときは私たちの本意を十分に理解していただくことができず、遺族の方から激しい叱責を受けました。しかし、私たちの真の願いは究極的にはその方にもきっと分っていただけるはずのものと信じています。お赦しとご理解を乞う次第です。

調査研究の結果、私たちが指摘しなければならないと感じたことの最大のものは、調査したすべての碑文をとおして、あの戦争についての、もっと正確に言うと、自分らの戦争加担についての罪責の自覚が見当らないということです。戦争には正義戦というものはありません。勝者にとっても敗者にとっても、戦争は罪悪です。戦争に協力してなお手の椅麗な人間は一人としてあり得るはずはありません。しかし、群立する慰霊塔からは、その痛みのうめきが聞こえてこないのです。国民がそういうところでしか生きていないとすれば、戦争罪責をぼかそうとする教科書の改ざんも当然起こるべくして起こったと言うべきでしょう。教科書問題はひとり政府・文部省がひき起こした問題ではありません。彼らをそうさせた国民の支持を、私たちは碑文の中に見るのです。根底がメスを必要としているのは文部行政よりも碑文に現わされている国民の精神ではないでしょうか。

そんな課題を思いつつ、報告書を送り出します。心は熱しても力およばず多くの不備を含んでいることを承知しております。特に、碑文等は一年前に書き写してあったものを、概ねそのまま用いていますので、その後の変更もあり得ますし、現在のものと多少違いが生じている可能性もあると思います。また報告書も昨年夏の時点で書かれたもので、印刷直前に若干の加筆修正は致したものの、分析の中で、最近の動向を加味するところまではいきませんでした。そのことをお断りしておきます。不充分な点につきましては、今後のより良い実りのために、皆さんのご教示をお願いする次第です。

この報告書をまとめるについて、沖縄戦を考える会の方がたのご協力をいただきました。有難うございます。

また、私たちの希望を快く引受けてカットを描いて下さった村上仁賢氏にも感謝申しあげます。

1982 年 12 月　　靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会　代表平良修

（平良修「はじめに」『戦争賛美に異議あり！―沖縄における慰霊塔碑文調査報告―』靖国神社国営化反対沖縄キリスト教連絡会、1983 年）

平良（たいら）　修（おさむ）　氏　　プロフィール

1931（昭和 6）年沖縄県宮古島生まれ。東京神学大学と国際基督大学に留学後に、アメリカのジョージ・ピーボディー教育大学に留学。ここで信仰と生活の一大転機を経験する。1966 年沖縄キリスト教短期大学第 2 代学長に就任。同年琉球列島第 5 代高等弁務官Ｆ．Ｔ．アンガー中将の就任式で、「この高等弁務官をして最後の高等弁務官たらしめ給え」と、沖縄の本土復帰の願いを主旨とした祈りをささげ話題となる。1974 年日本基督教教団沖縄教区佐敷教会牧師に就任（～2002 年）。2015 年日本基督教団沖縄教区うふざと伝道所牧師（代務者）に就任。2016 年日本基督教団沖縄教区総会議長に就任。現在に至る。

著書『沖縄にこだわりつづけて』（1993 年・新教出版社）

『小さな島からの大きな問い』（1933 年・新教出版社）

共著『27 度線の南から－沖縄キリスト者の証言』（1971 年・日本基督教団沖縄教区）

『戦争賛美に異義あり！－沖縄における慰霊塔碑文調査報告－』（1983 年・靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会）

『私は沖縄の牧師である』（2015 年・沖縄痛恨之碑の会）

慰霊から平和構築へ

金井　創

住民の犠牲に触れない慰霊碑

沖縄県南部の米須地域、ひめゆりの塔近くに「魂魄の塔」があります。沖縄戦が終わった後、民間収容所に入れられていた旧・真和志村民は解放されたものの米軍の命令によって、この地域一帯に強制移住させられました。住民が戦後の歩みを始めようにも周囲には多くの遺骨が散乱し、それらを集めないことには畑も作れない状態でした。しかし、戦争犠牲者の遺骨を集めることは反米的な行為と見なされ、それもままならない中で、当時の金城和信村長が米軍相手に折衝を重ねて何とか道を開きました。こうして遺骨収集が可能になり、集められた遺骨を納めたところに金城和信氏が「魂魄」と刻んだ石を立てました。これが魂魄の塔です。納められた遺骨は 3 万 5 千を超えています。この数だけ聞かされてもピンときません。でもたとえば現代、私たちの生活の範囲で一人の遺体が打ち捨てられていたらどうでしょう？　それは大変な事件であり、目撃してしまったショックは一生残るものだと思います。それが 3 万倍！気の遠くなる話です。

素朴な魂魄の塔（手前）と対照的な北霊碑

魂魄の塔が建立されたのが 1946 年 2 月。そしてその隣に他の都道府県に先駆けて、沖縄戦で最も多くの戦死者を出した北海道の慰霊塔「北霊碑」が 1954 年 4 月に建立されました。先駆けとなったのは時期だけではありません。その碑文には「玉砕護国の盾」、「散華」、「招魂の聖碑」、「英魂」などの言葉がちりばめられ、追悼というよりも後の各県の慰霊塔に見られる顕彰すなわち戦争賛美につながる特徴がすでに色濃く表されています。

私は北海道生まれの者です。それで北海道出身の戦没者の名前をずっと見ていて気がついたことがあります。北海道出身の兵士にはアイヌの人たちも当然含まれています。しかし、刻まれた名前を見てこの人はアイヌだと分かった人はいませんでした。そこに刻まれているのはすべて日本名なのです。明治政府がアイヌモシリ（人間の住む土地＝北海道のこと）を侵略し、アイヌの土地、文化、言語、名前を奪っていった植民地支配は沖縄戦の時代にはとっくに完成していたのだと、これらの名前を前につくづくと思わされました。

この地域には東京、奈良、和歌山、鳥取、島根、広島、香川、大分、宮崎の慰霊塔があります。魂魄の塔、北霊碑が建てられていたことから、この地域が一種の霊域、聖域と位置付けられていったのでしょう。

ところが、1952 年に摩文仁の丘の頂上に日本軍司令部員のために「黎明の塔」が建立されて以降、それを頂点として続々と各県の慰霊塔が摩文仁の丘に作られていきます。摩文仁の丘は最後の日本軍司令部が置かれた場所です。各県がどこに慰霊塔を設置するかという場所の選定も注目しなければならない視点だと思います。つまり大半の県が日本軍司令部を中心とした軍事最優先の発想で慰霊碑を建てているということ、日本軍兵士以上に多くの犠牲者を出した沖縄住民には全く目を向け

ていないことが露呈されています。

沖縄戦当時、ガマ（自然洞窟）に避難していた住民が日本軍兵士によって砲弾、爆弾が降り注ぐ壕の外へと追い出されたこと、ガマの中で子どもの泣き声が敵に居場所を知られるからと黙らされたこと、それは親がわが子の命を奪う結果になってしまったり、兵士によって子どもが殺されたりも含めてです。また、住民がスパイの疑いをかけられて日本軍に虐殺されたこと、実際日本軍の指令で住民が沖縄語を話すことを禁じられました。それをするとスパイと見なすということまで公式に定められました。こうしたことに触れた各県の慰霊碑は何一つありません。そのような日本の姿は沖縄戦当時という過去のものだけでなく、今も変わらないのではないかと思わされる光景があります。

前述の黎明の塔には毎年 6 月 23 日（沖縄慰霊の日）の早朝、まだ夜が明けきっていない時間に陸上自衛隊の幹部たちが数十人、制服姿で参拝にやってきます。「本土復帰」の 1972 年直後、こうした参拝がなされ県民からの大きな反発があって長い間参拝は行なわれていませんでした。ところが 2004 年、小泉政権下で制服参拝が復活し、以降毎年続いています。

沖縄県平和委員会や県統一連などが参拝をしないよう自衛隊に申し入れをしていますが、自衛隊はこれが個人として行なっていることであり、組織を挙げてのものではないことを強調しています。自衛隊幹部が制服を着用しての「私的参拝」。同じ時刻に数十人のしかも幹部クラスが制服姿でそろって行なう参拝が私的なことでしょうか。この行為は自衛隊が旧日本軍と別物ではなく、しっかりと連続していることを示すものでしょう。沖縄戦を体験した人々はその痛ましく壮絶な経験を通して、戦争になると軍隊は住民を守らないことを知りました。自衛隊が旧軍を受け継ぐものならば、自衛隊もまた住民を守るために存在しているのではないことになります。

基地建設反対は慰霊の帰結

沖縄県民の意思や思いは顧みられない現実がこのようなところに示されてしまっています。もうひとつ、慰霊碑とそれにまつわる住民無視の姿勢は、いまもっと露骨な仕方で進行しています。それが辺野古に建設されている米軍基地です。

沖縄県中部の宜野湾市の真ん中にあって「世界一危険な基地」と言われる米軍普天間飛行場を、人口の少ない北部の海岸、辺野古に移すということで基地建設計画が始まってもう 20 年になります。沖合埋め立て案が市民の抗議、抵抗にあって白紙撤回されるなど紆余曲折はありましたが、2014 年からは海兵隊基地キャンプ・シュワブの一部を含めて沿岸部を埋め立て、基地を建設する計画が進められています。計画されている基地は普天間基地の代替施設であると政府は言いますが、内実は代替でもなく移設でもありません。

工事が進められる辺野古と抗議行動

滑走路は 2 本になり、キャンプ・シュワブには辺野古弾薬庫があるため弾薬庫付きの基地になります。さらに　辺野古海域に隣接する水深のある大浦湾を埋め立てることでその岸壁は軍港機能も

併せ持つことになります。つまりここに作られようとしているのは機能が何倍にも強化された新基地なのです。そればかりか新基地の滑走路が全長 1800 メートルであることから、米軍は長さが足りないと言い出しています。そもそもヘリコプターを中心とした滑走路であるはずのものが、固定翼機の離着陸も求めて長さが足りないというのですから、前提そのものがくずれています。つまり結果的に 2500 メートルの滑走路を持つ普天間基地は返還されないことも充分ありうるのです。これが政府の言う「沖縄の基地負担軽減」なのでしょうか。

沖縄では様々なメディアによる世論調査で県民の約 8 割の人が辺野古の新基地建設に反対しています。2014 年にはこの基地建設に反対することを公約に掲げた知事を誕生させました。そして今年の 9 月 30 日には任期半ばで逝去した前知事の遺志を継ぐ新知事を選びました。これだけ民意が示されてきたにもかかわらず、政府は一顧だにしません。さらに県議会では条例に基づいて新基地建設の賛否を問う県民投票が実施されることが決議されました。しかし政府はもうこの時点で、県民投票の結果いかんに左右されず基地建設は進めると早くも表明しています。

県民の遺志も生活も全く考慮しない姿勢。慰霊碑に示された住民不在のこの国のありようはこのようにずっと連続しているのです。慰霊碑の碑文には「平和」の文字も数多く見られます。恒久平和を願うというような表現はほとんどに共通していると言ってもいいでしょう。しかし、実際は慰霊、追悼と現代の平和の問題は切り離されています。

沖縄戦で大きな痛みを負わされた沖縄は戦後、今度はアメリカの戦争の出撃基地にされてきました。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争。沖縄の基地から米軍は出撃していきました。戦地では米軍によって多くの住民の命が奪われました。沖縄はアメリカの戦争の加害者の立場に置かれてきたのです。沖縄の米軍基地は防衛のためのものではありません。ここからアメリカは戦争をしに出かけるのです。これ以上もう誰も殺してほしくない、殺されてほしくない、米兵たちも死んでほしくない。新たな基地建設に反対するのはそれがこうした命の問題だからなのです。そして私たちは戦争の加害の側には立たないという決意の表れでもあります。

沖縄戦の犠牲者の死を悼み慰霊することは、そして恒久平和を誓うことは、戦争につながる一切のものを否定することではないでしょうか。

平和の礎は、記念碑。沖縄戦の痛ましさを学ぶ教材

平和の礎（手前は、平和の火）

各県の慰霊碑と対極にあるのが平和祈念公園にある「平和の礎(いしじ)」です。これは沖縄戦で亡くなったすべての人の名前を刻んだ記念碑です。そこには当時の敵味方の区別もありません。軍人住民の区別もありません。沖縄県民も日本軍兵士も、連合軍兵士もすべての人の名前だけが刻まれています。刻銘数はいまでは 24 万を超えています。ただし、沖縄県民に関しては満州事変に始まる 15 年の戦争で亡くなった人も含んでいます。

これは沖縄戦で亡くなった人々が 20 万人を超えるというただの統計的な数字ではなく、一人ひとり

に名前があり、人生があり、家族があったことを知るため、そしてかくも多くの人の命が失われていった戦争の愚かさを学ぶための学習素材です。学習素材とはこれが建設された当時の知事・大田昌秀氏から直接聞いた言葉です。つまり平和の礎とは墓でもなく、慰霊碑でも追悼碑でもない記念碑なのだと。それは戦争の愚かさ、痛ましさを学ぶ教材、学習素材なのだというのです。

ところが近年、どうにも違和感を覚える光景が礎の前で見られるようになりました。それは県外から修学旅行で来た高校生でしょうか、学校ごとに整列してセレモニーを行なっているのです。礎に千羽鶴をささげる学校もあります。そしてたいていは生徒の代表がメッセージを礎に向かって読み上げるのです。すべてを聞いたわけではありませんが、礎に刻まれた人々の死を悼み、この人たちの犠牲の上に今の平和があることを感謝するというようなものです。

こうした光景の危うさや違和感は何だろうと考えたときに思い至ったのは、沖縄に犠牲を強い続ける今の日本の実態に声を上げることなく、慰霊だけをする各県の慰霊碑に対する姿勢と同じではないかということでした。

平和の礎を素材として学ぶことは、平和のないところに平和を造っていく行動につながらねばなりません。国土面積の 0.6%しかない沖縄に全国の在日米軍基地の 70%が集中しているという差別の構造。戦後の米軍による占領状態が実は今でも続いているという実態。沖縄は、そして日本はとうてい平和な国とは言えません。このことにしっかりと目を向け、戦争がないだけではない、差別のない、あらゆる意味の暴力のない真の平和な世界を造る言葉と行動に踏み出していくことこそ、沖縄で平和を学ぶ意義であり、また慰霊なのではないでしょうか。

金井　創（はじめ）氏　　プロフィール

1954 年、北海道生まれ。早稲田大学、東京神学大学を経て 13 年間日本キリスト教団富士見町教会(東京)副牧師。1996 年から 10 年間明治学院牧師。2006 年より、日本キリスト教団佐敷教会牧師(沖縄県南城市)として、現在に至る。
2007 年より現在、辺野古新基地建設阻止行動で船長。2010 年より、沖縄キリスト教学院平和総合研究所コーディネーターとして現在に至る。

沖縄から問われている

長谷　暢

私が沖縄にやってきたのは、1992 年のことである。沖縄に強い思い入れがあってこの地を選んだわけではない。たまたま合格した大学が沖縄であったという以外は理由がない。沖縄の大学を受験したのも特段の理由があるわけではなく、希望の学科があり、生まれ育った地から遠くに行ってみたいという程度の関心でしかなかった。遠くといっても、日本国内という限定であったわけだが。沖縄での大学生活は実に楽しく、海に遊び、泡盛を飲み、勉強もたまにして、それまでの人生経験とは異なることばかりで、「有意義な」と言えるかは分からないが、もう一度受験し直したとしても、同じ大学を選んでみたいと思っている。

その当時は、この本がテーマとしている碑文どころか、戦跡にもあまり行ったことがなく、沖縄戦のことも、沖縄の歴史にもほとんど関心がなかった。専攻が理系だったこともあり、周りの友人も歴史や文化に関心が薄かったと思う。そんな中でも、大学生活で強く感じたのは、沖縄の同級生とのギャップである。

私が学んだ大学の学生の半分は県外の学生で、北は北海道から南は鹿児島まで様々なところからやってきていた。同級生として様々な仲の良い友達ができるのだが、私の個性にもよるが、友人の多くは県外出身であった。もちろん中にはウチナーンチュ（沖縄人）の友人もいたが、数としては少なかった。当時はあまり深く考えなかったが、言葉の問題には気が付いていた。

沖縄の友人同士で話す言葉と、私などの県外から来た者に向けて語りかける言葉がまるで違うのだ。関西地域出身の者は誰とでも関西弁で話し、そのような言葉の使い分けをしたことはなかった。私自身、沖縄に来るまで標準語を積極的に話すことはなかったし、学校でも関西出身の教師たちは普通に関西弁でしか話していなかった。

ところが、沖縄の友人に標準語で話しかけられ、戸惑ったのを覚えている。沖縄の言葉は、「なまり」が強いからそのように使い分けをするのだと当時は思っていたが、実はそうではなかった。一方で、鹿児島出身の友人との会話では、しばしば彼の鹿児島の方言の意味が分からないと文句を言っても、彼はあいかわらず鹿児島弁を話し続けていた。

この違いは方言の度合いの問題ではなく、1879 年に併合されて以降、沖縄を日本化するための政策の影響があることを後になって知った。戦前・戦後と沖縄では、継続して標準語励行運動が進められてきた。方言を話すと「方言札」というものを首からかけるという罰まで用意されて、公教育の現場で強く推し進められた。その結果、現在は沖縄語といわれる島言葉を話せる若い世代はごくわずかだといわれている。それは、日常生活の中で島言葉が話されなくなっているからだ。では、私に標準語を話していた沖縄生まれの友人同士が話していた言葉は何なのか。かつて話されていた島言葉とは異なる、沖縄の方言というようなものと聞いている。現在は、沖縄の言葉「しまくとぅば」を取り戻す運動が繰り広げられていて、学校では副読本も用意されている。

もう一つ、沖縄で生活して初めて気付かされたことがある。それは「ヤマト」という民族に属して存在する私であったということである。それまでは、民族について自覚することはほとんどなく、日本人は「単一民族だ」と思っていた。ただし、海外に行くと日本人、アジア人である自分を感じ

たことはあった。しかし、沖縄では沖縄人と日本人という区別がある。厳密にどのように線引きされるのかは分からないが、私が自分自身を何と呼ぶのかはっきりしない。沖縄の人には「ないちゃー（内地の人）」「やまとんちゅー（ヤマトの人）」などと呼ばれることがあるが、前者は沖縄を外地とする意味があるから私は使わないようにしている。かといって、「ヤマト」と言われても正直ピンとこない。かろうじて、「県外出身です」と言っている。

これらの個人的な経験は、沖縄に生活したことのない「県外」の人にとっては実感を伴わないことであろう。しかし、このことは2009年以降やっと全国的な話題となった普天間基地の問題や沖縄戦をどう受け止め継承していくのか、また本書で取り上げている碑文とどう向き合うのかということに深く関係する重要なことであると思っている。

かつて、沖縄戦では日本の「国体」すなわち「天皇制」を維持するために沖縄を「捨て石」とした。結果、広島・長崎に原子爆弾が投下されるということによって敗戦するが、地上戦が日本本土で繰り広げられることは避けたのである。また現在、米軍基地が沖縄に過重負担させられている事実について、各種の選挙をとおして沖縄はその現状を強く拒否しているが、新たに名護市辺野古に今後200年も対応できる軍事施設の建設が強行されている。そして、多くの私たち日本人は、日米安保体制を肯定しながらも自分たちの地域に米軍基地がやってくることを拒否するのである。そして、沖縄に米軍基地が存在することを肯定または黙認している。

この過去と現在の二つの事だけをみても、沖縄がなぜこのような不利益を被るのかということを知るには、沖縄が日本本土と異なる歴史と文化を持っていることを知らなければならない。「かつて」といってもわずか130年ほど前は別の国であり、その琉球王国を併合したのは他ならない「日本」であるという明らかな事実である。現在、米軍基地が沖縄に存在することを「中国の脅威論」などを掲げる人もいるが、少なくとも過去の歴史の中で、琉球・沖縄を侵略したのは日本とアメリカ以外にない。そして、現在まで脈々と続く沖縄の人々の「アイデンティティ」や言語の違いが、沖縄に住む日本人に「ヤマト人」であることを自覚させるのではないだろうか。

そのような歴史と民族性の違いを意識するとき、摩文仁の丘を中心に建てられた碑文について大きな疑問を持たざるを得ない。わたしは縁あって沖縄靖国訴訟の原告となり、靖国問題を沖縄で学ぶ中で、特にその認識を深めていくこととなった。またもう一つの要因として、沖縄の女性と結婚し子どもたちと生活することで、沖縄を知りたいと思うようになったことから、沖縄戦で多くの人が亡くなっていることも、これらの碑文への関心を持つこととなった理由である。

それらの碑文の対象は、沖縄戦に参加した軍人軍属である。そして、ほとんどがその功績を讃える形をとっている。しかし、沖縄戦の特徴は多くの書籍が指摘しているように、住民、すなわち非戦闘員であり生活者が巻き込まれ被害を受けたということである。その多くは、軍人に徴用されなかった老人、女性、子どもなど弱い人々である。そういう人々が、戦争でどんな被害を受けたのかという視点が沖縄戦の継承では大切にされている。日本本土では、原爆や空襲による悲惨な戦争被害を受けている。多くの戦争にまつわるストーリーは、軍人またはその家族が語る軍人と戦場の姿である。そして、これらが戦争の実態として伝えられ、その結果、軍人やその家族が「英雄」や「ヒロイン」になったり、ときには「罪人」になったりする。

また戦後、沖縄を生きた人々は、その「犠牲」という名の被害のためにいかに辛く悲惨な経験をし、苦しい生活を強いられてきたのか。その人々の証言を、記録する努力が積み重ねられてきた。

しかし、現在も同じ「国」や「軍事的」な視点で米軍基地の意義が論じられ、沖縄にその負担が強いられている。「国防のために沖縄の人々が我慢すればすむ」という暴論は、「犠牲」や「国防のため」という名目で沖縄の被害を見えないようにしているのだ。そのことを詳しく検討する人が少ないのだが、テレビやインターネットの情報で、何となく気付いている人もいるのではないだろうか。

本書で詳細に調べ上げられた各県の碑文は、果たしてどの視点で記されているのだろうか。圧倒的に軍人の視点であり、同時に国家の視点である。国家の視点で現在の繁栄のために「犠牲」になった人々を沖縄戦の戦没者とし、そこに巻き込まれていった多くの民衆の姿は欠け落ちている。なぜ欠け落ちているのかということも、歴史的にも現在の課題としてよく考えなければならいと思う。

私は、どの県の碑文にも問題があると感じている。戦後ずっと存在し続け、その意図が明記されているそれらの碑文の意思は、辺野古新基地建設の強行を許す日本人の奥底の意識に通底していると言わざるを得ない。「過去の戦争」への向き合い方が、現在の一人ひとりの沖縄への向き合い方まで脈々と続いているのである。

そしてこれらの碑文は、真宗門徒へも大きな問いを投げかけてくる。「浄土」とは「誰もが共に生きていける世界」であると説いてある。しかもそれは、阿弥陀如来の浄土の内だけでなく広く十方世界に広がり呼びかけられ、他方国土の在り方にまでも阿弥陀如来の浄土と同じ願いが建てられている。つまり、自分たちが平穏で平等で平和であれば、他の国はどうでもいいということではない。

沖縄で活動されるある浄土真宗の先輩の僧侶が、いつも本土の僧侶たちに向かって教示する言葉だといって教えていただいたものがある。

「「兵戈無用」に、沖縄は入っていますか」。(「兵戈無用」(ひょうがむよう):大経の言葉で、お釈迦様の教説には、国の人々が豊かに安心して生活するには、兵隊も武器も無用である。という意味。)

このような様々な課題を投げかけている沖縄で、21 年間、思いもかけず長く生活している。真宗大谷派の僧侶になるために大谷専修学院に在学していたとき、元学院長で私が在学中にご指導いただいた故竹中智秀先生から聞いた言葉が大きな課題となっている。先生には、『阿弥陀仏の国か、天皇の国か』というタイトルの著書があるが、先生の講義で念仏者はどちらの国を本国として生きるのかが問われているのだということを、在学中繰り返し聞いた。その言葉が、今になって沖縄で長年生活する状況の中ではじめて強く響いてくるのだ。

現在の沖縄は、海外の人も含め沢山の人が観光に来るようになった。私も大好きな沖縄の美しい海と独自の文化を楽しむことをお薦めしたい。それにもう一つ加えて、沖縄の歴史と文化、そして人々の誇りある生き方に触れるとき、自身が問われることがある。「問う」などというとせっかくの楽しい旅が台無しになるような気もするが、次の言葉を紹介したい。

「本当の旅の発見は、新しい風景を見ることではなく、新しい目を持つことにある」

(マルセル・プルースト/フランス人小説家)

数年前のJALのポスターで目にした言葉である。この「新しい目」は「如来の眼差し」と置き換えて捉えてみたいのだが、どうだろうか。

故翁長雄志元沖縄県知事が、その政治姿勢を「イディオロギーからアイデンティティへ」と表現された。今度は、私たち日本人一人ひとりの「アイデンティティ」を意識する「新しい目」が必要である。このように沖縄から問われることが、私が当たり前としている一つ一つの言動、すなわち

自身の生き方にじわじわと影響を与えていることを実感する。沖縄が現在抱えている諸問題は、念仏・浄土を拠り処として生きようとする真宗門徒においては、実に厳粛で大きな「まなざし」に曝される場である。

沖縄別院の外観

別院屋上の梵鐘に刻まれた「兵戈無用」の文字

■沖縄の仏教 浄土真宗の歴史：紹介

仏教の伝来と興隆

「今を去ること 500 年前、沖縄は仏教王国であった」これは沖縄仏教史の研究者である知名定寛氏の『琉球仏教史の研究』の指摘である。一般的に仏教と縁がないと思われている沖縄であるが、歴史家がこう記すほど、仏教が取り入れられた時代もあったのである。 琉球最古の仏教伝来の記録としては、13 世紀の中頃、英祖王(1260 年即位)の時代に禅鑑と称する僧が、那覇に漂着し浦添城の西に極楽寺を建立したことである。その後、仏教の庇護者として尚泰久王（1454 年即位）、全盛期として尚真王（1477 年即位）時代があげられる。当時の沖縄の仏教寺院の多くは、ノロの制度と同じく、国家体制の補完としての機能が中心で、仏教の教義をよりどころとした大衆のための宗教とは異なったものであったと考えられている。また僧侶は京都へ多く派遣され、外交使節としても薩摩に派遣されていた。当時の僧侶の社会的地位は高く、政治の世界にも進出していき、僧侶になることが政治家への近道といわれ、「坊主の頭や三可官（大臣）と同待遇」ともいわれた。

仏教の衰退

1609 年、薩摩は琉球王国を侵攻し、沖縄は薩摩藩の政策に大きな影響を受けた。沖縄の仏教においては 1659 年、一向宗が禁制とされ、他の宗派においても様々な制限が加えられた。人を集めて説教をしてはいけない、俗家へ参ってはいけない、儒道を学ぶべきこと、などがあった。また京都へ留学が制限され寺院の建築や修理も自由にできなかったため、僧侶はその活動範囲が縮小され、仏教は加速度的に衰退していったとされるが、そもそも多くが「官寺」として民衆によって支えられた寺院ではなかったため、国の状況によってかなり左右されることとなったのである。そのため琉球処分後は、その維持経営に苦心し、廃寺していく寺も多く、僧侶の数も減少する一方であった。こうして、尚真王の時代(1477 年)には首里の町を中心に点在した寺院は明治の末期には、20 数ヶ寺にまで減少していた。

1603 年　浄土宗僧侶、袋中（たいちゅう）上人が渡来。後世のエイサー踊り（念仏踊り）やニンブチャー（念仏者）に影響を与えたという。
1609 年　島津軍が侵攻し、琉球国は支配下におかれる。以後、薩摩藩の政策により仏教寺院は衰退する。
1659 年　琉球において真宗が禁制となる。※この時期までに琉球に真宗が伝わっていたかは不明。
1839 年　知念仁屋仏像持下り事件。知念仁屋が、鹿児島より本尊を持ち帰り監禁される事件が起きる。
1853 年　仲尾次政隆の法難事件。念仏信仰が露見し、仲尾次政隆は八重山へ無期の流刑。信徒 300 名以上が処罰される。
1876 年　田原法水来琉。備瀬知恒と共に辻遊郭を中心に布教を始める。
1877 年　備瀬知恒の法難事件。中心人物の備瀬知恒は、翌年八重山に流罪になるも配所へむかう途中に難船のため溺死する。信徒 369 名が処罰される。
1879 年　真宗の禁制解かれる。
1882 年　那覇説教場新築のため、那覇西村事遺産の箭海岸 400 坪を埋立てる。
1884 年　那覇説教場落成。
1889 年　那覇説教場が琉球別院となる。
1892 年　琉球別院が真教寺となる。開基住職は田原法水。
1932 年　真教寺、新本道落成。
1935 年　田原惟信、真教寺第 3 代住職となる。
1944 年　「10・10 空襲」により真教寺全焼。
1974 年　真教寺本堂、再建される。
1993 年　東本願寺沖縄問教本部事務所が設立（浦添市）。
1994 年　沖縄戦 50 周年追弔法会厳修。

1997 年　東本願寺沖縄開教本部事務所を宜野湾市大謝名に移転。
2010 年　東本願寺沖縄別院、設立。※開教本部は別院内に移設

真宗法難史

薩摩の琉球侵攻後の 1659 年、一向宗＝真宗の禁制令が沖縄に出され宗門改めが行われるようになった。その禁制は琉球処分が断行される 1879（明治 12）年まで続いた。沖縄に一向宗＝真宗がいつ伝来したのかは不明であるが、確認されている最も古い文献では 1767 年に沖縄の講（信者のグループ）から京都の西本願寺に献上物が届けられたという記録がある。一方、禁教とされた真宗の信仰を持った人々が 3 度の摘発された記録が残されており、これを「真宗法難」とよび、伊波普猷の『浄土真宗開教前史』に詳しく記されている。最初の法難は 1839 年に鹿児島から本尊（阿弥陀仏像）を持ち帰って摘発された「知念仁屋仏像持下り事件」があるが背景などは詳しくわかっていない。

仲尾次政隆（なかおし　せいりゅう）

那覇泉崎に生まれる。その先祖は、京都から薩摩の久志浦に移住したといわれ、代々真宗の門徒であった。4 代前の中村宇兵衛が薩摩から琉球に移り住み、琉球の妻との聞に 5 男をもうけ、その長子が仲尾次家を称した。政隆は若くして官職につき、大和横目、那覇総横目などの要職を歴任している。そして官職の身でありながら、当時琉球で禁制となっていた真宗をひそかに信仰していた。さらに政隆は自身の信仰だけに留まらず、念仏講を結成し那覇の遊郭で遊女たちを中心に積極的に布教活動に取組んだ。しかし、信者が増え次第に人目につくようになり、1853 年政敵によって密告され、信徒らとともに拘留され取調べをうける。結果、政隆は八重山へ無期の流刑、他の信徒もそれぞれ処罰された。配流地の石垣島では、流人の身で宮良橋を再建し、その功により赦免され 11 年ぶりに那覇に帰された。享年 62 歳。伊波普猷（いはふゆう）は、その著書のなかで「仲尾次政隆は近代沖縄の宗教的偉人Ｊ（『浄土真宗沖縄開教前史一仲尾次政隆と其背景』より）と評している。

備瀬知恒（びせ　ちこう）

那覇東村の出身。仲尾次政隆の布教のもとで真宗に帰依する。1853 年の仲尾次政隆の法難事件の際、彼は商用で奄美大島に渡っていたため難を逃れた。その後数年間奄美諸島を流浪し、1861 年になってようやく帰郷する。そして政隆のあとをついで真宗布教を再開し、ひそかに本尊を拝し、自宅や辻遊郭で講話をおこなった。1876 年、大谷派僧侶田原法水と出会い互いに協力・連携し、より布教がすすめられることになる。しかし急激に信徒が増えたことが災いし、その活動が役人に見つかり、翌 1877 年 10 月、備瀬知恒以下信徒たちが次々と検挙され、結果 300 人以上の信徒が処罰されるという大事件に発展した。備瀬知恒は、事件の中心人物と見なされ仲尾次政隆と同じく八重山へ 10 年の流刑に処せられたが、翌年八重山へ送られる途中、宮古島付近で難船し溺死したとされる。琉球における真宗の解禁と、信徒一同の赦免は、彼の死の翌年のことである。享年 59 歳。仲尾次の高弟としてその意志を受け継ぎ、真宗禁制下の琉球で罪科を恐れず布教し、その法灯を田原法水に伝えるという重要な役割を果たした人物である。

これらの法難の後、真宗大谷派の僧侶・田原法水、本山派遣の小栗憲一らのはたらきにより、琉球処分と時を同じくして 1879（明治 12）年、真宗の禁制が解かれた。　（沖縄別院ＨＰ）

第５章　資料の紹介

１．沖縄から伝えたい。米軍基地の話Ｑ＆Ａ：沖縄県

1. 沖縄の米軍基地ができた歴史的背景を教えてください。－209

2. 何もなかったところに米軍基地ができて、
その周りに人が住んだのではないですか。－209

3. 沖縄にはどれだけの米軍基地があるのですか。－209

4. 日米地位協定とは何ですか。また課題を教えてください。－210

5. 日米地位協定の改定は難しいのではないですか。－211

6. 米軍基地がなくなったら沖縄の経済に悪影響があるのではないですか。－211

7. 米軍基地と引き替えに沖縄振興が図られているのではないですか。－211

8. 米軍基地を負担するのは当然ではないですか。－212

9. なぜ普天間飛行場を辺野古へ移設することに反対なのですか。－212

10. 沖縄県は辺野古新基地建設に反対していますが、
日米安全保障体制に反対なのですか。－212

２．真宗大谷派　1995 年の不戦決議　－213

３．真宗大谷派　2015 年の非戦決議　－213

４．真宗大谷派　沖縄戦 50 周年追弔法会　表白　－214

５．真宗大谷派　米軍普天間基地周辺住民へ危険を及ぼす米軍機への抗議　－215

１．沖縄から伝えたい。米軍基地の話Ｑ＆Ａ：沖縄県

■1. 沖縄の米軍基地ができた歴史的背景を教えてください。

普天間飛行場の建設（現・宜野湾市）　昭和20年（1945年）米軍の沖縄上陸　昭和20年（1945年）

※沖縄と米軍基地の歴史的側面

豊かな自然と独特な文化を有する沖縄は、太平洋戦争において、史上まれにみる熾烈な地上戦が行われ、「鉄の暴風」と呼ばれたほどのすさまじい爆弾投下と砲撃により、緑豊かな島々は焦土と化しました。沖縄に上陸した米軍は、住民を収容所に強制隔離し、土地の強制接収を行い、次々と新しい基地を建設していきました。住民は土地を有無を言わさず奪われました。

太平洋戦争終結後も、朝鮮戦争の勃発など国際情勢の変化に伴い新しい基地が必要になると、武装兵らによる「銃剣とブルドーザー」で住民を追い出し、家を壊し、田畑をつぶして、新たな基地を造っていきました。

日本本土では昭和31年（1956年）の経済白書で「もはや戦後ではない」とされ、高度経済成長が始まりましたが、ちょうどその時期に、本土の米軍基地の整理縮小の流れを受けて、本土から沖縄に海兵隊の移転が進みました。

戦後、沖縄は、昭和47年（1972年）の本土復帰まで27年間にわたり、米軍の施政権下にありました。本土復帰後も、本土では基地の整理縮小が進む中、沖縄には多くの米軍基地が日米安全保障条約に基づく提供施設・区域として引き継がれ、県民は過重な基地負担を背負うことになり、現在もその負担は重くのしかかっています。

■2. 何もなかったところに米軍基地ができて、その周りに人が住んだのではないですか。

※それは、誤った認識です。

たとえば、米軍上陸前年の宜野湾村には多くの集落が存在し、約１万４千人の住民がいましたが、沖縄に上陸した米軍は普天間飛行場建設のために宜野湾、神山、新城、中原の４つの集落を中心に広い範囲を強制接収しました。

なかでも、普天間飛行場が建設される前の当時の宜野湾村の中心は字宜野湾という場所で、現在の普天間飛行場の中にありました。そこは、もともと役場や国民学校、郵便局、病院、旅館、雑貨店がならび、いくつもの集落が点在する地域でした。

また、字普天間には、沖縄県庁中頭郡地方事務所や県立農事試験場など官公庁が設置され、沖縄本島中部の中心地でした。

住民が避難したり収容所に入れられている間に、米軍が利用価値の高い土地を強制的に接収したため、戻ってきた住民は自分の故郷に帰りたくても帰れず、その周辺に住むしかないという状況でした。

■3. 沖縄にはどれだけの米軍基地があるのですか。

沖縄県には、31 の米軍専用施設があり、その総面積は１万 8,609 ヘクタール、本県の総面積の約８％、人口の９割以上が居住する沖縄本島では約 15％の面積を占めています。

その規模は東京 23 区のうち 13 区を覆ってしまうほどの広大な面積です。

沖縄が本土に復帰した昭和４７年（1972 年）当時、全国の米軍専用施設面積に占める沖縄県の割合は約 58.7％でしたが、本土では米軍基地の整理・縮小が沖縄県よりも進んだ結果、現在では、国土面積の約 0.6％しかない沖縄県に、全国の米軍専用施設面積の約 70.6％が集中しています。（平成 29 年１月１日現在）

また、陸上だけではなく、沖縄県及びその周辺には、水域 27 カ所と空域 20 カ所が訓練区域として米軍管理下に置かれ、漁業への制限や航空経路への制限等があります。また、その規模は、水域が約 54,938 ㎢で九州の約 1.3 倍、空域が約 95,416 ㎢で北海道の約 1.1 倍の広大なものとなっています。（平成 28 年３月 31 日現在）※米軍専用施設・・・自衛隊が管理する共用施設とは異なり、専ら日米地位協定のもとで管理、運営され、基本的にはその運用に国内法が適用されず、また、立ち入り許可なども米軍の裁量によりなされる。

※本ページで記載している面積、割合等は米軍専用施設のものであり、米軍が自衛隊等の施設を一時使用（共同使用）している面積は除いています。

■米軍専用施設面積の割合

1．沖 縄 県　70.6%
2．青 森 県　 9.0%
3．神奈川県　 5.6%
4．東 京 都　 5.0%
5．山 口 県　 3.0%
6．長 崎 県　 1.8%
7．北 海 道　 1.6%
8．広 島 県　 1.3%
9．そ の 他　 2.0%

（2016 年 3 月 31 日現在）

■上記の沖縄県の米軍専用施設面積は、東京 23 区のうち品川区・港区・目黒区・渋谷区・中央区・千代田区・新宿区・中野区・文京区・豊島区・台東区・墨田区・荒川区の 13 区の面積に匹敵する。（約 18,701 ヘクタール）

■米軍専用施設面積の割合の推移

1972（昭和 47）年 5 月（沖縄が日本復帰をした年）
沖縄県　58.7%
本　土　41.3%

2017（平成 29）年 1 月
沖縄県　70.6%
本　土　29.4%

■4. 日米地位協定とは何ですか。また課題を教えてください。

日米地位協定は、在日米軍による施設・区域の使用を認めた日米安全保障条約第６条を受けて、施設・区域の使用のあり方や日本における米軍の地位について定めた条約です。

具体的には、施設・区域の提供、米軍の管理権、日本国の租税等の適用除外、刑事裁判権、民事裁判権、日米両国の経費負担、日米合同委員会の設置等が定められています。

日米地位協定は、人権や環境問題などに対する意識の高まり等の中で、時代の要求や国民の要望にそぐわないものとなっており、刑事裁判権、米軍の管理権としての基地使用のあり方、環境汚染など、様々な問題点が指摘されていますが、昭和35年（1960年）に締結されて以降、改定は一度も行われていません。

政府は、米軍及び在日米軍施設・区域を巡る問題を解決するためには、日米地位協定の運用の改善によって対応していくことが合理的であると説明しています。

沖縄県としては、米軍基地を巡る諸問題の解決を図るためには、米側に裁量を委ねる形となる運用の改善だけでは不十分であり、地位協定の抜本的な見直しが必要であると考えており、国に対して毎年度要請を行っています。

平成7年10月の日米合同委員会合意

殺人又は強姦という凶悪な犯罪に係る起訴前の拘禁の移転についての日本側からの要請に対し、米側は好意的な考慮を払う。

平成14年11月　婦女暴行未遂事件（沖縄県）

日本側の起訴前の身柄引き渡し要請に対し、米側は明確な理由を示さないまま拒否。起訴前の身柄引き渡しの判断は、依然として米側の裁量に委ねられている。

■5. 日米地位協定の改定は難しいのではないですか。

日米地位協定は、昭和35年（1960年）に締結されて以降、一度も改定されたことがありません。しかし、日本と同じように米国と地位協定を締結しているドイツや韓国では、改定を実現させています。

特にドイツでは、昭和34年（1959年）に締結されたボン補足協定をこれまで３度も改定しており、駐留軍に対しても原則としてドイツの国内法が適用されることが明記されているほか、環境保全を目的とする詳細な規定が設けられています。

沖縄県としては、日米地位協定の見直しについては、米軍基地が集中する沖縄という一地域だけの問題ではなく、我が国の外交・安全保障や国民の人権、環境保護などについてどう考えるかという極めて国民的な問題であると考えています。

このため、沖縄県では、日米地位協定の見直しを求める動きを全国に広げるために「全国行動プラン※１」を実施したり、渉外知事会※２と連携して日米両政府に抜本的な見直しを求めるなど取り組んできました。

今後とも、渉外知事会や全国知事会※３など全国的な団体とも連携し、あらゆる機会を通じ、日米両政府に、日米地位協定の見直しを粘り強く求めていきたいと考えています。

●全国行動プラン

渉外知事会加盟の都道県議会議長及び知事への要請行動や全国紙への意見広告掲載等の事業を実施。沖縄県を含む33都道府県議会や全国知事会等で見直しを求める決議等がなされた。（平成15年度）

●渉外知事会

米軍提供施設等が所在する都道府県相互間の連絡協調を密接にし、政府等に対して、基地問題の適切かつ迅速な措置について要望等を行い、これらの問題の効果的な解決を図るため、昭和37年１月に設立。平成29年１月現在、15都道府県で構成。

●全国知事会

各都道府県間の連絡提携を緊密にして、地方自治の円滑な運営と進展を図ることを目的として設立。全国47都道府県知事で構成。平成28年11月には、沖縄をはじめとする在日米軍基地に係る基地負担の状況について広く理解し、研究するために「米軍基地負担に関する研究会」が設置された。

■6. 米軍基地がなくなったら沖縄の経済に悪影響があるのではないですか。

米軍基地が整理縮小され、返還後の跡地利用が進めば、県経済に好影響を与えると考えます。

全国でも有数の高い人口密度となっている中南部都市圏において、市街地を分断する形で広大な米軍基地が存在していることは、都市機能、交通体系、土地利用などの面で県経済の発展にとって大きな阻害要因となっています。

既に返還された駐留軍用地の跡地利用に伴う経済効果を試算すると、那覇新都心地区、小禄金城地区、桑江・北前地区の3地区合計では返還後の跡地利用により、返還前と比べて直接経済効果※１が約28倍、雇用者数※２が約72倍となっています。

今後返還が予定されている駐留軍用地（5施設）についても、跡地利用を推進することで、約18倍の直接経済効果及び誘発雇用人数が見込まれています。

■7. 米軍基地と引き替えに沖縄振興が図られているのではないですか。

沖縄には米軍基地が集中していることから、県内外の方々に、国から特別に多額の予算が措置されている、との誤解が見受けられますが、それは違います。

沖縄振興は、沖縄の置かれた「特殊な諸事情」を踏まえ、復帰後の本土との格差是正や、沖縄経済の自立的発展のために実施されており、米軍基地の受け入れと引き替えのものではありません。

沖縄振興の根拠法である沖縄振興特別措置法は、離島振興法や山村振興法、北海道開発法と同様に「国土の均衡ある発展」を目的とした地域振興法の一つとして制定されているものです。

❶第二次世界大戦末期の沖縄戦における苛烈な戦渦と、その後26年余りにわたり我が国の施政権の外にあったこと（歴史的事情）

❷本土から遠隔にあり、広大な海域に多数の離島が点在していること（地理的事情）

❸我が国でも希な亜熱帯地域にあること（自然的事情）

❹国土面積の0.6％の沖縄に在日米軍専用施設・区域の大半が集中していること（社会的事情）

【沖縄振興特別措置法】
第１条　この法律は、沖縄の置かれた特殊な諸事情に鑑み、沖縄振興基本方針を策定し、及びこれに基づき策定された沖縄振興計画に基づく事業を推進する等特別の措置を講ずることにより、沖縄の自主性を尊重しつつその総合的かつ計画的な振興を図り、もって沖縄の自立的発展に資するとともに、沖縄の豊かな住民生活の実現に寄与することを目的とする。

■8. 米軍基地を負担するのは当然ではないですか。

沖縄振興予算は、各種振興策を実施するために内閣府沖縄担当部局に一括して計上される予算のことで、平成29年度当初予算案で3,150億円となっています。

沖縄振興予算は、振興策を総合的かつ計画的に推進するため、他県であれば各省庁が個別に計上する、道路や港湾、病院や学校の校舎等の施設の整備に要する費用等も、内閣府沖縄担当部局が一括して計上する仕組みになっています。

他県にはない独自の仕組みであるため、しばしば誤解されることがありますが、他県と同様の交付金・補助金の枠組みに加えてさらに3,000億円の予算が別途上乗せされているわけではありません。

他県では各省庁が個別に計上する予算を、沖縄県では内閣府沖縄担当部局予算において内閣府が一括計上（ただし、全国一　律の制度である年金、医療、介護に関する社会保障関係費や義務教育国庫負担金等は含まれていない）している。

これは、沖縄が米軍の施政権下に置かれていた27年間、各省庁に直接予算要求する機会がなかったこと等もあり、国への予算　要求を一体的に行い、必要な予算を確保することも目的としている。

■9. なぜ普天間飛行場を辺野古へ移設することに反対なのですか。

戦後71年を過ぎても日本の国土面積約0.6%の沖縄県に、約70.6%もの米軍専用施設が存在し続け、状況が改善されない中で、今後100年、200年も使われるであろう辺野古新基地ができることは、沖縄県に対し、過重な基地負担や基地負担の格差を固定化するものであり、到底容認できるものではありません。

沖縄は今日まで自ら基地を提供したことは一度としてありません。戦後の米軍占領下、住民が収容所に隔離されている間に無断で集落や畑がつぶされ、日本独立後も武装兵らによる「銃剣とブルドーザー」で居住地などが強制接収されて、住民の意思とは関わりなく、基地が次々と建設されました。

土地を奪って、今日まで住民に大きな苦しみを与えておきながら、基地が老朽化したから、世界一危険だから、普天間飛行場の移設は辺野古が唯一の解決策だから沖縄が基地を負担しろというのは、理不尽です。

一方、辺野古新基地が造られようとしている辺野古・大浦湾周辺の海域は、ジュゴンをはじめとする絶滅危惧種262種を含む5,800種以上の生物が確認され、生物種の数は国内の世界自然
遺産地域を上回るもので、子や孫に誇りある豊かな自然を残すことは我々の責任です。

また、5,800種のうち、約1,300種は分類されていない生物であり、種が同定されると多くは新種の可能性があります。新基地建設は、貴重な生物多様性を失わせ、これらかけがえのない生物の存在をおびやかすものなのです。

さらに、平成26年の名護市長選挙、沖縄県知事選挙、衆議院議員選挙、平成28年の県議会議員選挙、参議院議員選挙では、辺野古移設に反対する県民の民意が示されています。沖縄県は日米安全保障体制の重要性は理解していますが、県民の理解の得られない辺野古移設を強行すると、日米安全保障体制に大きな禍根を残すことになります。

沖縄県は、これらのことから辺野古への移設を反対しており、今後とも辺野古に新基地は造らせないということを県政運営の柱にし、普天間飛行場の県外移設を求めていきます。

■10. 沖縄県は辺野古新基地建設に反対していますが、日米安全保障体制に反対なのですか。

いいえ。沖縄県は日米安全保障体制を理解する立場です。

沖縄県は、日米安全保障体制については、これまで日本と東アジアの平和と安定の維持に寄与してきたと考えています。

また、国の調査においても、「日米安全保障条約は日本の平和と安全に役立っている」とする回答が82.9%となり過去最高を記録するなど、その重要性に対する理解が多くの国民に広がっています。

しかし、我が国においては、沖縄の米軍基地の機能や効果、負担のあり方など、安全保障全般について国民的議論が十分なされてきたとは言えず、戦後71年以上経た現在もなお、国土面積の約0.6％しかない沖縄県に、全国の米軍専用施設の約70.6％が集中しています。

沖縄県としては、辺野古新基地建設問題等を通して、日米安全保障の負担のあり方について、改めて日本全国の皆様で考えて頂きたいと思っています。

【日米安全保障条約】　第６条（前段抜粋）

日本国の安全に寄与し、並びに極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため、アメリカ合衆国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される。

（沖縄県ＨＰ　代表：沖縄県知事公室基地対策課）

２．真宗大谷派　1995 年の不戦決議

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧じることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穏なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門からさえ見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞うとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧げておられるあらゆる心ある人々に、深甚の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の相違を越えて、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをともにすることを誓うものであります。

右、決議いたします。

１９９５年６月１３日
真宗大谷派　宗議会議員一同
１９９５年６月１５日
真宗大谷派　参議会議員一同

３．真宗大谷派　2015 年の非戦決議

私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。

この懺悔の思念を旨として、私たちは、人間のいのちを軽んじ、他を抹殺して愧じることのない、すべての戦闘行為を否定し、さらに賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまないことを決意して、ここに 「不戦の誓い」を表明するものであります。

さらに私たちは、かつて安穏なる世を願い、四海同朋への慈しみを説いたために、非国民とされ、宗門からさえ見捨てられた人々に対し、心からなる許しを乞うとともに、今日世界各地において不戦平和への願いに促されて、その実現に身を捧げておられるあらゆる心ある人々に、深甚の敬意を表するものであります。

私たちは、民族・言語・文化・宗教の相違を越えて、戦争を許さない、豊かで平和な国際社会の建設にむけて、すべての人々と歩みをともにすることを誓うものであります。

『不戦決議』（１９９５年）

戦後５０年を経た１９９５年６月、真宗大谷派は、人類の願いを「不戦の誓い」として表現しました。私たちは、この決議の重みを再確認し、あらためて平和の意味を問いたいと思います。決議より２０年、戦争の悲惨さと愚かさに対する人々の感覚は風化してきています。その風化は、現在も、基地問題で苦しむ沖縄の人たちの心に向き合おうとせず、戦争に向かう状況を生み出そうとしています。

私たち人間の生きざまを憐れんで「国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」と誓い、法蔵菩薩は、浄土を建立されました。

永い人類の歴史は、人が人を殺し、傷つけ合う悲しみの連続でありました。如来の願心は、自我愛を正当化して「賜ったいのち」を奪い合うことを悲しみ、私たちに「共に生きよ」と呼びかけておられます。この呼びかけに応じ、「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」という仏陀の言葉を如来の悲願と受け取り、あらためてここに「非戦の誓い」を表明いたします。

そして、世界の人々と積極的な対話を通じて「真の平和」を希求してまいります。

上記決議いたします。

２０１５年6月9日
真宗大谷派 宗議会議員一同
２０１５年6月１０日
真宗大谷派 参議会議員一同

４．真宗大谷派　沖縄戦 50 周年追弔法会　表白

沖縄戦から 50 年の 1995 年、真宗大谷派は沖縄県糸満市にある「沖縄平和祈念堂」にて「沖縄戦５０周年追弔法会」を開催いたしました。

この法要の主旨を『表白』としてつぎのとおり表明しました。

本日ここに、阿弥陀仏の尊前において、沖縄戦五十周年追弔法要を勤めさせていただくにあたり、私どもの想いを申し上げさせていただきます。

まず、なによりも、この沖縄の地を戦場と化し、戦死という悲惨な死を、数えきれない多くの方々にもたらしてしまいましたことは、もとより、私どもが今日まで、そのことの意味について、本当に心を尽くしてきた歩みであったのかを自問いたしますとき、沖縄の皆様にはお詫びしなければなりません。いまなお癒されることのない傷跡を負って生きておられる方々のおことばをお聞きいたしますにつけ、その思いを深くするばかりでございます。

かつて、私どもの国が大日本帝国と名のって、以来、国の強大化をはかって、いくたびも戦争を繰り返してきました。そうしたはてに沖縄の島々での戦禍があったといって過言ではありません。

この沖縄戦において、亡くなられた方々は二十五万人余、そのうち沖縄県民の十五万人余の方々が犠牲となって、そのかけがえのないいのちが失われました。これら多くの人びとは砲弾で、また自国の軍隊によって強要された集団自決や、虐殺によるという悲惨なものでありました。また、朝鮮半島より強制連行されてきた人びとの犠牲も、その足跡は明らかにされていないままであります。

こうした、繰り返されてきた戦争というものの実態と、軍隊のおそろしさがあらわになったのが沖縄戦でありました。にもかかわらず、その後、それらの事実の深淵に思いをいたすことなく、それこそ、ひたすらにこの世の繁栄を求めていくなかで忘れ去っていたのであります。

そのことこそが戦後、現在にいたるまでも、沖縄の方々に戦争の暗い影が重くのしかかっていくことになり、さらには、長い間、私どもの国が侵してきたアジアの国々の人びと、わけても植民地とした国の人びとの痛みと悲しみに満ちた犠牲に、心をよせることをも見失わせてきたのであります。

かえりみれば、戦時中に私どもの宗門は、繰り返されてきた戦争を「聖戦」と呼び、国の繁栄と発展のための正しい戦争であるとして、多くの同朋を戦場に送り出すという罪業を重ねてまいりました。

まことに申し訳のないことでございます。

もとより、宗祖親鸞聖人が見いだされた阿弥陀仏の誓願は、どこまでも罪悪深重煩悩熾盛の衆生として、この世にあって罪悪をまぬがれず、とどまることのない欲求にとらわれている、そういう衆生のひとりとしての私自身を照らし出してくる教えであります。その衆生のひとりに立ち帰ってこそ、お互いが生あえる世界が開かれてくるのであります。

いったい、私どもの願う平和とはどういう平和なのか。 戦争だけがいのちを犠牲にするのではなく、今日言われますところの平和もまた、多くのいのちをそこなっていくという、そうした私どもの在り方が問われなければなりません。

いま、この時にあたり、真宗大谷派、全宗門の名において非戦の誓いを新たにいたすとともに、二度と

ふたたび、このような戦争による犠牲者を出して欲しくないという、戦没者はもとより、あとに残された方々が祈ってこられた、その祈りをこそ生きる者として、平和の礎を明らかにしていくことを、この沖縄の地で誓うものであります。

1995 年 3 月 5 日
真宗大谷派　熊邨　英士

沖縄平和祈念堂の外観

堂内のご本尊

5．真宗大谷派　米軍普天間基地周辺住民へ危険を及ぼす米軍機への抗議

私たちは、沖縄駐留米軍のヘリコプターが、沖縄県宜野湾市に所在する「緑ヶ丘保育園」と「普天間第二小学校」に立て続けに物を落下させた事故の報道に接し、大きな衝撃を受けました。

これまでも、米軍基地が存在することに端を発する事故が沖縄県では多発してきました。2004年の沖縄国際大学ヘリ墜落事故は言うまでもなく、近くは昨年12月には名護市の住宅地間近の沿岸にオスプレイが墜落、本年10月にはCH53が東村の民間地に不時着・炎上しています。この他、米軍基地が存在することに起因する悲惨な事故や凄惨な事件が繰り返され、私たちは生命の危機を感じながら生活することを強いられています。

釈尊の説かれた『大無量寿経』の願い「国豊民安 兵戈無用」を拠り所とする私たち真宗大谷派は、これまで軍隊も武器も必要としない、平和で豊かな、人々が安心して暮らせる社会を希求してきました。このたび、東本願寺沖縄別院が所在し、私たちが地域の人々とともに暮らす宜野湾市においてこのような事件が発生し、さらには未来を担う子どもたちの安全が脅かされていることは、仏教を宗とする者として、到底看過することができません。

今回の事故後も、米軍機は保育園、幼稚園、小中高等学校および住宅地の上空を、人々の尊厳を無視するかのように飛行しています。私たちは、今回の落下物事故に対し厳重に抗議し、これ以上沖縄の人々、とりわけ子どもたちに危険が及ぶ軍用機の飛行を即時中止することを求めます。

２０１７年１２月２８日
真宗大谷派　沖縄開教本部長
東本願寺沖縄別院　輪番 相良 晴美

住宅、保育園、幼稚園、学校に隣接している世界で一番危険な普天間飛行場

普天間飛行場から離陸して住宅街上空で飛行訓練を始めるオスプレー

案内地図に名称を掲載しましたが、本誌での紹介ができなかった慰霊塔・戦跡・資料館・観光地の写真を一部掲載します。

国立沖縄戦没者墓苑
1. 摩文仁地区(2)㉖

琉風之塔：2.伊原地区⑤

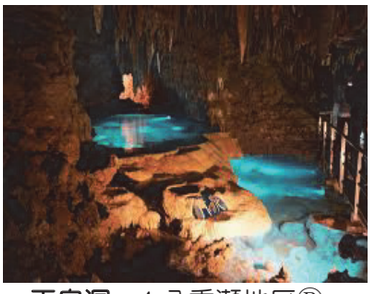
八重瀬之塔：4.八重瀬地区⑥

白梅学徒隊の碑：4.八重瀬地区⑦

小桜の塔：5.那覇地区①

海鳴りの像：5.那覇地区③

おきなわワールド：4.八重瀬地区Ⓐ

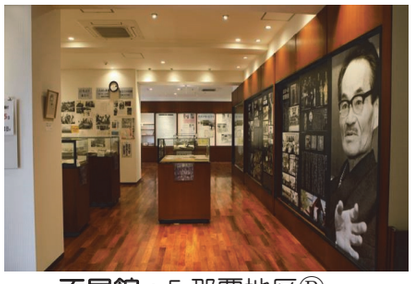


玉泉洞：4.八重瀬地区Ⓑ

ガンガラーの谷：4.八重瀬地区Ⓓ

ひめゆり平和祈念資料館
2.伊原地区④

対馬丸記念資料館
5.那覇地区Ⓐ



不屈館：5.那覇地区Ⓑ

体験王国むら咲きむら：9.読谷地区Ⓒ

真栄田岬：9.読谷地区Ⓖ

残波岬の大獅子：9.読谷地区Ⓕ

編集者紹介

監修：福島　栄寿　教授（ふくしま えいじゅ）

1965 年京都市生まれ。大谷高校（京都）卒業後、山口大学人文学部へ進学。同人文科学研究科修士課程修了後、大谷大学大学院文学研究科博士後期課程（仏教文化専攻）へ進学、1995 年単位取得退学。博士（文学）。1996 年より京都光華女子大学真宗文化研究所職員、2001 年より真宗大谷派教学研究所研究員、2007 年より札幌大谷大学准教授を経て、2011 年より大谷大学准教授。2017 年より現職。著書『思想史としての「精神主義』（法藏館、2003 年）他。

代表：吉岡　康裕（よしおか やすひろ）　Email：yoshioka7064@gmail.com

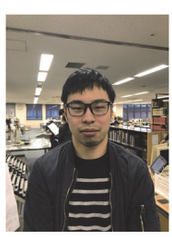
1955 年富山県生まれ。県立石動高校卒業後、大谷大学文学部真宗学科へ進学。同学科卒業後、大谷大学大学院修士課程真宗学専攻へ進学。同課程修了後、幼稚園事務長を勤め 1993 年千葉県佐倉市に開教所（新寺：了因寺支坊）を設立し、親鸞聖人の教法を宣布する活動に専念する。1998 年「首都圏大谷派開教者会」に入会、2001 年同会の会長に就任し 5 期 10 年務め、現在に至る。

助言：長谷　暢（ながたに　まさし）

1973年滋賀県生まれ。真宗大谷派沖縄開教本部職員・法政大学沖縄文化研究所国内研究院。琉球大学理学部物理学科卒業後、大谷専修学院を卒業。大谷大学大学院（真宗学・修士）修了。アメリカ留学を経て、2001年から沖縄開教本部の嘱託・出仕として現在まで勤務。

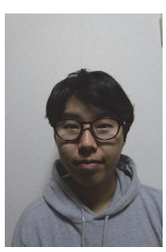
協力：出雲路　真志（いずもじ しんじ）

1993 年北海道生まれ。
龍谷大学文学部歴史学科卒業。
大谷大学大学院文学研究科仏教文化専攻修了　福島ゼミ出身
現在、龍谷大学大学院博士後期課程　日本史学専攻



協力：久保　槙一郎（くぼ しんいちろう）

1997 年大阪市生まれ。
現在、大谷大学文学部歴史学科　福島ゼミ（4 回生）



協力：丸尾　大貴（まるお だいき）

1996 年兵庫県生まれ。
現在、大谷大学文学部歴史学科　福島ゼミ（4 回生）